

第 50 回

足立区政に関する世論調査

2021(令和3)年 8 月 実施

定住性／大震災などの災害への備え／洪水対策／区の情報発信のあり方／
健康／スポーツ・読書／ビューティフル・ウィンドウズ運動／環境・地域活動／
「孤立ゼロプロジェクト」など／協働・協創／区の取り組み

はじめに

令和3年8月から9月にかけて、無作為抽出した3千人の区民の皆様を対象に実施した「第50回足立区区政に関する世論調査」の結果がまとまりました。

約2年にわたるコロナ禍のさなかに実施した調査であるため、その影響をしっかりと見極めていく必要があります。特に「足立区を誇りに思う」割合が前回と比較して約8ポイント下がったことを重く受け止めています。

世論調査の目的ですが、最も重要なのは、同じ質問を毎年繰り返すことによって、区民の皆様のお考えの変化を読み取ることです。区政が思った方向へ進んでいるのか否かを確認し、必要に応じて施策に修正を加えていきます。

また、質問の答えを、性別・年齢別・地域別等に分類することによって、そこに現れるお考えの違いから、施策のターゲットの絞り込みや、地域別に施策のアプローチを変える等、より効果的な対策を講じることができます。調査結果の本質を見極めて初めて、数字が様々なことを私たちに語ってくれるのです。

区政運営上、やみくもに進んでも、時間やお金を浪費するばかりです。皆様が納付された貴重な税金の使い道を託されている私たち自治体職員には、確かな戦略をもって、効率的、効果的に区政を進めていく責任があります。世論調査はそのために絶対に欠かせないツールなのです。

この度も大変お忙しい中、ご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。お声をしっかり受けとめて、今後の施策に活かしてまいります。

令和4年3月

足立区長 近藤やよい

目 次

第 1 章 調査の概要	1
1 調査の目的	3
2 調査の内容	3
3 調査の設計	3
4 調査地域	4
5 調査方法	5
6 回収結果	5
7 報告書の見方	7
8 標本構成	10
 第 2 章 調査結果の要約	 15
1 定住性	17
2 大震災などの災害への備え	18
3 洪水対策	20
4 区の情報発信のあり方	21
5 健康	22
6 スポーツ・読書	24
7 ビューティフル・ウィンドウズ運動	26
8 環境・地域活動	27
9 「孤立ゼロプロジェクト」など	28
10 協働・協創	30
11 区の取り組み	31
 第 3 章 調査結果の分析	 39
1 定 住 性	41
(1) 居住地域の評価	43
(2) 地域の暮らしやすさ	65
(3) 特に暮らしにくいと感ずること	71
(4) 定住意向	75
2 大震災などの災害への備え	83
(1) 備蓄や防災用具などの用意	85
(2) 備蓄や防災用具、買い置きなどの内容	89
(3) 備蓄量	94
(4) 災害発生時の水や食料の確保	100
(5) 家具類の転倒・落下・移動防止対策	103
(6) 対策をしていない理由	106

(7) 地域の3種の避難場所とその意味の認知	109
(8) 避難場所の認知経路	117
(9) 大規模災害時の避難生活場所	120
(10) 大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいこと	122
3 洪水対策	127
(1) 「足立区洪水ハザードマップ」の認知	129
(2) 河川はん濫時の避難場所の事前決定	133
(3) 事前に決めている河川はん濫時の避難場所	136
(4) 河川はん濫時の避難場所を決めていない理由	139
(5) 河川はん濫による浸水被害の際の対処	142
4 区の情報発信のあり方	151
(1) 区の情報の入手手段	153
(2) 重要と考える区の情報	159
(3) 必要な時に必要とする区の情報の入手状況	163
(4) 区の情報が得られない理由	165
(5) 区の情報が得られない理由の詳細	167
5 健康	169
(1) 区のキャッチフレーズの認知状況	171
(2) 糖尿病の進行による病気や障がいの認識	173
(3) 野菜から食べ始めることの実践状況	176
(4) 1日野菜350g以上の摂取	178
(5) 体調や習慣	180
(6) 健康維持のために実行している、心がけているもの	185
(7) 自身の健康状態について	188
(8) がん検診の受診状況	190
(9) 受けたがん検診の種類	192
(10) 決めている歯科医院	194
(11) 歯科医院で治療のほかに受けている内容	196
(12) 感染症予防のための手洗いの実践状況	198
(13) 「ゲートキーパー」という言葉の認知状況	200
6 スポーツ・読書	203
(1) 日常的な運動・スポーツの実施状況	205
(2) 継続的に実施している運動・スポーツ	207
(3) 運動・スポーツを行っている場所	211
(4) 運動・スポーツを行うためのきっかけ	214
(5) 東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた区の取り組みで関心があること	216
(6) 新たに始めたいスポーツ、文化、ボランティア活動の有無	219
(7) 新たに始めたい、または活動を継続したいスポーツ、文化、ボランティア活動	221
(8) スポーツ、文化、ボランティア活動を新たに始める場合のきっかけ	224

(9) 区のスポーツ施設における高齢者免除制度に関する意識	226
(10) 読書に関わる行動状況	228
(11) 読書に関わる行動をできなかった・しなかった理由	230
7 ビューティフル・ウィンドウズ運動	233
(1) 「ビューティフル・ウィンドウズ運動」の認知状況	235
(2) 参加している・参加したい「ビューティフル・ウィンドウズ運動」の取り組み	238
(3) 『花のビュー坊プレート』『ビュー坊のガーデンピック』の認知状況	242
(4) 治安が改善していることの認知	246
(5) 居住地域の治安状況	249
(6) 区内の治安が良いと感じる点	253
(7) 区内の治安が悪いと感じる点	256
(8) 治安対策として区に力を入れてほしいこと	260
(9) 駐車時の鍵かけ状況	264
8 環境・地域活動	271
(1) 環境のために心がけていること	273
(2) 食品ロス削減のために心がけていること	276
(3) 日頃から環境への影響を考えた具体的な行動状況	279
(4) 町会・自治会の加入や活動	281
(5) 町会・自治会に加入しない理由	290
(6) この1年間に参加した活動と引き続き、または今後参加したい活動	292
9 「孤立ゼロプロジェクト」など	301
(1) 「孤立ゼロプロジェクト」の認知状況	303
(2) 「地域包括支援センター」の認知状況	306
(3) 高齢者の孤立防止や見守り活動への協力意向	309
(4) 協力意向がある活動内容	312
(5) 「フレイル」にならないための活動の認知と実践状況	314
(6) 「たんぱく質を多く含む食品」の毎食の摂食状況	317
(7) 仕事と仕事以外の生活の調和	320
(8) 「成年後見制度」「身体的暴力以外のDV」「LGBT」の認知状況	323
10 協働・協創	327
(1) 「協創」の認知	329
(2) 協働・協創の実践	331
(3) 区役所・区民・団体の協働や協創による事業推進の評価	333
11 区の取り組み	337
(1) 満足度と重要度	339
(2) 区政への区民意見の反映度	385
(3) 区に対する気持ち	388
(4) 区に対する気持ち（愛着、誇り、人に勧める）の具体的な内容（自由回答）	412
(5) 区を良いまちにするための行動	421

(6) 区政についてのご意見、ご要望（自由回答）	425
(7) 本調査内容の区民ニーズ・意識把握に対する有効度	432

第4章 使用した調査票	435
-------------------	-----

第 1 章 調査の概要

1 調査の目的

本調査は、区政の各分野について区民の生活実態、意識や意向、意見や要望などを把握し、これを今後の区政運営に反映させることを目的としたものである。

2 調査の内容

今回の調査では11項目について調査した。

- (1) 定住性
- (2) 大震災などの災害への備え
- (3) 洪水対策
- (4) 区の情報発信のあり方
- (5) 健康
- (6) スポーツ・読書
- (7) ビューティフル・ウィンドウズ運動
- (8) 環境・地域活動
- (9) 「孤立ゼロプロジェクト」など
- (10) 協働・協創
- (11) 区の取り組み

3 調査の設計

- | | |
|--------------|-----------------------|
| (1) 調査地域 | 足立区全域 |
| (2) 調査対象 | 足立区在住の満18歳以上の男女個人 |
| (3) 標本数 | 3,000サンプル |
| (4) 調査対象者の抽出 | 足立区住民基本台帳より単純無作為抽出法 |
| (5) 調査期間 | 令和3年8月19日(木)～9月10日(金) |
| (6) 調査機関 | (株)サーベイリサーチセンター |

4 調査地域

図1 地域区分図

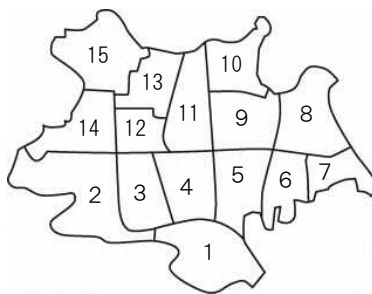


表1 調査地域一町丁目対応表

地域名	地 区 町 丁 目 名
第1地域	千住関屋町、千住曙町、千住東一丁目～二丁目、千住旭町、柳原一丁目～二丁目、日ノ出町、千住橋戸町、千住河原町、千住仲町、千住緑町一丁目～三丁目、千住宮元町、千住中居町、千住龍田町、千住桜木一丁目～二丁目、千住一丁目～五丁目、千住大川町、千住寿町、千住元町、千住柳町
第2地域	小台一丁目～二丁目、宮城一丁目～二丁目、新田一丁目～三丁目、鹿浜一丁目、堀之内一丁目～二丁目、椿一丁目、江北一丁目～五丁目、扇二丁目
第3地域	西新井本町一丁目～五丁目、扇一丁目、扇三丁目、興野一丁目～二丁目、本木一丁目～二丁目、本木東町、本木西町、本木南町、本木北町
第4地域	西新井栄町一丁目～三丁目、関原一丁目～三丁目、梅田一丁目～八丁目、梅島一丁目～三丁目
第5地域	足立一丁目～四丁目、西綾瀬一丁目～四丁目、中央本町一丁目～五丁目、弘道一丁目～二丁目、青井一丁目～六丁目
第6地域	加平一丁目、綾瀬一丁目～七丁目、東綾瀬一丁目～三丁目、谷中一丁目～二丁目
第7地域	東和一丁目～五丁目、中川一丁目～五丁目
第8地域	大谷田一丁目～五丁目、佐野一丁目～二丁目、辰沼一丁目～二丁目、六木一丁目～四丁目、神明一丁目～三丁目、神明南一丁目～二丁目、北加平町、加平二丁目～三丁目、谷中三丁目～五丁目
第9地域	西加平一丁目～二丁目、六町一丁目～四丁目、一ツ家一丁目～四丁目、保塚町、東六月町、平野一丁目～三丁目、保木間一丁目～二丁目、南花畑一丁目～三丁目、東保木間一丁目～二丁目
第10地域	花畑一丁目～八丁目、南花畑四丁目～五丁目、保木間三丁目～五丁目
第11地域	西保木間一丁目～四丁目、竹の塚一丁目～七丁目、六月一丁目～三丁目、島根一丁目～四丁目、栗原一丁目～二丁目
第12地域	西新井一丁目～七丁目、栗原三丁目～四丁目
第13地域	西伊興町、西伊興一丁目～四丁目、伊興一丁目～五丁目、西竹の塚一丁目～二丁目、東伊興一丁目～四丁目、伊興本町一丁目～二丁目
第14地域	谷在家一丁目～三丁目、鹿浜二丁目～八丁目、椿二丁目、江北六丁目～七丁目、加賀一丁目～二丁目、皿沼一丁目～三丁目
第15地域	舎人一丁目～六丁目、入谷一丁目～九丁目、古千谷一丁目～二丁目、古千谷本町一丁目～四丁目、入谷町、舎人町、舎人公園

5 調査方法

- (1) 調査方法 郵送配布郵送回収法（依頼状、督促状ともに1回）
 (2) 調査票 第4章の調査票を使用

6 回収結果

- (1) 標本数 3,000票
 (2) 有効回収数 1,709票 有効回収率 57.0%
 (3) 回収不能数 1,291票 回収不能率 43.0%

- (4) 地域別回収結果

表2 調査地域別回収結果

地域名	18歳以上人口	構成比	標本数	有効回収数	有効回収率
区全体	596,971	100.0%	3,000票	1,709票	57.0%
第1地域	67,679	11.3	335	199	59.4
第2地域	42,071	7.0	212	120	56.6
第3地域	35,577	6.0	180	84	46.7
第4地域	51,302	8.6	259	141	54.4
第5地域	53,878	9.0	272	161	59.2
第6地域	38,812	6.5	196	113	57.7
第7地域	28,915	4.8	146	91	62.3
第8地域	48,238	8.1	244	144	59.0
第9地域	39,819	6.7	201	110	54.7
第10地域	27,999	4.7	141	85	60.3
第11地域	48,618	8.1	246	144	58.5
第12地域	24,826	4.2	125	70	56.0
第13地域	29,525	4.9	149	86	57.7
第14地域	32,203	5.4	163	83	50.9
第15地域	27,509	4.6	131	77	58.8

(18歳以上人口は令和3年7月1日現在)

※有効回収数のうち1票は地域不明

第1章 調査の概要

(5) 性別・年代別回収結果

表3 性別・年代別回収結果

性・年代	標本数	有効回収数	有効回収率
全 体	3,000票	1,709票	57.0%
男性（計）	1,503	751	50.0
18～29歳	255	72	30.6
30 代	229	81	35.4
40 代	280	133	47.5
50 代	270	141	52.2
60 代	203	131	64.5
70歳以上	266	190	71.4
女性（計）	1,497	911	60.9
18～29歳	249	83	33.3
30 代	180	99	55.0
40 代	260	167	64.2
50 代	232	150	64.7
60 代	185	130	70.3
70歳以上	391	273	69.8
どちらでもない		2	
無回答		57	

(注) この表での『どちらでもない』は、「性」の回答において、今回の令和3年度より選択肢の表現を変更した「どちらでもない」を選んだサンプルの数を掲載している。

(注) この表での『無回答』は、「性」の回答がなかった方、「年代」の回答がなかった方、又はその両方の回答がなかった方のサンプル数を掲載している。

(注) 「性」を回答していても「年代」を回答していない方（12名）がいるため、各年代の数を足し上げても「性（計）」の数とは一致しない。

7 報告書の見方

- (1) 回答の比率(%)はすべて百分比で表し、小数点第2位を四捨五入した。そのため、百分比の合計が100%に満たない、または上回ることがある。
- (2) 問1の〈居住地域の評価〉における【そう思う(計)】のように、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」等の2つ以上の選択肢を合わせた項目の比率を表記する場合、その比率は、それぞれの選択肢の実数値を合計して、比率を再計算したものを使用している。
- (3) 複数回答の設問は、各選択肢を1つだけでなく、2つ以上選択するため、各選択肢の合計数字が100%を超える場合がある。
- (4) グラフ・数表上の選択肢表記は、場合によっては語句を簡略化してある。
- (5) 集計は、単純集計、フェイスシートとのクロス集計、設問間クロス集計の3種類を行った。
- (6) 性・年代別などのクロス分析の場合、分析軸の「その他」、「無回答」を掲載していないため、調査回答者全員の人数より少なくなることがある。
- (7) クロス集計において、回答対象者の属性毎のサンプル数が30を下回る場合は、誤差が大きくなるため、参考値としての掲載とする。
- (8) 標本誤差

標本誤差とは、今回のように全体（母集団）の中から一部を抽出して行う標本調査では、全体を対象に行った調査と比べ、調査結果に差が生じることがあるが、その誤差のことをいう。この誤差は、標本の抽出方法や標本数によって異なるが、誤差を数学的に計算することが可能である。

今回の調査の回答結果から、母集団（足立区在住の満18歳以上の男女）全体の比率を推定するため、無作為抽出法の場合の標本誤差の〈算出式〉と〈早見表〉を示した。

標本誤差および〈早見表〉は、以下のように使用する。

例えば、問3の「あなたは、足立区に今後も住みたいと思いますか」という質問に対して、「ずっと住みたい」と答えた人は、1,709人のうち36.0%であった。

回答者数が1,709人、回答の比率が40%前後のときの標本誤差は、〈早見表〉では±2.37%であるから、「ずっと住みたい」と考えている人は、足立区在住の満18歳以上の男女全体（母集団）の33.6%から38.4%であると推定できる。

〈標本誤差算出式〉

$$b = 2 \sqrt{\frac{N - n}{N - 1} \times \frac{P(1 - P)}{n}}$$

b = 標本誤差

N = 母集団数（足立区の18歳以上人口）

n = 比率算出の基数（回答者数）

P = 回答の比率（ $0 \leq P \leq 1$ ）

第1章 調査の概要

〈 早見表 〉

回答の比率 (P) 基 数(n)	10%または 90%前後	20%または 80%前後	30%または 70%前後	40%または 60%前後	50%前後
1,709	± 1.45	± 1.94	± 2.22	± 2.37	± 2.42
1,500	± 1.55	± 2.07	± 2.37	± 2.53	± 2.58
1,200	± 1.73	± 2.31	± 2.65	± 2.83	± 2.89
1,000	± 1.90	± 2.53	± 2.90	± 3.10	± 3.16
800	± 2.12	± 2.83	± 3.24	± 3.46	± 3.54
600	± 2.45	± 3.27	± 3.74	± 4.00	± 4.08
400	± 3.00	± 4.00	± 4.58	± 4.90	± 5.00
200	± 4.24	± 5.66	± 6.48	± 6.93	± 7.07
100	± 6.00	± 8.00	± 9.17	± 9.80	±10.00

〈 早見表 ― 性・年代別 〉

回答の比率(P) 基 数(n)		10%または 90%前後	20%または 80%前後	30%または 70%前後	40%または 60%前後	50%前後
全 体	1,709	± 1.45	± 1.94	± 2.22	± 2.37	± 2.42
男性 (計)	751	± 2.19	± 2.92	± 3.34	± 3.58	± 3.65
18～29歳	72	± 7.07	± 9.43	±10.80	±11.55	±11.79
30 代	81	± 6.67	± 8.89	±10.18	±10.89	±11.11
40 代	133	± 5.20	± 6.94	± 7.95	± 8.50	± 8.67
50 代	141	± 5.05	± 6.74	± 7.72	± 8.25	± 8.42
60 代	131	± 5.24	± 6.99	± 8.01	± 8.56	± 8.74
70歳以上	190	± 4.35	± 5.80	± 6.65	± 7.11	± 7.25
女性 (計)	911	± 1.99	± 2.65	± 3.04	± 3.25	± 3.31
18～29歳	83	± 6.59	± 8.78	±10.06	±10.75	±10.98
30 代	99	± 6.03	± 8.04	± 9.21	± 9.85	±10.05
40 代	167	± 4.64	± 6.19	± 7.09	± 7.58	± 7.74
50 代	150	± 4.90	± 6.53	± 7.48	± 8.00	± 8.16
60 代	130	± 5.26	± 7.02	± 8.04	± 8.59	± 8.77
70歳以上	273	± 3.63	± 4.84	± 5.55	± 5.93	± 6.05

(注1) Nはnより非常に大きく、 $\frac{N-n}{N-1} \doteq 1$ とみなせるので、 $\frac{N-n}{N-1} = 1$ として計算した。

(注2) 「年代」においては、「性」を回答していても「年代」を回答していない方、又はその逆に「年代」を回答していても「性」を回答していない方がいるため、各年代の数を足し上げても「性」(計)の数とは一致しない。

(9) 分類した項目の定義

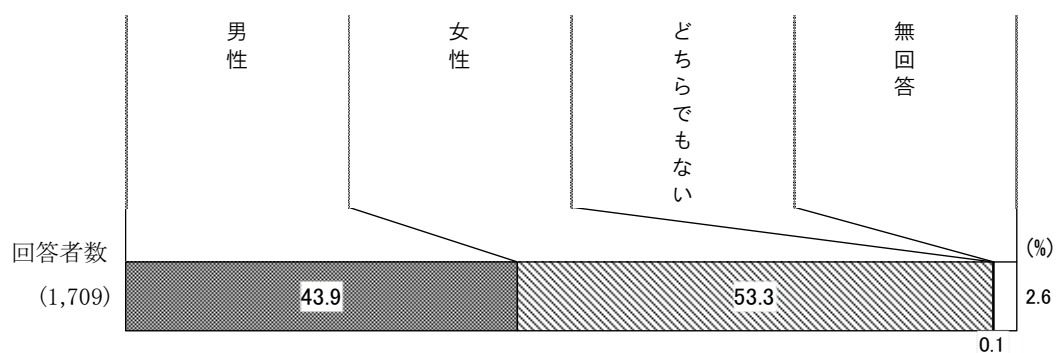
質問に対して、分類（表側）に使用した項目は以下のとおりである。

- ① 地 域 別 …… (15カテゴリー)
- ② 性 別 …… (2カテゴリー) ※性別の「どちらともいえない」は2サンプルのみだったので表側からは割愛した
- ③ 性 ・ 年 代 別 …… (12カテゴリー)
- ④ ライフステージ別 …… (7カテゴリー)
 - ・ 独身期 40歳未満の独身者
 - ・ 家族形成期 40歳未満で子どものいない夫婦、または本人が64歳以下で一番上の子どもが小学校入学前の人
 - ・ 家族成長前期 本人が64歳以下で一番上の子どもが小・中学生の人
 (家族成長小学校期) 本人が64歳以下で一番上の子どもが小学生の人
 (家族成長中学校期) 本人が64歳以下で一番上の子どもが中学生の人
 - ・ 家族成長後期 本人が64歳以下で一番上の子どもが高校生・大学生の人
 - ・ 家族成熟期 本人が64歳以下で一番上の子どもが学校を卒業している人
 - ・ 高齢期 本人が65歳以上の人
 (一人暮らし高齢者) 本人が65歳以上で一人暮らしの人
 (夫婦二人暮らし高齢者) 本人が65歳以上で夫婦二人暮らしの人
 (その他の高齢者) 本人が65歳以上で一人暮らし、夫婦二人暮らし以外の人
 - ・ その他壮年期 本人が40歳～64歳で独身、または本人が40歳～64歳で子どものいない夫婦
 (壮年独身者) 本人が40歳～64歳で独身
 (壮年夫婦のみ者) 本人が40歳～64歳で子どものいない夫婦
- ⑤ エリアデザイン別① …… (9カテゴリー)
- ⑥ エリアデザイン別② …… (2カテゴリー)
- ⑦ 住 居 形 態 別 …… (8カテゴリー)
- ⑧ 職 業 別 …… (8カテゴリー)
- ⑨ 就労（就学）場所別 …… (6カテゴリー)
- ⑩ 居 住 年 数 別 …… (6カテゴリー)

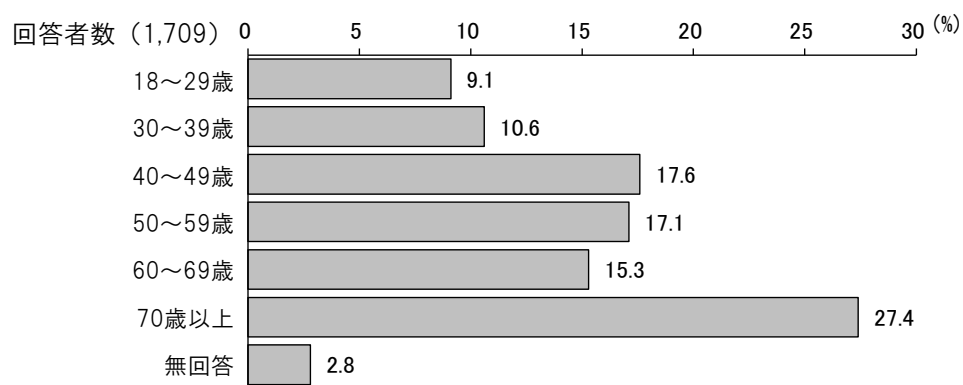
※ 本文中、表側に使用した項目の回答者数が30名未満の場合は、誤差が大きくなるため、参考値としての掲載にとどめ、分析コメントでは言及していないことがある。

8 標本構成

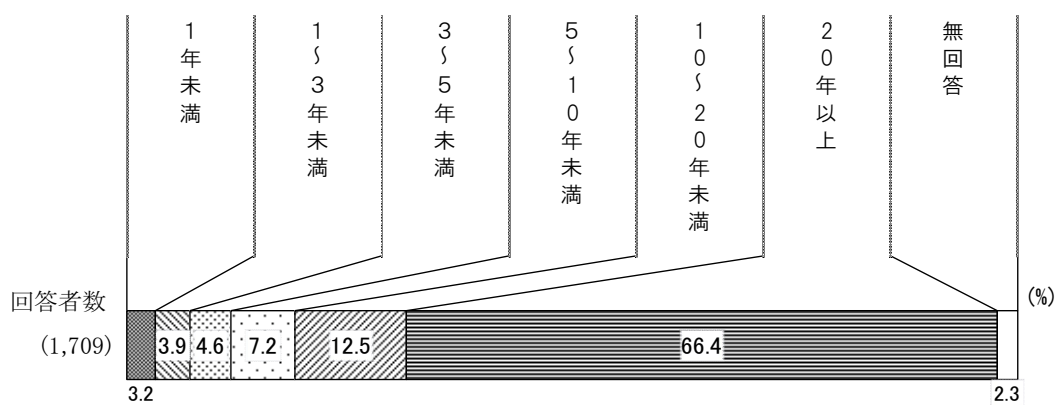
F 1 性別



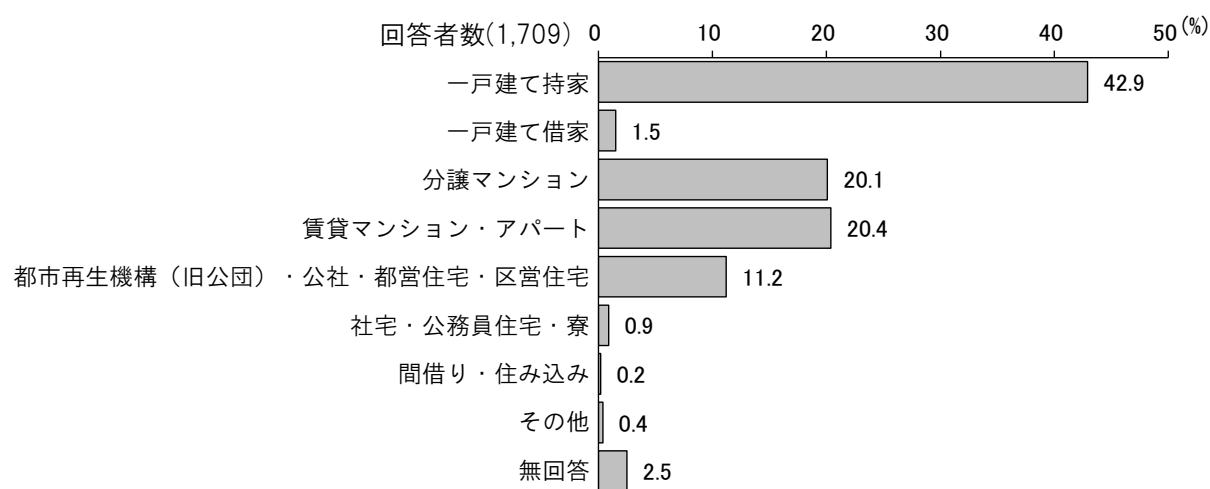
F 2 年齢



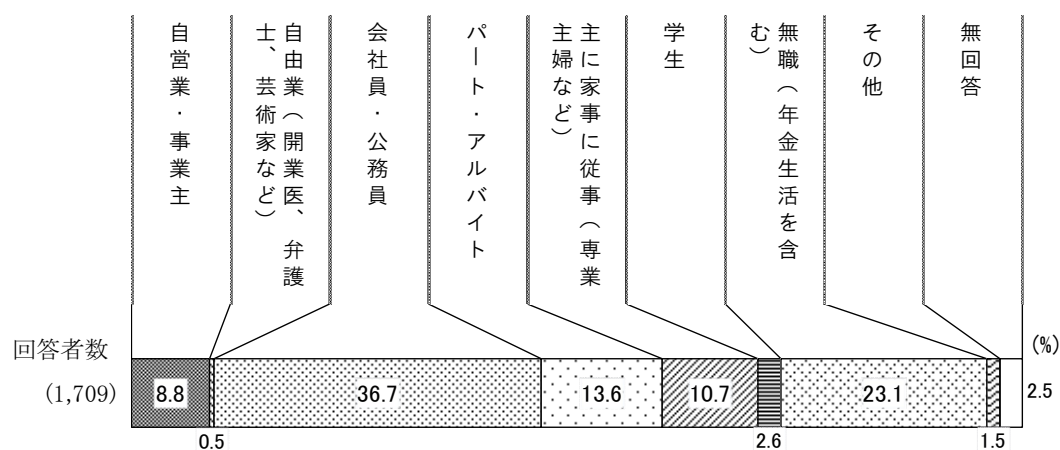
F 3 居住年数



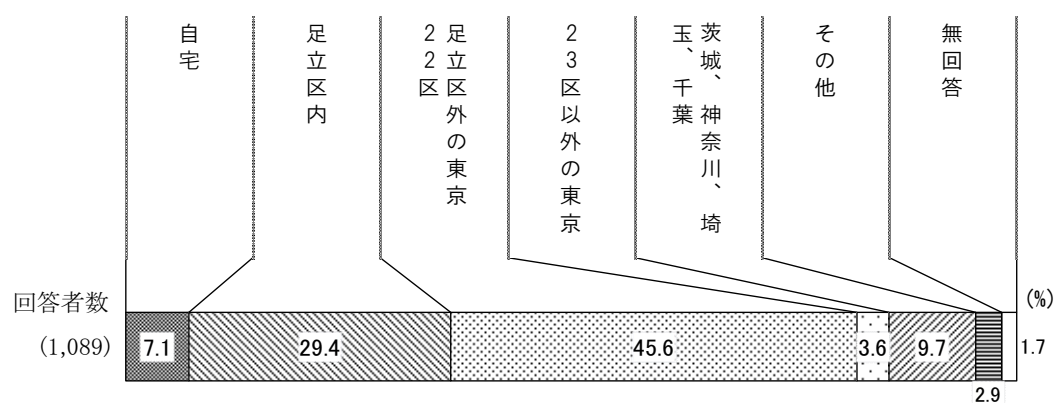
F 4 住居形態



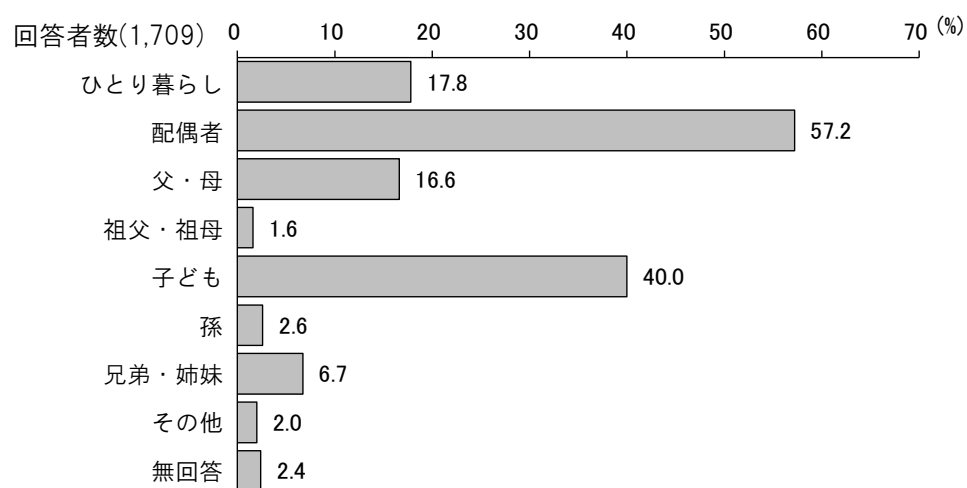
F 5 職業



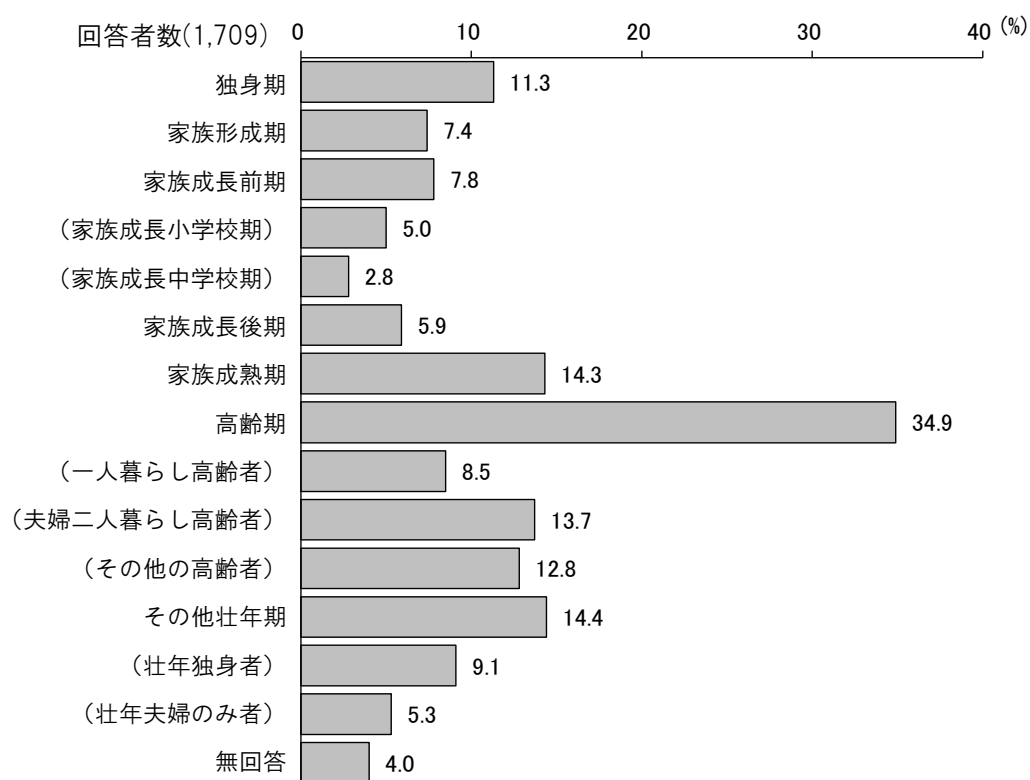
F 6 就労、就学場所【就労者、就学者ベース】



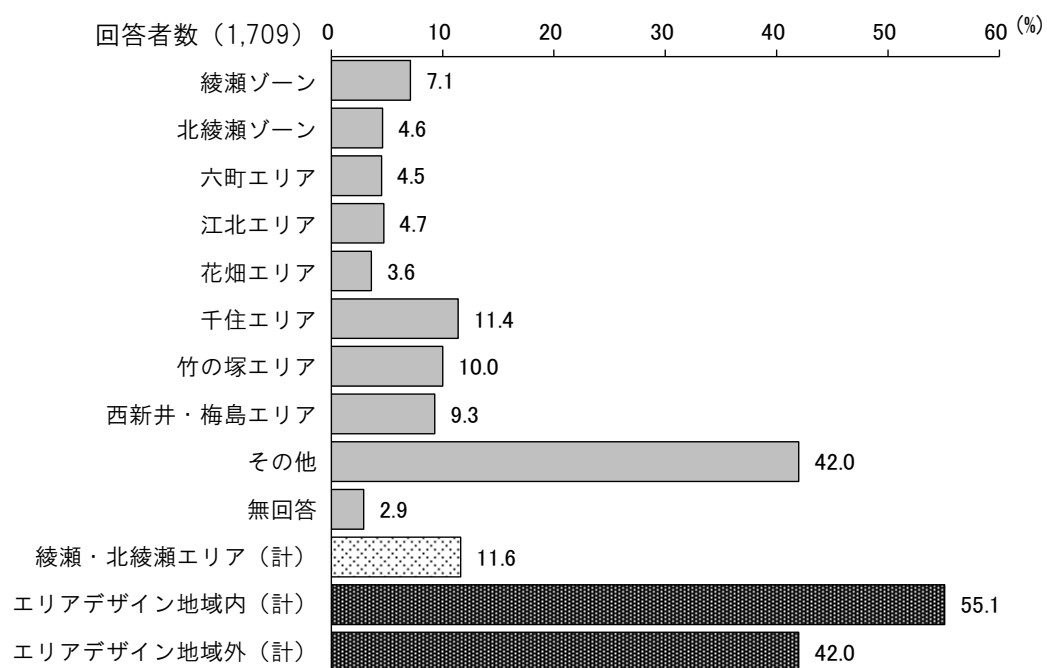
F 7 同居家族（複数回答）



F 8 ライフステージ



F 9 エリアデザイン



第2章 調査結果の要約

1 定住性

(1) 〈普段の買い物が便利である〉と感じている人は約8割

居住地域の評価については、全16項目のうち〈普段の買い物が便利である〉〈落書きが減少したと感じる〉〈通勤や通学などの交通の便が良い〉〈まちなかの花や緑が多い〉〈快適で安全なまちである〉〈ごみがなく地域がきれいになったと感じる〉〈不法投棄が減少したと感じる〉〈景観・街並みが良好である〉〈よく行く、または行きたい公園がある〉の9項目で肯定的評価（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）が5割以上となっている。一方、〈自転車利用者の交通ルール、走行マナーが良いと感じる〉は否定的評価（「そう思わない」＋「どちらかといえばそう思わない」）が唯一5割を超えており、区民の交通マナー意識の向上が求められる。

経年でみると、今回からの新設項目を除く10項目すべてで肯定的評価が前回調査から増加している。

また、肯定的評価が7割弱と高い〈通勤や通学などの交通の便が良い〉を地域別にみると、第1地域と第6地域の両地域で9割前後と高い一方で、第2地域、第10地域、第14地域の3地域では肯定的評価が5割以下となっており、他の項目に比べて地域差が大きくなっている。

(2) 【暮らしやすい】は増加傾向を続け、平成22年調査に次ぐ8割台半ばと高い割合

地域の暮らしやすさへの評価を【暮らしやすい】（「暮らしやすい」＋「どちらかといえば暮らしやすい」）でみると、8割台半ばと平成22年調査に次ぐ高い水準となったが、これを地域別にみると、第2地域、第10地域、第14地域などで8割以下と他地域に比べ低くなっている。

【暮らしにくい】（「暮らしにくい」＋「どちらかといえば暮らしにくい」）と回答した人に、特に暮らしにくいと感じることを聞いた結果、「住民のマナーやルールを守ろうとする意識が低いこと」が4割台半ばで前回調査に引き続き最も高く、次いで「交通の便が悪いこと」が約4割、「買い物がしにくいこと」が3割と続いている。

(3) 定住意向がある人は、現行の聴き方になった平成13年以降で初めての8割台

【定住意向】（「ずっと住み続けたい」＋「当分は住み続けたい」）は、現行の選択肢になった平成13年以降で初めて8割台となり、地域別にみても、15地域すべてで7割以上となっている。

買い物や通勤などの利便性や快適性と、不法投棄・落書きの減少など美化意識の向上など多くの項目で肯定的にとらえられ、区全体としての暮らしやすさの高評価や定住意向の向上につながっているものと考えられる。しかし、その一方で〈マナー意識の低さ〉、〈交通の便の悪さ〉、〈買い物のしにくさ〉については地域差がみられ、区の暮らしやすさの総合評価の向上に影響を及ぼしている。

今後は、これらの地域差の解消を図るとともに、住民のマナー意識の啓発など、各種の取り組みを一層強化し、暮らしやすさへの評価をさらに向上させることが、区民の定住意向をより高めていくことに繋がると考える。

2 大震災などの災害への備え

東日本大震災から10年半が経過した令和3年調査時における、区民の防災意識や日頃の備えはどのようにになっているのだろうか。

(1) 備蓄・買い置きをしている人はほぼ4人に3人の割合

食料の備蓄や防災用具の買い置きなどについては、【備蓄・買い置きあり】（「災害に備えて食料の備蓄や防災用具などを用意している」＋「特に災害対策としてではないが、一定量の飲食物などの買い置きはある」）は73.0%であり、前回調査時から大きな変動はみられなかった。

ただ「災害に備えて食料の備蓄や防災用具などを用意している」に限ってみると、前回から3.9ポイント増加し、震災半年後の平成23年調査結果（25.7%）と同レベルの水準まで割合が増加している。逆に、「特に用意していない」は平成23年調査時（23.8%）から平成29年調査時（33.8%）にかけて増加したものの、以降は減少傾向を続け、今回調査（23.5%）で平成23年調査時を下回るところまで減少した。このように、震災の翌年から続いていた家庭備蓄にみる区民の防災への意識低下は、平成29年を境に改善傾向に転じ、今回で平成23年調査時とほぼ同様の水準となった。震災から10年というところで、マスコミ等に再び災害のトピックスで取り上げられる機会が増えたことの影響もあるほか、水害に対する意識向上により家庭備蓄の増強につながったと考えられるが、この機会を生かして区民の防災意識を高い水準で保ち続ける取り組みが必要と考えられる。

(2) 備蓄や防災用具の買い置きなどの内容では、「水」が9割強

備蓄や防災用具、買い置きなどの内容では、「水」が9割強、「食料」が9割、「あかり」が8割と高くなっているのに対して、「医薬品」は4割台半ば、「簡易トイレ」、「防災袋」、「水の確保用品」は3割台にとどまっており、備蓄内容によって割合に大きな差がある。経年でみると、「簡易トイレ」が平成25年調査時に比べて15.1ポイント増加しており増加幅がもっと大きい。

また、水と食料の備蓄量について、国の「最低3日分、できれば1週間分」という目標に照らすと、「3日分以上1週間分未満」と「1週間分以上」を合わせた【3日分以上】が「水」と「食料」とともに4割弱となっている。経年でみると、前回に比べると「水」と「食料」はともに4～6ポイント減少したが、聴きはじめた平成25年調査と比べると、「水」は大きく変わらないものの、「食料」は6.7ポイント増加している。

〈水や食料を特に用意していない〉と回答された方に災害発生時の水や食料の確保について聴いたところ、「考えていない」が3割強で前回から微増した。また、性・年代別にみると「考えていない」は女性より男性の方が9.7ポイントほど高く、男女とも18～29歳と40代が他の年代より高くなっている。

このことから、ただ備蓄をしていて安心というのではなく、水と食料の備蓄量については、国の「最低3日分、できれば1週間分」という目標の浸透と、幅広い年代に対する啓発をさらに強化継続していくことが重要である。

(3) 家具類の転倒・落下・移動防止対策をしている【対策実施・多い】は初めて3割台

家具類の転倒・落下・移動防止対策については、【対策実施・多い】（「すべての家具類に対策を行っている」＋「対策をしている家具類が多い」）は3割強となり、平成23年以降で初めて3割台となった。住宅の形態別では、「一戸建て」に対し「集合住宅」が約8ポイント低く、所有形態別では、「持家」に対し「借家」が約11ポイント低くなっている。

また、全体の6割台半ばを占めている【少ない・行っていない】（「対策をしている家具類は少ない」＋「対策を行っていない」）の理由は、例年同様、順位・割合に大きな変動はなく、「面倒である」、「室内に危険性のある家具類がないため不要である」、「建物の壁にキズをつけたくない」が2割半ばで上位となっている。

家具類の転倒・落下・移動防止対策で【対策実施・多い】が初めて3割台になったとはいえ、人命にも係わることを考えれば、まだまだその実施率は低いと考える必要がある。方向性としては、「集合住宅」や「借家」における対策実施率の向上策や、「面倒である」「方法が分からない」という人に対する対策事例の紹介やPRなどが必要と考える。

(4) 避難場所の〈場所〉を知っている人は3割台半ば、第一次避難場所の〈意味〉を知っている人は2割強

前回の令和2年調査から、3種の避難場所の〈意味〉と〈場所〉を聴取する形式に設問方法を変更したが、前回に比べて認知割合に特に変動はみられなかった。認知度（「知っている」と回答）が最も高いのは【避難場所】の〈場所〉で3割台半ば、最も低いのは【第一次避難所】の〈意味〉で2割強であった。3種の避難場所とも〈場所〉より〈意味〉の認知度が低くなっている。

「なんとなく見当がつく」は【一時集合場所】と【避難場所】で3割台半ば、【第一次避難所】で3割前後であることから、この層を〈意味〉、〈場所〉ともに「知っている」にランクアップすれば認知度が5割以上となる。認知媒体としての割合が増加している「あだち防災マップ&ガイド」や、今回の調査で新たに認知媒体として効果的とされた「公園などに設置している表示板・標識」などさまざまな情報媒体を活用して、【3種の避難場所】の〈意味〉と〈場所〉の認知浸透度をさらに向上させていく必要がある。

(5) 大規模災害時の避難生活場所は「避難所」が4ポイント増加し約5割

前回調査では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けたからか、従来は5割台半ばで推移していた「避難所」が4割台半ばまで急下降したが、今回調査時（令和3年8月）は東京都のコロナ感染者数が減少傾向にあって約5割まで増加した。このことから、大規模災害時に自宅に住めなくなった場合に避難生活を送る場所として区民の半数から過半数が「避難所」を想定していることが窺える。従って、避難所における感染拡大防止対応をはじめ、衛生面など新たな生活様式に備えた工夫や対策が必要であり、良好な生活環境の確保に力を入れていくことは引き続き重要となっている。

(6) 大地震の際の防災対策で区に力を入れてほしいこととして、「衛生対策の充実」「ライフラインやエネルギーの確保」が6割で並んで上位

大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいこととしては、「非常用トイレの確保など衛生対策の充実」と「ライフラインやエネルギーの確保」がともに6割で上位となり、次いで「水・食料の備蓄の充実」が5割台半ばで続いている。この上位3位については近年の調査において回答傾向に変化はなく、引き続きこれらの分野への取り組みを推進する必要がある。

3 洪水対策

令和元年台風第19号により、河川氾濫の危険が高まり、区内全域に避難勧告を発令した。この経験による区民の水害への意識の変化はみられるのだろうか。

(1) 「足立区洪水ハザードマップ」を【見たことがある】は8割台半ば

「足立区洪水ハザードマップ」を【見たことがある】（「見て、自宅の浸水深を確認した」＋「見て、内容は確認した」＋「見たが、内容までは覚えていない」）は今回84.5%で前回（84.7%）に比べて特に変動はないが、より認識の高い「見て、自宅の浸水深を確認した」と「見て、内容は確認した」は微増している。

また、「そのような地図は見たことがない」は平成27年以降漸減してきたが、今回調査では0.5ポイントの微減にとどまった。今後も、このマップの存在を広く区民に周知して、自宅の浸水深を確認してもらうなど、起こり得る水害への理解を深めてもらうことが重要である。

(2) 河川はん濫時の避難場所を事前に決めている人が8割近くと多いが、そのうち6割強が「自宅にとどまる」と回答

河川がはん濫する恐れがある場合の避難場所を事前に「決めている」人は8割近くと多いが、決めている避難場所は、「自宅にとどまる（自宅内の高い階への移動を含む）」が6割強を占め、次点の「近隣の小・中学校など区が開設する水害時の避難所」（20.8%）を大きく上回っている。

一方、避難場所を事前に「決めていない」（19.8%）人の主な理由は「避難する場所がわからないから」が4割台半ばで最も多く、次いで「河川のはん濫は起こらないと思っているから」が1割台半ばとなっている。「足立区ハザードマップ」で自宅内に浸水しない安全な場所があることを確認している場合は問題ないが、その確認をしていない中で「自宅にとどまる」人を含めて避難場所の安全性と避難場所への誘導を推し進めることが重要である。

(3) 河川がはん濫して浸水被害になるような大洪水が迫っている際の情報で、「避難する」割合が高いのは、〈区から避難指示が発令されたとき〉が7割弱、〈自宅付近が浸水したとき〉が6割台半ば

河川がはん濫して浸水被害になるような大洪水が迫っていると仮定した場合の情報で、「避難する」の割合が高い順にみると、「区から避難指示が発令されたとき」が68.6%で最も高く、次いで「自宅付近が浸水したとき」（64.5%）、「近所の人が避難をしているのを見たとき」（42.1%）となっている。6項目ある設問のうち「区から高齢者等避難が発令されたとき」を除く5項目で前回より3～5ポイント増加しており、水害に対する早期避難の呼びかけの浸透度が高まっている。

4 区の情報発信のあり方

（１）区の情報の入手手段として、「あだち広報」が7割、次いで「区のホームページ」が3割

区に関する情報の入手手段としては、「あだち広報」が7割で、本設問を再聴取しはじめた平成30年以降は7割前後で特に変動なく推移し、依然として他の媒体に比べて高くなっている。次いで、「区のホームページ」(30.4%)、「町会・自治会の掲示板・回覧板」(29.4%)、「トキメキ」(29.1%)と僅差で続いている。上位4媒体は性別での差はないが、年代別にみると、「あだち広報」と「トキメキ」はおおむね年代が上がるほど割合も高くなっている。「区のホームページ」は男女ともに40代～60代（3割台後半～4割台）で高く、「町会・自治会の掲示板・回覧板」は男女とも70歳以上（5割台）で他の年代層に比べ特に高くなっている。また、第6位の「Aメール」は女性(24.4%)の方が男性（15.4%）より9.0ポイント高くなっているが、年代別の傾向は男女とも同様に40代で最も高くなっている。

このような状況を踏まえ、高年代層での割合が高い「あだち広報」や「町会・自治会の掲示板・回覧板」、「トキメキ」といった紙媒体の重要性を認識しつつ、壮年期で高まりつつある「区のホームページ」や「Aメール」などのICTを活用した媒体を充実させ、その仕組みに若者を取り込むことが重要であると考えられる。

（２）重要と考える区の情報は、「健康や福祉」と「災害や気象」が6割台半ば近くで上位

区が発信する情報で重要と考えるのは、「健診や生活支援など健康や福祉に関する情報」(63.8%)と「災害や気象に関する情報」(63.1%)が上位2項目となっている。以下「国保・年金・税などに関する届出や証明に関する情報」(50.4%)、「ごみ・リサイクルなど環境に関する情報」(47.2%)の順となっている。

この結果を性・年代別にみると、「健診や生活支援など健康や福祉に関する情報」は男女とも50代以上で高く、「国保・年金・税などに関する届出や証明に関する情報」は男性の60代と女性の70歳以上で6割強と高くなっている。また、「出産や育児、就学など子どもや教育に関する情報」が男女ともに30代（男性56.8%、女性65.7%）で特に高くなっている。

（３）必要な時に必要とする区の情報は「得られている」が漸増傾向を続け7割台後半

区の情報が「必要なときに得られているか」を聴いたところ、【得られている】（「十分に得られている」＋「ある程度得られている」）は76.1%となり、経年でみると、平成25年（60.5%）から15.6ポイント増加し最も高くなっている。一方、【得られない】（「得られないことが多い」＋「まったく得られない」）は、平成25年以降で最も低い割合（10.6%）となっており、この結果から、区民が必要とする区の情報提供は着実に進んでいると言える。

しかしながら、依然として区民の1割は、必要なときに区の情報が【得られない】と答えており、「情報の探し方がわからない」(30.8%)と「情報が探しにくい」(28.0%)が主な理由となっている。

5 健康

(1) 区のキャッチフレーズを「知っている」は4割で変動なし

『あだちベジタベライフ～そうだ、野菜を食べよう～』について、「内容まで知っている」が12.6%で、これに「詳しくは知らないが、言葉は聞いたことがある」(26.3%)を合わせた【知っている】は38.9%で、「知らない(初めて聞いた)」が58.2%となっている。経年でみると、「内容まで知っている」は微増しているものの、直近5年間は特に大きな変動はみられない。

性別でみると、【知っている】は女性(46.5%)の方が男性(29.3%)より17.2ポイントと大きく上回っている。性・年代別にみると、女性の30代以上は4割以上となっており、特に70歳以上で54.6%と最も高くなっている。その一方で、女性の18～29歳(14.5%)は1割台半ばで、他の性・年代層に比べて特に低くなっている。

一般的に糖尿病の有病率は男性が高いことから、男性に対するキャッチフレーズの浸透・周知がより必要であり、30代の若年層からの生活習慣の適正化を図るため、若年層も含めた全年代層に対するキャッチフレーズの周知活動を展開していくことが重要である。

(2) 糖尿病の進行による病気や障がいでは知っているものは、「失明」と「足の壊疽」が6割台

糖尿病が進行するとあらわれる病気や障がいでは知っているものは、「失明」が61.9%で最も高く、次いで「足の壊疽(えそ)」(60.3%)、「人工透析」(47.5%)、「口の渇き」(45.4%)、「腎不全」(36.1%)などとなっている。性別でみると、ほぼ全ての項目で女性の方が高く、「足の壊疽(えそ)」と「口の渇き」では女性の方が10ポイント以上高くなっている。

前回調査との比較では、「失明」が3.8ポイント減少しているものの、特に大きな変動はみられない。

(3) 野菜から「食べている」人は3ポイント以上増加し7割弱

糖尿病の予防には、“食事の際に野菜から食べ始めることが効果的である”と言われていることに対し、「(野菜から)食べている」人は68.1%となり、前回調査から3.3ポイント増加している。

また、野菜の摂取量については、“1日350g以上”が目標とされており、実際に【できている】(「できている」+「だいたいできている」)は43.5%で、前回調査から3.2ポイント増加し、平成25年以降では最も高くなった。

今後も、糖尿病が進行するとあらわれる病気や障がいについて、継続して区民の理解を深めていくとともに、あらゆる性別、年代の区民に対し、糖尿病予防における野菜摂取の重要性を一層周知していくことが重要である。

(4) 自分は「健康である」と自認している人は6割台半ば

健康維持のために実行している、心がけていることとしては、平成25年以降、「毎年健康診断を受けている」と「毎日朝ごはんを食べている」がともに6割台で上位となっているが、経年でみると「毎年健康診断を受けている」は漸増傾向で、「毎日朝ごはんを食べている」は逆に漸減傾向となっている。「毎日朝ごはんを食べている」ことについて年齢別でみると、30代以下がともに5割台半ばより低い傾向にある。このことから、健康づくりのためには、30代以下の若年層に対し1日3食の必要性も強調した取り組みや啓発が必要と考える。

また、令和元年調査より4段階評定で聴取している「自身の健康状態」の結果をみると、「健康な方だと思う」が60.7%を占めており、「非常に健康だと思う」(5.3%)を合わせた【健康である】は6割台半ばとなっている。一方、【健康ではない】(「あまり健康ではない」+「健康ではない」)と感じている人は3割強となっている。

性・年代別でみると、【健康である】は男女とも30代までは7割前後であるが、40代以上はどの年代も6割台に減少している。

また、体調や習慣に関する項目について、平成25年から今回までを経年的にみると、「習慣的にたばこを吸っている」(22.9%→17.5%)が漸減傾向にあるが、「疲れているのに寝付けない、途中で目が覚める、朝早く起きてしまうことが2週間以上続くことがある」(19.2%→25.1%)は漸増傾向となっており、今後の取り組みの課題となっている。

(5) この一年間のがん検診の受診率は4割弱、種類別では「大腸がん検診」が4割台半ば

この一年間のがん検診の受診状況は、「受けた」が38.1%で、「受けていない」が59.0%となっている。がん検診を「受けた」と答えた性別内訳では、女性(46.7%)が男性(28.0%)を18.7ポイント上回って高く、前回調査と変わらない。がん検診を「受けた」年代は、女性では30代から60代が中心で、男性では60代から70代が中心となっている。受けたがん検診の種類では、男女共通の「大腸がん検診」は47.3%、「胃がん検診」は36.6%となっており、性別で見ると、女性は「子宮頸がん検診」(54.8%)、「乳がん検診」(54.6%)が5割台半ばと高く、男性は「大腸がん検診」(58.1%)、「胃がん検診」(53.3%)が5割半ばから6割近くと高くなっている。

がん検診においては、検診の種類によって該当する性・年代層が異なることから、がん検診の初回の受診率を高めることが重要であると考えられる。

(6) かかりつけ歯科医を「決めている」人は6割台半ば、うち「歯石除去・歯面清掃」は約6割が実施、「定期健診(年1回以上)」は4割台半ばが実施

口腔の疾患はさまざまな全身疾患と関連していることが報告されており、口腔の健康状態は全身的な健康状態と密接な関連があると言われている。そこで、今回調査からかかりつけ歯科医の有無を聴取した。かかりつけ歯科医を「決めている」は64.1%で、性別で見ると女性(69.7%)の方が男性(57.4%)より10ポイント以上高くなっている。

実施年度は異なるが、令和元年に実施された東京都福祉保健基礎調査「都民の健康と医療に関する実態と意識」では、かかりつけ歯科医を「決めている」が70.8%であったことと比較すると、東京都全体に比べて本区は6.7ポイントほど低くなっている。前述のとおり、口腔の健康は全身の健康にもつながるため、かかりつけ歯科医の必要性を啓発する取り組みの強化が重要である。

(7) 感染症予防として手洗いを「毎日(毎回)行っている」人が9割

帰宅時に感染症予防として手洗いを「毎日(毎回)行っている」が90.3%で、「ときどき行っている」(6.1%)を合わせた【行っている】は96.4%となっており、前回調査時の質問文と選択肢は若干異なるものの、“日頃からの感染症予防としての手洗いの実践状況”の結果、「日常的に手洗いを実践している」(86.0%)と「汚れたときは手洗いを実践している」(10.8%)を合わせた【実践している】も9割台半ばで同程度の回答割合となっており、感染症予防としての手洗いは浸透していると言える。

(8) 「ゲートキーパー」という言葉を「知らない(初めて聞いた)」が8割台半ば近く

「ゲートキーパー」という言葉の認知状況は、「内容まで知っている」が2.9%、「詳しくは知らないが、言葉は聞いたことがある」が12.2%で、これらを合わせた【知っている】は15.1%となり、聴取を始めた令和元年調査から特に大きな違いはみられない。性・年代別にみると、【知っている】は男性の方がやや高く、最も高いのが男性の18～29歳で25.0%、最も低いのが女性の18～29歳で8.4%となっている。

人々の孤独・孤立化は、コロナ禍による人脈の寸断から孤立する人が増えるという課題が示唆されていたり、国でも孤独・孤立対策担当室が設置されるなど、非常に注視されていることから、「ゲートキーパー」の認知率を向上させる取り組みと啓発は急務と言える。

6 スポーツ・読書

(1) 「運動・スポーツはしていない」は4割、「30分以上の運動を週2回以上」は2割

日常的な運動・スポーツの実施状況をみると、「30分以上の運動を週2回以上」が20.4%で、以下「年に数回（時間は問わない）」までを含めた【運動している】は56.3%で、「運動・スポーツはしていない」は40.5%となっている。前回調査との比較では特に大きな違いはみられない。

(2) 継続的に実施している運動・スポーツは「ウォーキング」が5割強で突出

【運動している】と回答した人に、継続的に実施している運動・スポーツを聞いた結果は、「ウォーキング」が51.0%で最も高く、これに「健康体操（エアロビクス・リズム体操・ストレッチなど）」(24.9%)と「筋力トレーニング」(21.3%)が続いて上位となっている。性・年代別にみると、「ウォーキング」は性別では特に差異がなく、男性の60代と70歳以上で6割台後半と高くなっている。「健康体操」は女性の方が男性より20ポイント以上高く、女性の50代で4割強と最も高い。一方、「筋力トレーニング」は男性の方が女性より約8ポイント高く、男性の18～29歳で4割台半ば近くと最も高くなっている。また、運動・スポーツの実施場所については、「自宅周辺」(59.0%)が最も高く、次いで「自宅」(35.8%)となっている。前回調査と比較すると、「自宅周辺」が約3ポイント増加している。

(3) 運動していない人が運動・スポーツを行うためのきっかけは、“身近な場所でできる”

日常的に「運動・スポーツをしていない」人に、どのようなきっかけがあれば運動・スポーツを行いたいと思うかを選んでもらった結果は、「身近な場所で運動・スポーツができる」(35.3%)、「手軽な価格で施設を利用できる」(27.0%)、「レベルを気にせず参加できる機会がある」(21.5%)が上位で、これらの上位3項目は男性より女性の方が高めとなっている。また、特徴的な点として、「託児サービスなど子どもの面倒を見てもらえる」は女性の30代で42.3%と高い割合であった。

(4) 東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた区の取り組みで関心があることは、「選手の育成や支援」が1割台半ばで最多も、「特にない」が5割弱に達する

本調査の実施時期がパラリンピックとは一部重なっていたが、オリンピックは終了していたこともあり、「特にない」が約8ポイント増加し5割弱と最も高く、多くの項目で前回から減少した。そんな中で「選手の育成や支援」(14.9%)が4.4ポイント増加し、取り組み項目では最多となった。また、パラリンピックの最中でもあり「障がい者スポーツの普及・振興・環境整備・ボランティアの養成」(11.5%)が3.6ポイント増加し前回調査よりも上位となっている。

(5) 新たに始めたいスポーツ、文化、ボランティア活動について、始めたい活動がある人は1割台半ばみられるも、「ない」人が7割強と大半

東京2020大会はスポーツ・文化の祭典であり、ボランティアの活躍の場でもある。このタイミングにおいて、新たに始めたいスポーツ、文化、ボランティア活動の有無を聞いた。「ある」は17.6%で、「ない」が72.0%と大半を占めている。この傾向は経年でみても特に大きい変動はみられない。性・年代別にみると、「ある」は、女性(19.8%)の方が男性(15.4%)より4.4ポイント高く、女性の40代が31.7%で最も高くなっている。新たに始めたい活動が「ある」、または「今までの活動を継続」と回答した人に、その活動内容を聞いたところ、「スポーツをする・スポーツを観戦する」が59.5%で最も高く、次いで「文化活動をする・伝統文化などを観る」(34.1%)となっている。また、新たに始めたい活動が「ない」と回答した人に、始めるためのきっかけを聞いたところ、「始めようとは思わない」が66.8%を占めており、具体的なきっかけとしては、「スポーツ・文化・ボランティア活動や団体の情報提供」(11.9%)が最も多くなっている。

(6) 区のスポーツ施設における高齢者免除制度は「現行のまま継続すべき」が、例年同様、4割台半ばで主流

足立区の温水プールやスポーツ施設を高齢者が無料で使用できる制度（高齢者免除制度）については、36.8%が何らかの制度改正を望んでいるものの、「現行のまま継続すべき」が42.9%で最も高くなっている。この傾向は過去5年間で特に大きな変動がなく推移している。

(7) 最近1か月間に読書に関わる行動があった人は8割台半ばで、「新聞を読む」が4割台半ばを超えて最も高く、「本を読む」が4割台半ばで続く

最近1か月間の読書に関わる行動状況は、【読書に関わる行動あり】が84.0%を占めている。具体的な内容としては、「新聞を読む」が47.4%と最も高く、以下「本を読む」(44.2%)、「雑誌を読む」(37.3%)、「書店・古書店に行く」と「漫画（アニメ）を読む」(各31.3%)などが続いている。一方、【読書に関わる行動なし】は12.1%で、その内訳として「したかったが、できなかった」が1.6%、「いずれもしなかった」が10.5%となっている。

性・年代別にみると、「新聞を読む」は男女とも年代が上がるほど割合が高い傾向があり、男性の70歳以上で71.1%と最も高く、「漫画（アニメ）を読む」は男性の40代以下、女性の30代以下で6割以上と高くなっている。

また、【読書に関わる行動なし】の人にその理由を聴いたところ、「忙しいから」が32.4%で最も高く、次いで「加齢に伴い目が悪くなり読みづらくなったから」(26.1%)などとなっている。

7 ビューティフル・ウィンドウズ運動

(1) 「ビューティフル・ウィンドウズ運動」を知っている人が半数近く

足立区独自の犯罪抑止運動である『ビューティフル・ウィンドウズ運動』については、【知っている】（「知っていて、活動を実践している」＋「知っているが、特に何も行っていない」＋「名前は聞いたことはあるが、内容はわからない」）が44.5%と前回調査（45.8%）より微減しており、「知っていて、活動を実践している」は、5.8%と前回調査（4.4%）から微増している。

また、『ビューティフル・ウィンドウズ運動』で現在参加している、もしくは今後参加したい取り組みは、前回から特に違いはみられず、「参加していない（今後も参加しない）」が64.1%を占めている。この状況を踏まえて、これまで以上に、区民がこの取り組みに対する認識を深め、理解を広めていく取り組みを行うとともに、区民の活動への参加を促進していくことが必要である。

(2) 「花のビュー坊プレート」「ビュー坊のガーデンピック」の認知状況は、依然3割程度

『花のビュー坊プレート』と『ビュー坊のガーデンピック』の認知状況については、「すでに使用している」は3.5%と1.3%で、ともに極めて低い割合で推移している。【知っている】（「すでに使用している」＋「見たことがあり、名称なども知っている」「見たことはあるが、名称などは知らなかった」＋「名称などは知っているが、見たことはない」）でみても、33.4%と29.2%で3割前後にとどまり、区民への認知浸透度は依然として低いままとなっている。

(3) 治安が改善していることを「知っている」は4割台半ば

足立区内の刑法犯認知件数がピークだった平成13年と比較して1万件以上減少していることを「知っている」（44.8%）人は4割台半ばで、「知らない（初めて聞いた）」（52.8%）の5割強を下回っているが、平成30年以降は漸増傾向となっている。

(4) 居住地域の治安状況が【良い】と感じている人は6割強で、平成23年以降漸増が続く

居住地域の治安状況については、【良い】（「良い」＋「どちらかといえば良い」）が6割強と、本設問を開始した平成23年以降は漸増を続けこの10年間で20ポイント以上の増加となっている。しかしながら、地域別にみると7割台半ば近くと高い地域がある一方で、5割強と低い地域もある。また、性・年代別でも、男女とも比較的若い層で低く、地域や性・年代別で意識に差がみられる。

治安が【良い】と評価した理由としては、「自分を含め、身近で犯罪に巻き込まれた人がいないから」が45.9%で最も高くなっているものの平成25年から漸減傾向は続いており、代わりに次点の「防犯カメラが増えたことで、安心感があるから」（34.5%）が漸増傾向となっている。一方で、治安が【悪い】と感じる理由としては、「自転車盗難、空き巣など生活に身近な犯罪が多発していると聞いたことがあるから」（44.4%）が最も高くなっているものの、この5年間は漸減傾向となっており、代わりに次点の「子どもに対する『不審な声かけ事案など』の発生が多いと聞いたことがあるから」（35.4%）が漸増傾向となっている。

治安対策として足立区に特に力を入れてほしいことは、「防犯カメラなど防犯設備の設置に対する支援」が51.7%で最も高く、次いで「安全に配慮した道路、公園の整備」（42.7%）、「安全・安心パトロールカー（青パト車）による防犯パトロール」（37.0%）となっており、こちらの方は例年同様の傾向となっている。

(5) 今後の課題

前述のとおり、治安が良い、または悪いと感じる理由は経年で変化があるものの、区に要望される治安対策は例年変わりがなく、防犯カメラなど防犯設備の設置促進の取り組み強化や防犯パトロールの強化などとなっている。これらの取り組みを軸に、新たな治安向上に資する施策を間断なく推し進めることが更なる治安の向上に繋がると考える。

8 環境・地域活動

- (1) 環境のために心がけていることは「ごみと資源の分別」が8割台半ばを超えて1位、「不要なレジ袋を断る」が約8割で2位

環境のために心がけていることでは、「ごみと資源の分別を実行している」(87.7%)が今回も最も高く、平成23年以降8割台半ばから9割弱の間で推移している。令和2年7月からレジ袋の有料化がはじまり、昨年の調査で大きく伸長した「マイバッグを使うなどして、不要なレジ袋を断っている」は今回も増加して79.3%となっている。また、今回の調査で新設された「雑紙を燃やすごみではなく、資源として出している」(59.4%)と「自然環境を大切にすることを心がけている」(31.4%)の2項目がそれぞれ3位、6位となっている。

- (2) 食品ロス削減のために心がけていることは「残さず食べる」が7割台半ば、「外食時は食べられる分だけ注文」が5割

食品ロス削減のために心がけていることは、「残さず食べるようにしている」が76.8%で最も高く、次いで「外食時に食べられる分だけ注文する」(50.3%)、「買い物前に必要なものをメモに書き、買いすぎないように注意している」(44.2%)などとなっている。

前回までは「食品ロス」という言葉の認知者のみに聞いていた項目であるが、「食品ロス」という言葉の認知度が高くなってきたことにより、今回調査では全員に聴いたものの、前回調査から割合や傾向に大きな違いはみられない結果となった。

- (3) 環境への影響を考えた行動は「行動している」が3割強、「行動することが時々ある」が4割

環境への影響を考えた日頃からの行動については、「行動している」が33.0%で、「行動することが時々ある」(40.8%)を合わせた【行動している】は7割台半ば近くとなっている。性・年代別でみると、【行動している】は男性の30代で82.7%と最も高く、女性の60代でも81.5%と高くなっている。

- (4) 町会・自治会に加入している人は6割弱で、活動に参加したことがある人は4割強

自分の住所地に該当する町会・自治会の認知は、「はい(知っている)」が70.6%、町会・自治会への加入は「はい(加入している)」が58.0%となっている。町会・自治会の活動内容の認知は「はい(知っている)」が54.9%、町会・自治会の活動への参加は「はい(参加したことがある)」が41.3%となっている。

地域別にみると、加入状況は第3地域(73.8%)が最も高く、次いで、第5地域(68.3%)となっている。活動の参加状況は第5地域(55.3%)が最も高く、次いで、第13地域(46.5%)と第9地域(46.4%)などとなっている。性・年代別にみると、加入状況は女性(59.1%)の方が男性(56.3%)より僅かに高く、女性の70歳以上(77.7%)が最も高くなっている。活動の参加状況は女性(44.8%)の方が男性(37.3%)より高く、女性の70歳以上(64.5%)が最も高くなっている。

町会・自治会に加入しない理由は、「加入する必要性を感じないから」(30.7%)が最も高く、次いで、「人間関係がわずらわしいから」(13.8%)となっている。

9 「孤立ゼロプロジェクト」など

(1) 「孤立ゼロプロジェクト」を【知っている】は2割台半ば

「孤立ゼロプロジェクト」の認知状況は、【知っている】（「知っていて、内容も概ね理解している」(8.6%) + 「聞いたことはあるが、内容はわからない」(17.7%)）は26.3%と、前回調査から特に変動はない。

【知っている】を地域別でみると、第14地域、第12地域、第10地域、第3地域で3割台と他の地域に比べて高くなっている。性・年代別では、女性の方が男性より約8ポイント高く、女性の60代と70歳以上で4割強と高くなっている。

(2) 「地域包括支援センター」を【知っている】は5割台半ば超

「地域包括支援センター」の認知状況は、【知っている】（「知っていて、業務内容も概ね理解している」(25.6%) + 「聞いたことはあるが、詳しくはわからない」(32.1%)）は57.8%と、前回調査から特に変動はない。

【知っている】を地域別でみると、第10地域、第4地域、第1地域で6割台後半と他の地域に比べて高くなっている。性・年代別では、女性の方が男性より約19ポイント高く、女性の70歳以上で8割弱と高くなっている。

(3) 高齢者の孤立防止や見守り活動に「協力したい」は約2割

高齢者の孤立防止や見守り活動への協力意向は、【協力したい】（「積極的に協力したい」(2.0%) + 「負担にならない範囲で協力してもよい」(17.8%)）は19.8%で前回調査から変動はない。

【協力したい】を地域別でみると、第9地域が3割で他の地域に比べて高くなっている。性・年代別では、女性の方が男性より約6ポイント高く、女性の60代で3割強と最も高くなっている。

協力意向のある人の活動内容は、「体調の変化、悩み相談などを伺いながら寄り添う、ちょっとした気づかいの活動」が52.4%と最も高く、次いで『世間話をする頻度』や『困りごとの相談相手』などを調査する活動（37.0%）、「住区センターや地域での自主的な活動への協力や参加の働きかけなどをする活動」（30.5%）などとなっている。

(4) 「フレイル」を予防する活動を【知っている】は5割強で、「実践している」は1割台半ば

「フレイル」にならないために「運動」「口の健康・栄養」「社会参加」のそれぞれが大切なことの認知状況については、「知っていて、活動を実践している」が15.4%で、これに「知っているが、特に何もしていない」(37.0%)を合わせた【知っている】は5割強となっている。

性・年代別にみると、女性の方が男性より高く、女性の70歳以上が7割で最も高くなっている。

(5) 「たんぱく質を多く含む食品」の摂食頻度は「毎食（1日3回）食べている」が2割強

たんぱく質を多く含む食品（肉、魚、卵、大豆製品）の摂食頻度は、「毎食（1日3回）食べている」が21.9%にとどまり、最も高いのは「1日1回位食べている」(37.7%)となっている。

性・年代別でみると、「毎食（1日3回）食べている」は、男性の18～29歳が3割台半ばで最も高くなっている。

(6) 仕事と仕事以外の生活の調和が「取れている」は4割台半ば、「取れていない」は2割強

仕事と仕事以外の生活の調和について、調和が「取れている」が43.6%で、「取れていない」(22.4%)を上回っている一方で、「わからない」は29.5%であった。

性・年代別でみると、調和が「取れている」は女性の30代が5割台半ばを超えて最も高くなっている。一方、「取れていない」は女性の50代が3割台半ばで最も高くなっている。

(7) 言葉の内容まで知っているは「身体的暴力以外のDV」(49.2%)、「LGBT」(47.0%)、
「成年後見制度」(23.4%)

「内容まで知っている」と「聞いたことはあるが、内容はわからない」を合わせた【知っている】でみると、「身体的暴力以外のDV」が83.9%、「LGBT」が70.7%、「成年後見制度」が60.6%となっている。

【知っている】を性別にみると、「成年後見制度」は女性(65.8%)の方が男性(55.1%)より10.7ポイント高く、「身体的暴力以外のDV」は女性(86.8%)の方が男性(80.7%)より6.1ポイント高くなっている。また、「LGBT」は【知っている】での性差はほぼないが、「内容まで知っている」では女性(49.6%)の方が男性(43.9%)より5.7ポイント高い。

(8) 今後の課題

「孤立ゼロプロジェクト」の認知状況、高齢者の孤立防止や見守り活動への協力意向、「地域包括支援センター」の認知状況のいずれも前回調査から特に変動はない。

地域福祉を推進する上で、これらの取り組みは極めて重要な役割を果たすものであるが、調査結果をみる限り、認知及び協力意向の割合が伸び悩んでいる。また、「地域包括支援センター」の認知状況にいたっては、男性が女性より20ポイント近くも低い結果となっている。

このことから、今後の取り組みでは、地域差や性差がある現状を考慮して、引き続き区民の事業に対する認知度の向上に強く取り組むとともに、活動への積極的な参加を促進していくことに資する環境の整備や参加へのハードルを下げる工夫などが必要と思われる。

10 協働・協創

（１）「協創」の認知度は漸増しているものの、未だ約２割

「協創」について、「知っている」は4.4%で、これに「聞いたことはある」（15.4%）を合わせた【知っている】は約２割で、前回(16.1%)より3.7ポイント増加した。しかし、「協創」の仕組みを基本構想に掲げ、周知に取り組んできたにもかかわらず、認知率２割という現状を打開すべく、広く区民に周知を図っていく必要がある。

（２）“協働”“協創”の実践について、「関心はあるが、特に活動していない」が６割強

「協創」を知っていると回答した人における協働・協創の実践状況は、「すでに、活動を実践している」（25.3%）が前回調査と比較して2.6ポイント増、「関心はあるが、特に活動していない」（62.7%）が約５ポイント増となり、「関心がない」（10.7%）が前回調査と比較して９ポイント減少した。

６割強を占めている「関心はあるが、特に活動していない」と回答された方をコロナ禍で限られた実践方法の中でいかに活動に結びつけるか、今後も模索していく必要がある。

（３）協働や協創が進んでいると感じている人は２割強

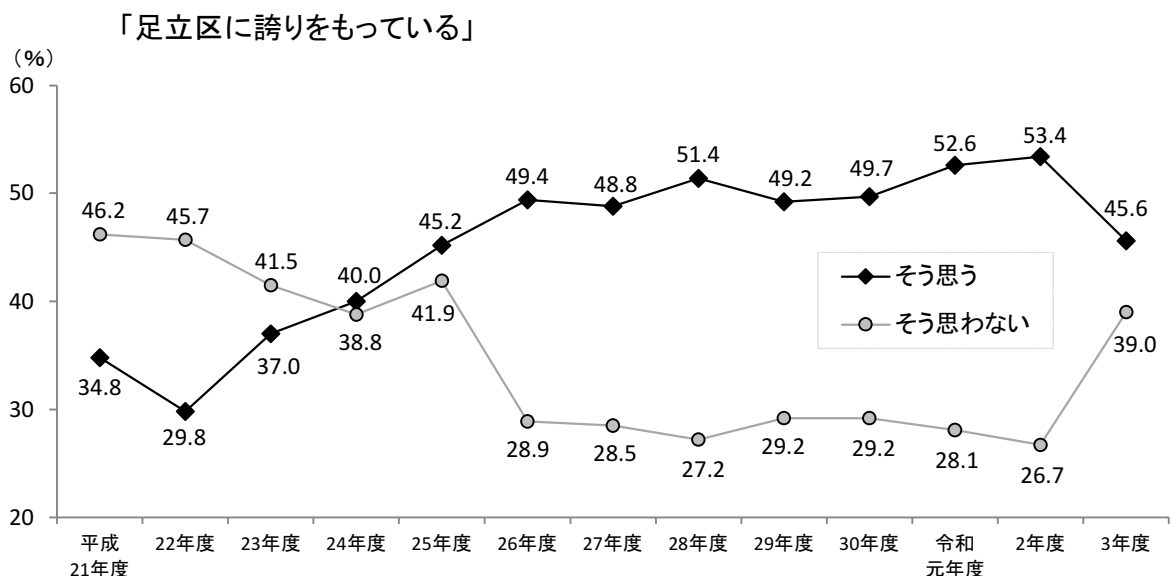
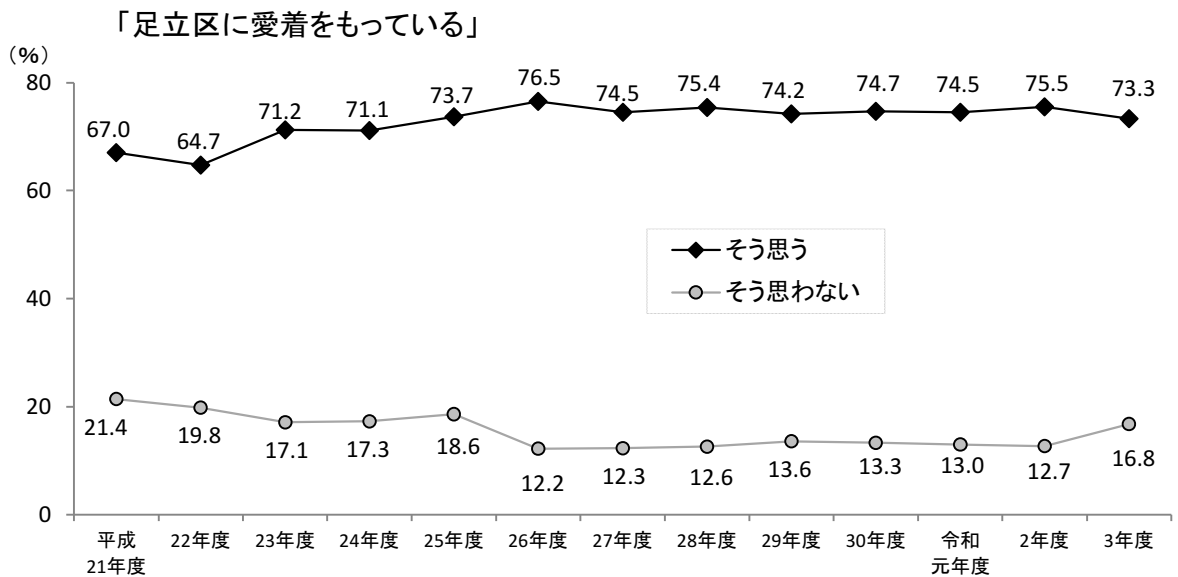
協働や協創が進んでいると感じるかについては、「そう思う」（3.4%）に「どちらかといえばそう思う」（18.3%）を合わせた【そう思う】が２割強と前回調査と比較して2.3ポイント減少している。その一方で、「そう思わない」（6.4%）に「どちらかといえばそう思わない」（11.0%）を合わせた【そう思わない】の割合には前回調査から変動がなく、「わからない」が微増して55.4%となっている。様々な機会を通じて具体的な協働や協創の事例を広く紹介し取り組みを可視化することで、どの年代の区民にも認知度を高めていく必要がある。

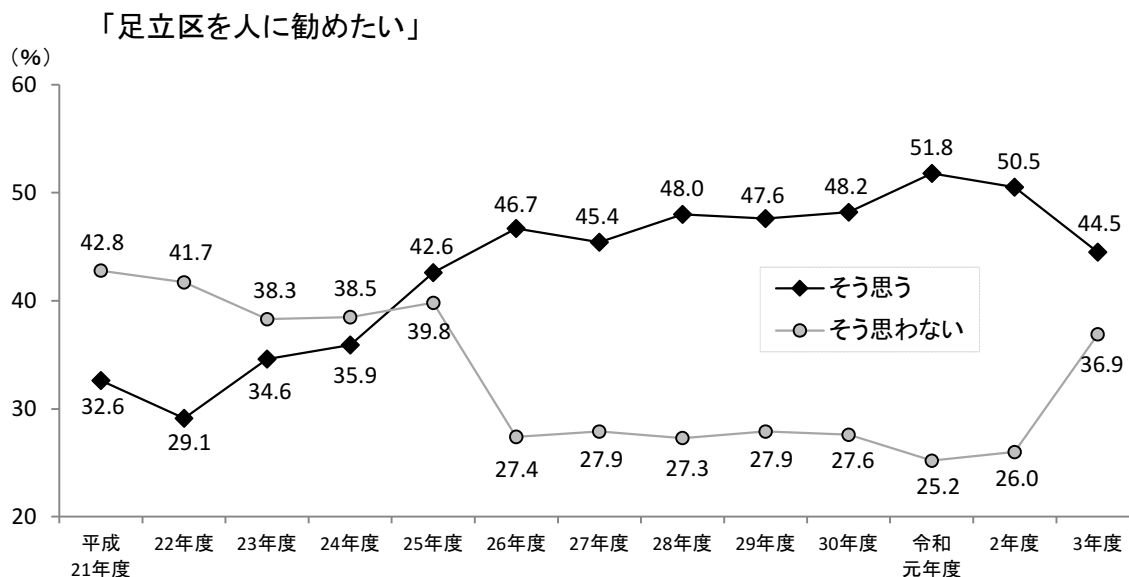
11 区を取り組み

(1) 「足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する」と「足立区に愛着をもっている」が7割台後半

平成21年調査から今回の令和3年調査まで13年にわたって経年で聴取している〈足立区に愛着をもっている〉〈足立区に誇りをもっている〉〈足立区を人に勧めたい〉の3項目について、今回の結果を【そう思う】(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」)の比率でみると、〈足立区に愛着をもっている〉は73.3%、〈足立区に誇りをもっている〉は45.6%、〈足立区を人に勧めたい〉は44.5%となっている。

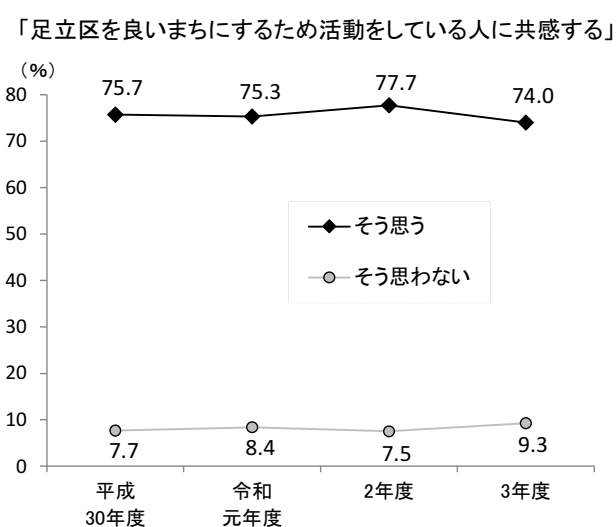
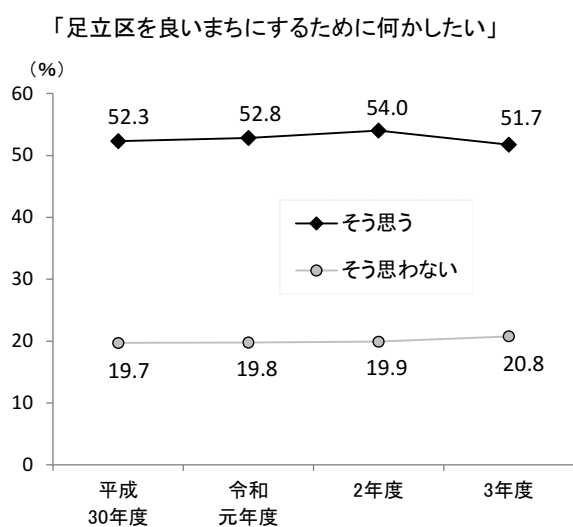
経年でみると、【そう思う】は〈足立区に愛着をもっている〉では微減し、〈足立区に誇りをもっている〉と〈足立区を人に勧めたい〉の2項目では6～8ポイントの減少となった。今回の調査では、ある特定の場所への感情的なつながりである「愛着」と、他人へ紹介したり自慢したりする態度としての「誇り」などが、例年とは異なる傾向を見せた。なお、〈足立区に誇りをもっている〉と〈足立区を人に勧めたい〉は13年間の推移が同様の傾向をみせており、両項目は“誇れるものがあるから人に勧められる”という強い正の相関にあると言える。今回の結果が一過性のものであるかどうかは今後の推移を見守る必要があるが、例えば足立区民が外に誇れる存在として何をイメージするかなど、今後も研究を重ねていく必要があると考えられる。





また、平成30年調査から新たに聴取項目に加えた〈足立区を良いまちにするために何かしたい〉と〈足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する〉の2項目について、【**そう思う**】をみると、それぞれ51.7%と74.0%で、ともに前回調査から微減となっているものの、平成30年度調査に比べると特に大きな変動はみられない。

この項目については、性・年代別では特に傾向がみられないものの、区政満足別にみると【**そう思う**】は区政への満足度が増すほど割合が高くなる。〈足立区を良いまちにするために何かしたい〉について、【**そう思う**】をみると、区政に不満がある層では34.0%であるのに対し、区政に満足している層では66.9%となり、〈足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する〉について、【**そう思う**】をみると、区政に不満がある層では60.4%であるのに対し、区政に満足している層では83.8%となり、区政に満足しているから、区を良くしたいという好循環が生まれていると考えられる。



〈足立区を良いまちにするために何かしたい〉という熱い思いを持つ区民と、〈足立区に愛着をもっている〉〈足立区に誇りをもっている〉〈足立区を人に勧めたい〉〈足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する〉、および〈区政満足度〉の5項目との関係を、下記のクロス集計表にまとめてみた。これらの5項目で【そう思う】と回答している人は、〈足立区を良いまちにするために何かしたい〉と思う人がそれぞれ大半を占めており、中でも、〈足立区に誇りをもっている〉〈足立区を人に勧めたい〉〈足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する〉の3項目では、いずれも7割前後と高くなっている。

31ページでも触れたが、“誇りがもてる”と“人に勧めたい”は正の相関が強くあることから、この意識を啓発することが、〈足立区を良いまちにするために何かしたい〉という熱い思いを持つ区民を増やすことに繋がるものと考えられる。

		足立区を良いまちにするために何かしたい		
		回答者数	そう思う(計)	そう思わない(計)
全 体		1709	51.7	20.8
足立区に愛着を持っている	そう思う(計)	1252	61.6	15.8
	そう思わない(計)	287	28.2	50.9
足立区に誇りをもっている	そう思う(計)	780	69.0	10.4
	そう思わない(計)	667	42.0	38.5
足立区を人に勧めたい	そう思う(計)	760	71.7	10.8
	そう思わない(計)	630	41.3	39.7
足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する	そう思う(計)	1264	67.9	15.6
	そう思わない(計)	159	6.3	86.8
区政満足度	満足(計)	1138	60.0	16.7
	不満(計)	383	39.7	36.8

(%)

※濃いグレーの白字：全体に比べて10ポイント以上高い

※薄いグレーの黒字：全体に比べて5ポイント以上高い

(2) 区政全体に対する【満足】はこれまでで最高の6割台半ば、【不満】は2割強

定住性の評価で【暮らしやすい】(85.2%)は漸増傾向を続け、【定住意向】(80.0%)も高い割合で推移しているなか、区政全体に対する満足度も【満足層】(「満足」＋「やや満足」)が66.6%と、現行と同じ聴取方法となった平成25年以降で最も高い割合となっている。

なお、今回調査においても、区の各分野への取り組みへの現状評価(満足度)と重要度の関係を数値化(算出方法の詳細は363頁を参照のこと)してみると、本区の場合、“重要度が平均値より高いが、現状評価(満足度)が平均値より低い”分野、つまり、今後、重点的に取り組む必要のある分野が、「交通対策」「防災対策」「学校教育対策」「高齢者支援」「治安対策」の5項目となった。項目数としては、前回調査で該当していた「行政改革」が今回調査では除外されたため1項目減少した。

また、重要度に対する現状評価の乖離度(「重要度の得点」－「現状評価の得点」)が大きい項目は、「防災対策」(2.72ポイント)、「交通対策」(2.64ポイント)、「治安対策」(2.42ポイント)、「住環境対策」(2.27ポイント)、「高齢者支援」(1.97ポイント)などとなっている。

(3) 今後の課題

重要度が平均値より高いが、現状評価(満足度)が平均値より低くなっている「交通対策」「防災対策」「学校教育対策」「高齢者支援」「治安対策」、及び重要度は平均値より低いものの現状評価との乖離度が大きい「住環境対策」については、今後も区の重点的課題として、行政と区民、関係機関が連携し、総合的かつ効果的な取り組みを推進することが重要である。そのためには、これまで行政だけでは行き届かなかった地域課題の解決や、区の新しい魅力の創出に向けて、多様な主体が手を取り合い、それぞれの強みを発揮できる土台づくりが行政には求められている。

重要度		満足度	
キ 治安対策	3.38	イ 職員の接客態度	1.81
エ 防災対策	3.35	カ 資源環境対策	1.61
ス 子育て支援	3.11	ア 情報提供	1.56
ナ 交通対策	3.07	オ 自然・緑化対策	1.36
カ 資源環境対策	3.02	タ 保健衛生対策	1.34
ア 情報提供	2.95	ス 子育て支援	1.26
セ 高齢者支援	2.92	サ 生涯学習振興	1.04
ソ 障がい者支援	2.90	ソ 障がい者支援	1.01
オ 自然・緑化対策	2.85	キ 治安対策	0.96
イ 職員の接客態度	2.83	セ 高齢者支援	0.95
シ 学校教育対策	2.81	ク 地域活動支援	0.94
タ 保健衛生対策	2.78	コ 男女共同参画推進	0.92
ト 住環境対策	2.45	シ 学校教育対策	0.92
テ 都市開発	2.42	ケ 社会参加支援	0.87
ウ ICT活用	2.35	ツ 産業振興	0.76
チ 低所得者対策	2.31	テ 都市開発	0.65
ツ 産業振興	2.04	エ 防災対策	0.63
コ 男女共同参画推進	2.01	チ 低所得者対策	0.63
サ 生涯学習振興	2.01	ウ ICT活用	0.47
ク 地域活動支援	1.78	ナ 交通対策	0.43
ケ 社会参加支援	1.58	ト 住環境対策	0.18
区全体	2.62	二 区政全体として	1.10
		区全体	0.97

区に対する気持ち 経年比較／性・年代別

1 足立区に愛着をもっている

全体	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
	76.5	74.5	75.4	74.2	74.7	74.5	75.5	73.3

(%)

男性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
18～19歳	—	—	—	—	—	—	—	68.1
20代	77.0	82.0	66.7	68.4	74.6	72.5	62.7	
30代	77.2	67.3	67.7	74.5	65.1	69.5	80.0	56.8
40代	76.6	76.5	74.8	75.7	77.5	71.7	79.3	74.4
50代	80.6	73.0	82.1	82.9	76.0	81.6	79.7	78.7
60代	76.6	77.7	82.6	69.3	81.4	76.9	77.5	78.6
70代以上	85.9	76.0	82.4	81.6	76.9	74.5	77.9	76.3

女性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
18～19歳	—	—	—	—	—	—	—	67.5
20代	67.1	67.5	66.3	72.5	64.9	59.1	66.3	
30代	77.6	69.0	66.7	66.9	74.5	73.7	75.0	72.7
40代	71.4	75.1	73.5	73.5	71.0	72.0	74.7	71.9
50代	68.7	74.7	75.7	74.0	74.7	79.2	73.2	74.7
60代	76.9	77.1	73.9	77.3	72.0	80.0	76.1	70.8
70代以上	76.5	76.5	80.0	74.6	78.1	73.2	76.6	76.9

2 足立区に誇りを持っている

全体	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
	49.4	48.8	51.4	49.2	49.7	52.6	53.4	45.6

(%)

男性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
18～19歳	—	—	—	—	—	—	—	43.1
20代	44.3	54.1	44.9	36.8	50.8	40.6	45.8	
30代	47.5	37.6	47.5	42.9	31.4	42.7	52.9	30.9
40代	50.6	48.8	51.9	54.9	51.2	52.5	50.7	41.4
50代	50.4	47.6	52.7	57.7	51.9	60.5	54.4	48.2
60代	51.5	52.2	59.7	46.0	54.3	58.7	62.0	53.4
70代以上	65.9	63.0	68.2	59.9	62.3	62.8	64.2	61.1

女性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
18～19歳	—	—	—	—	—	—	—	28.9
20代	35.4	37.7	33.7	34.8	33.8	40.9	45.7	
30代	38.8	40.1	41.5	34.7	41.8	43.2	43.8	29.3
40代	42.3	42.8	42.7	47.1	36.6	43.9	50.0	39.5
50代	38.1	39.9	45.1	41.6	48.8	51.0	48.0	47.3
60代	50.0	51.4	50.3	58.2	44.8	54.2	47.2	35.4
70代以上	57.3	57.7	60.0	55.5	63.9	57.3	61.1	56.0

3 足立区にを人に勧めたい

全体	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
	46.7	45.4	48.0	47.6	48.2	51.8	50.5	44.5

(%)

男性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
18～19歳	—	—	—	—	—	—	—	40.3
20代	62.3	44.3	43.6	42.1	59.3	46.4	42.4	
30代	49.5	36.6	48.5	49.0	47.7	62.2	68.6	34.6
40代	49.4	51.2	55.6	56.9	51.9	55.0	52.7	51.1
50代	48.2	49.2	50.9	52.0	53.5	57.8	51.3	51.1
60代	46.1	48.9	54.2	38.0	50.4	49.6	54.3	48.9
70代以上	55.1	54.0	59.1	55.3	53.8	53.2	58.3	51.6

女性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
18～19歳	—	—	—	—	—	—	—	38.6
20代	39.2	32.5	41.6	43.5	36.4	43.9	46.7	
30代	42.5	41.5	40.0	42.4	48.2	53.4	50.9	48.5
40代	43.9	41.3	42.7	47.6	37.2	52.2	52.4	37.1
50代	40.3	39.9	47.9	42.2	47.5	55.0	43.0	46.0
60代	42.9	45.7	43.0	53.2	44.8	49.2	38.7	36.9
70代以上	46.3	50.0	49.0	47.3	49.8	45.1	52.3	42.1

第2章 調査結果の要約

4 足立区を良いまちにするため何かしたい

全体	平成 30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年	(%)
	52.3	52.8	54.0	51.7	

男性	平成 30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
18～19歳	—	—	—	45.8
20代	45.8	39.1	44.1	
30代	52.3	56.1	57.1	44.4
40代	60.5	57.5	54.0	57.1
50代	57.4	58.8	57.0	56.7
60代	46.5	47.9	58.1	58.0
70代以上	53.8	56.9	59.8	47.9

女性	平成 30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
18～19歳	—	—	—	54.2
20代	41.6	39.4	41.3	
30代	54.5	51.7	58.0	58.6
40代	52.5	63.7	58.4	53.9
50代	52.5	60.4	53.6	58.7
60代	59.4	45.8	49.3	53.8
70代以上	48.5	45.1	49.8	42.9

5 足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する

全体	平成 30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年	(%)
	75.7	75.3	77.7	74.0	

男性	平成 30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
18～19歳	—	—	—	66.7
20代	64.4	59.4	67.8	
30代	76.7	79.3	82.9	61.7
40代	76.7	80.0	75.3	78.9
50代	78.3	80.3	77.2	72.3
60代	75.2	72.7	76.7	80.2
70代以上	74.5	72.9	80.9	66.8

女性	平成 30年	令和 元年	令和 2年	令和 3年
18～19歳	—	—	—	72.3
20代	61.0	66.7	66.3	
30代	79.1	71.2	81.3	80.8
40代	80.3	80.3	84.3	80.2
50代	79.0	83.2	77.7	82.0
60代	82.5	75.0	81.7	75.4
70代以上	71.7	72.8	74.1	70.7

区政満足度の分析 経年比較／暮らしやすさ／定住意向／情報の入手／治安

全体	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	2年	3年
満足	53.2	53.3	57.7	61.5	60.0	62.1	66.5	66.6
不満足	27.6	27.4	25.6	24.0	23.9	21.8	20.2	22.4

1 地域の暮らしやすさと区政満足度

	満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
暮らしやすい	4.8	19.1	2.5	0.4	3.2
どちらかといえば暮らしやすい	2.9	33.9	10.8	1.3	6.2
どちらかといえば暮らしにくい	0.2	4.5	5.0	0.7	0.9
暮らしにくい	0.1	0.5	0.8	0.5	0.1

2 定住意向と区政満足度

	満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
ずっと住み続けたい	4.7	22.0	4.0	0.6	4.6
当分は住み続けたい	2.0	28.0	8.1	1.3	4.6
区外に転出したい	0.2	2.4	2.7	0.5	0.3
わからない	0.8	5.8	4.2	0.6	1.2

3 必要な時に必要とする区の情報の入手状況と区政満足度

	満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
十分に得られている	2.0	2.9	0.3	0.2	0.6
ある程度得られている	5.0	45.4	12.2	1.2	6.4
得られないことが多い	0.4	3.8	3.2	0.6	1.3
まったく得られない	0.1	0.7	0.1	0.2	0.2
必要と思ったことがない	0.2	3.2	1.8	0.6	0.7
区の情報に関心がない	0.2	1.3	1.1	0.1	0.4

4 居住地域の治安状況と区政満足度

	満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
良い	2.8	4.9	0.6	0.1	1.1
どちらかと言えば良い	3.7	36.3	7.5	0.8	4.9
どちらかと言えば悪い	0.6	9.4	6.3	0.8	1.5
悪い	0.2	1.1	1.3	0.8	0.2
わからない	0.3	5.7	3	0.6	2.5

第3章 調査結果の分析

1 定 住 性

-
- (1) 居住地の評価
 - (2) 地域の暮らしやすさ
 - (3) 特に暮らしにくいと感じること
 - (4) 定住意向
-

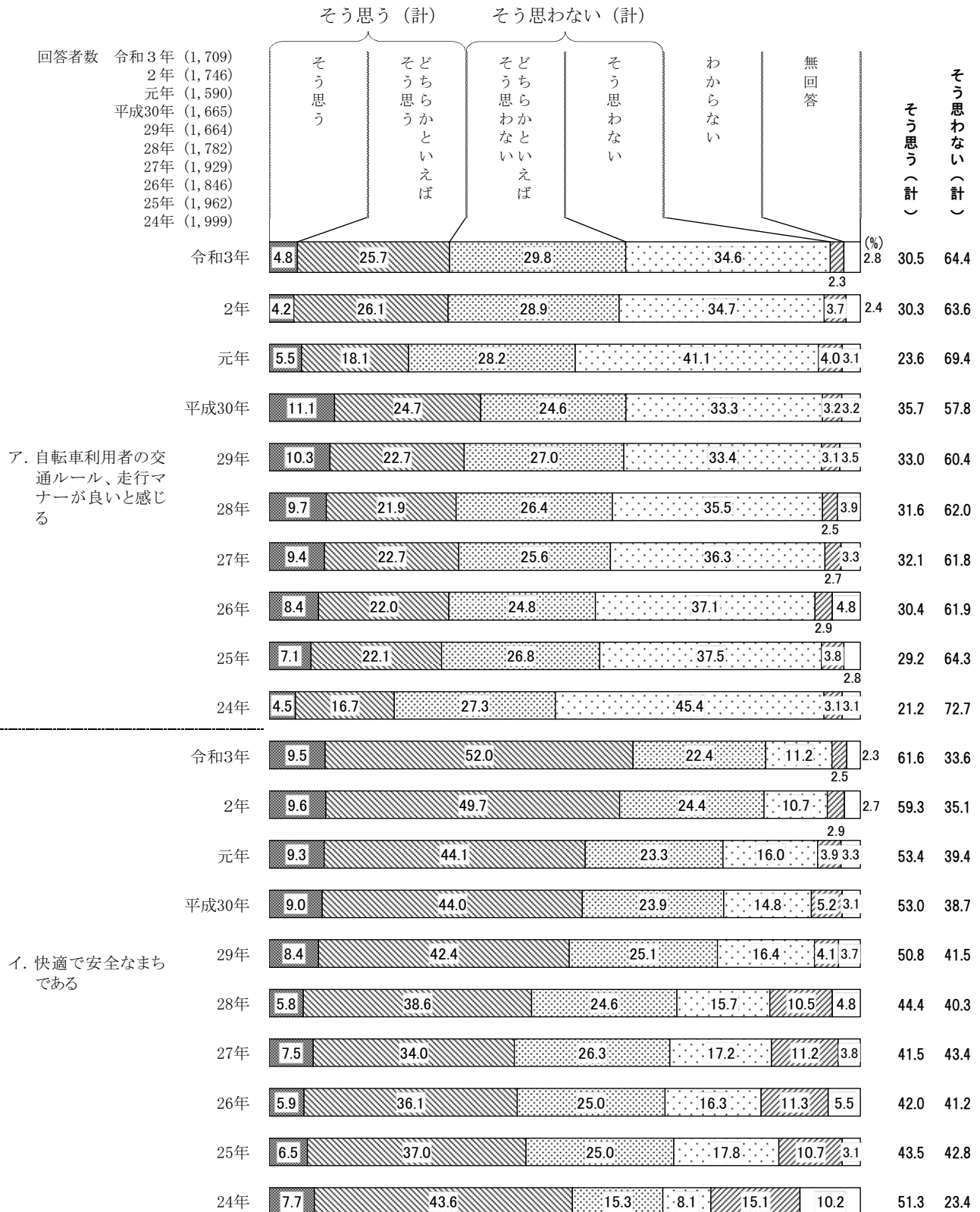
1 定住性

(1) 居住地域の評価

■ 〈普段の買い物が便利である〉と感じている人は約8割

問1 あなたは、お住まいの地域について、どのように感じていますか（〇はそれぞれ1つずつ）。

図1-1-1-① 経年比較／居住地域の評価



第3章 調査結果の分析〈定住性〉

図 1-1-1-② 経年比較／居住地域の評価

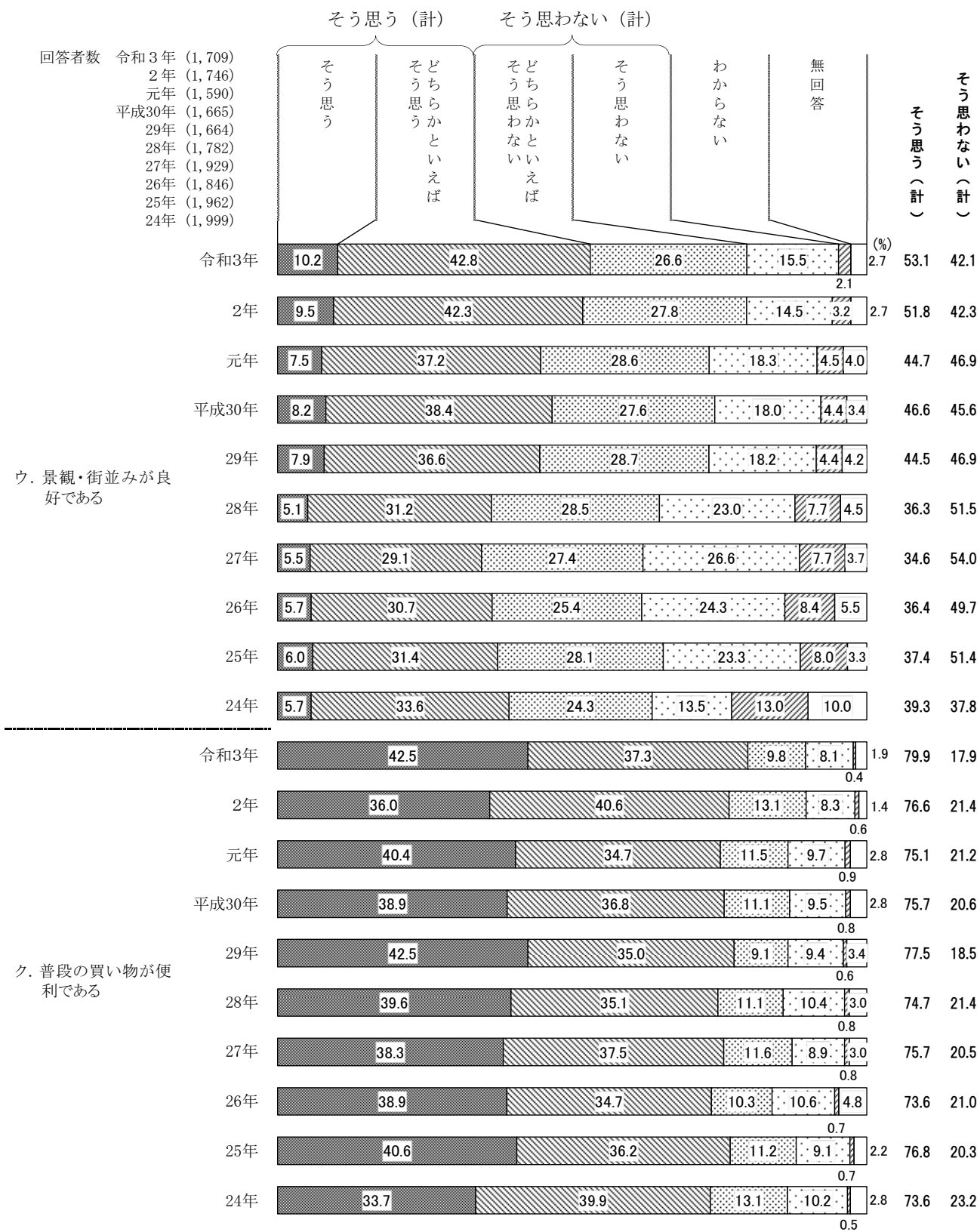
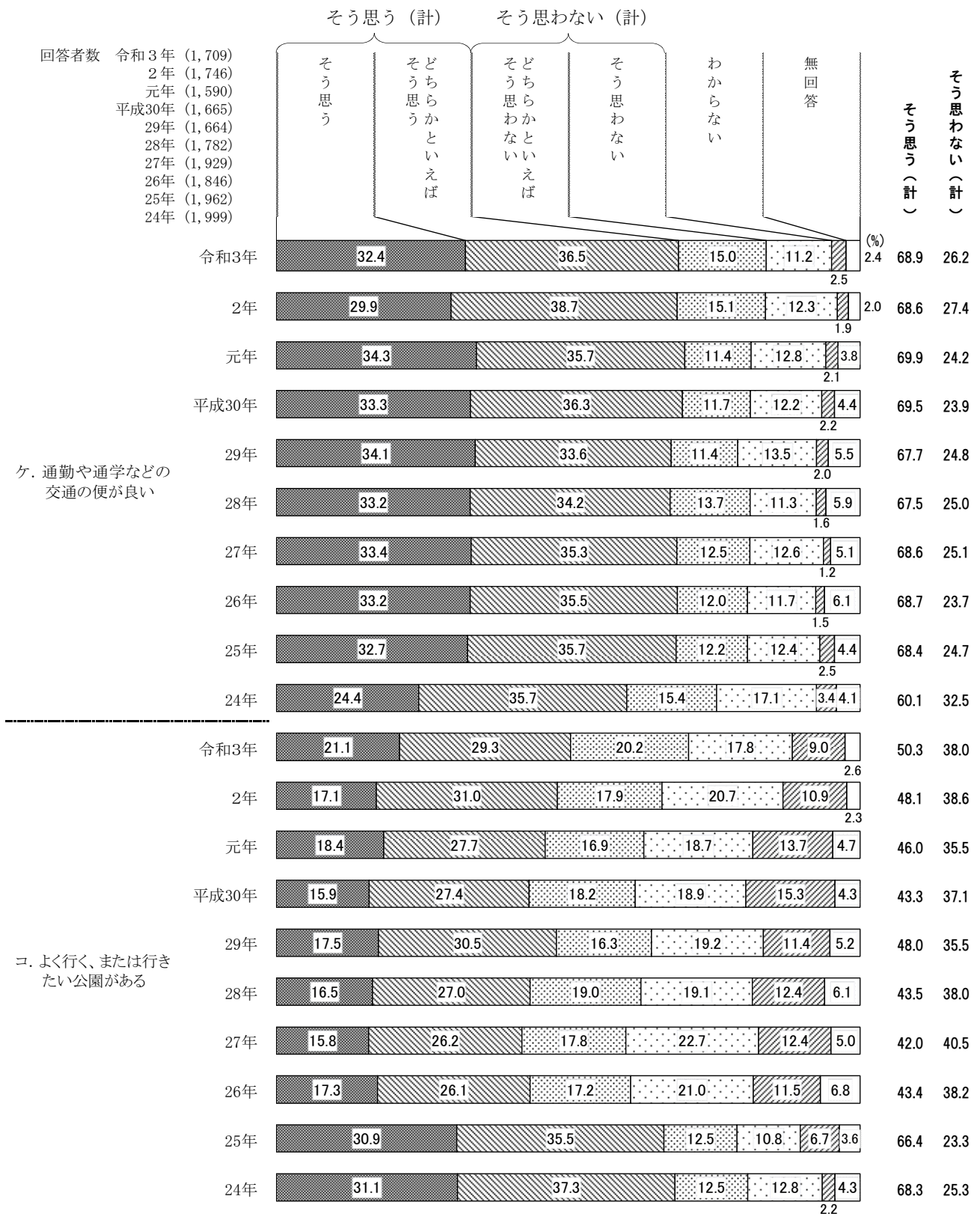


図 1 - 1 - 1 - ③ 経年比較／居住地域の評価



第3章 調査結果の分析 〈 定住性 〉

図1-1-1-④ 経年比較／居住地域の評価

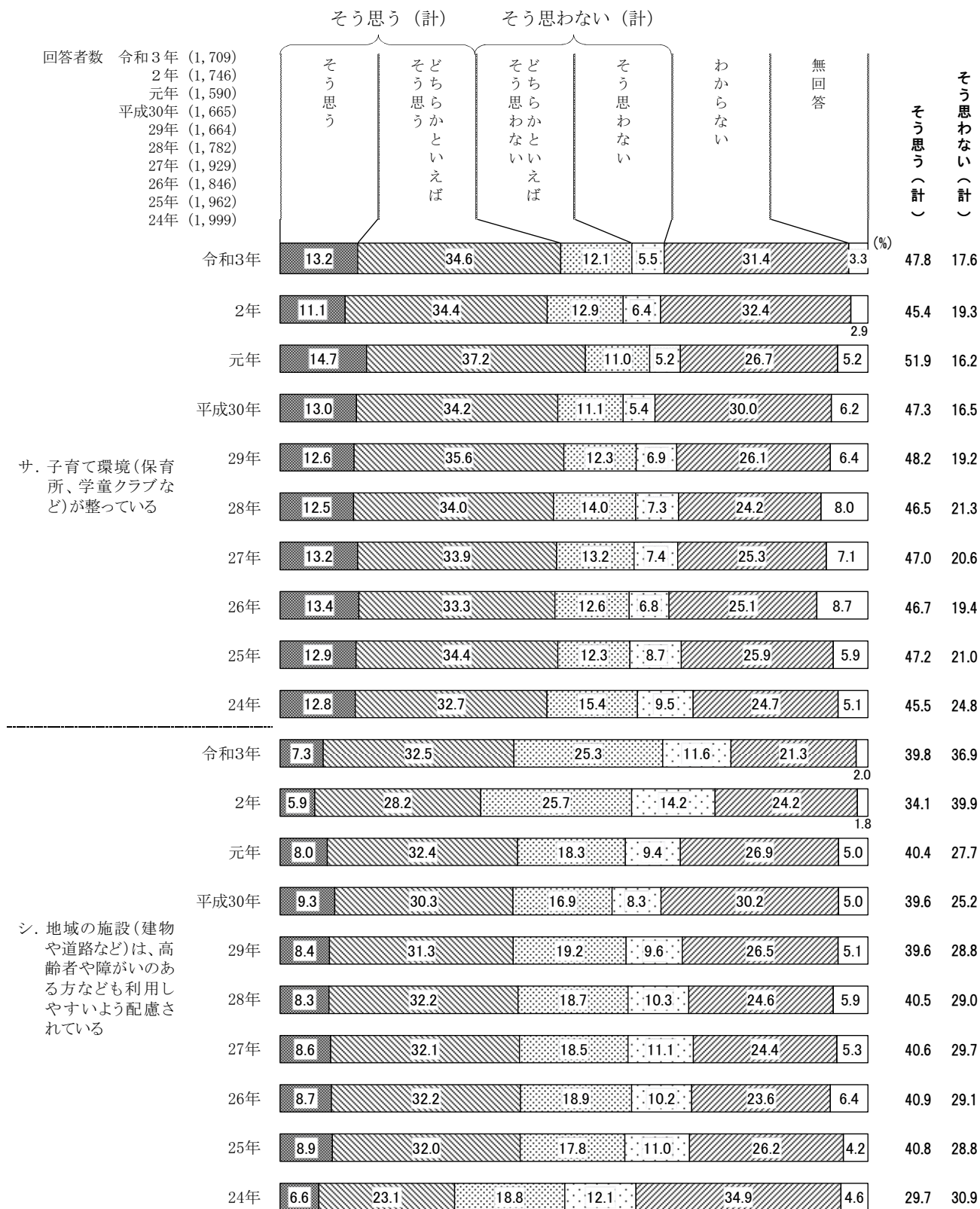
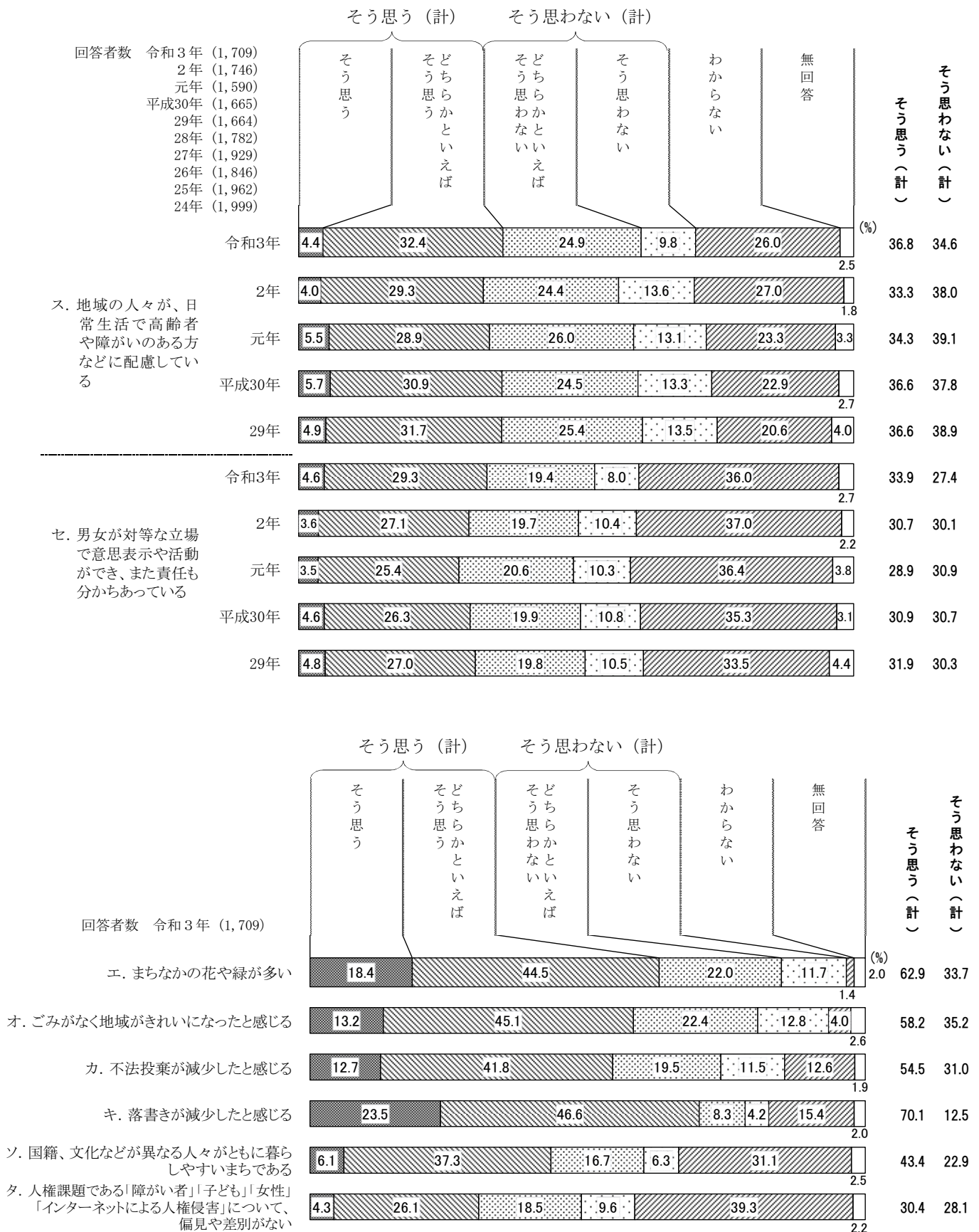


図1-1-1-⑤ 経年比較／居住地域の評価



第3章 調査結果の分析〈定住性〉

- ※ アは、令和元年度「自転車、歩行者は交通ルール、交通マナーをよく守っている」から表現をかえた。
- ※ イは、平成28年度「快適で安全なまちづくりが進められている」から表現をかえた。
- ※ ウは、平成28年度「景観・街並みが魅力的になってきている」から表現をかえた。
- ※ エ、オ、カ、キ、ソ、タは、今回の令和3年度からの新設項目。
- ※ コは、平成25年度「利用しやすい公園がある」から表現をかえた。
- ※ シは、平成24年度「高齢者や障がいのある方も施設が利用しやすい」から表現をかえて、令和2年度に「地域の施設」の部分を「地域の施設（建物や道路など）」に表現をかえた。

住んでいる地域について感じていることを、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた【そう思う】の高い順でみると、〈普段の買い物が便利である〉が79.9%で最も高く、以下〈落書きが減少したと感じる〉70.1%、〈通勤や通学などの交通の便が良い〉68.9%の順となっている。

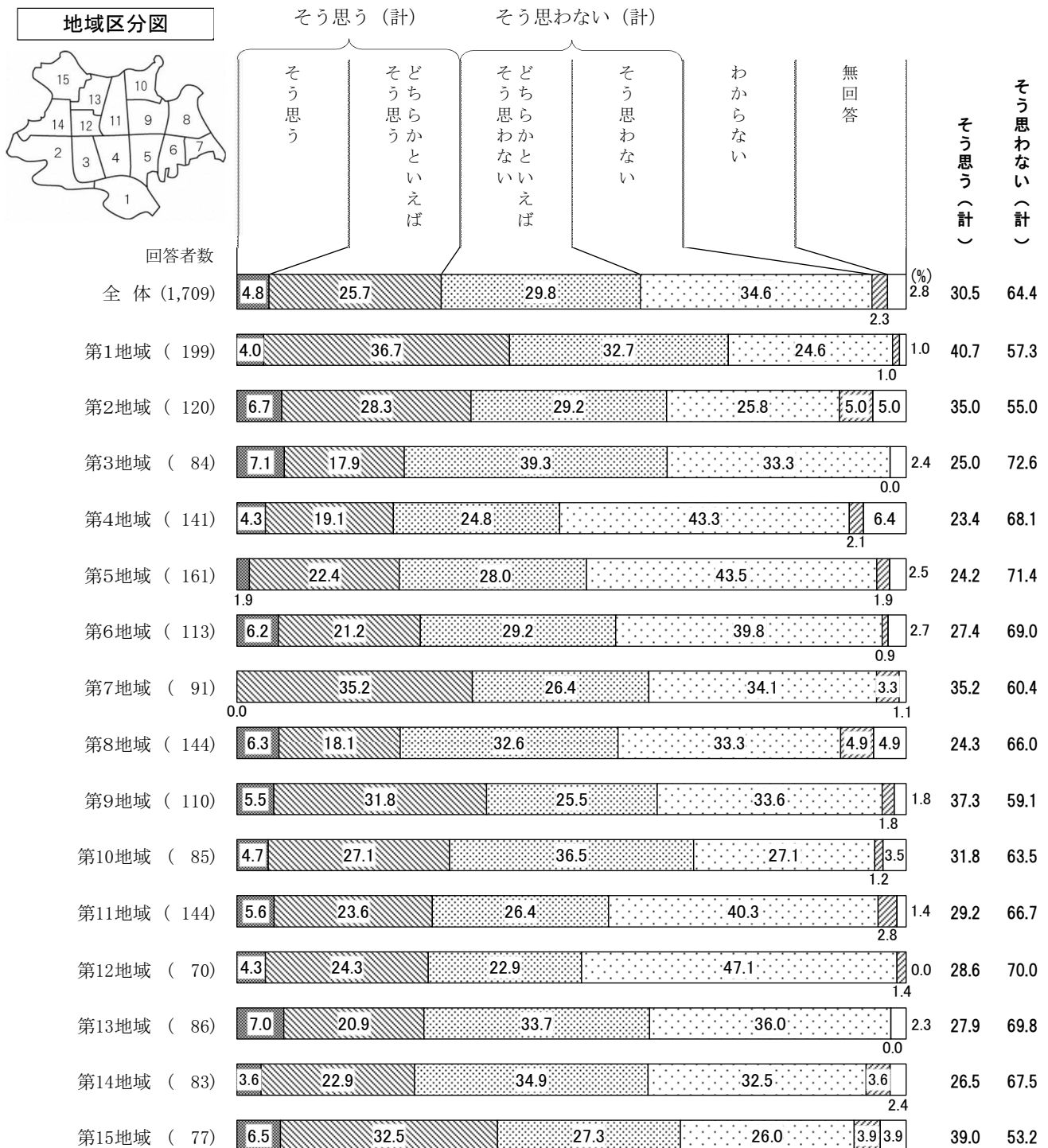
経年で比較すると、今回の調査では、新設項目を除く10項目すべてで【そう思う】が令和2年調査に比べて増加している。増加幅が大きい項目は、〈地域の施設（建物や道路など）は、高齢者や障がいのある方なども利用しやすいよう配慮されている〉（+5.7ポイント）、〈地域の人々が、日常生活で高齢者や障がいのある方などに配慮している〉（+3.5ポイント）、〈普段の買い物が便利である〉（+3.3ポイント）、〈男女が対等な立場で意思表示や活動ができ、また責任も分かちあっている〉（+3.2ポイント）などとなっている。

次に、各項目について、地域別でみた。

〈自転車利用者の交通ルール、走行マナーが良いと感じる〉について、【そう思う】は第1地域で40.7%と最も高く、次いで第15地域が39.0%となっている。一方、【そう思わない】は第3地域で72.6%と最も高く、次いで第5地域が71.4%となっている。

図1-1-2-① 地域別／居住地域の評価

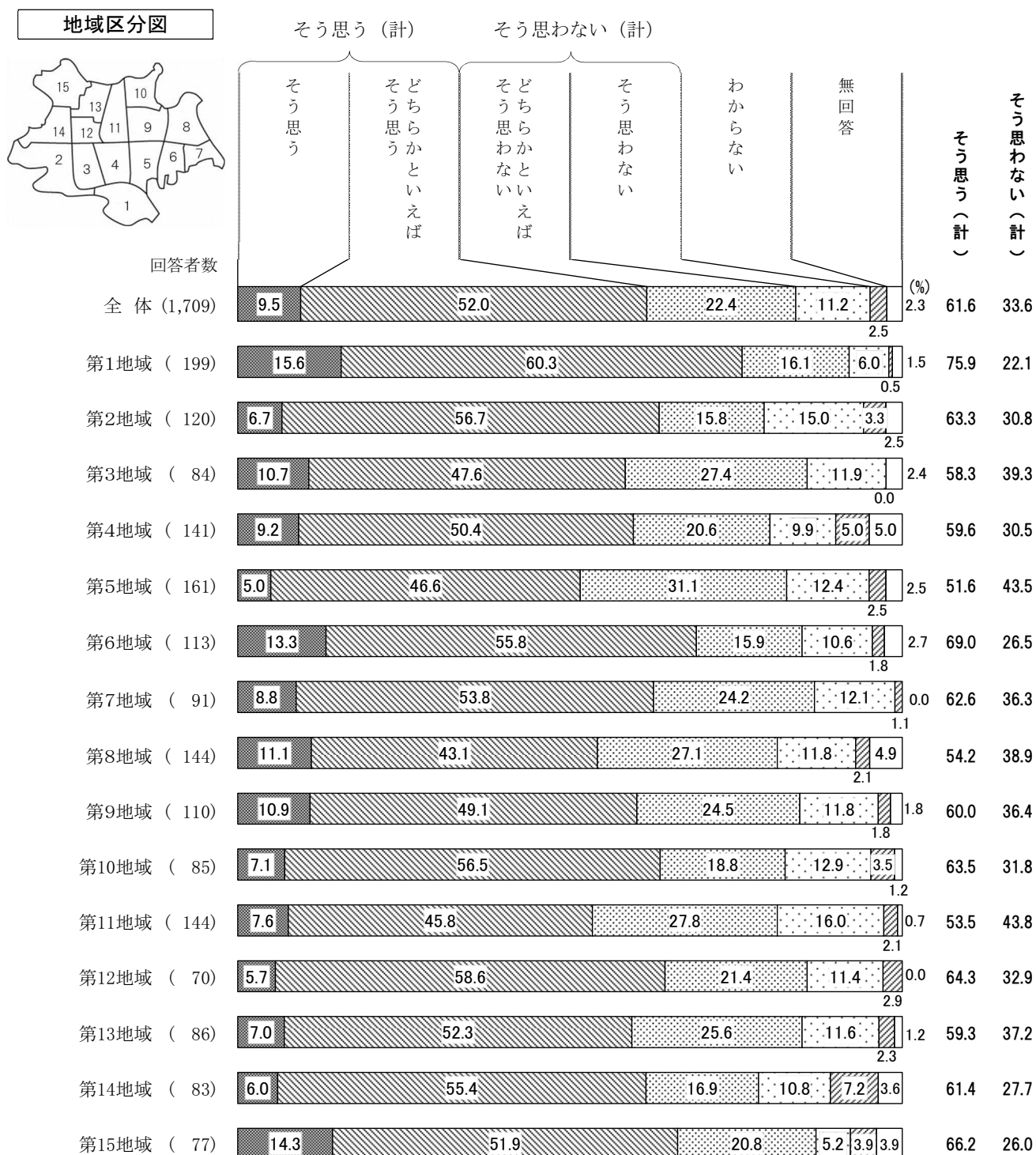
／自転車利用者の交通ルール、走行マナーが良いと感じる



第3章 調査結果の分析〈定住性〉

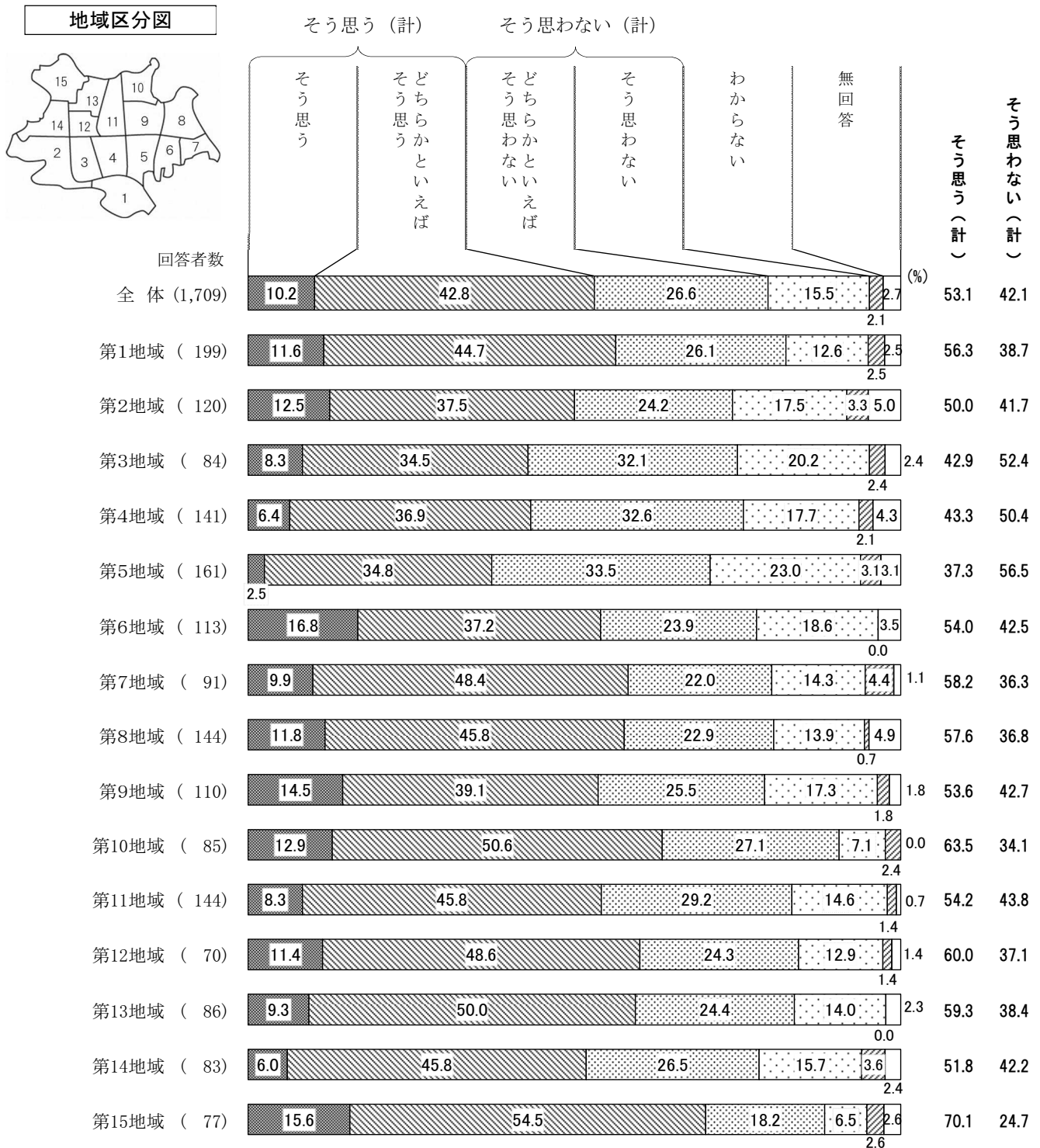
〈快適で安全なまちである〉について、【そう思う】は第1地域で75.9%と最も高く、次いで第6地域が69.0%となっている。一方、【そう思わない】は第11地域で43.8%と最も高く、次いで第5地域が43.5%となっている。

図1-1-2-② 地域別／居住地域の評価／快適で安全なまちである



〈景観・街並みが良好である〉について、【そう思う】は第15地域で70.1%と最も高く、次いで第10地域が63.5%、第12地域も60.0%と高くなっている。一方、【そう思わない】は第5地域で56.5%と最も高く、次いで第3地域が52.4%、第4地域も50.4%で高くなっている。

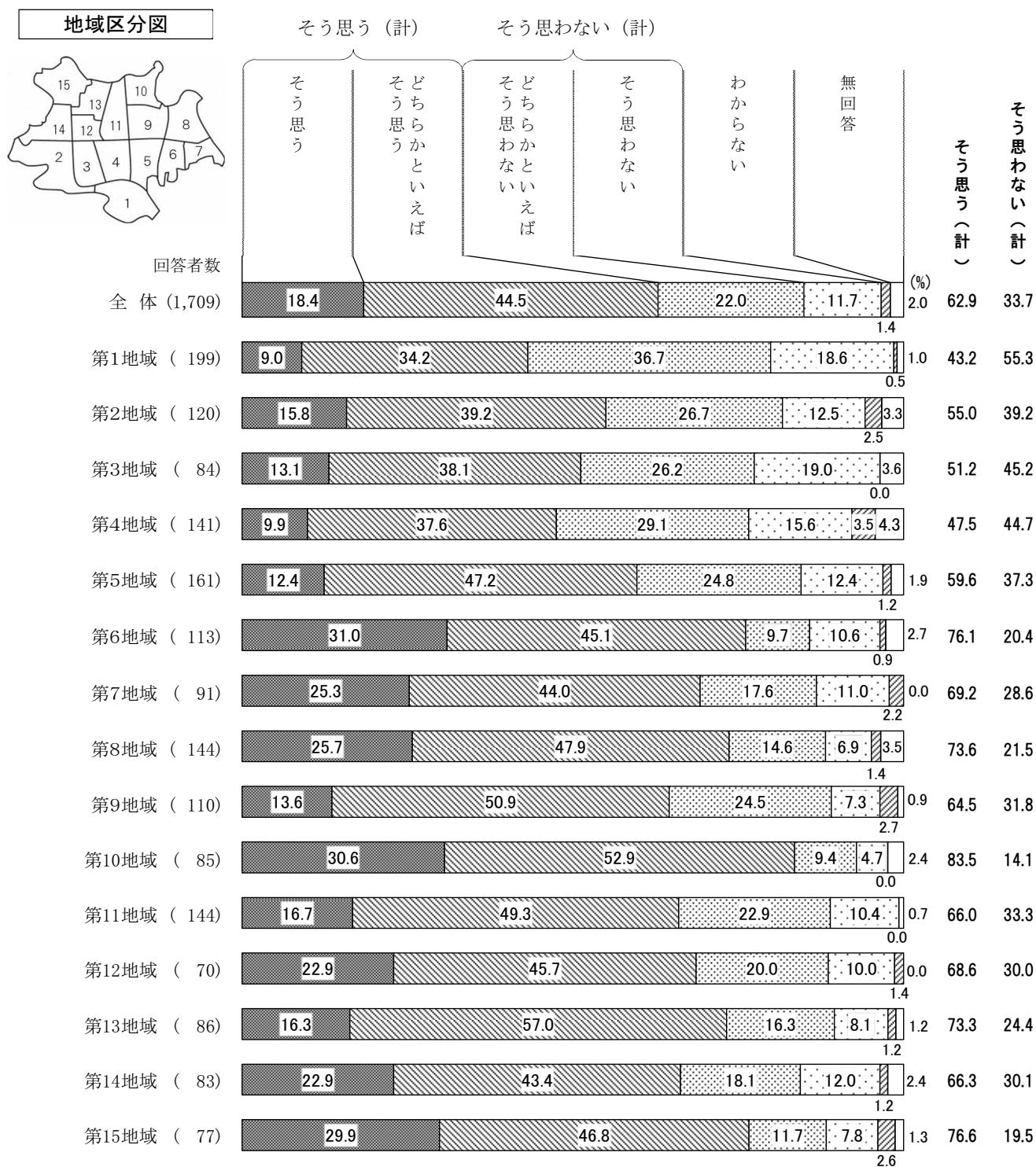
図1-1-2-③ 地域別／居住地域の評価／景観・街並みが良好である



第3章 調査結果の分析 〈 定住性 〉

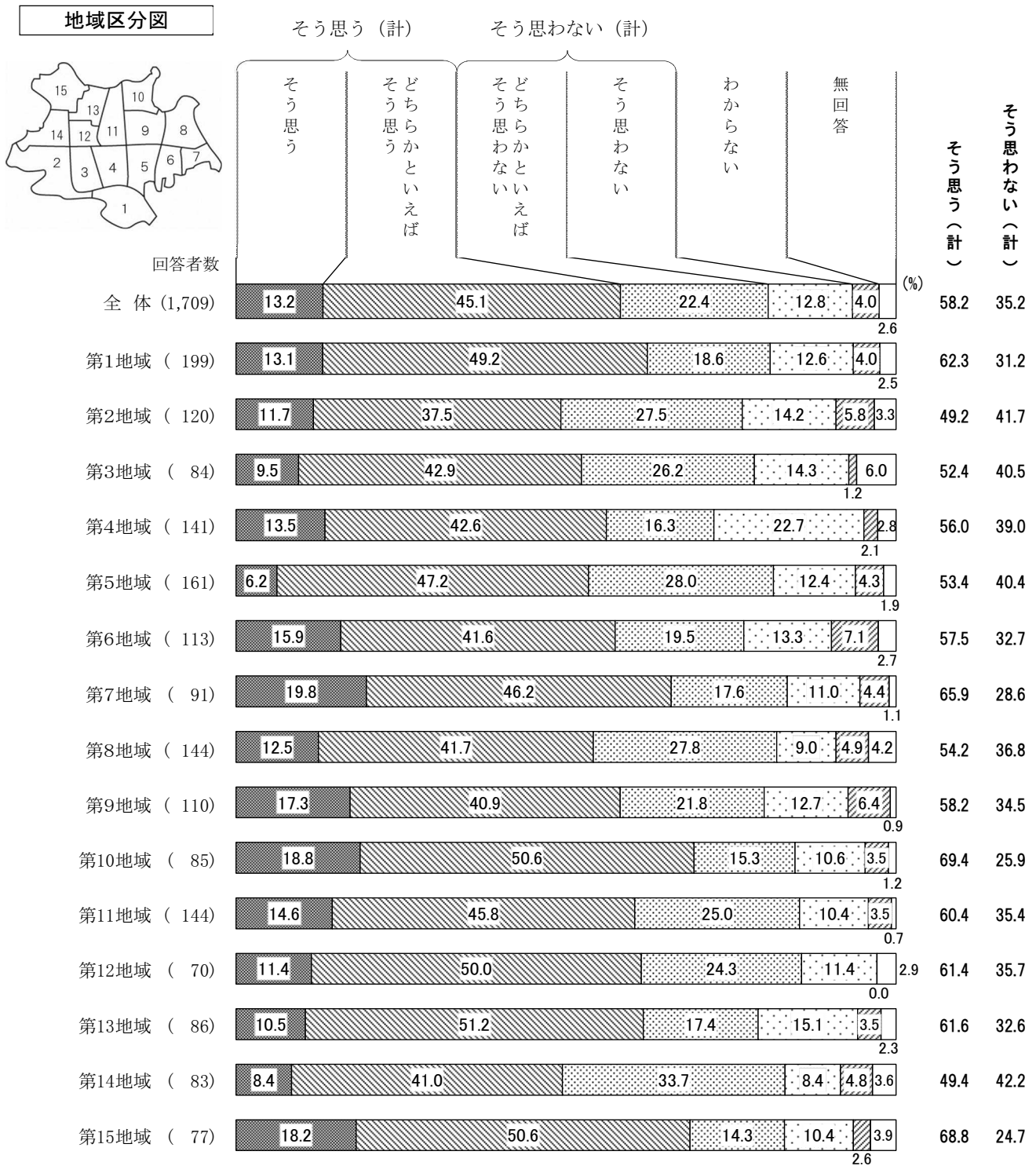
〈まちなかの花や緑が多い〉について、【そう思う】は第10地域が83.5%で最も高く、次いで第15地域が76.6%、僅差で第6地域が76.1%が続いている。一方、【そう思わない】は第1地域で55.3%と最も高く、次いで第3地域が45.2%となっている。

図1-1-2-④ 地域別／居住地域の評価／まちなかの花や緑が多い



〈ごみがなく地域がきれいになったと感じる〉について、【そう思う】は第10地域が69.4%と最も高く、次いで第15地域が68.8%となっている。一方、【そう思わない】は第14地域で42.2%と最も高く、次いで第2地域が41.7%となっている。

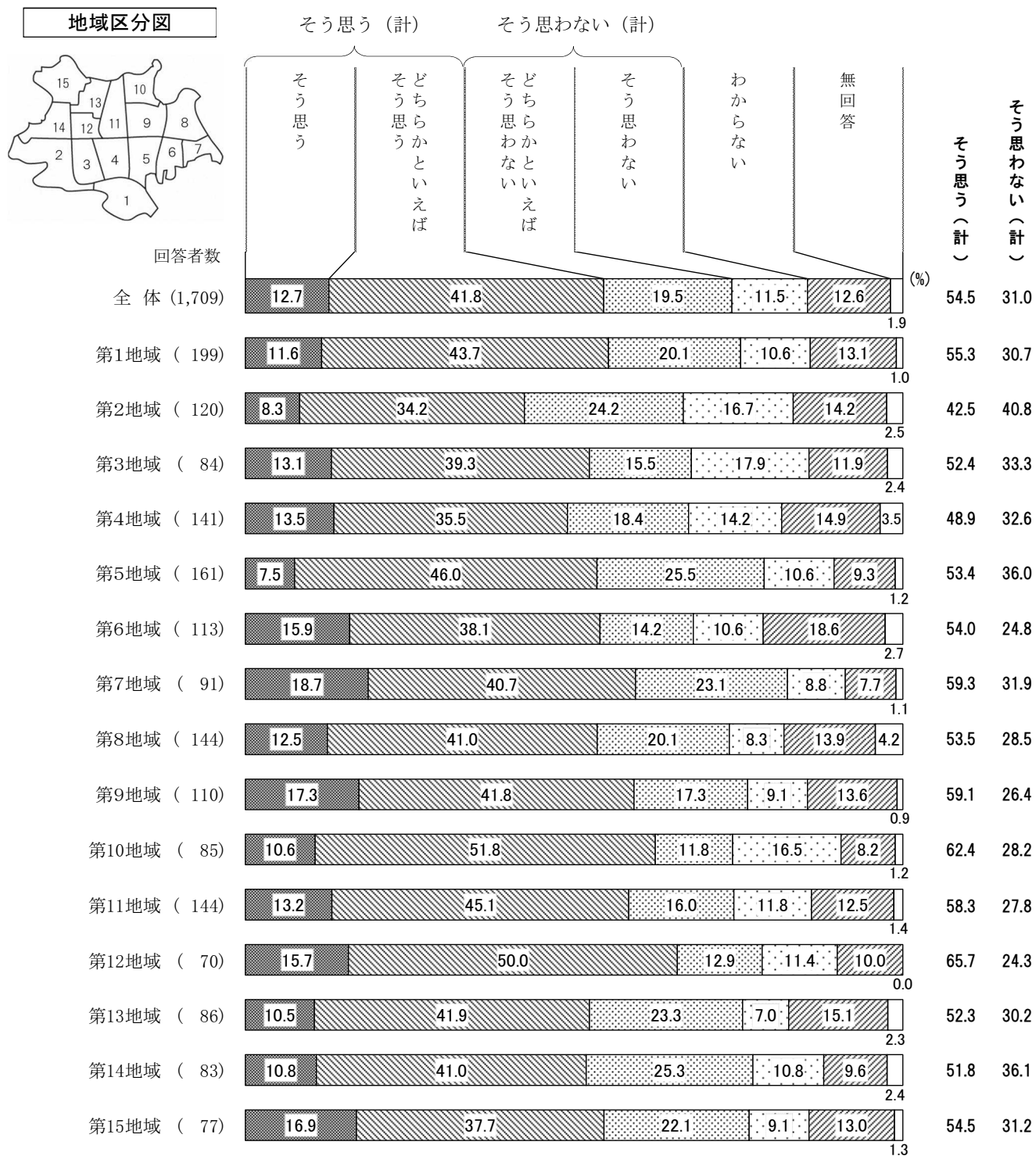
図1-1-2-⑤ 地域別／居住地域の評価／ごみがなく地域がきれいになったと感じる



第3章 調査結果の分析 〈 定住性 〉

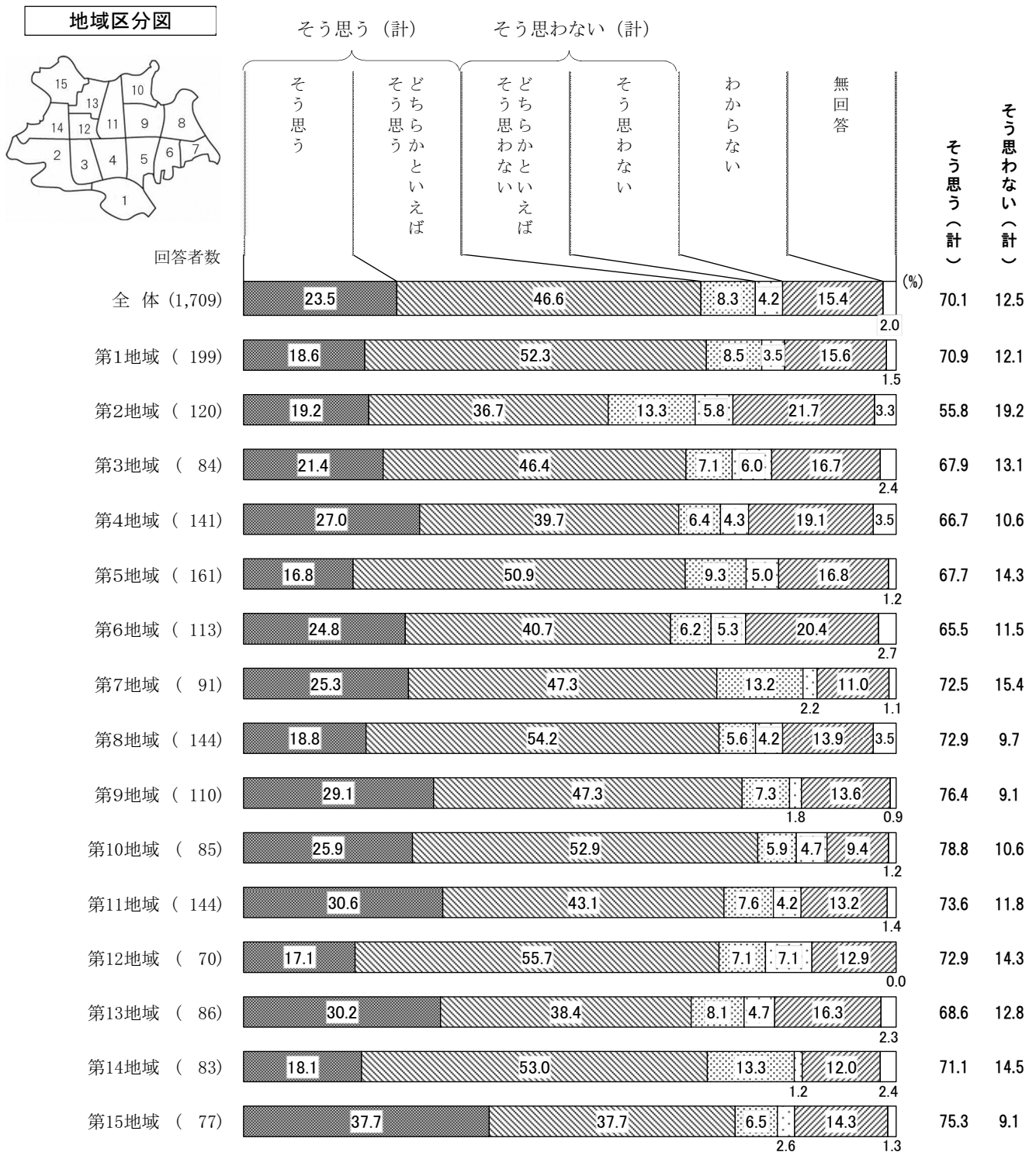
〈不法投棄が減少したと感じる〉について、【**そう思う**】は第12地域で65.7%と最も高く、次いで第10地域が62.4%となっている。一方、【**そう思わない**】は第2地域で40.8%と最も高く、次いで第14地域が36.1%、僅差で第5地域が36.0%で続いている。

図1-1-2-⑥ 地域別／居住地域の評価／不法投棄が減少したとを感じる



〈落書きが減少したと感じる〉について、【そう思う】は第10地域で78.8%と最も高く、次いで第9地域が76.4%となっている。一方、【そう思わない】は第2地域で19.2%と最も高く、次いで第7地域が15.4%となっている。

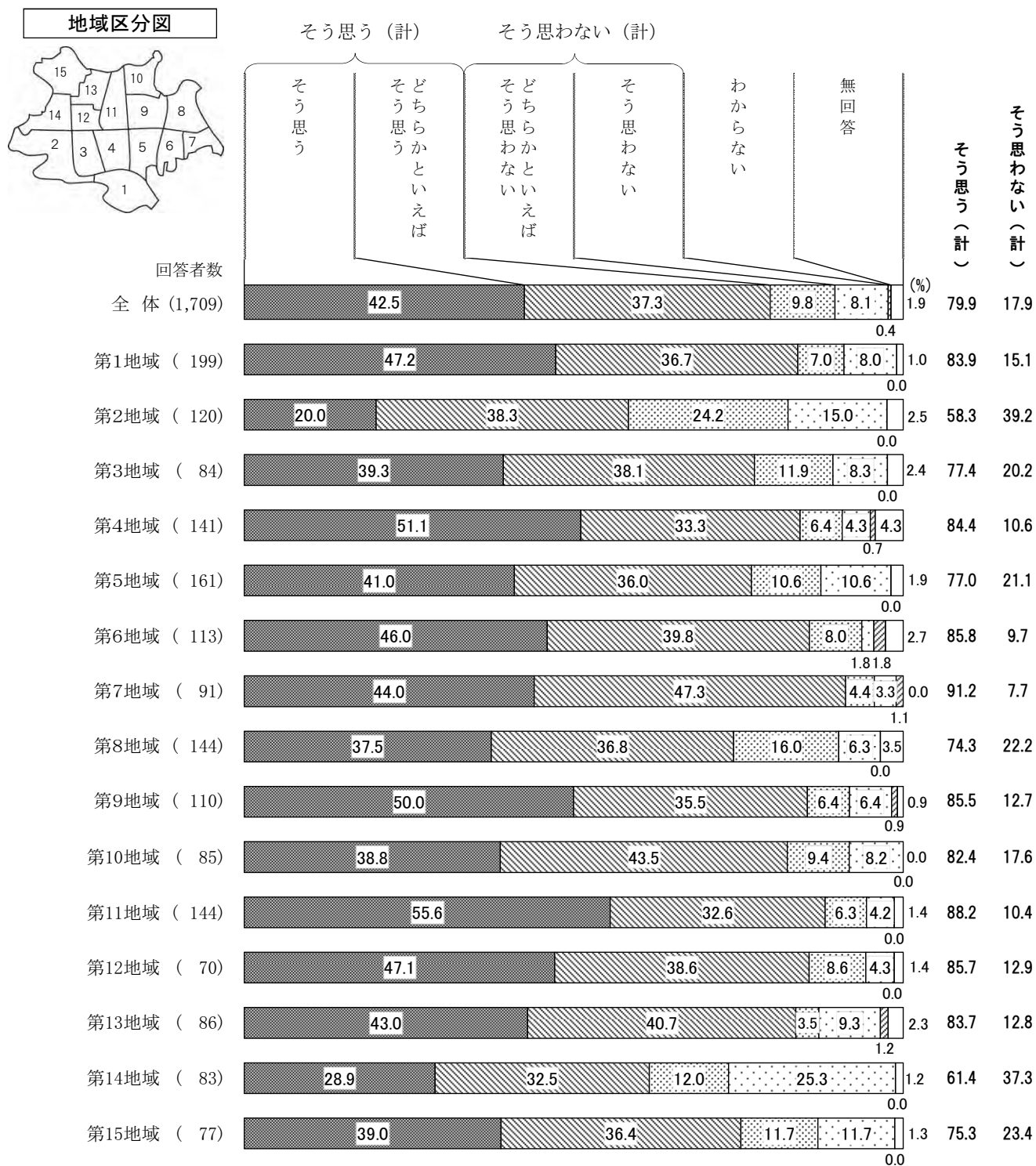
図1-1-2-⑦ 地域別／居住地域の評価／落書きが減少したと感じる



第3章 調査結果の分析〈定住性〉

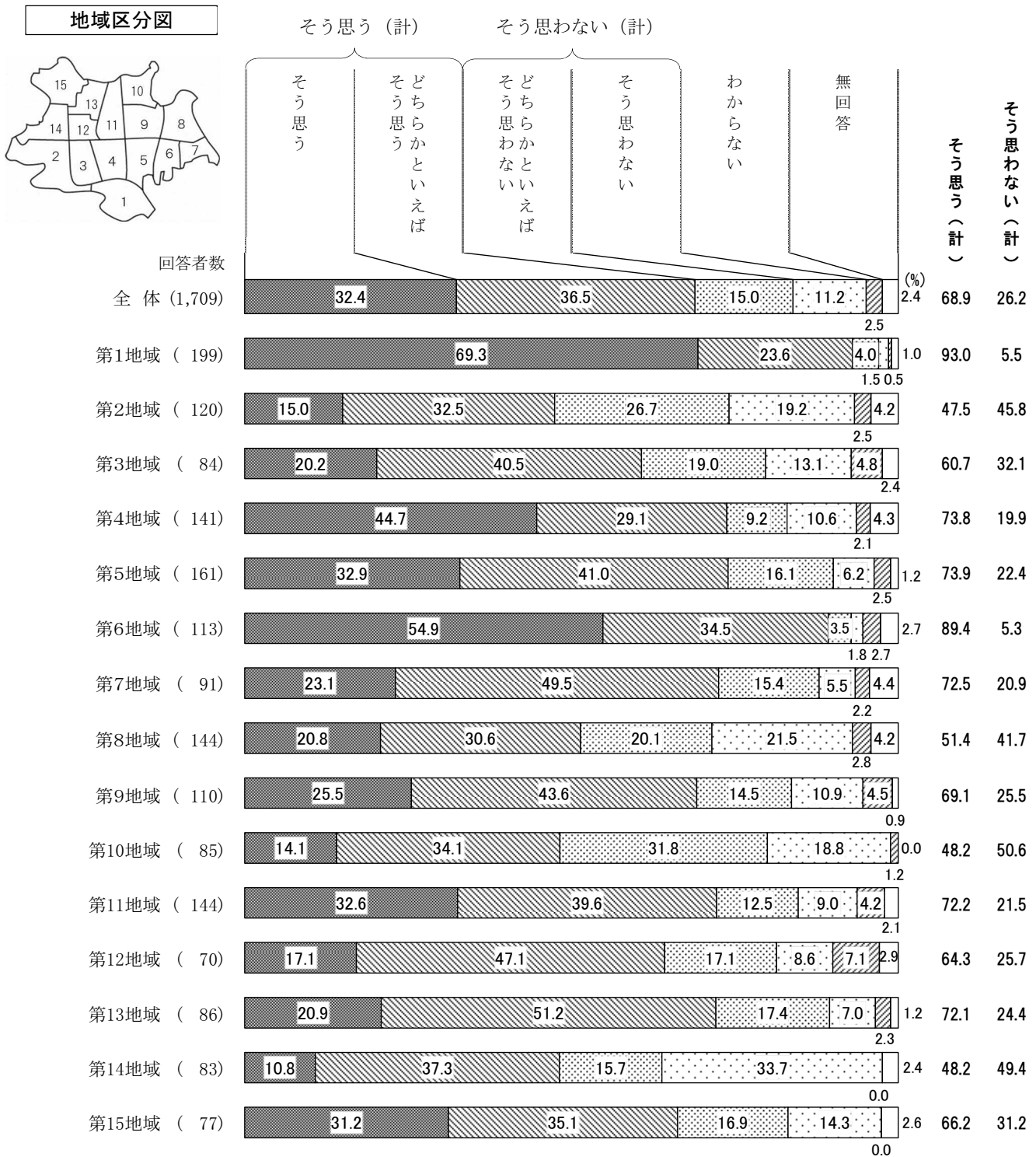
〈普段の買い物が便利である〉について、【そう思う】は第7地域が91.2%で最も高く、次いで第11地域で88.2%となっている。一方、【そう思わない】は第2地域で39.2%と最も高く、次いで第14地域で37.3%となっている。

図1-1-2-⑧ 地域別／居住地域の評価／普段の買い物が便利である



〈通勤や通学などの交通の便が良い〉について、【そう思う】は第1地域が93.0%と最も高く、次いで第6地域が89.4%で続き、この2地域で特に高くなっている。一方、【そう思わない】は第10地域で50.6%と最も高く、次いで第14地域が49.4%となっている。

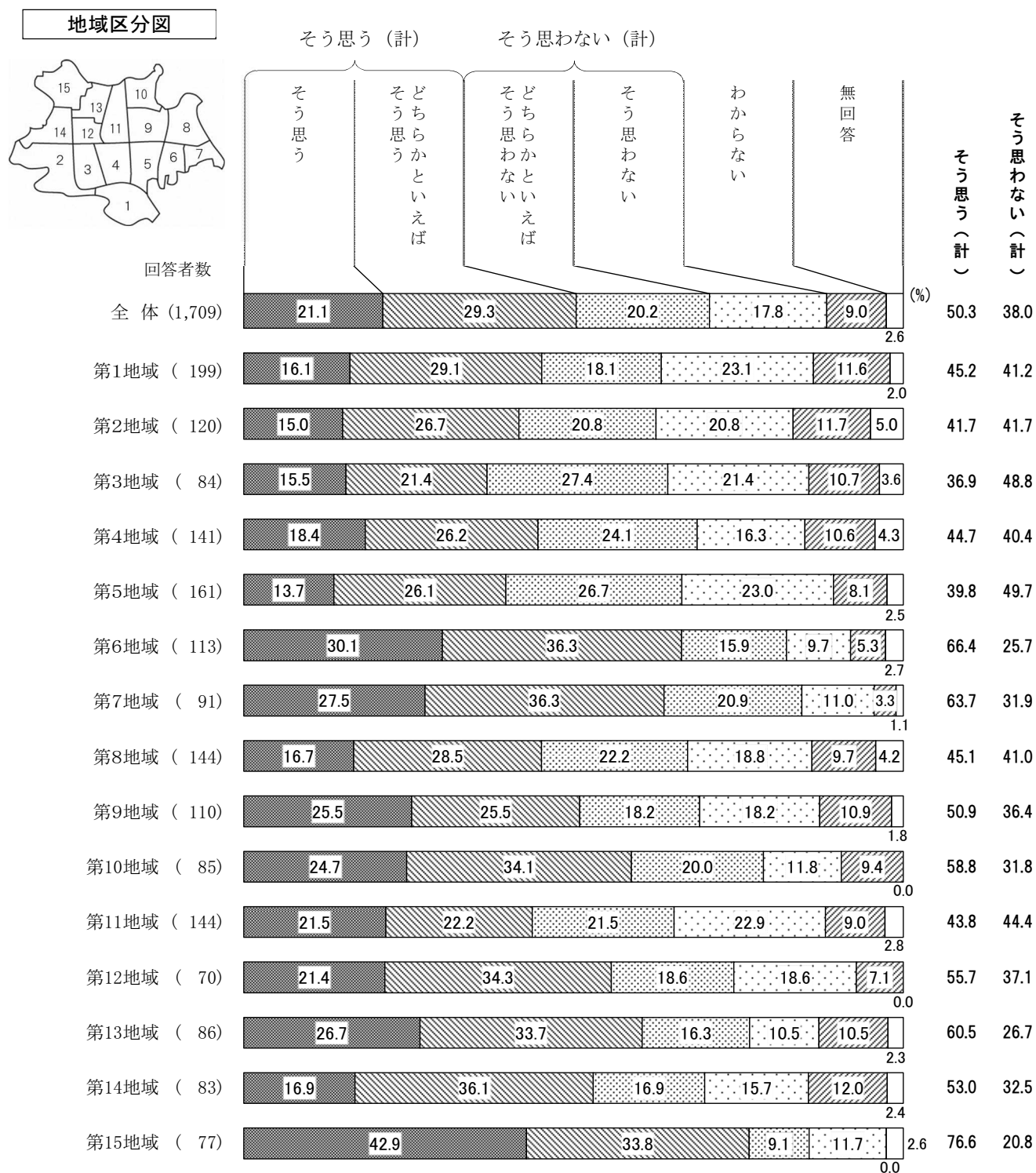
図1-1-2-⑨ 地域別／居住地域の評価／通勤や通学などの交通の便が良い



第3章 調査結果の分析 〈 定住性 〉

〈よく行く、または行きたい公園がある〉について、【そう思う】は第15地域で76.6%と最も高く、次いで第6地域で66.4%となっている。一方、【そう思わない】は第5地域で49.7%と最も高く、次いで第3地域で48.8%となっている。

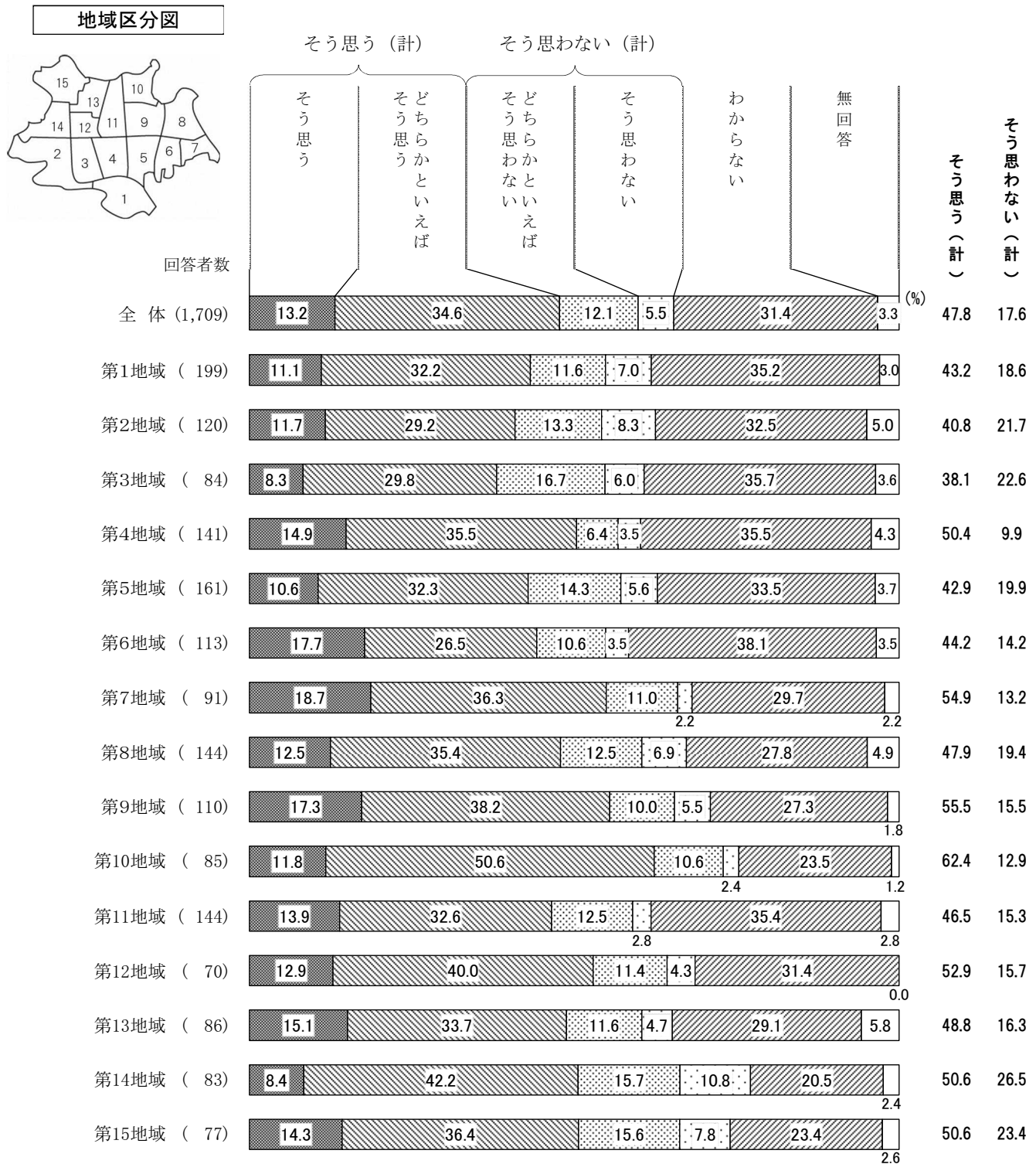
図1-1-2-⑩ 地域別／居住地域の評価／よく行く、または行きたい公園がある



〈子育て環境（保育所、学童クラブなど）が整っている〉について、【そう思う】は第10地域で62.4%と最も高く、次いで第9地域が55.5%となっている。一方、【そう思わない】は第14地域で26.5%と最も高く、次いで第15地域で23.4%となっている。

図1-1-2-⑪ 地域別／居住地域の評価

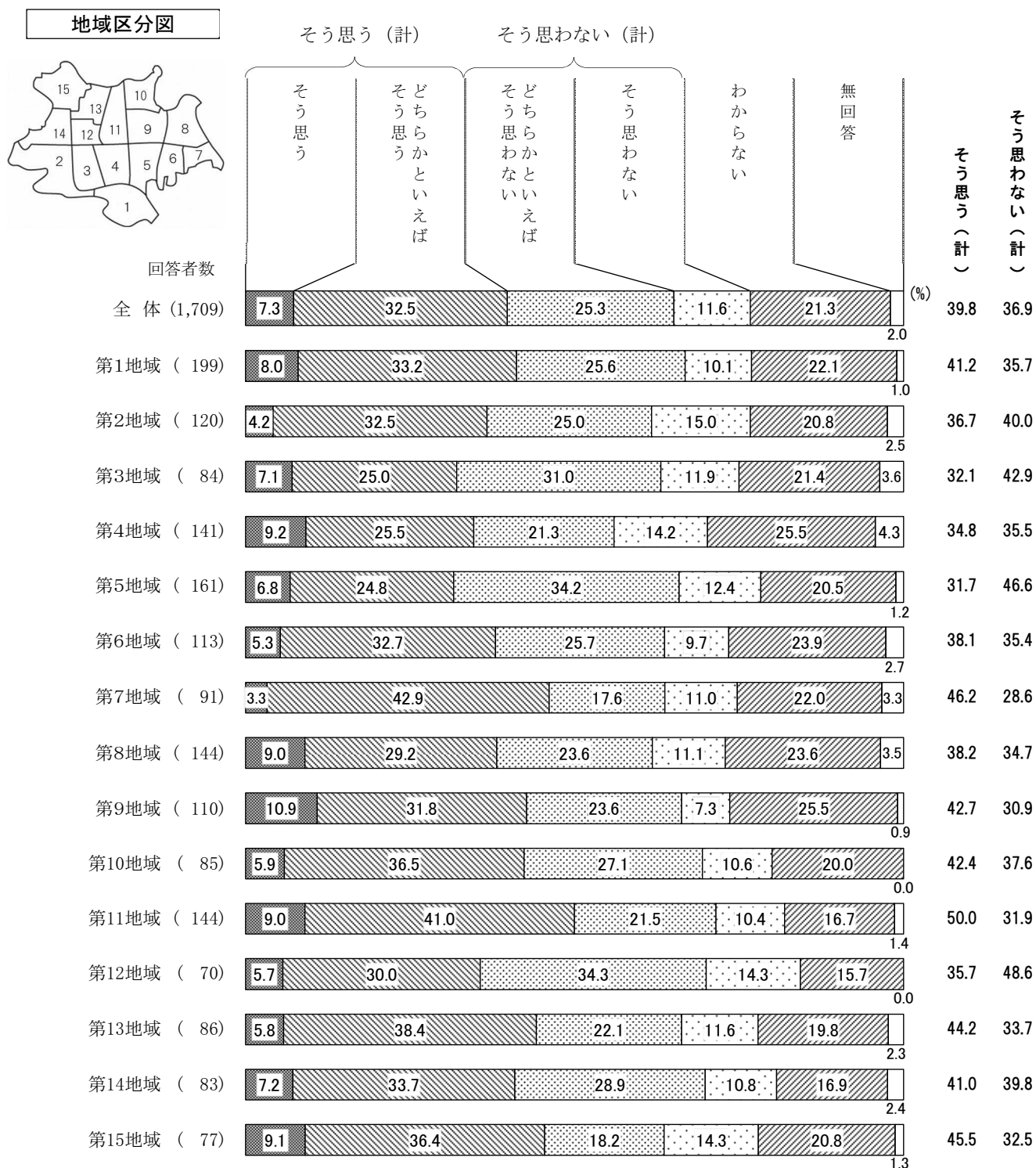
／子育て環境（保育所、学童クラブなど）が整っている



第3章 調査結果の分析 〈 定住性 〉

〈地域の施設（建物や道路など）は、高齢者や障がいのある方なども利用しやすいよう配慮されている〉について、【そう思う】は第11地域で50.0%と最も高く、次いで第7地域で46.2%となっている。一方、【そう思わない】は第12地域で48.6%と最も高く、次いで第5地域で46.6%となっている。

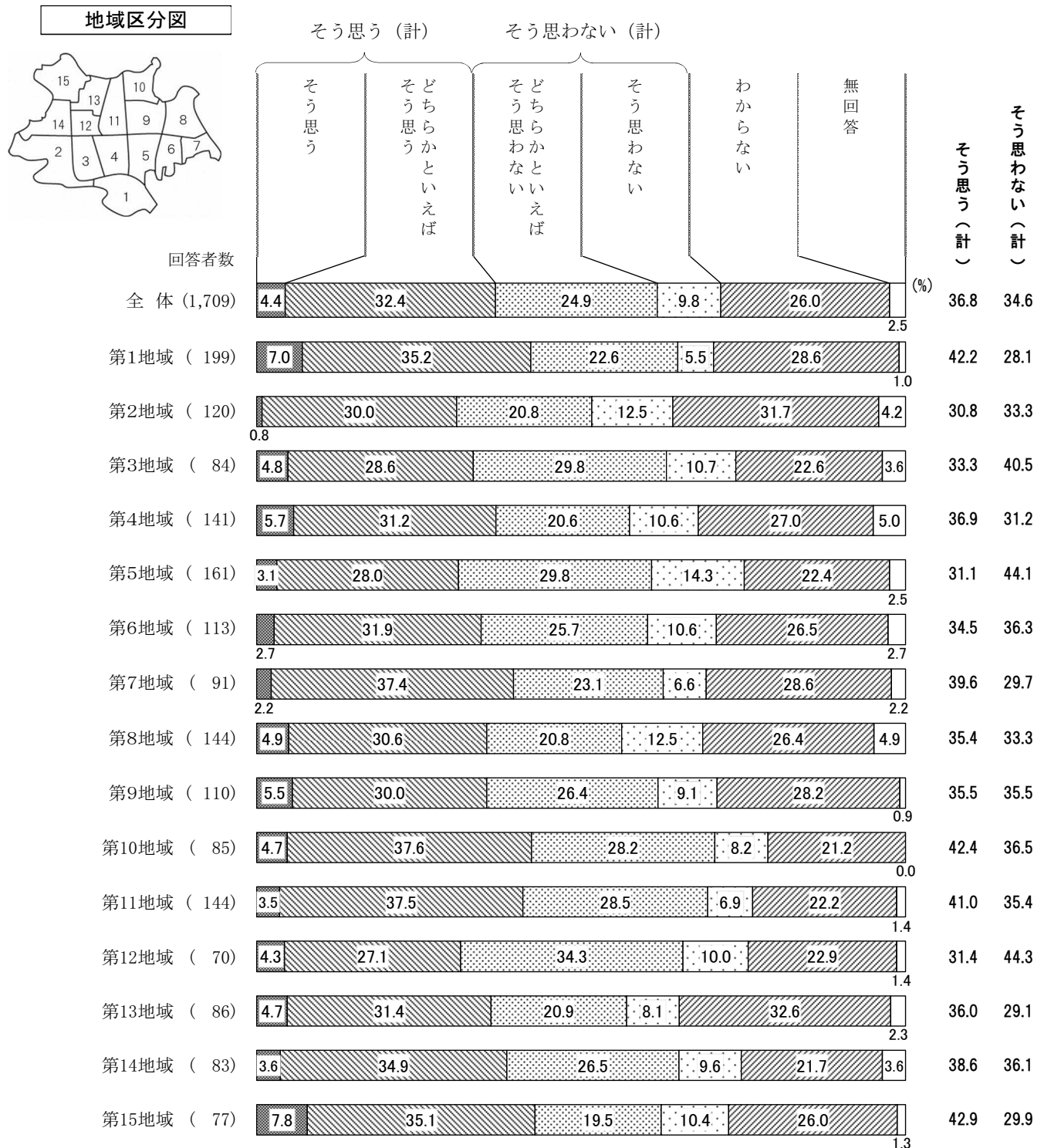
図1-1-2-⑫ 地域別／居住地域の評価／地域の施設（建物や道路など）は、
高齢者や障がいのある方なども利用しやすいよう配慮されている



〈地域の人々が、日常生活で高齢者や障がいのある方などに配慮している〉について、【そう思う】は第15地域で42.9%と最も高く、次いで第10地域が42.4%、僅差で第1地域が42.2%が続いている。一方、【そう思わない】は第12地域で44.3%と最も高く、次いで第5地域で44.1%となっている。

図1-1-2-⑬ 地域別／居住地域の評価

／地域の人々が、日常生活で高齢者や障がいのある方などに配慮している

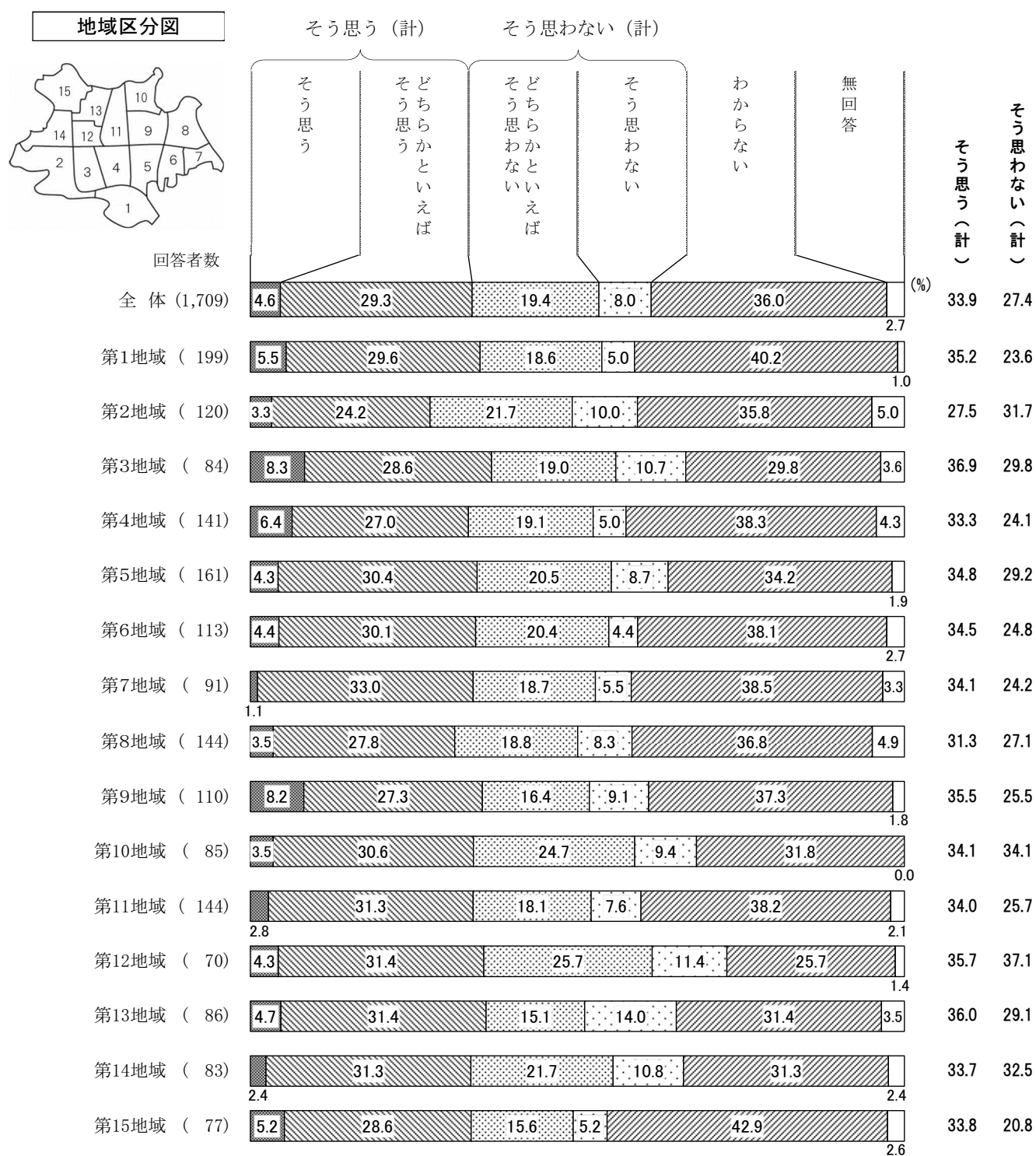


第3章 調査結果の分析 〈 定住性 〉

〈男女が対等な立場で意思表示や活動ができ、また責任も分かちあっている〉について、【そう思う】は第3地域で36.9%と最も高く、次いで第13地域が36.0%となっている。一方、【そう思わない】は第12地域で37.1%と最も高く、次いで第10地域が34.1%となっている。

図1-1-2-⑭ 地域別／居住地域の評価

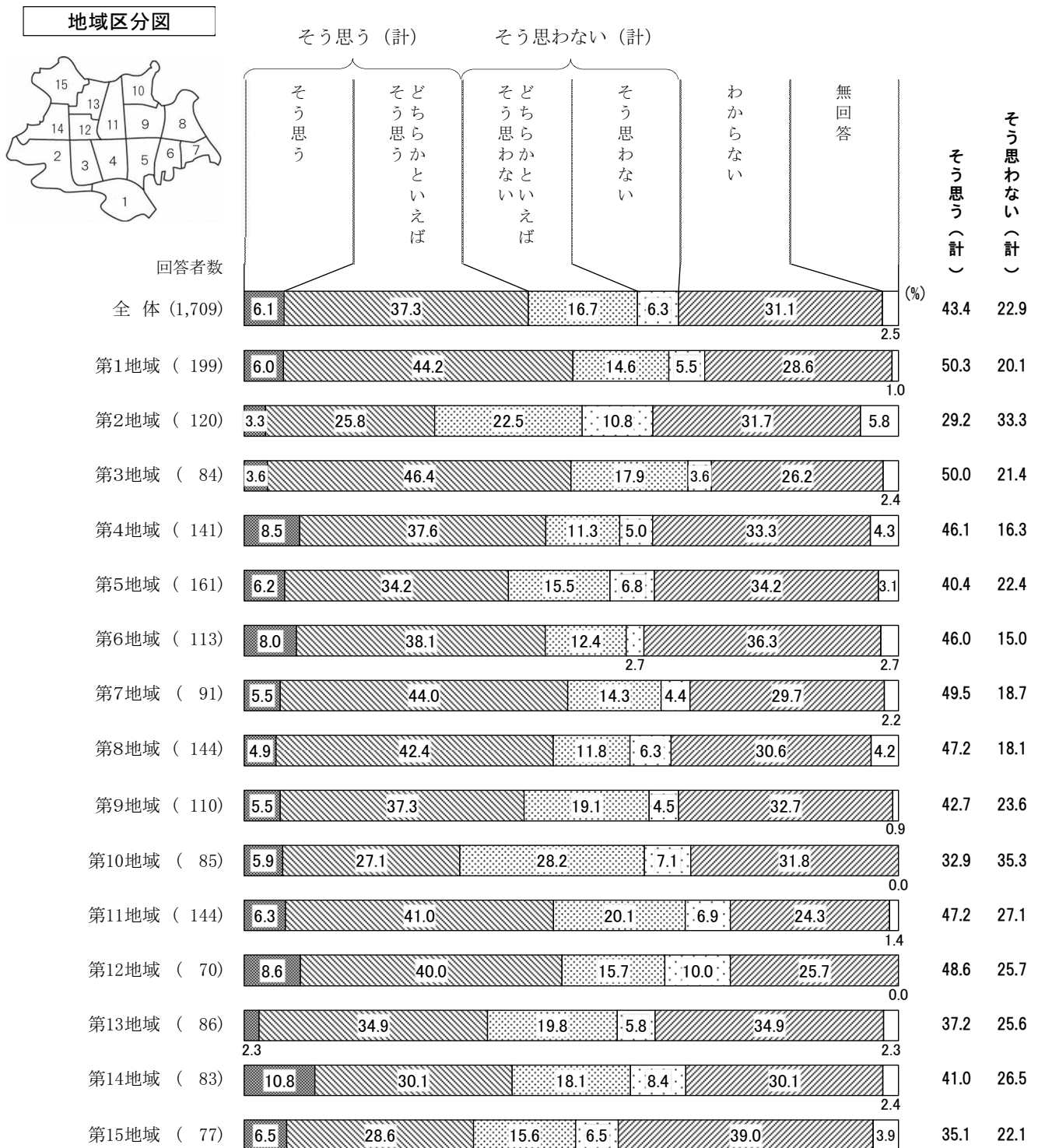
／男女が対等な立場で意思表示や活動ができ、また責任も分かちあっている



〈国籍、文化などが異なる人々がともに暮らしやすいまちである〉について、【そう思う】は第1地域で50.3%と最も高く、次いで第3地域が50.0%となっている。一方、【そう思わない】は第10地域で35.3%と最も高く、次いで第2地域が33.3%となっている。

図 1 - 1 - 2 - ⑮ 地域別／居住地域の評価

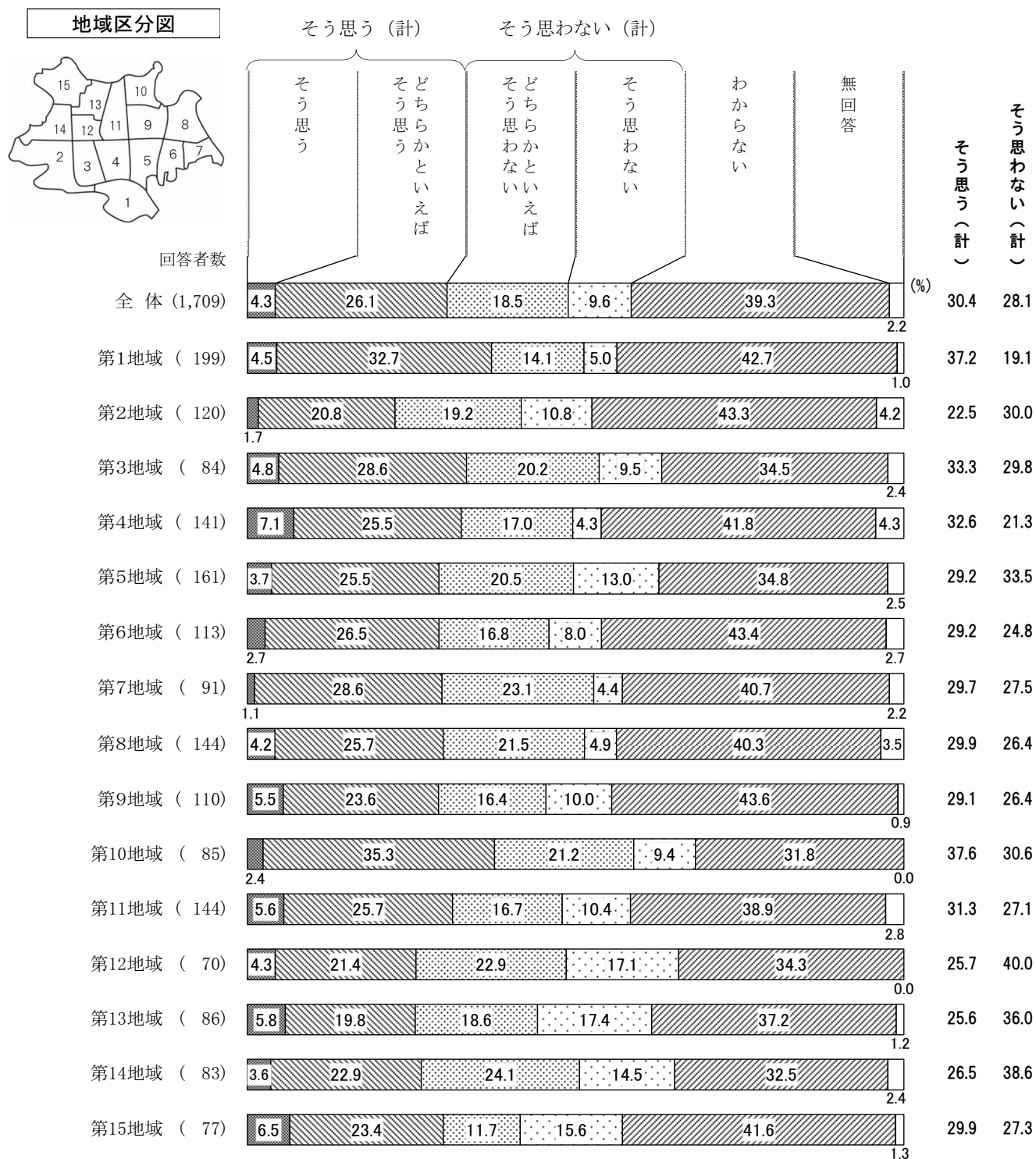
／国籍、文化などが異なる人々がともに暮らしやすいまちである



第3章 調査結果の分析 〈 定住性 〉

〈人権課題である「障がい者」「子ども」「女性」「インターネットによる人権侵害」について、偏見や差別がない〉について、【**そう思う**】は第10地域で37.6%と最も高く、次いで第1地域が37.2%となっている。一方、【**そう思わない**】は第12地域で40.0%と最も高く、次いで第14地域が38.6%となっている。

図1-1-2-⑯ 地域別／居住地域の評価／人権課題である「障がい者」「子ども」「女性」「インターネットによる人権侵害」について、偏見や差別がない



(2) 地域の暮らしやすさ

■【暮らしやすい】はここ7年増加傾向を続け、平成22年調査に次ぐ8割台半ばと高い割合

問2 問1を踏まえてお聞きします。あなたは、あなたのお住まいの地域について、暮らしやすいと感じていますか（〇は1つだけ）。

図1-2-1-① 経年比較／地域の暮らしやすさ

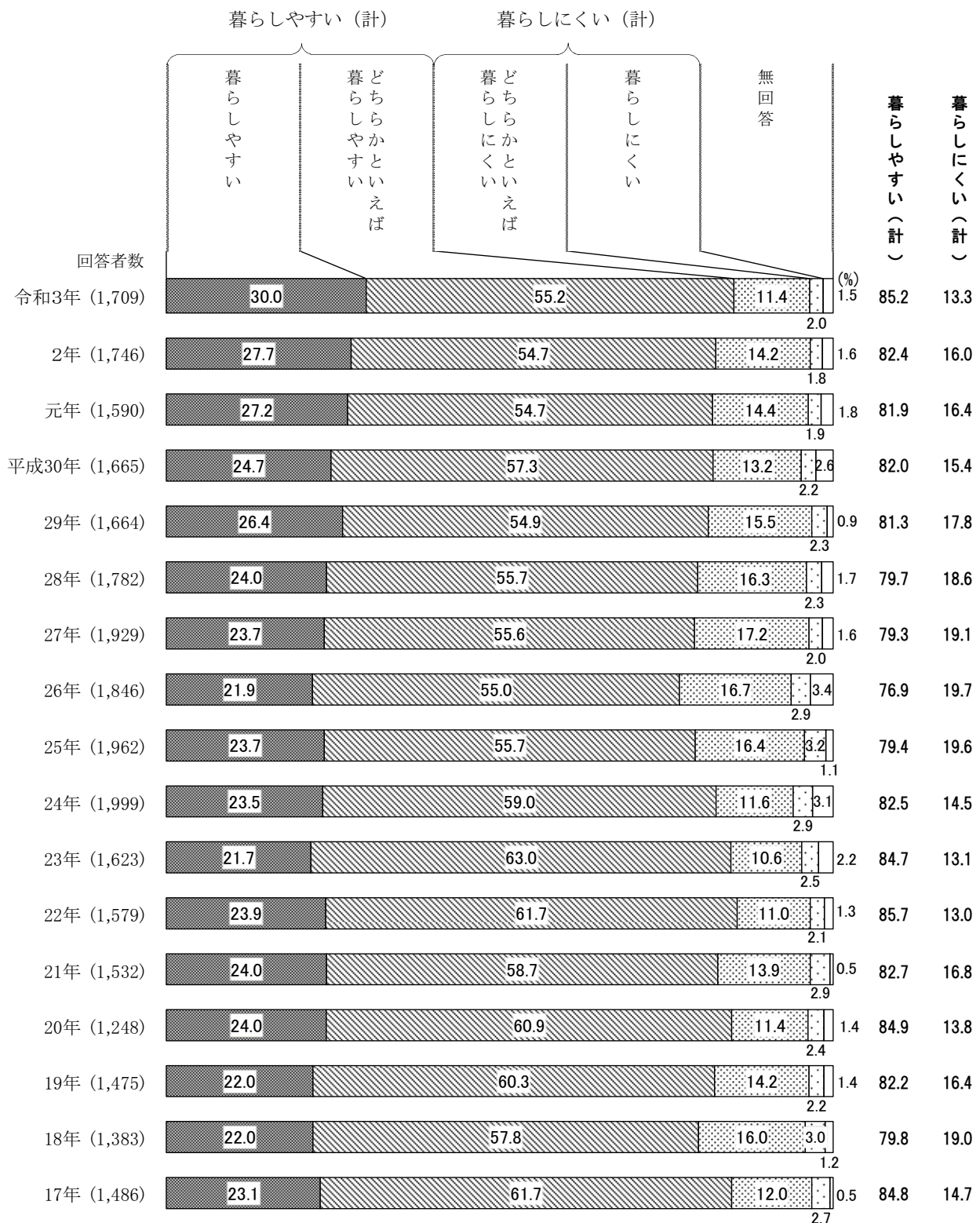
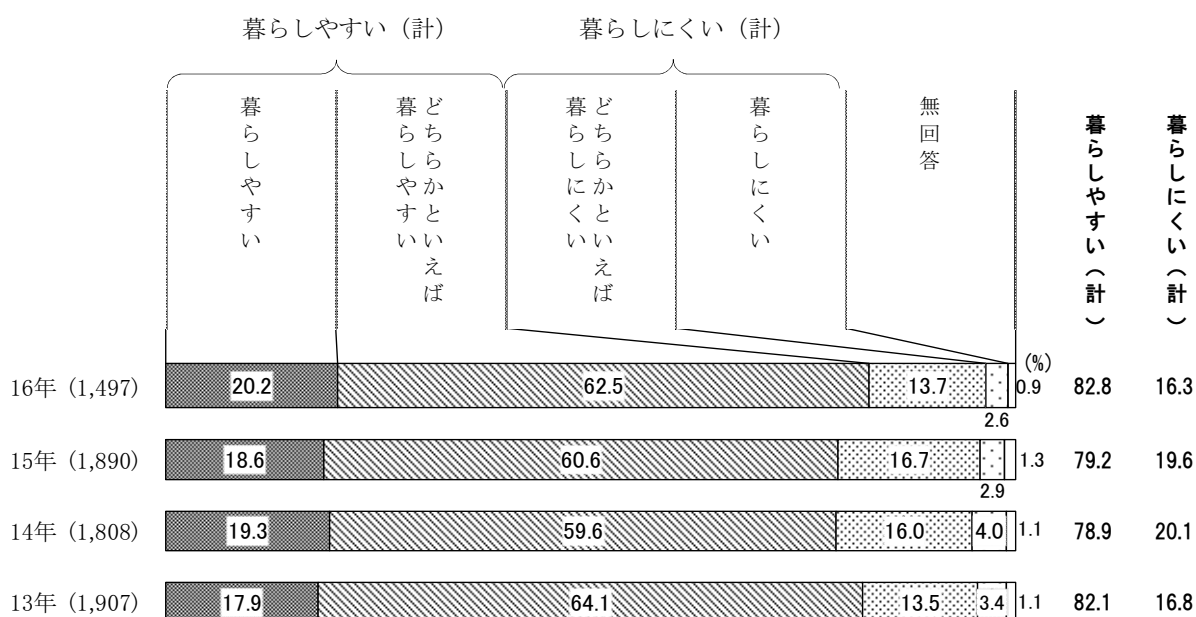


図1-2-1-② 経年比較／地域の暮らしやすさ

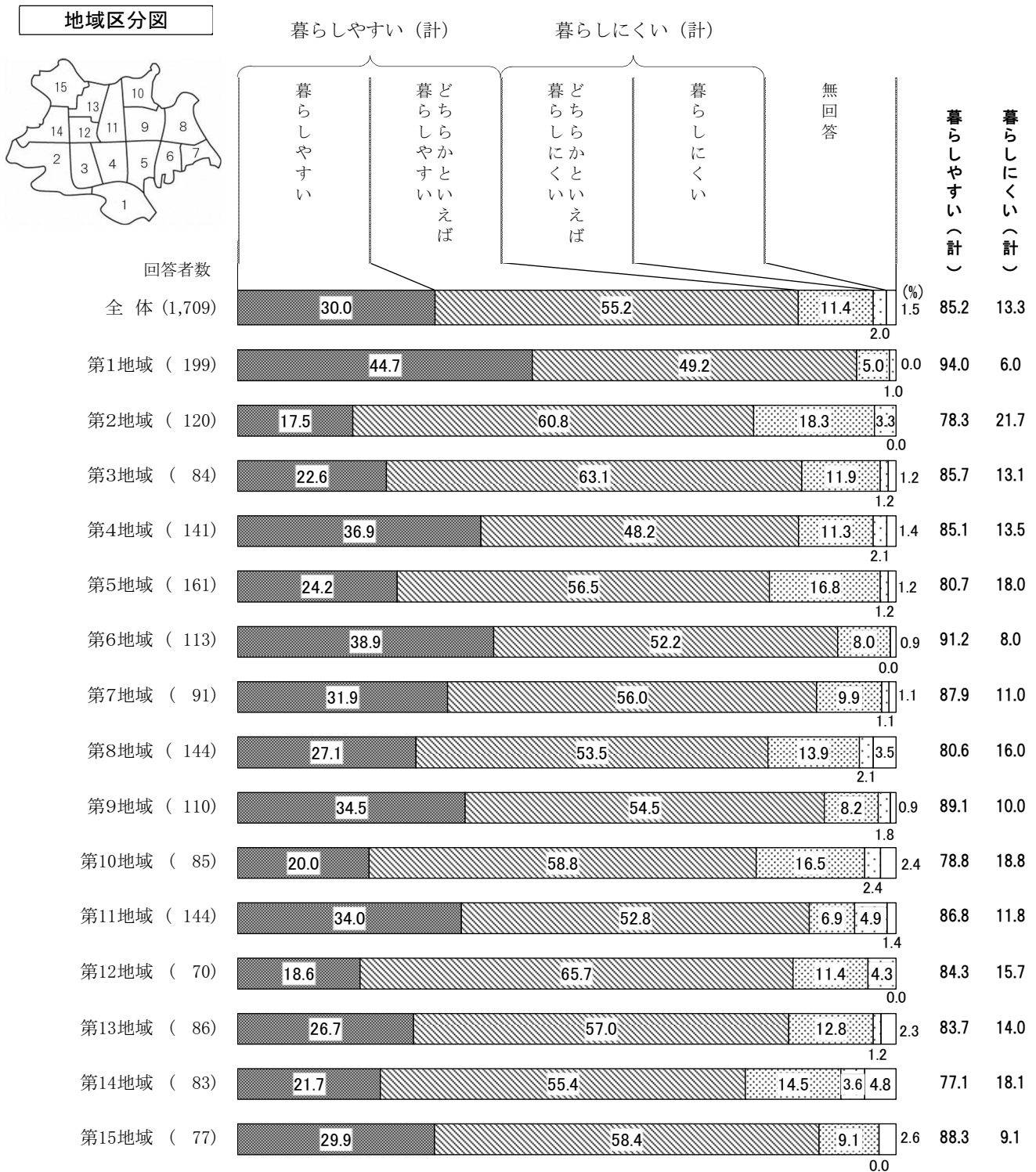


地域の暮らしやすさについて、「暮らしやすい」は30.0%で、「どちらかといえば暮らしやすい」(55.2%)を合わせた【暮らしやすい】は8割台半ばを占めている。一方、「暮らしにくい」は2.0%で、「どちらかといえば暮らしにくい」(11.4%)を合わせた【暮らしにくい】は1割台半ばとなっている。

経年でみると、【暮らしやすい】は、平成22年の85.7%を頂点として平成26年調査(76.9%)まで漸減傾向にあったが、平成27年調査から増加に転じ、それ以降は概ね増加傾向を続け、前回の令和2年調査(82.4%)から2.8ポイント増加の85.2%まで戻し、平成22年調査に次ぐ高い割合となった。一方、「どちらかといえば暮らしにくい」と「暮らしにくい」を合わせた【暮らしにくい】は、今回の調査では13.3%と、前回の令和2年調査(16.0%)に比べて2.7ポイント減少し、平成26年調査(19.7%)以降はおおむね減少傾向となっている。

地域別でみると、【暮らしやすい】は第1地域で94.0%と最も高く、次いで第6地域（91.2%）が9割強で続いている。一方、【暮らしにくい】は第2地域（21.7%）が2割強で最も高く、次いで第10地域（18.8%）と第14地域（18.1%）がともに2割弱で続いている。

図1-2-2 地域別／地域の暮らしやすさ

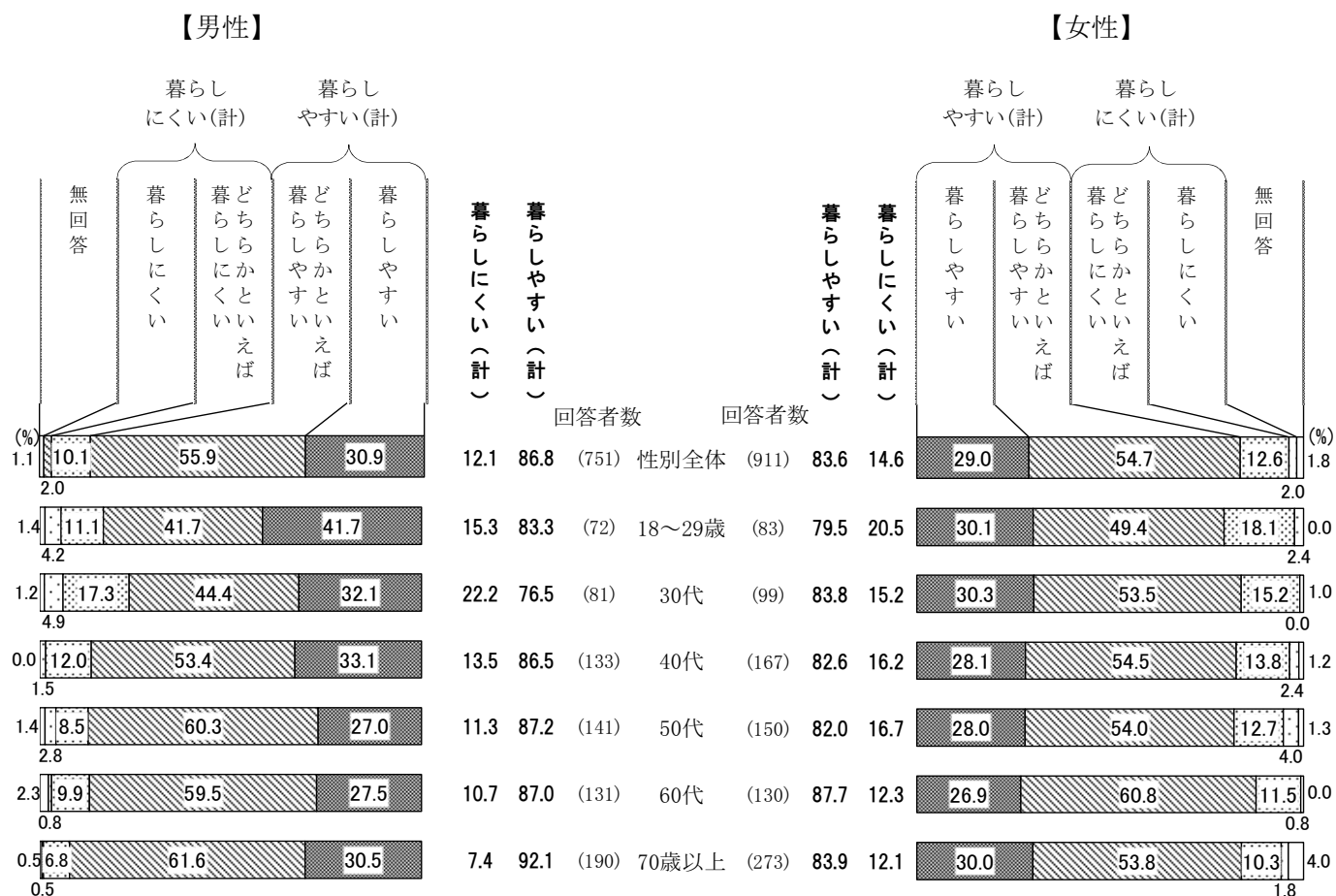


第3章 調査結果の分析〈定住性〉

性別でみると【暮らしやすい】は、男性（86.8%）の方が女性（83.6%）より3.2ポイント高くなっている。

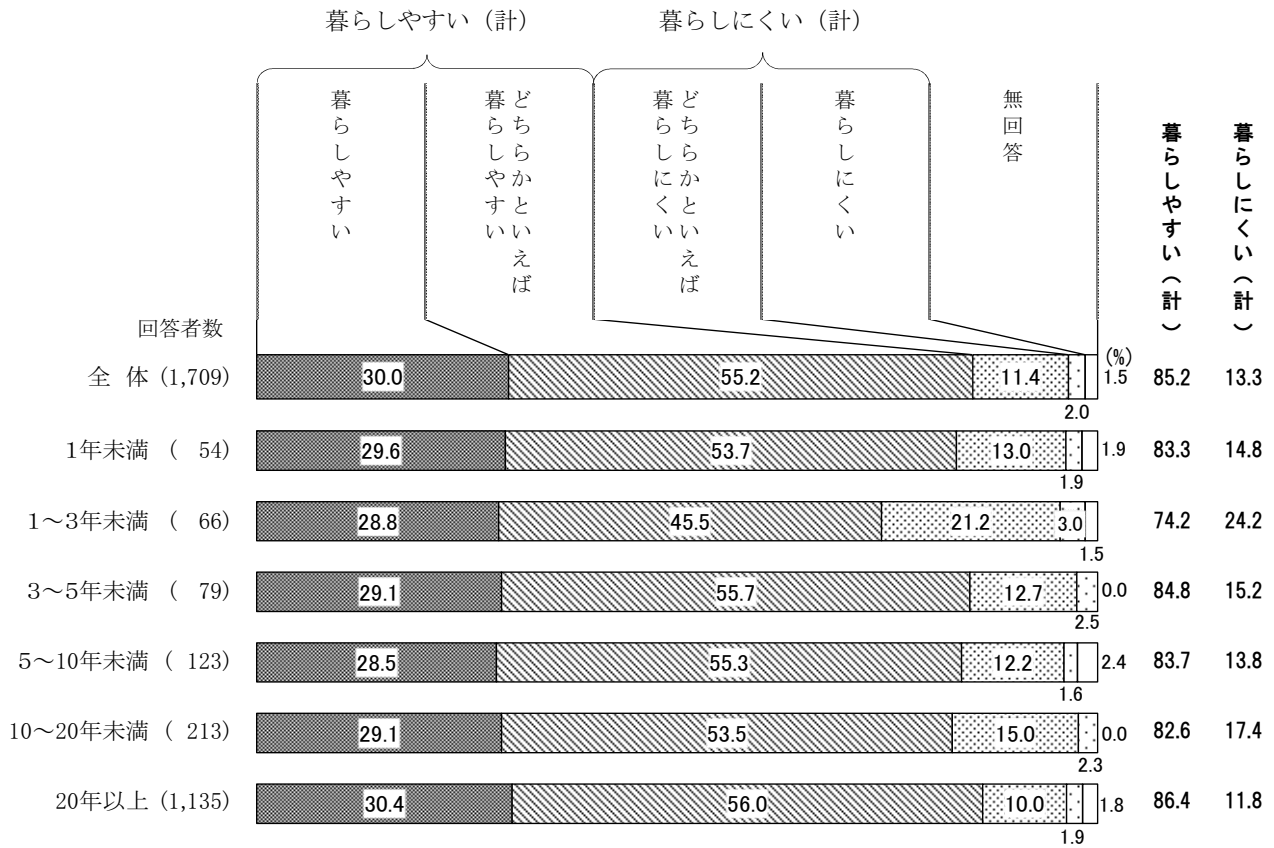
性・年代別でみると、男性では、【暮らしやすい】は70歳以上で92.1%と最も高く、【暮らしにくい】は30代で22.2%と最も高くなっている。女性では、【暮らしやすい】は60代で87.7%と最も高く、【暮らしにくい】は18～29歳で20.5%と最も高くなっている。

図1-2-3 性別、性・年代別／地域の暮らしやすさ



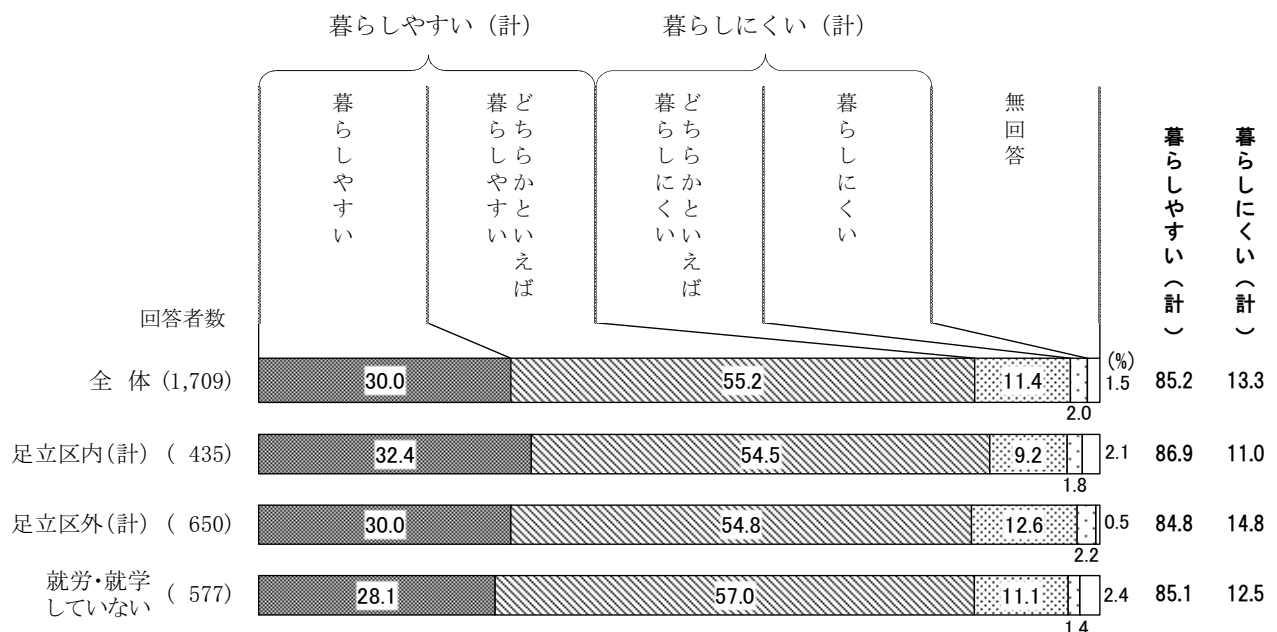
居住年数別でみると、【暮らしやすい】は「20年以上」で86.4%と最も高く、【暮らしにくい】は「1～3年未満」で24.2%と最も高くなっている。

図1-2-4 居住年数別／地域の暮らしやすさ



就労・就学場所別にみると、特に大きな違いはみられないものの、【暮らしにくい】は「足立区内 (計)」(11.0%)で低くなっている。

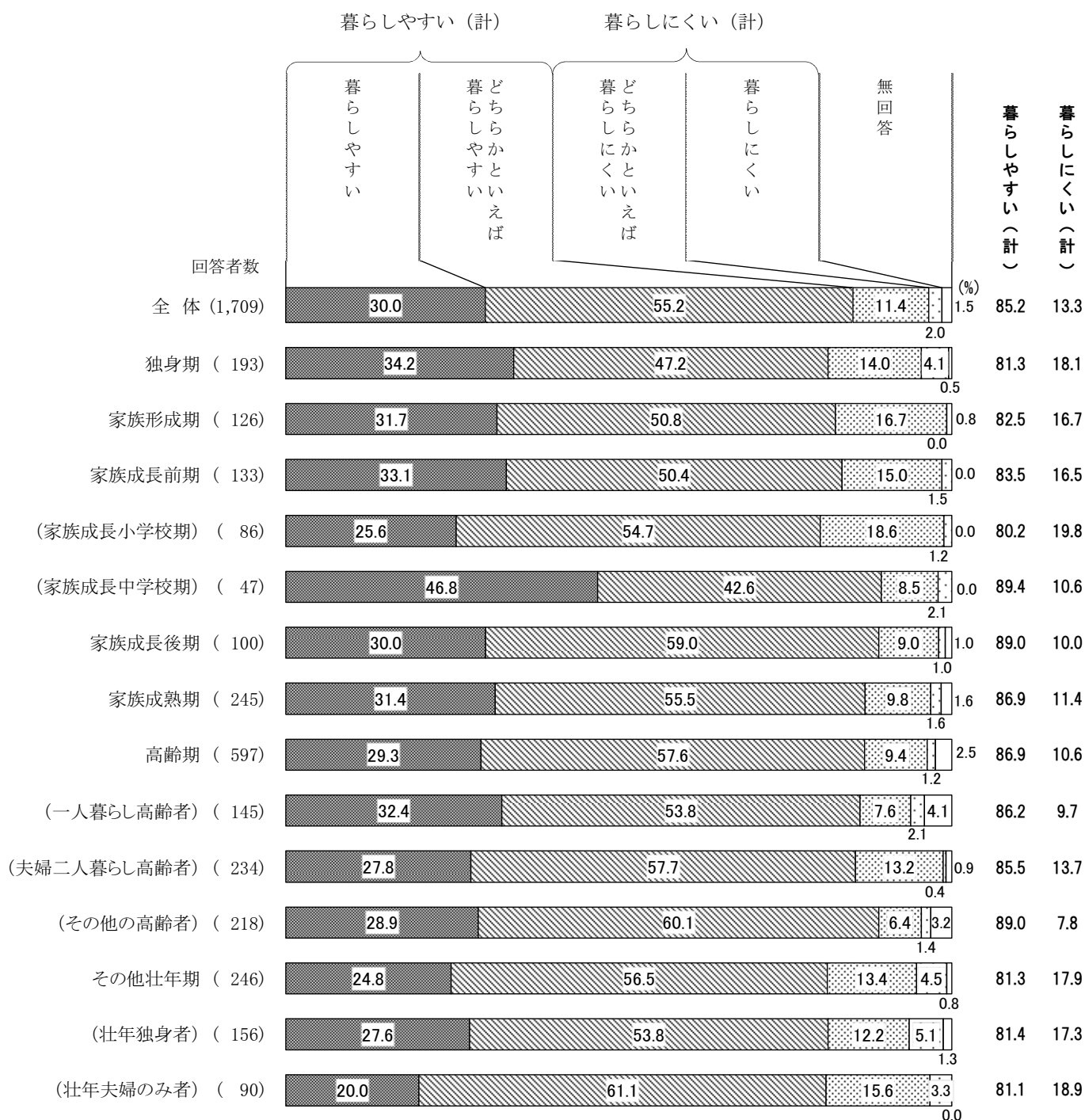
図1-2-5 就労・就学場所別／地域の暮らしやすさ



第3章 調査結果の分析 〈 定住性 〉

ライフステージ別でみると、【暮らしやすい】はいずれのステージでも8割台と大きな違いはみられないが、詳細区分でみると〈(家族成長中学校期)〉(89.4%)、〈家族成長後期〉(89.0%)、〈(その他の高齢者)〉(89.0%)、で約9割と高く、【暮らしにくい】は〈(家族成長小学校期)〉(19.8%)が約2割で最も高くなっている。

図1-2-6 ライフステージ別／地域の暮らしやすさ



(3) 特に暮らしにくいと感じること

■ “マナーやルールへの意識の低さ” が4割台半ばを超えて2年連続で最も高い

問2で「3 どちらかといえば暮らしにくい」、または「4 暮らしにくい」とお答えの方に
問2-1 特に暮らしにくいと感じることは何ですか（〇は3つまで）。

図1-3-1-① 経年比較／特に暮らしにくいと感じること

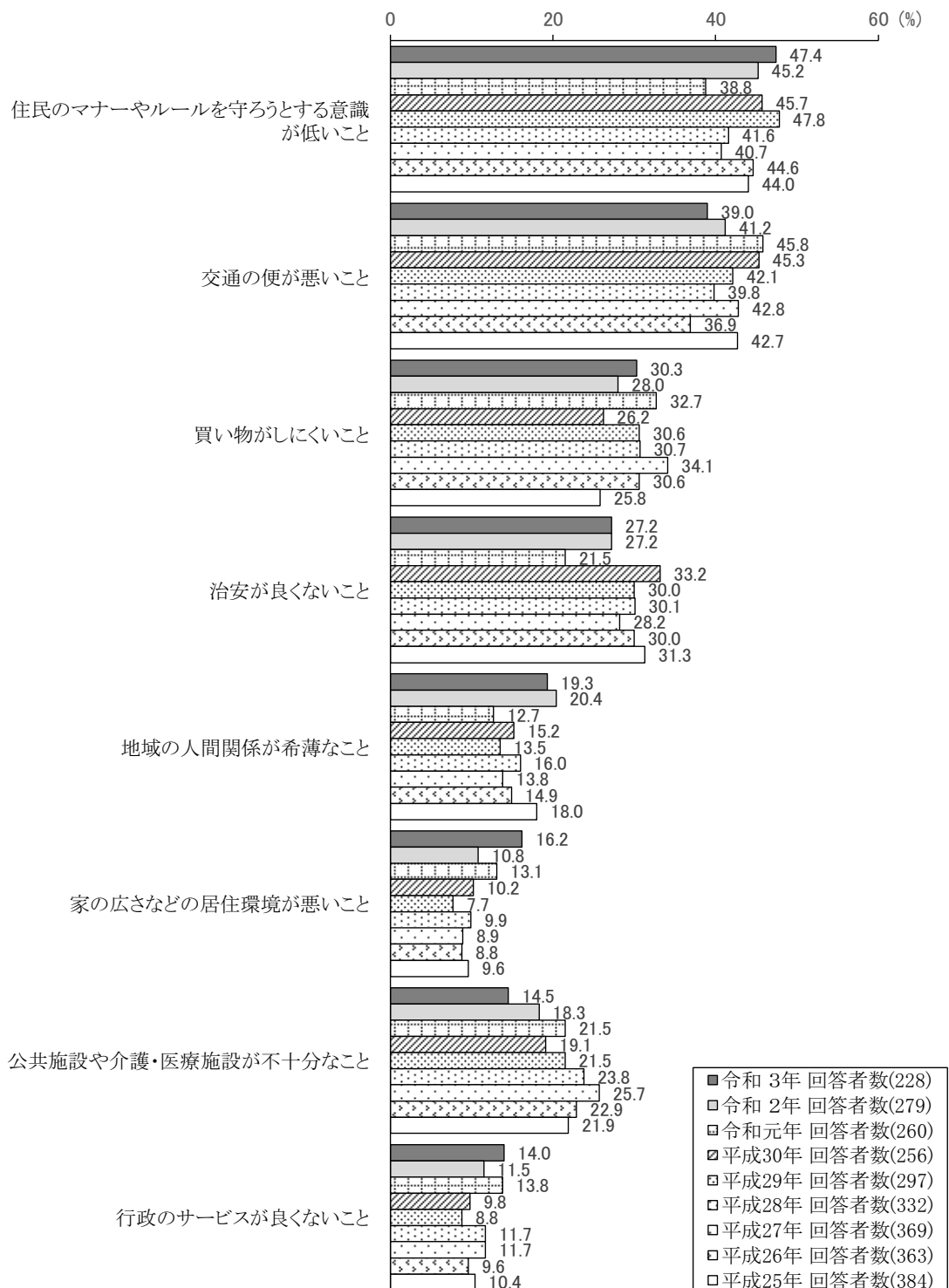
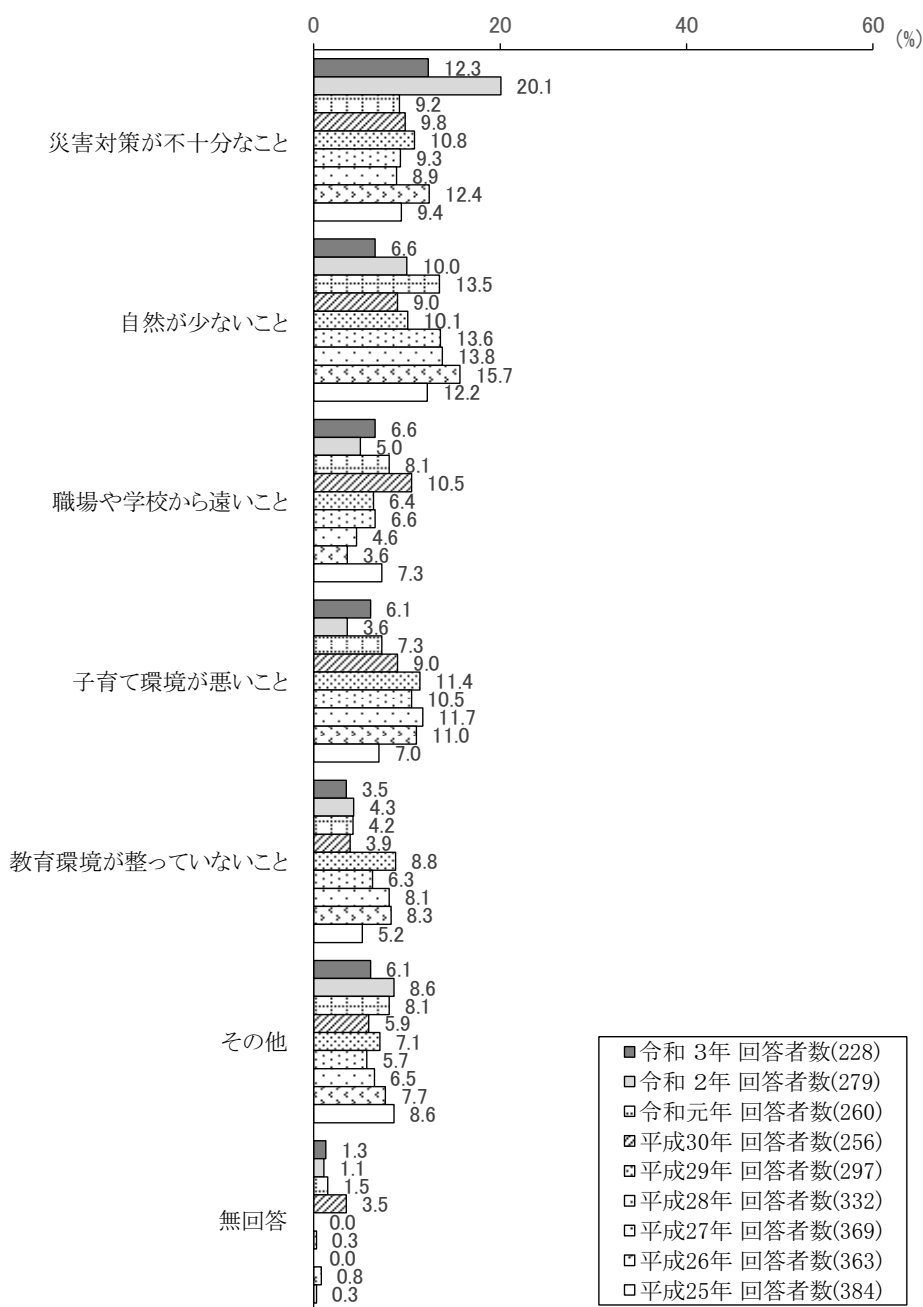


図1-3-1-② 経年比較／特に暮らしにくいと感じること

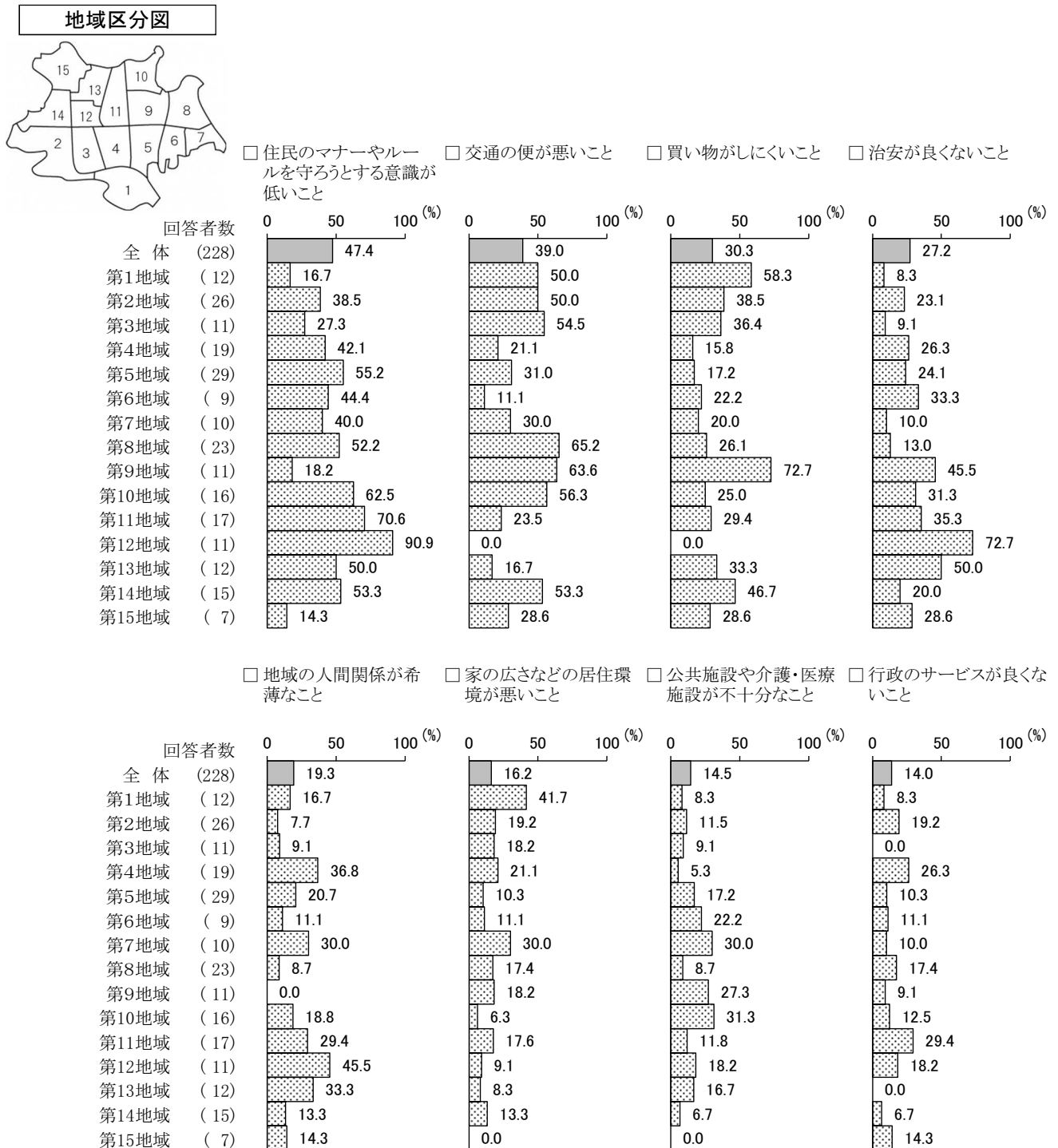


【暮らしにくい】という人に、その理由を聞いたところ、「住民のマナーやルールを守ろうとする意識が低いこと」が47.4%と最も高く、次いで「交通の便が悪いこと」が39.0%で続き、「買い物がしにくいこと」が30.3%と続いている。

上位10項目について経年でみると、令和2年調査に比べて増加は、「家の広さなどの居住環境が悪いこと」(+5.4ポイント)、「行政のサービスが良くないこと」(+2.5ポイント)、「買い物がしにくいこと」(+2.3ポイント)、「住民のマナーやルールを守ろうとする意識が低いこと」(+2.2ポイント)などで、逆に減少は、「災害対策が不十分なこと」(-7.8ポイント)、「公共施設や介護・医療施設が不十分なこと」(-3.8ポイント)、「交通の便が悪いこと」(-2.2ポイント)などとなっている。

地域別でみると、すべての地域の回答者数が30未満となっていることから参考値にとどめる必要があるが、「住民のマナーやルールを守ろうとする意識が低いこと」は第12地域（90.9%）、「買い物がしにくいこと」は第9地域（72.7%）、「治安が良くないこと」は第12地域（72.7%）で他の地域に比べて高くなっている。

図1-3-2 地域別／特に暮らしにくいと感じること／上位8項目

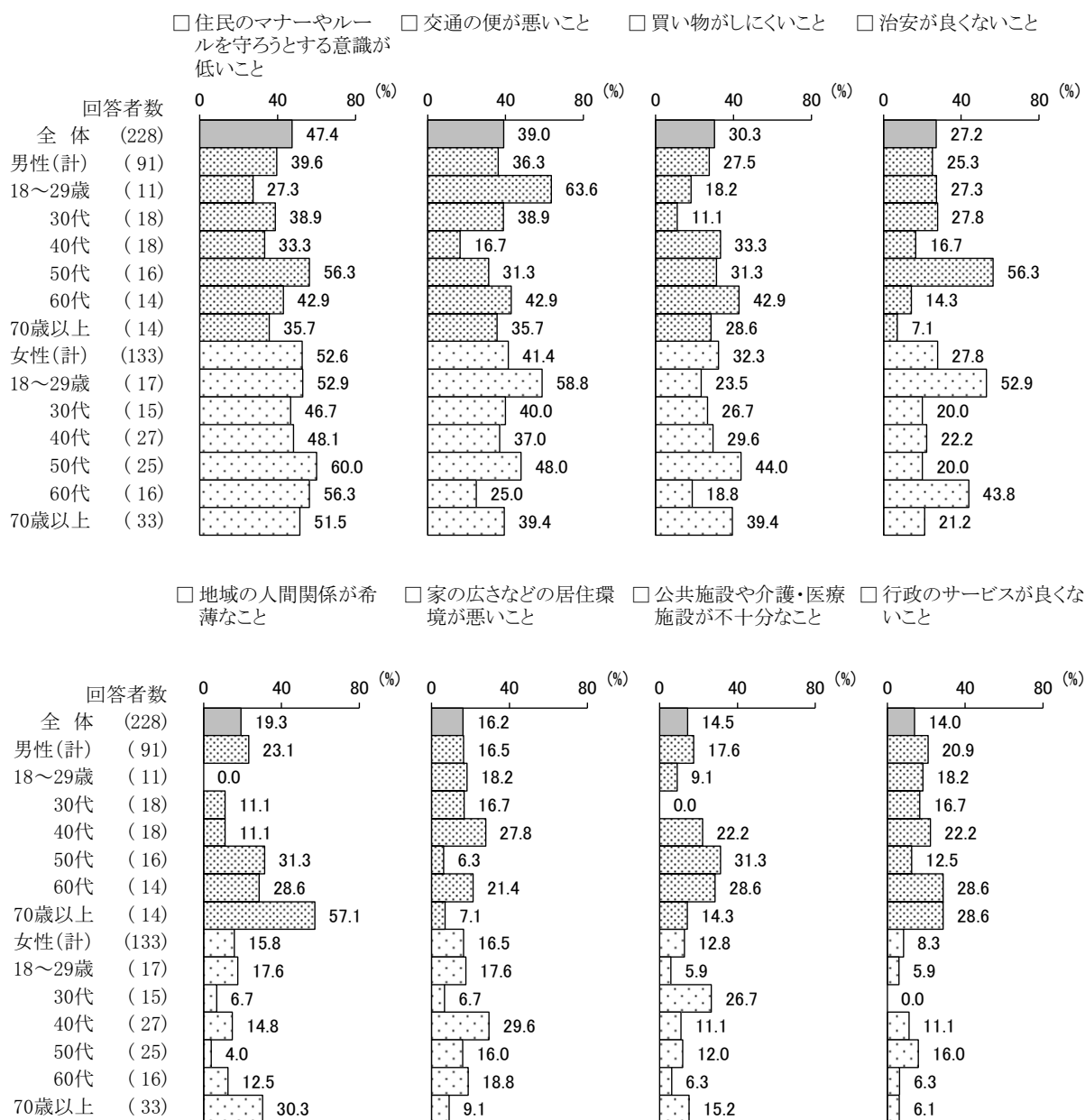


第3章 調査結果の分析 〈 定住性 〉

性別でみると、「住民のマナーやルールを守ろうとする意識が低いこと」は女性の方が男性より13.0ポイント高く、「交通の便が悪いこと」でも女性の方が男性より5.1ポイント高くなっている。一方、「行政のサービスが良くないこと」は男性の方が女性より12.6ポイント高く、「地域の人間関係が希薄なこと」でも男性の方が女性より7.3ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、サンプル数が少ない層が多いことからあくまで参考値ながら、回答割合の高い上位2項目についてみると、「住民のマナーやルールを守ろうとする意識が低いこと」は男女とも50代で高く、「交通の便が悪いこと」は男女とも18～29歳で高くなっている。

図1-3-3 性別、性・年代別／特に暮らしにくいと感じること／上位8項目



(4) 定住意向

■【定住意向】は、現行の選択肢になって以降初めて8割台

問3 あなたは、足立区に今後も住み続けたいと思いますか（○は1つだけ）。

図1-4-1-① 経年比較／定住意向

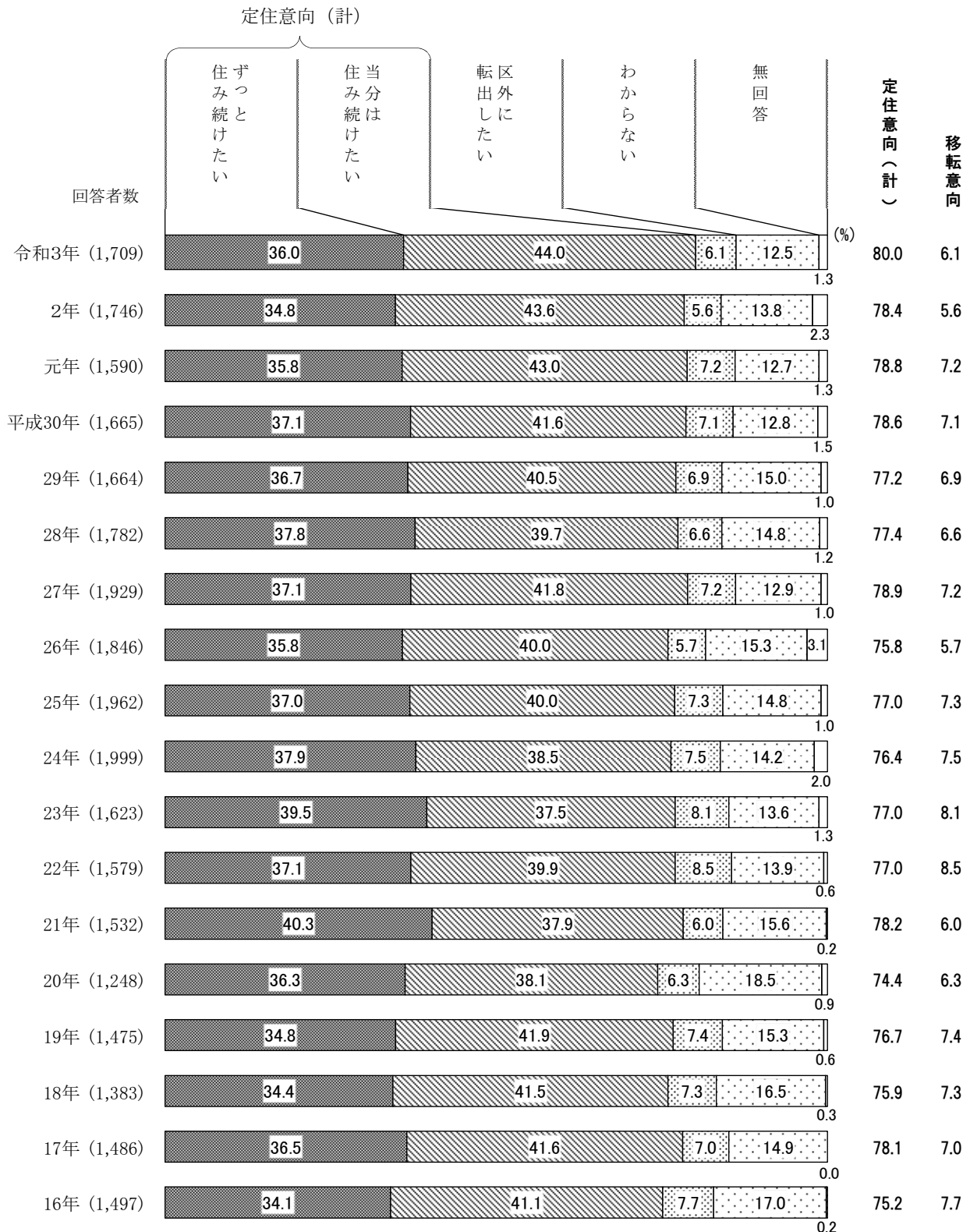
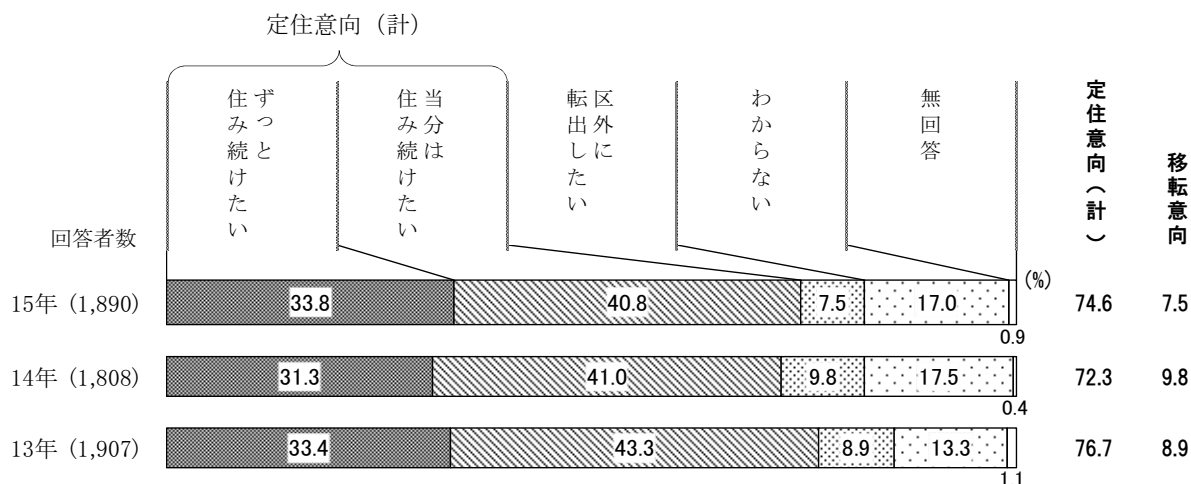


図1-4-1-② 経年比較／定住意向



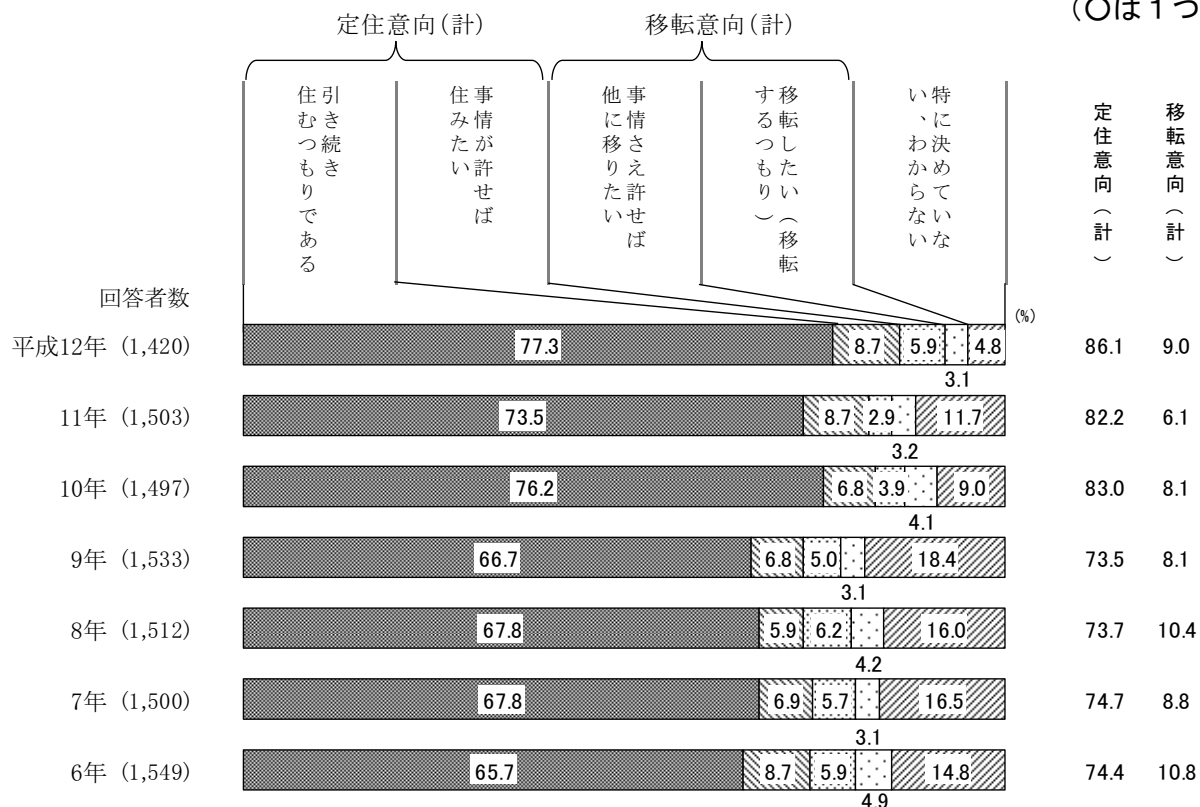
足立区への定住意向をみると、「ずっと住み続けたい」は36.0%で、「当分は住み続けたい」（44.0%）を合わせた【定住意向】は8割を占めている。一方、「区外に転出したい」は1割未満となっている。

経年でみると、【定住意向】は現行の選択肢となった平成13年以降、初めて8割台となった。

参考／定住・移転意向の推移

問 あなたは、足立区に今後も住み続けたいと思いますか。この中から1つにお答えください。

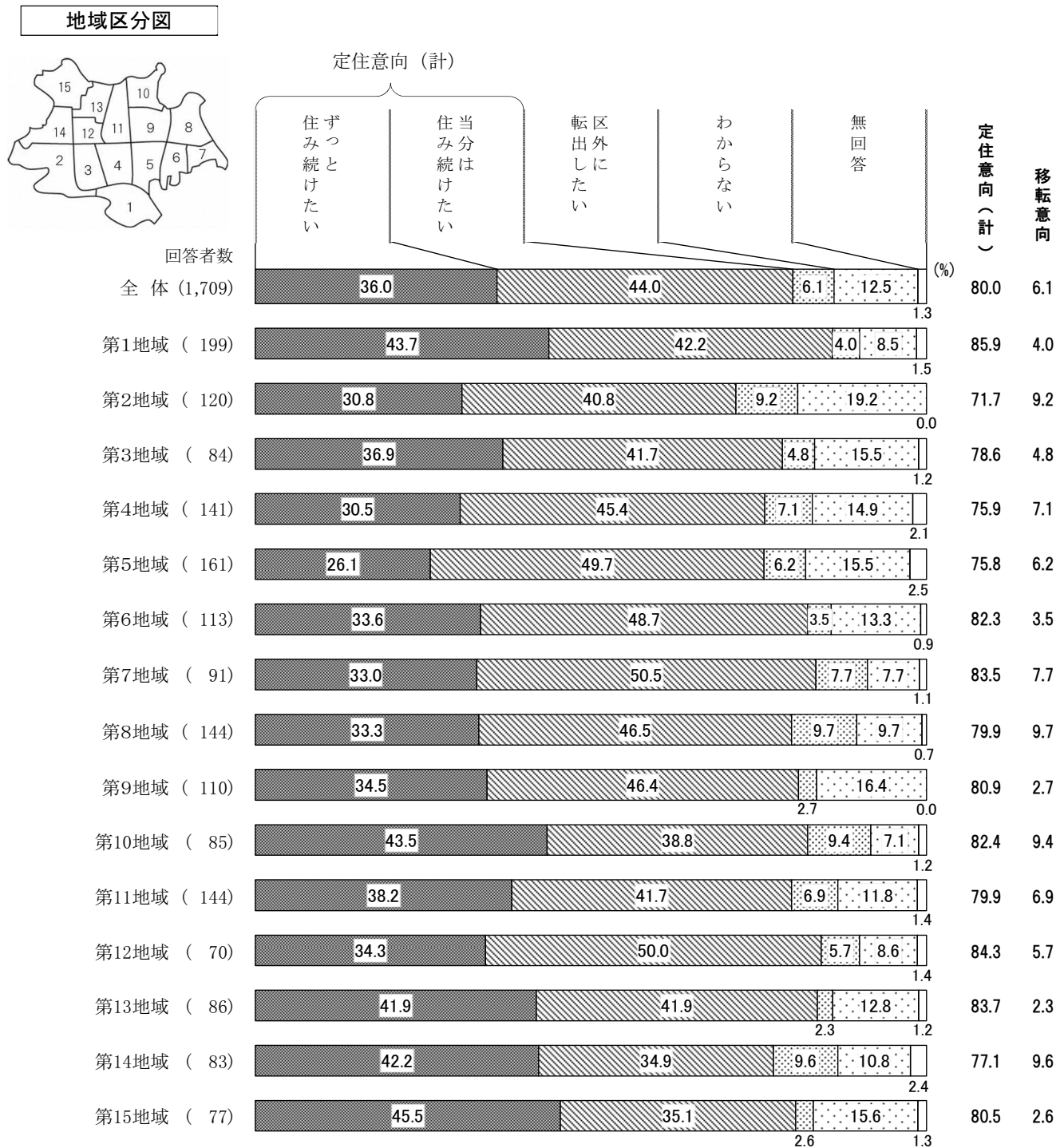
（○は1つ）



※ 平成12年度までと平成13年度以降では、調査方法（平成12年度までは訪問面接法、平成13年度以降は郵送配布郵送回収法）、質問文、選択肢が異なるため、結果を単純に比較することはできない。

地域別でみると、【定住意向】は第1地域で85.9%と最も高く、次いで第12地域が84.3%となっている。一方、「区外に転出したい」という【移転意向】は第8地域で9.7%と最も高く、次いで第14地域で9.6%となっている。

図1-4-2 地域別／定住意向

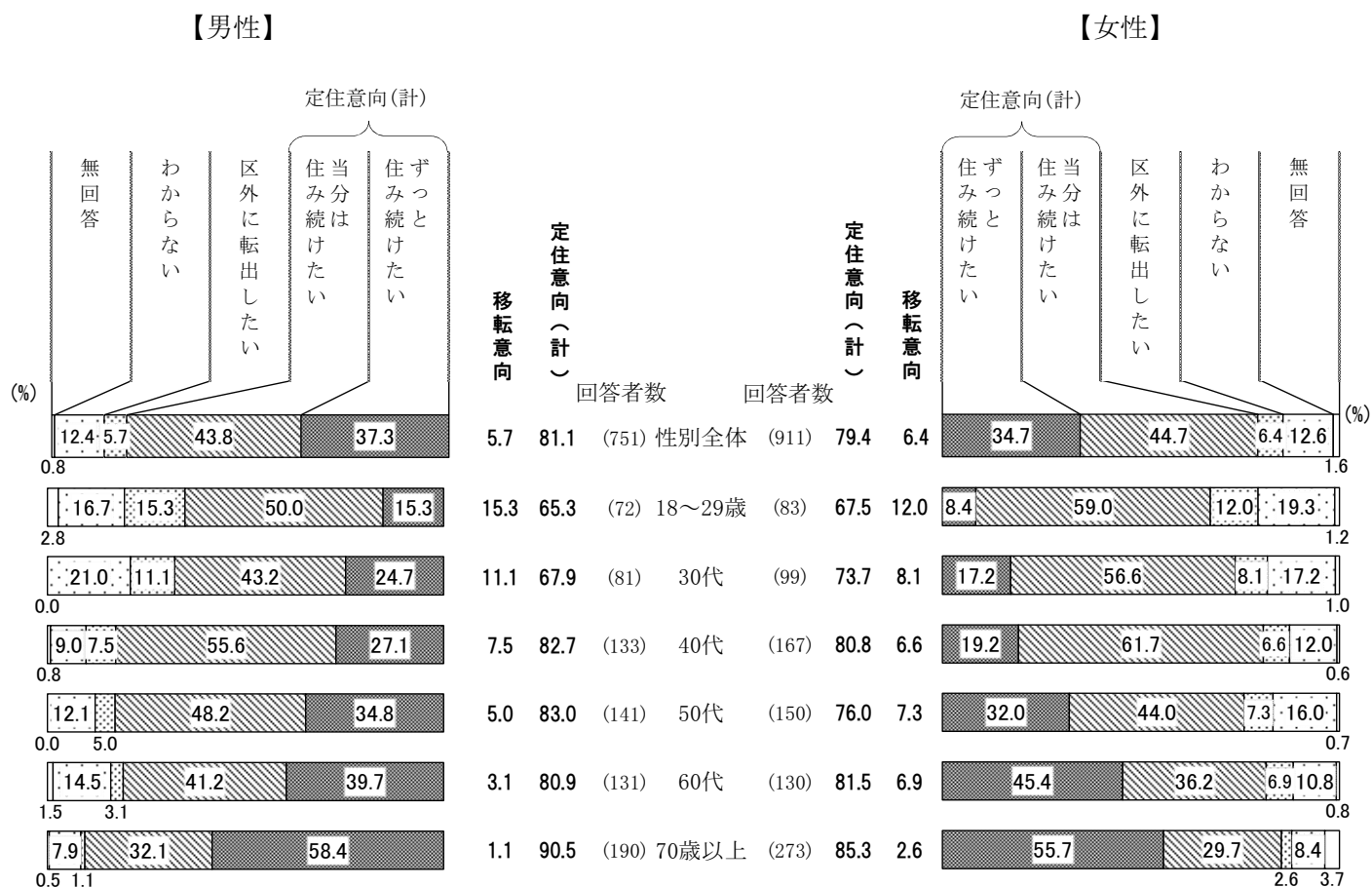


第3章 調査結果の分析〈定住性〉

性別でみると、【定住意向】は、男性（81.1%）の方が女性（79.4%）より僅かに高くなっている。

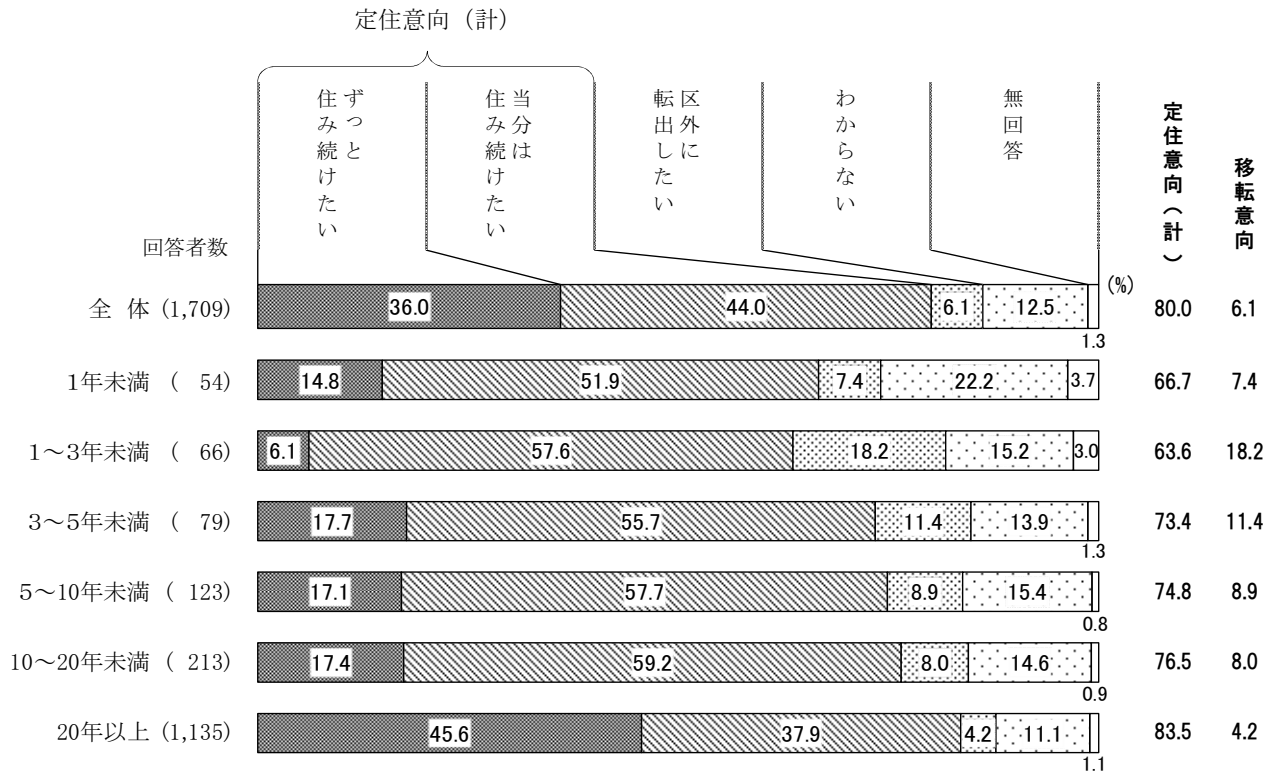
性・年代別でみると、【定住意向】は、男女ともに70歳以上（男性90.5%、女性85.3%）で最も高く、男女ともに18～29歳（男性65.3%、女性85.3%）で最も低くなっている。

図1-4-3 性別、性・年代別／定住意向



居住年数別でみると、【定住意向】は20年以上で83.5%と最も高く、3～20年未満で7割台半ば、0～3年未満で6割台半ばとなっており、居住年数が長くなるほど定住意向の割合が高くなる傾向がみられた。

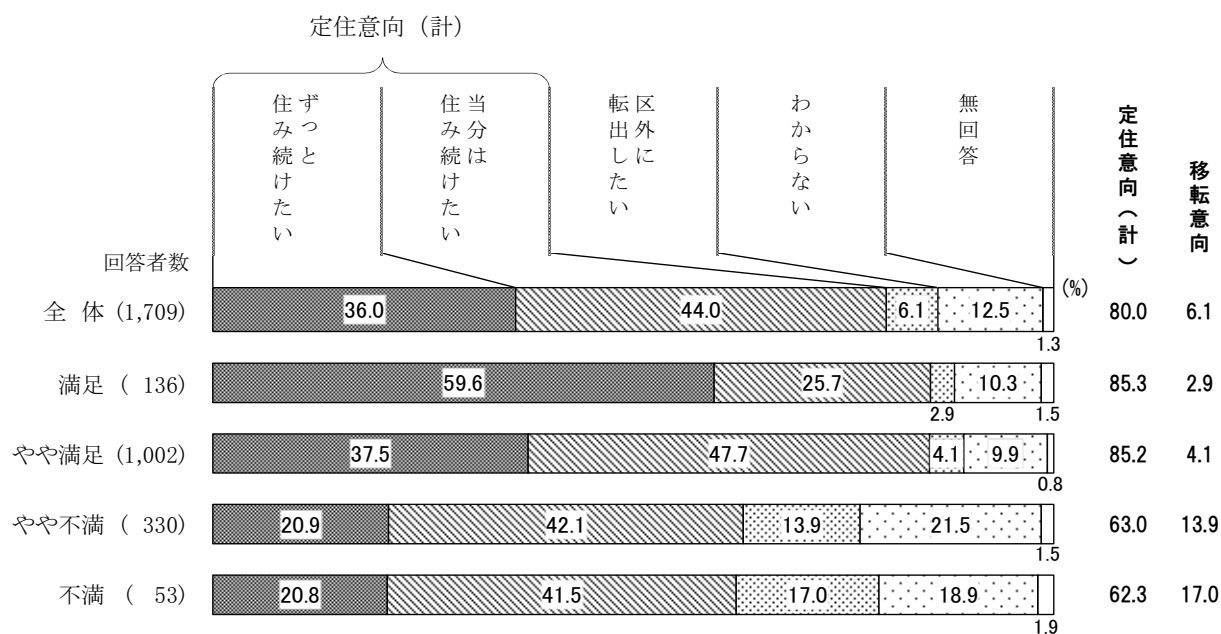
図1-4-4 居住年数別／定住意向



第3章 調査結果の分析〈定住性〉

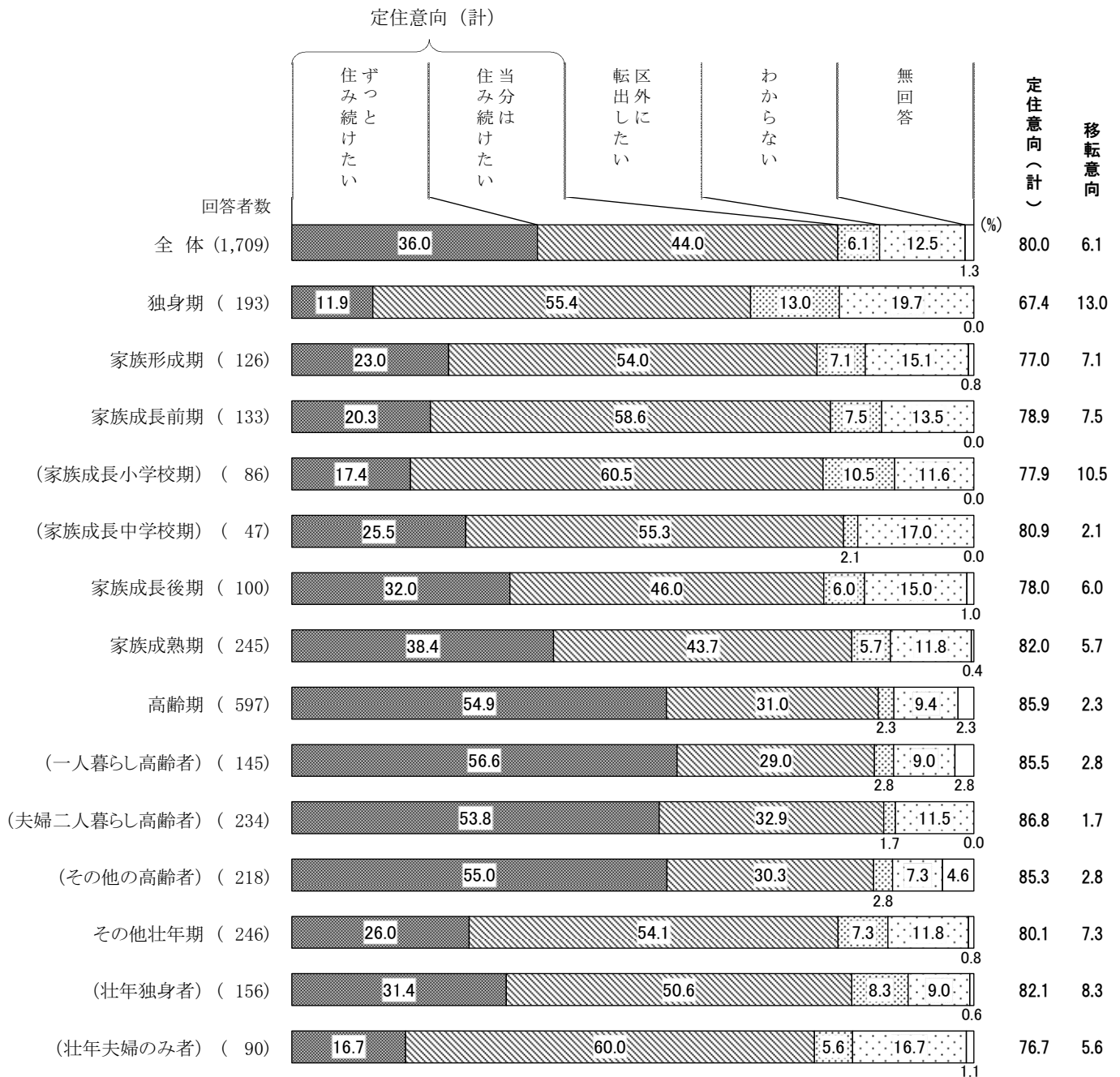
区政への満足度別にみると、満足（85.3％）とやや満足（85.2％）の区政に満足している層が8割台半ばと高く、やや不満（63.0％）と不満（62.3％）の区政に不満がある層が6割台前半と低くなっており、満足度によって定住意向の割合に差がみられる。

図1－4－5 区政満足度別／定住意向



ライフステージ別でみると、【定住意向】は〈高齢期〉が85.9%で最も高く、〈(夫婦二人暮らし高齢者)〉(86.8%)、〈(一人暮らし高齢者)〉(85.5%)、〈(その他の高齢者)〉(85.3%)の〈高齢期〉の詳細区分すべてで8割台半ばと高くなっている。一方、〈独身期〉では67.4%と最も低くなっている。

図1-4-6 ライフステージ別／定住意向



2 大震災などの災害への備え

-
- (1) 備蓄や防災用具などの用意
 - (2) 備蓄や防災用具、買い置きなどの内容
 - (3) 備蓄量
 - (4) 災害発生時の水や食料の確保
 - (5) 家具類の転倒・落下・移動防止対策
 - (6) 対策をしていない理由
 - (7) 地域の3種の避難場所とその意味の認知
 - (8) 避難場所の認知経路
 - (9) 大規模災害時の避難生活場所
 - (10) 大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいこと
-

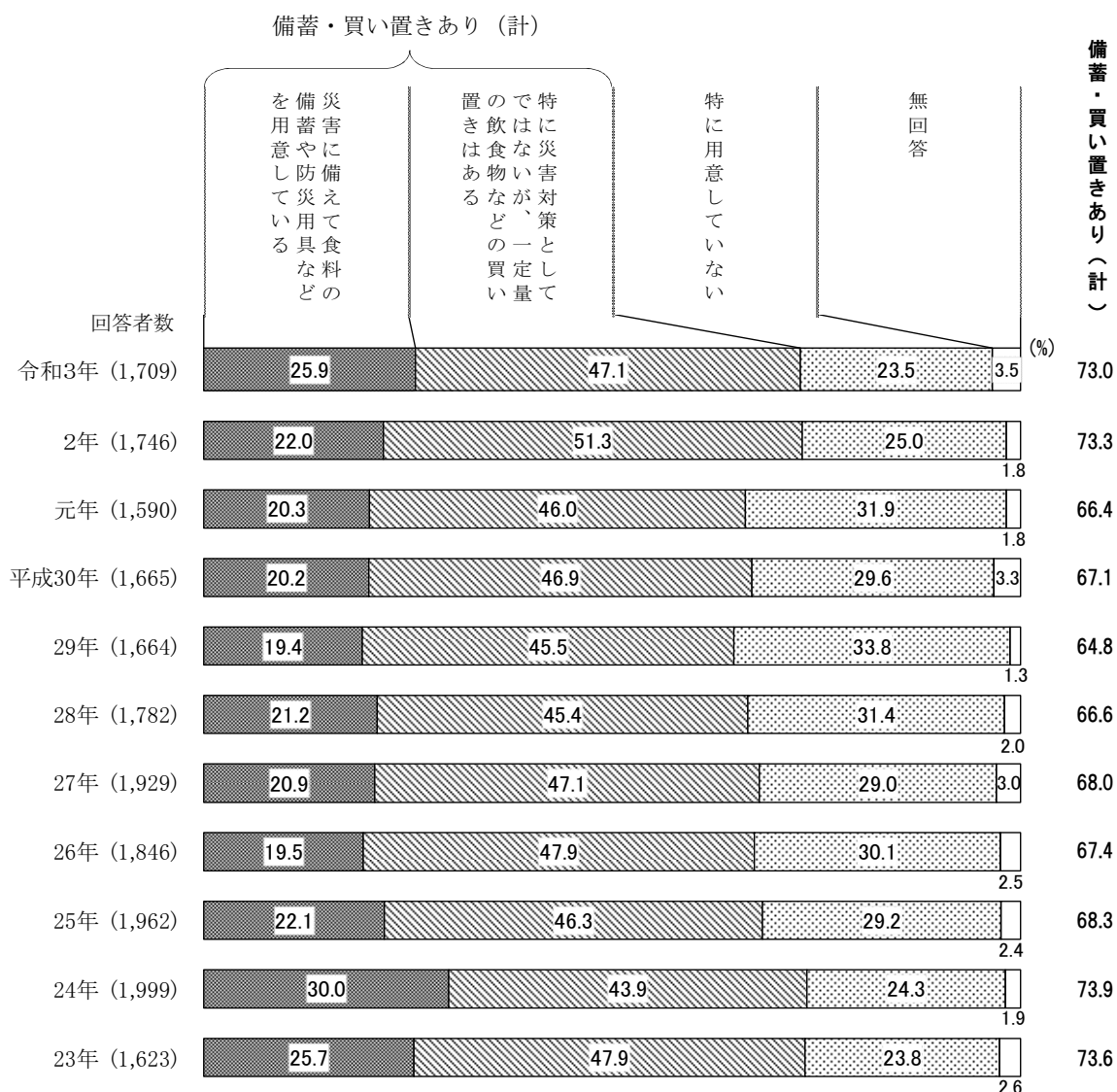
2 大震災などの災害への備え

(1) 備蓄や防災用具などの用意

■「災害に備えて食料の備蓄や防災用具などを用意している」は4人に1人の割合

問4 あなたのご家庭では、災害に備えて水や食料などの備蓄や防災用具などの用意をしていますか（○は1つだけ）。

図2-1-1 経年比較／備蓄や防災用具などの用意



災害に備えての準備状況については、「災害に備えて食料の備蓄や防災用具などを用意している」が25.9%、「特に災害対策としてではないが、一定量の飲食物などの買い置きはある」が47.1%で、両者を合わせた【備蓄・買い置きあり】は73.0%となっている。一方、「特に用意していない」は23.5%となっている。

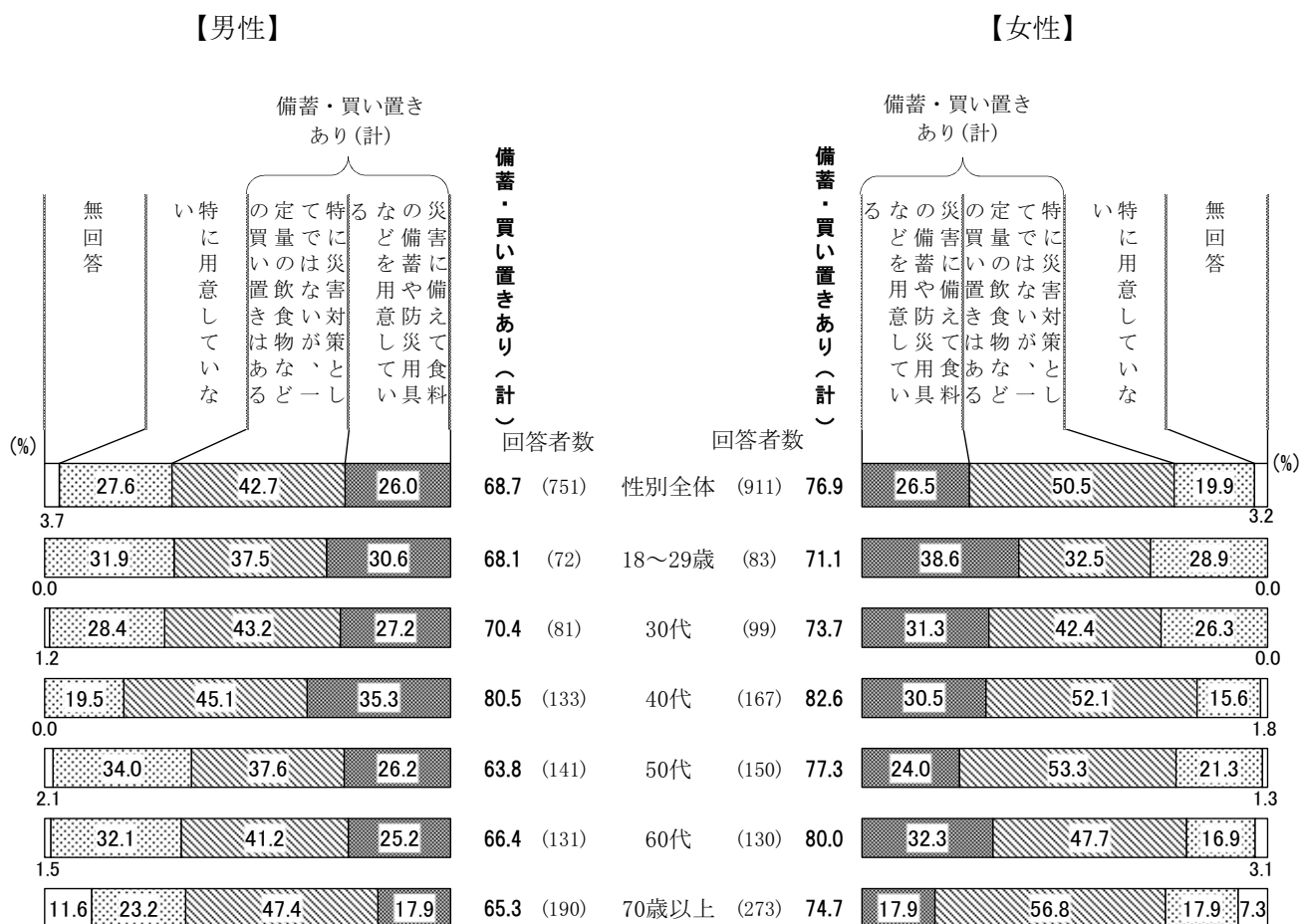
経年でみると、「災害に備えて食料の備蓄や防災用具などを用意している」は前回の令和2年調査（22.0%）から3.9ポイント増加しているが、「特に災害対策としてではないが、一定量の飲食物などの買い置きはある」を合わせた【備蓄・買い置きあり】は令和2年調査（73.3%）に比べて0.3ポイントの減少となった。

第3章 調査結果の分析〈大震災などの災害への備え〉

性別でみると、【備蓄・買い置きあり】は女性（76.9%）の方が男性（68.7%）より8.2ポイント高くなっている。

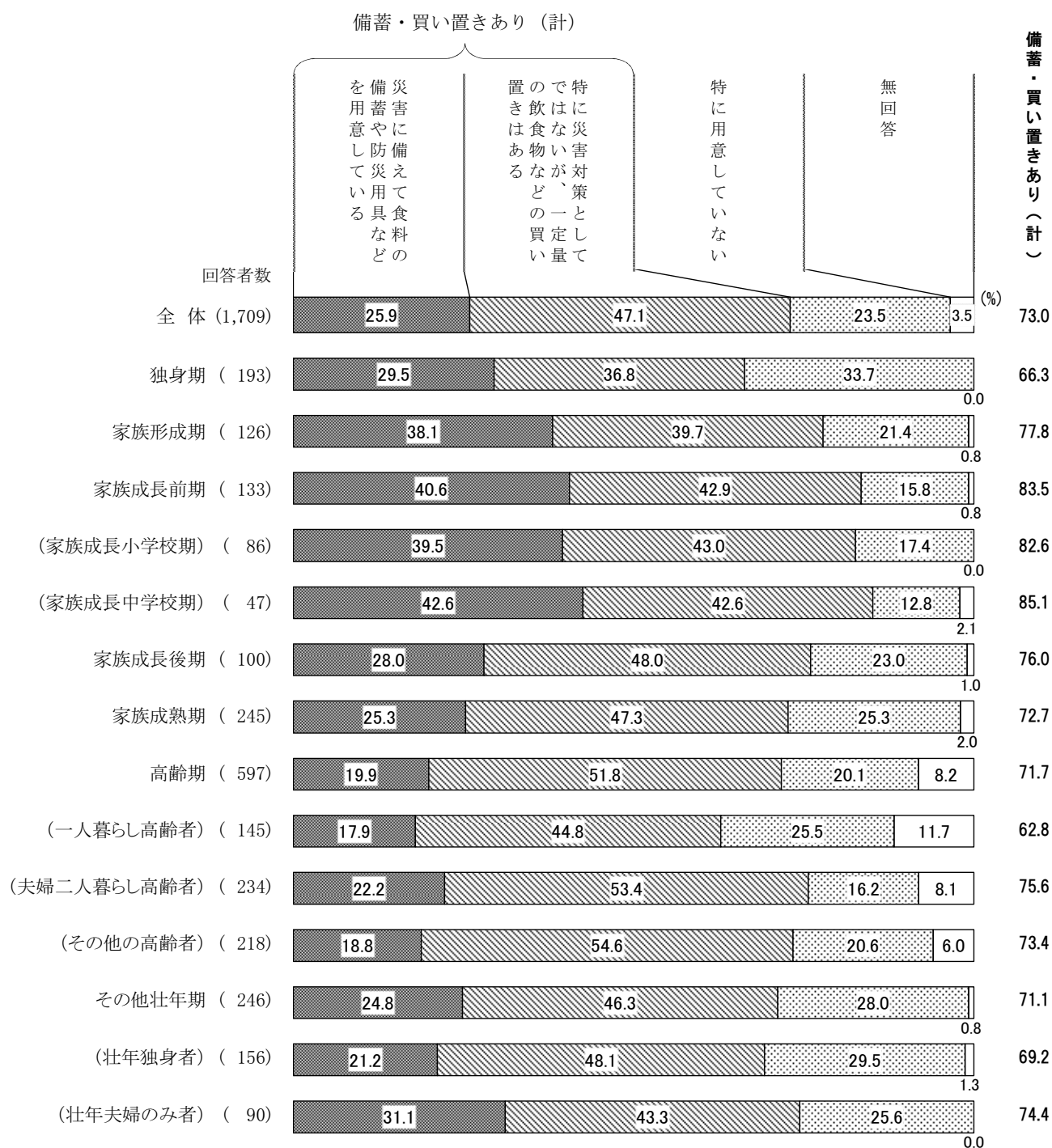
性・年代別でみると、【備蓄・買い置きあり】は、男女ともに40代（男性80.5%、女性82.6%）で最も高くなっている。「災害に備えて食料の備蓄や防災用具などを用意している」は、女性の18～29歳が38.6%で最も高く、「特に用意していない」は男性の50代が34.0%で最も高くなっている。

図2-1-2 性別、性・年代別／備蓄や防災用具などの用意



ライフステージ別でみると、【備蓄・買い置きあり】は〈家族成長前期〉で83.5%と最も高く、次いで〈家族形成期〉(77.8%)となっている。一方、〈独身期〉で66.3%と最も低いが、詳細区分では、〈(一人暮らし高齢者)〉で62.8%と最も低くなっている。

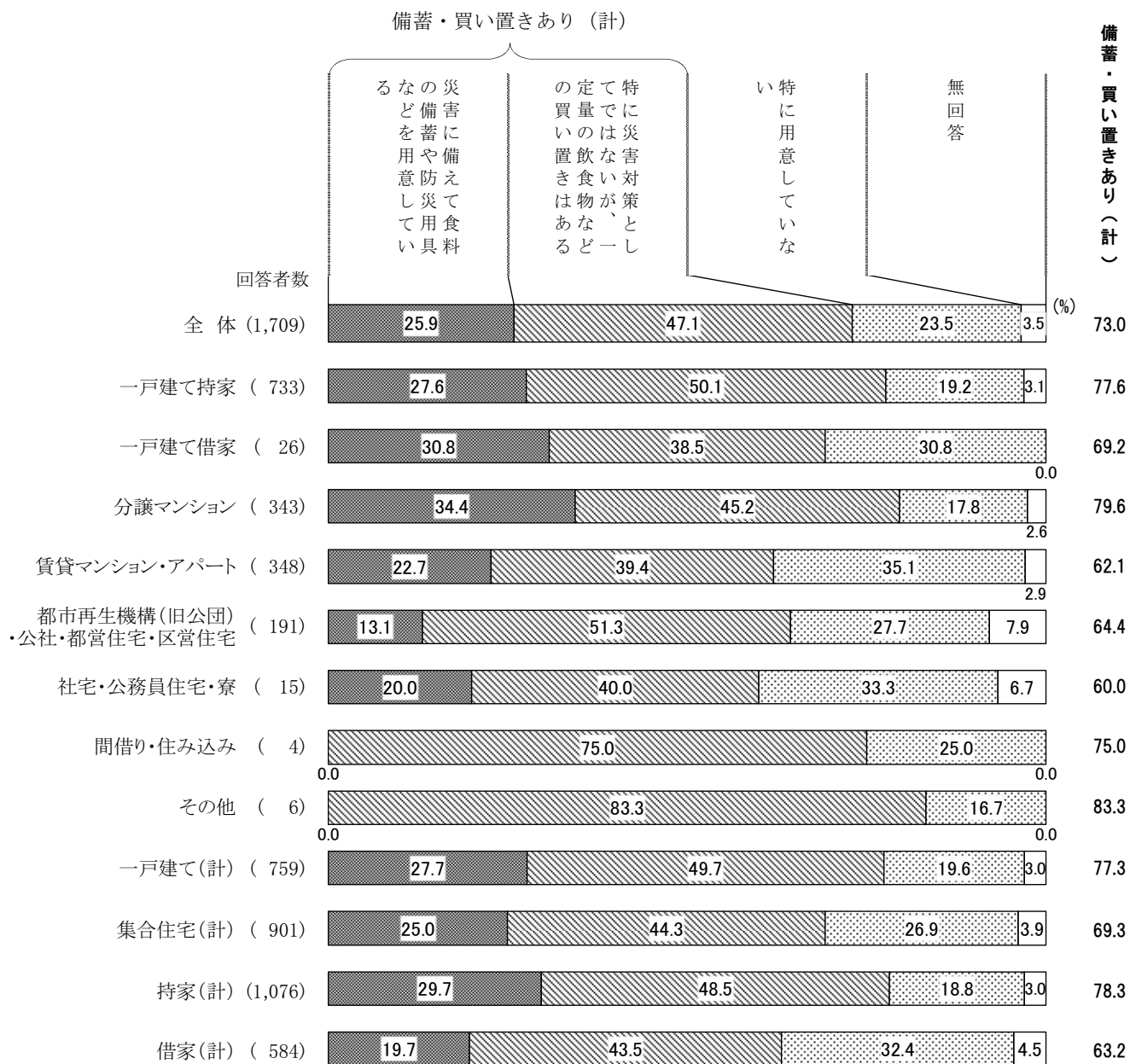
図2-1-3 ライフステージ別／備蓄や防災用具などの用意



第3章 調査結果の分析 〈大震災などの災害への備え〉

住居形態別でみると、【備蓄・買い置きあり】は〈分譲マンション〉が79.6%で最も高くなっている。住宅の戸建て集合別では、〈一戸建て（計）〉（77.3%）の方が〈集合住宅（計）〉（69.3%）より8.0ポイント高く、住宅の所有形態別では、〈持家（計）〉（78.3%）の方が〈借家（計）〉（63.2%）より15.1ポイント高くなっている。一方、「特に用意していない」は〈賃貸マンション・アパート〉が35.1%で最も高くなっている。

図2-1-4 住居形態別／備蓄や防災用具などの用意



(2) 備蓄や防災用具、買い置きなどの内容

■ 1位「水」(9割強)が前回調査から8ポイント増加、2位「食料」(9割)が10ポイント増加

問4で「1 災害に備えて～」または「2 特に災害対策としてでは～」とお答えの方に

問4-1 備蓄や防災用具、買い置きなどの内容を教えてください

(〇はあてはまるものすべて)。

図2-2-1-① 経年比較／備蓄や防災用具、買い置きなどの内容

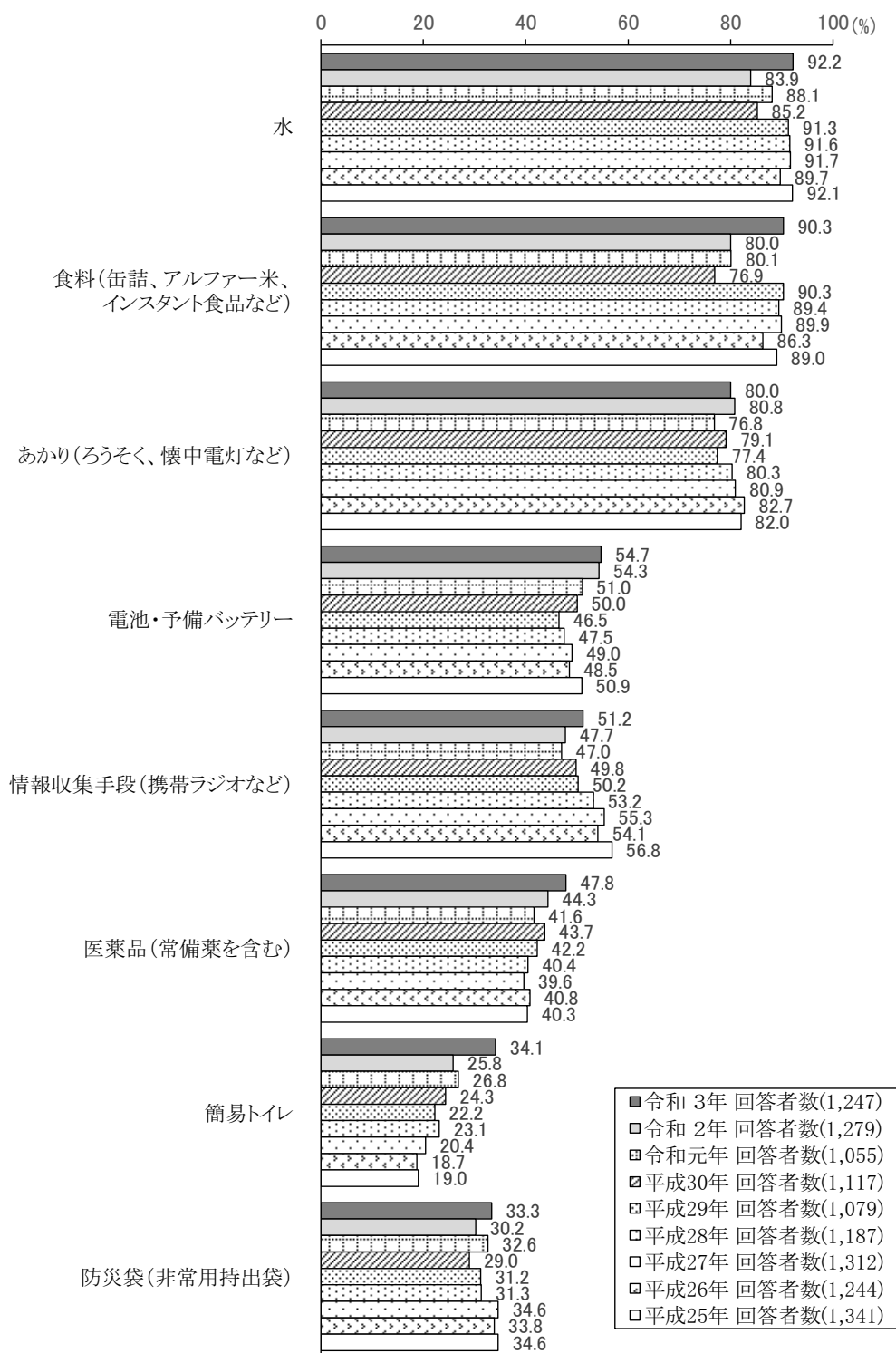


図2-2-1-② 経年比較／備蓄や防災用具、買い置きなどの内容

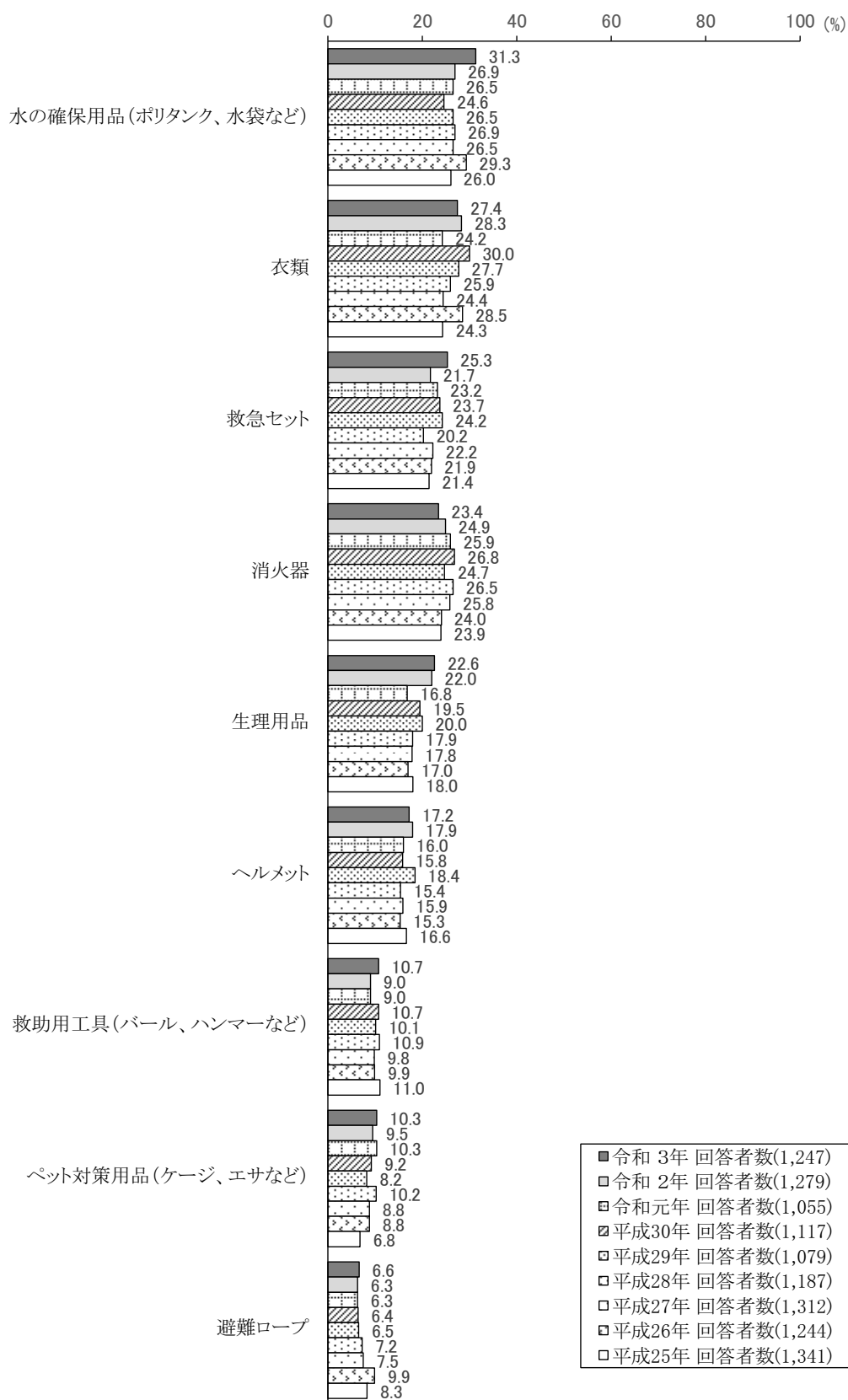
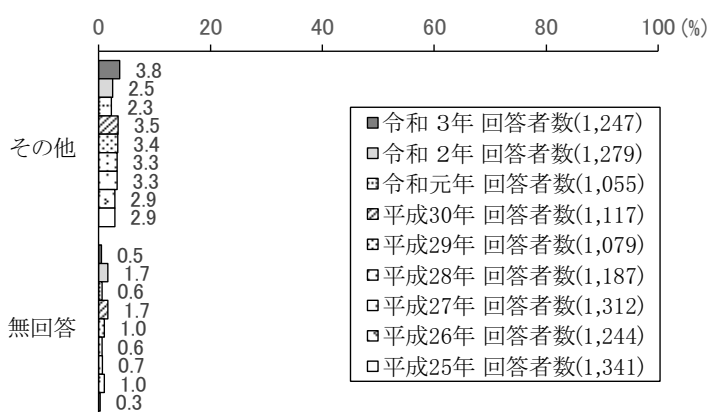


図2-2-1-③ 経年比較／備蓄や防災用具、買い置きなどの内容



【備蓄・買い置きあり】の内容は、「水」が92.2%で最も高く、以下「食料（缶詰、アルファーマイ、インスタント食品など）」（90.3%）、「あかり（ろうそく、懐中電灯など）」（80.0%）、「電池・予備バッテリー」（54.7%）、「情報収集手段（携帯ラジオなど）」（51.2%）などとなっている。

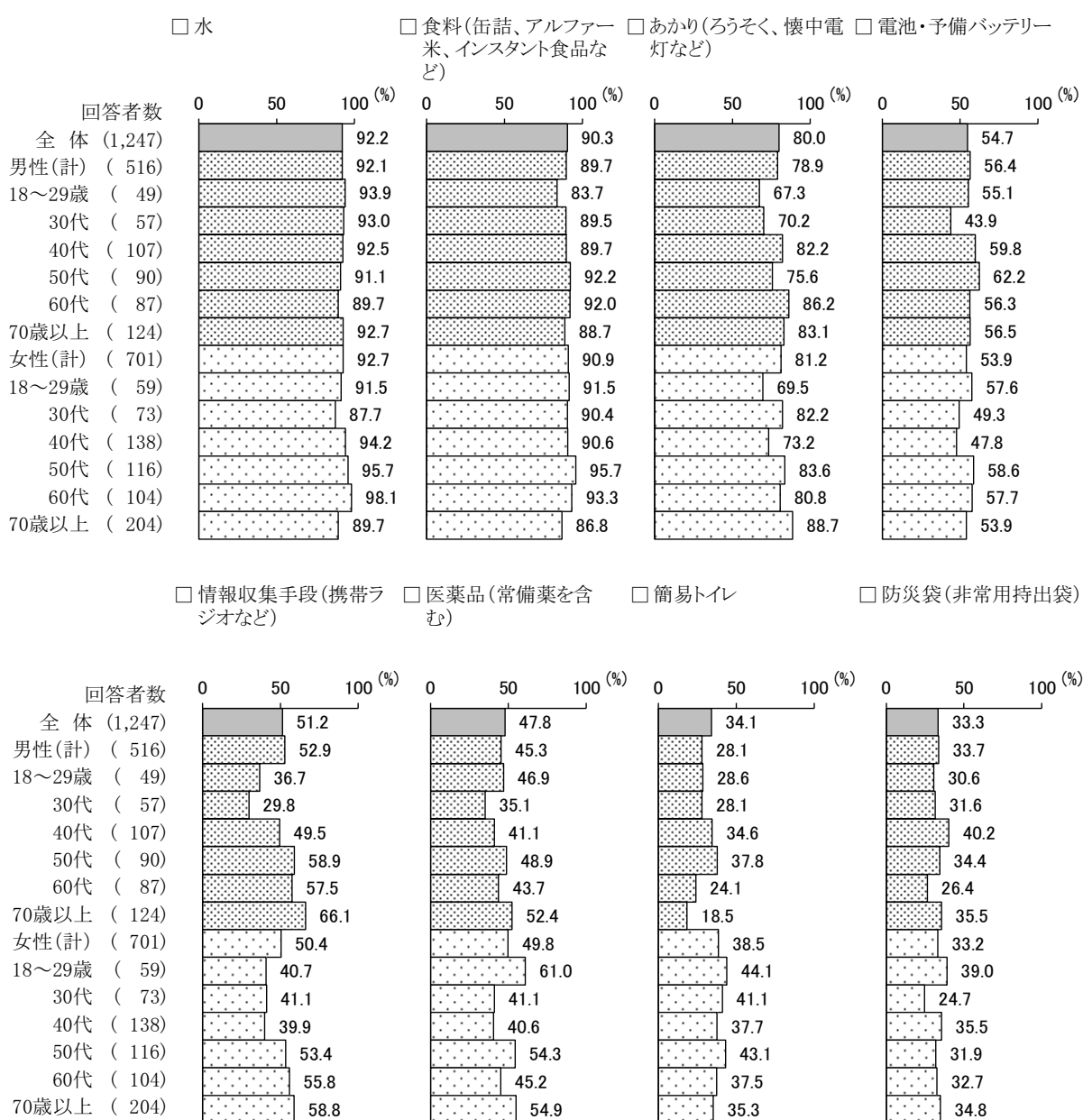
経年でみると、平成25年調査以降、「水」「食料（缶詰、アルファーマイ、インスタント食品など）」「あかり（ろうそく、懐中電灯など）」が継続して上位3項目に挙げられている。前回の令和2年調査からの増減では、「水」（83.9%→92.2%）が8.3ポイント増加、「食料（缶詰、アルファーマイ、インスタント食品など）」は（80.0%→90.3%）が10.3ポイント増加している。また、「簡易トイレ」（25.8%→34.1%）が8.3ポイント増加している。

第3章 調査結果の分析 〈大震災などの災害への備え〉

上位項目を中心に、性別でみると、上位3項目の「水」、「食料（缶詰、アルファ米、インスタント食品など）」、「あかり（ろうそく、懐中電灯など）」では男女で大きな違いはみられないが、「簡易トイレ」（女性10.4ポイント）、「医薬品（常備薬を含む）」（女性4.5ポイント）の3項目はそれぞれ女性が男性より高くなっている。

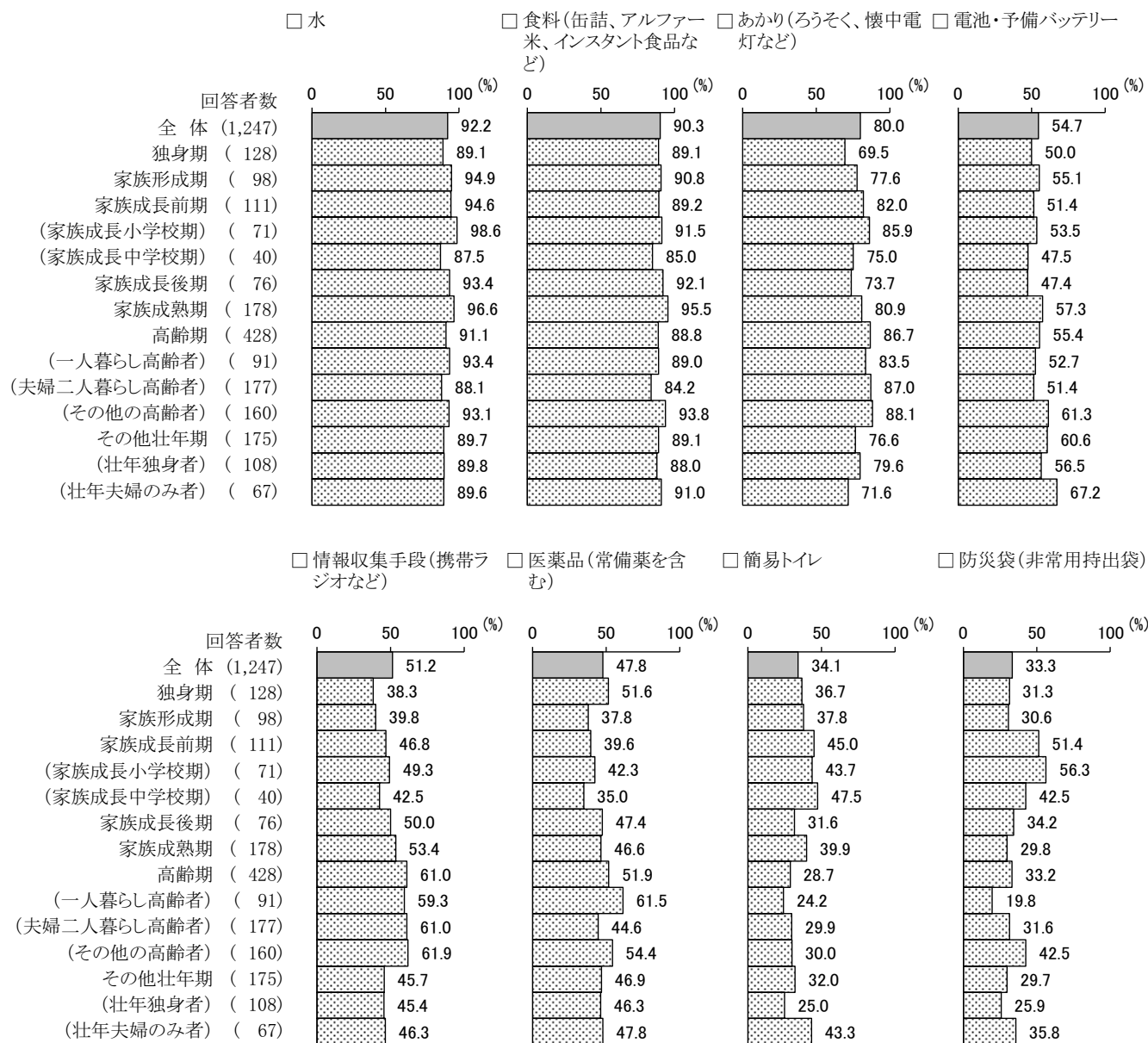
性・年代別でみると、男性では、「電池・予備バッテリー」で50代（62.2%）、「情報収集手段（携帯ラジオなど）」で70歳以上（66.1%）が最も高く、女性では上位3項目の「水」は60代（98.1%）、「食料（缶詰、アルファ米、インスタント食品など）」は50代（95.7%）、「あかり（ろうそく、懐中電灯など）」は70歳以上（88.7%）で最も高くなっている。

図2-2-2 性別、性・年代別／備蓄や防災用具、買い置きなどの内容／上位8項目



ライフステージ別にみると、詳細区分を除いたところでは、「食料（缶詰、アルファ米、インスタント食品など）」は〈家族成熟期〉（95.5%）、「あかり（ろうそく、懐中電灯など）」は〈高齢期〉（86.7%）、「情報収集手段（携帯ラジオなど）」も〈高齢期〉（61.0%）が他のステージに比べて高くなっている。

図2-2-3 ライフステージ別／備蓄や防災用具、買い置きなどの内容／上位8項目



(3) 備蓄量

■「水」と「食料」の【3日分以上の備蓄あり】はともに約4割

問4-1で「1 水」または「2 食料」とお答えの方に

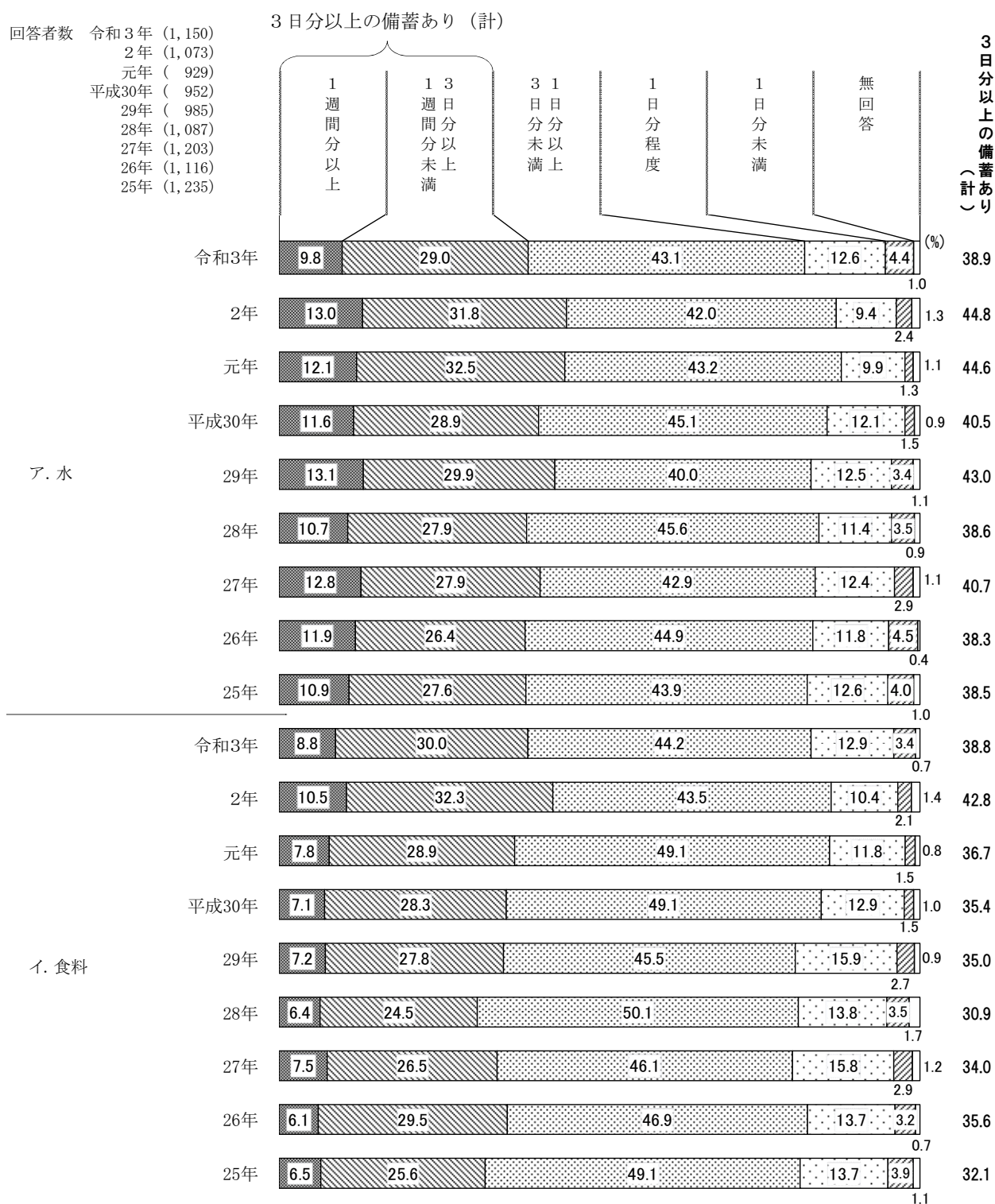
問4-1-1 あなたのご家庭では、「水」と「食料」の備蓄の量はどれくらいありますか。

「水」「食料」いずれかの備蓄がない場合は、その項目についての回答は不要です

(○はそれぞれ1つずつ)

※ 水は大人1人1日3リットルで計算。水、食料は日常の買い置きなどを含みます。

図2-3-1 経年比較／備蓄量



「水」の備蓄量については「1日分以上3日分未満」が43.1%で最も多く、次いで「3日分以上1週間分未満」(29.0%)となっている。「食料(缶詰、アルファーマ、インスタント食品など)」の備蓄量についても「1日分以上3日分未満」が44.2%で最も多く、次いで「3日分以上1週間分未満」(30.0%)となっている。また、「3日分以上1週間分未満」と「1週間分以上」を合わせた【3日分以上の備蓄あり】は「水」(38.9%)と「食料(缶詰、アルファーマ、インスタント食品など)」(38.8%)がほぼ同じ割合となっている。

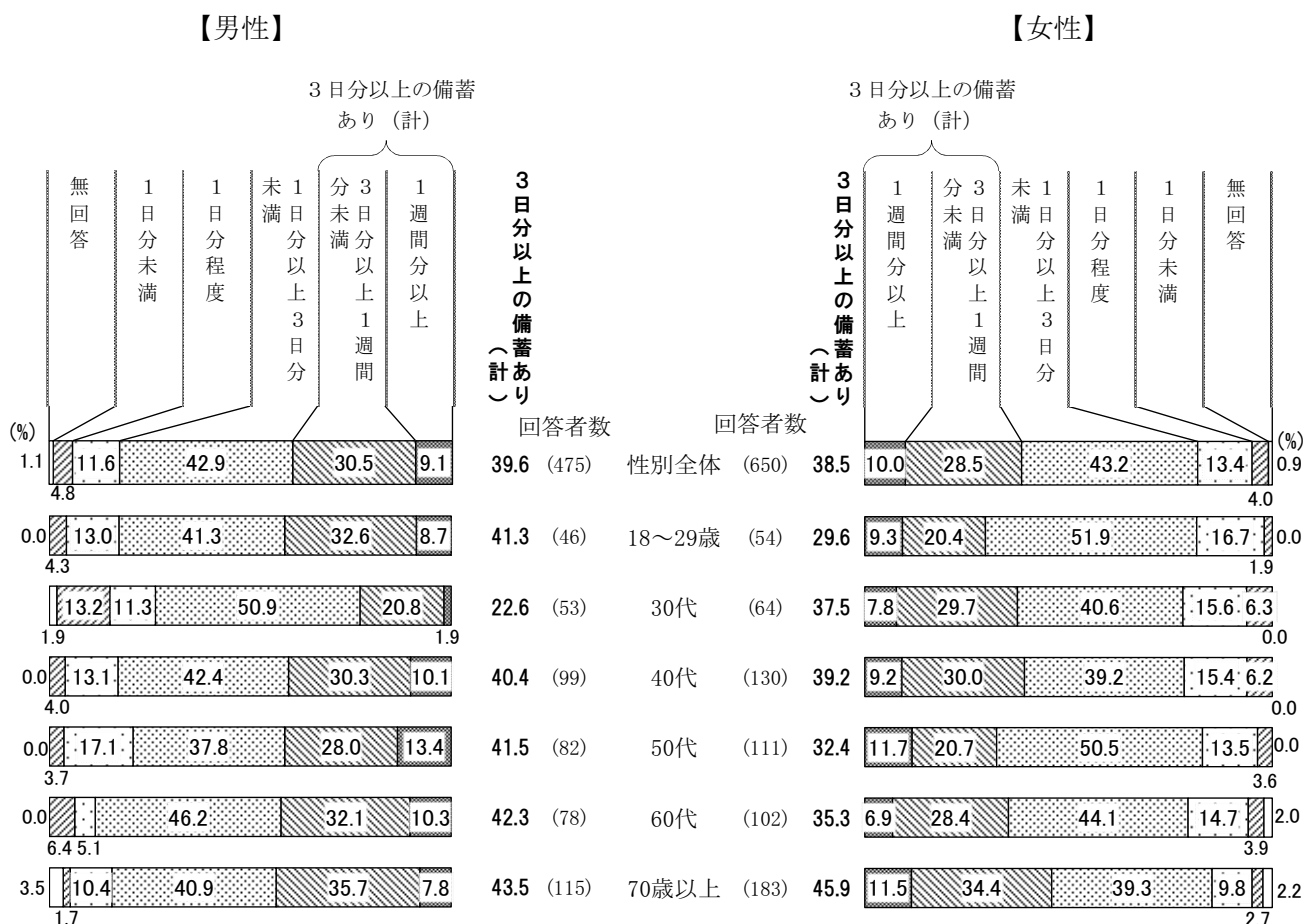
経年で【3日分以上の備蓄あり】をみると、「水」は前回の令和2年調査(44.8%)に比べて5.9ポイント減少し、「食料(缶詰、アルファーマ、インスタント食品など)」も4.0ポイント減少している。

第3章 調査結果の分析〈大震災などの災害への備え〉

「水」の備蓄量を性別でみると、男女で大きな違いはみられない。

性・年代別で【3日分以上の備蓄あり】をみると、女性の70歳以上が45.9%で最も高く、次いで男性の70歳以上（43.5%）となっている。逆に、男性の30代が22.6%で最も低くなっている。また、「1日分未満」は、男性の30代が13.2%で最も高く、「1日分程度」は男性の50代（17.1%）、女性の18～40代で1割台半ばを超える。

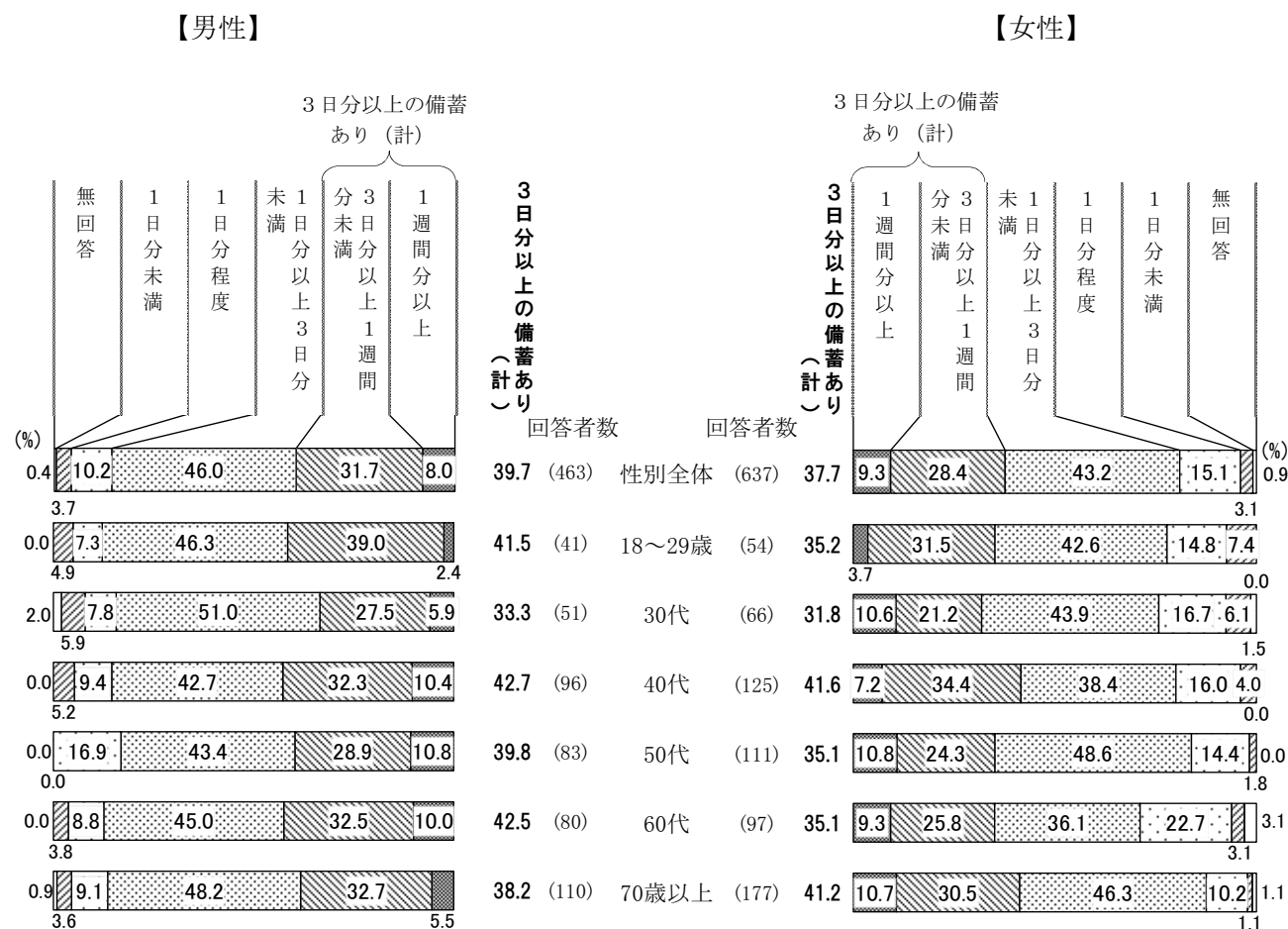
図2-3-2-① 性別、性・年代別／備蓄量／水



「食料」の備蓄量を性別でみると、【3日分以上の備蓄あり】では特に大きな差はないが、「1日分程度」では、女性（15.1%）の方が男性（10.2%）より4.9ポイント高くなっている。

性・年代別で【3日分以上の備蓄あり】をみると、男性の40代が42.7%で最も高く、次いで男性の60代（42.5%）となっている。「1日分程度」をみると、女性の60代が22.7%と最も高くなっている。

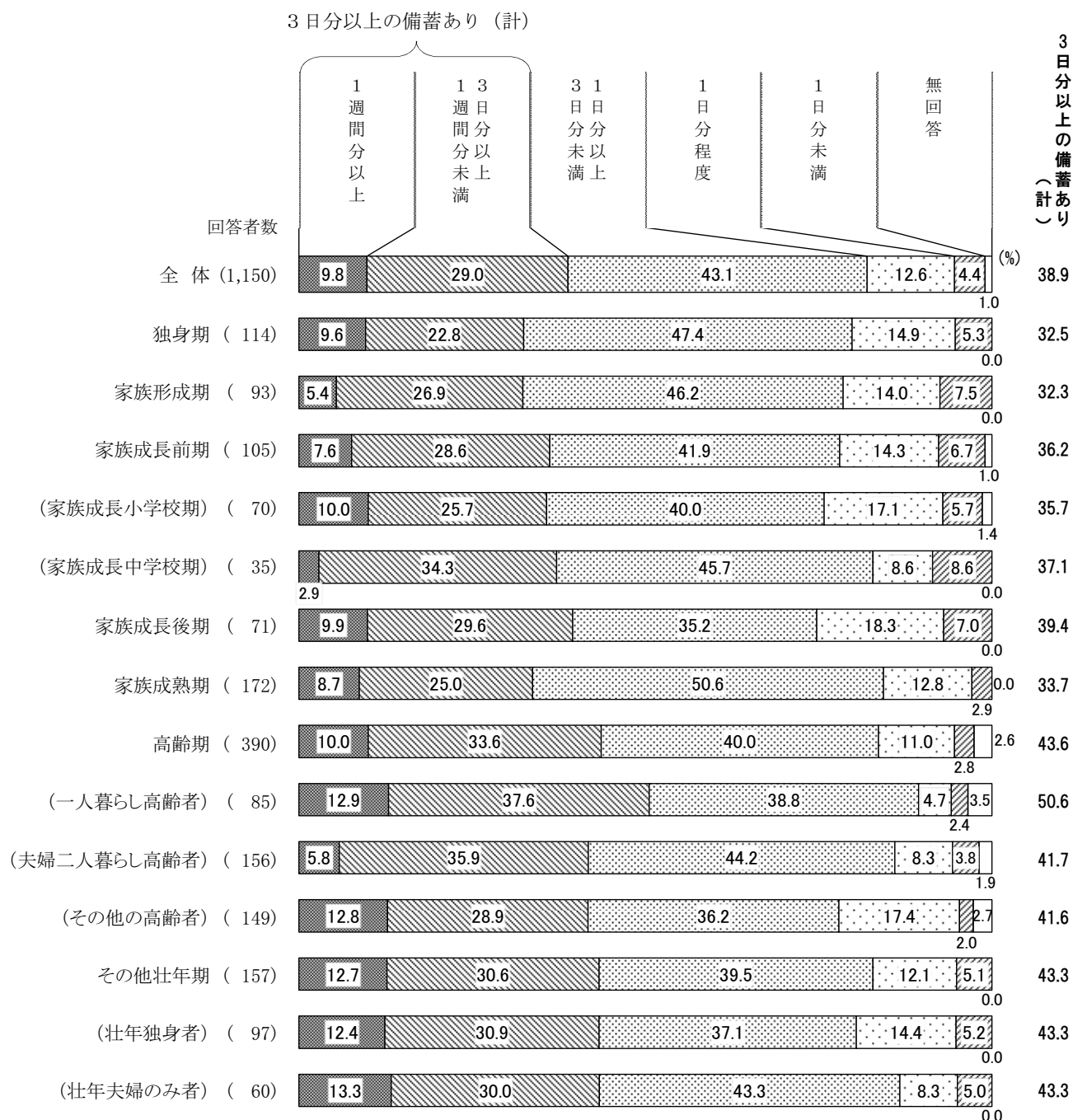
図2-3-2-② 性別、性・年代別／備蓄量／食料



第3章 調査結果の分析 〈大震災などの災害への備え〉

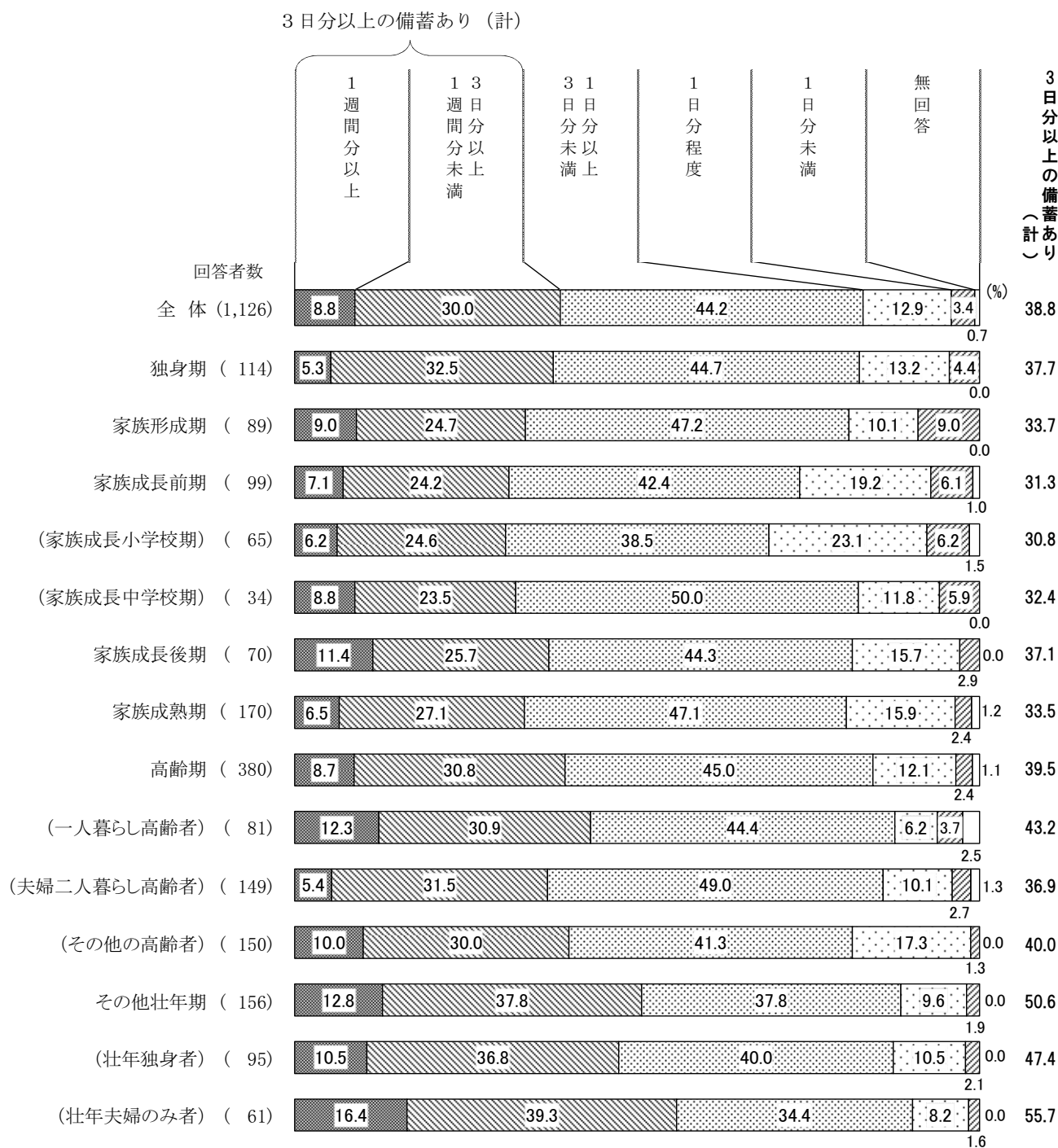
「水」の備蓄量をライフステージ別でみると、【3日分以上の備蓄あり】は〈高齢期〉(43.6%)が最も高く、次いで、〈その他壮年期〉(43.3%)となっている。詳細区分でみると、〈(一人暮らし高齢者)〉が50.6%と特に高くなっている。逆に〈家族形成期〉が32.3%で最も低くなっている。

図2-3-3-① ライフステージ別／備蓄量／水



「食料」の備蓄量をライフステージ別にみると、【3日分以上の備蓄あり】は〈その他壮年期〉（50.6%）が最も高く、次いで、〈高齢期〉（39.5%）となっている。詳細区分でみると、〈（壮年夫婦のみ者）〉が55.7%と特に高くなっている。逆に〈（家族成長小学校期）〉が30.8%で最も低くなっている。

図2-3-3-② ライフステージ別／備蓄量／食料



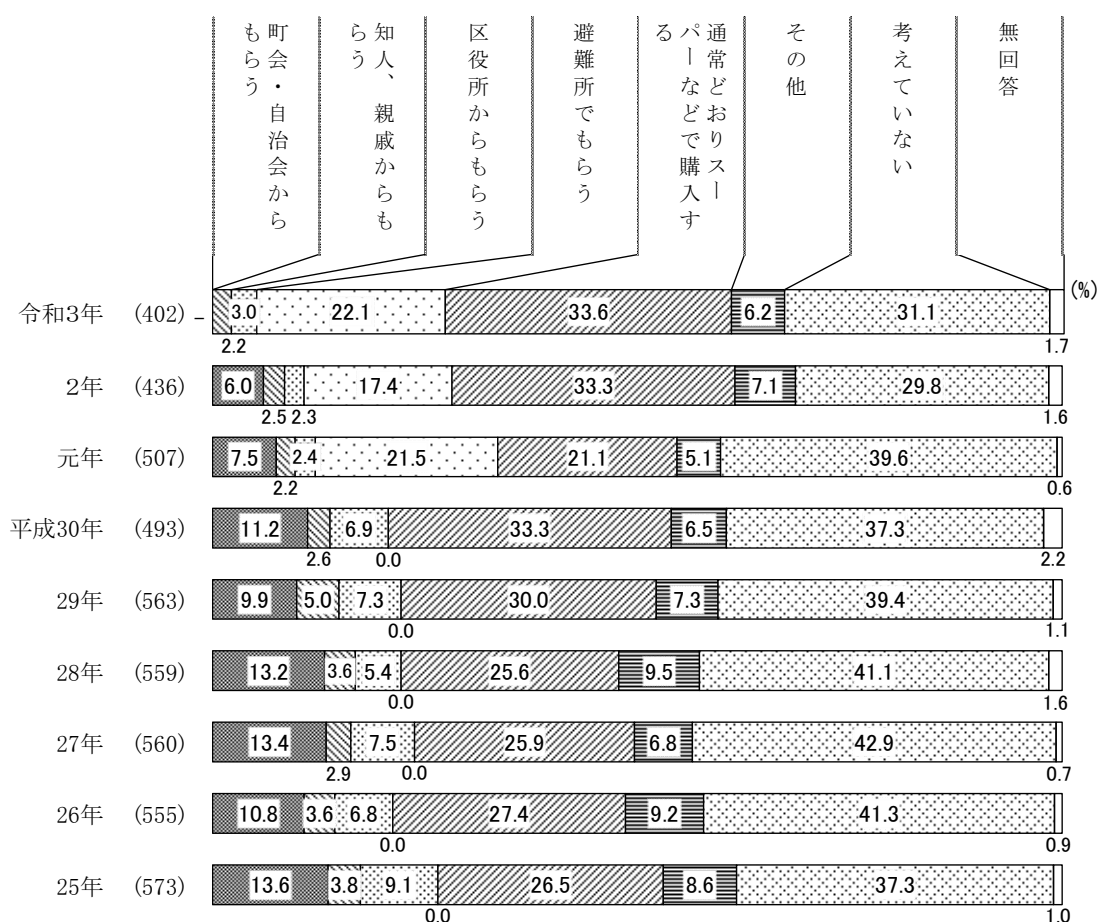
(4) 災害発生時の水や食料の確保

■「スーパーなどで購入」が3割台半ば近くで、「考えていない」(3割強)を上回っている

問5は、問4で「3 特に用意していない」とお答えの方におうかがいします

問5 災害が発生した場合、水や食料をどのようにして確保するつもりですか(○は1つだけ)。

図2-4-1 経年比較／災害発生時の水や食料の確保



※「町会・自治会からもらう」は、今回の令和3年度から削除。

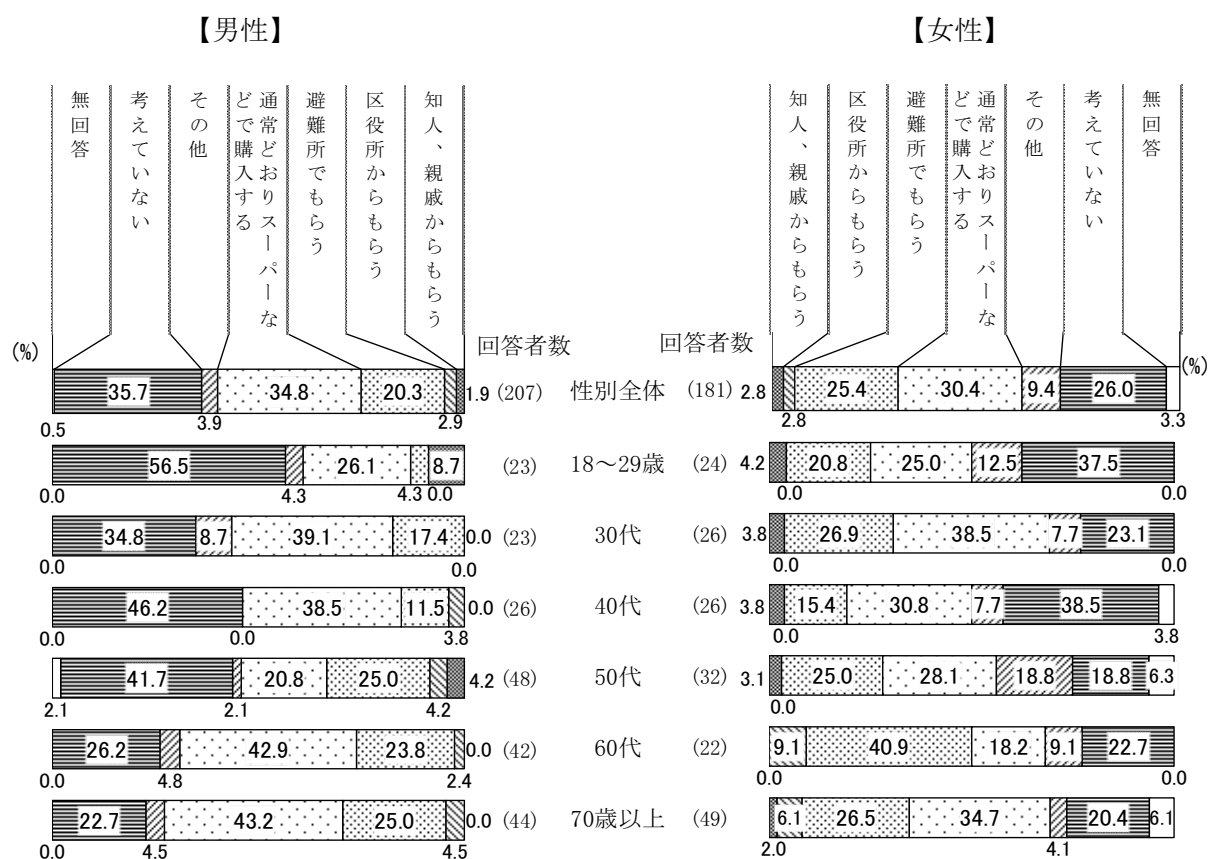
備蓄や防災用具などを「特に用意していない」という人に、災害発生時の水や食料の確保について聞いたところ、「通常どおりスーパーなどで購入する」が33.6%と最も高く、次いで「考えていない」(31.1%)、「避難所でもらう」(22.1%) などとなっている。

前回の令和2年調査との比較でみると、「避難所でもらう」が前回調査(17.4%)に比べて今回調査(22.1%)で4.7ポイント増加しているが、他の項目では特に大きな違いがないことから、今回調査で選択肢から削除した「町会・自治会からもらう」(前回調査で6.0%)の代替になったと考えられる。

性別でみると、「考えていない」は男性（35.7%）の方が女性（26.0%）より9.7ポイント高く、「通常どおりスーパーなどで購入する」でも男性（34.8%）の方が女性（30.4%）より4.4ポイント高くなっている。一方、「避難所でもらう」は女性（25.4%）の方が男性（20.3%）より5.1ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、40代以下でサンプル数が少ないことからあくまで参考値ながら、「考えていない」は男女とも18～29歳と40代で他の年齢層に較べて高くなっている。

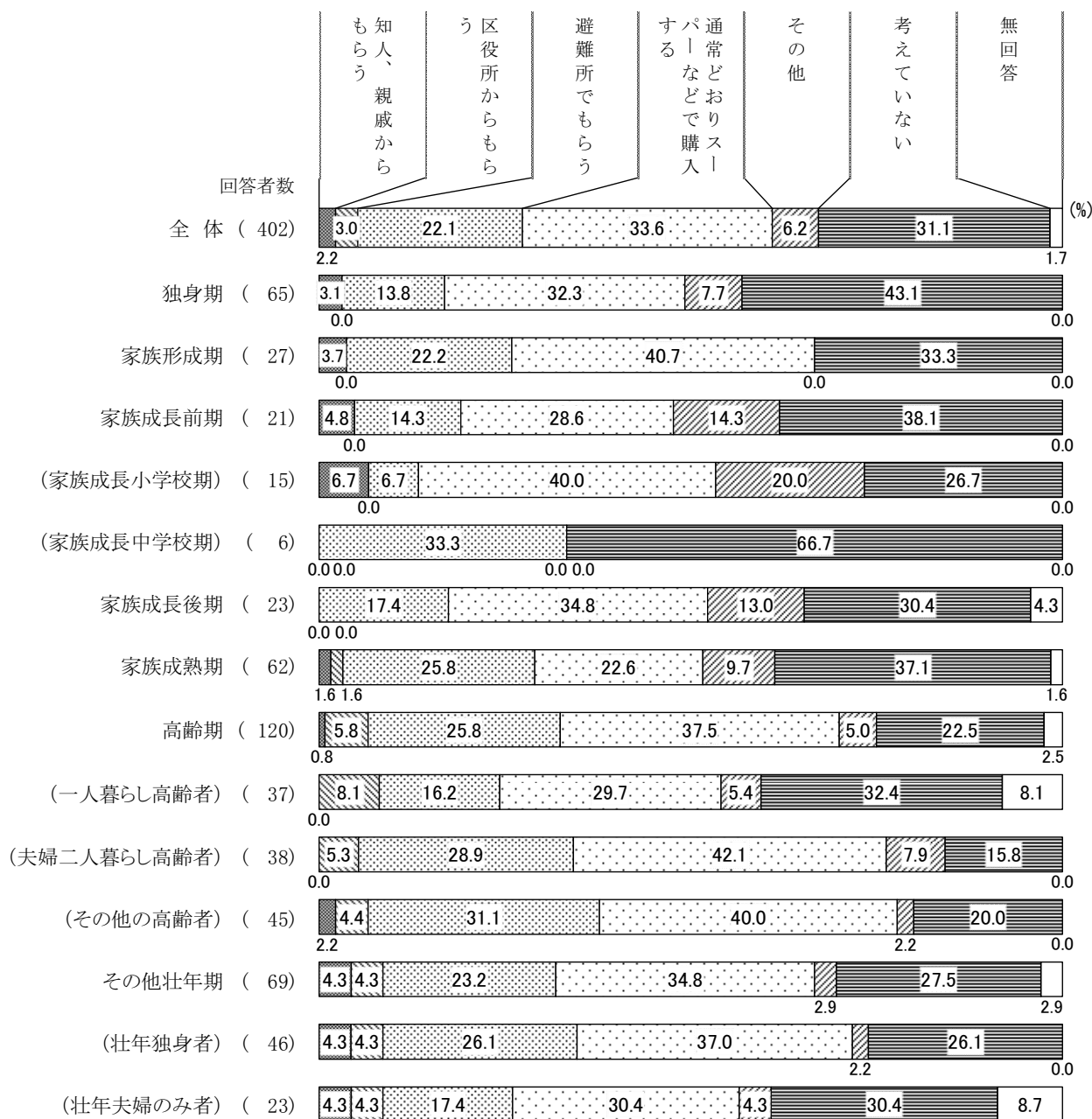
図2-4-2 性別、性・年代別／災害発生時の水や食料の確保



第3章 調査結果の分析 〈大震災などの災害への備え〉

ライフステージ別でみると、〈家族形成期〉、〈家族成長前期〉、〈家族成長後期〉でサンプル数が少ないことからあくまで参考値ながら、「考えていない」は〈独身期〉で高く、「避難所でもらう」は〈家族成熟期〉、〈高齢期〉で高くなっている。

図2-4-3 ライフステージ別／災害発生時の水や食料の確保



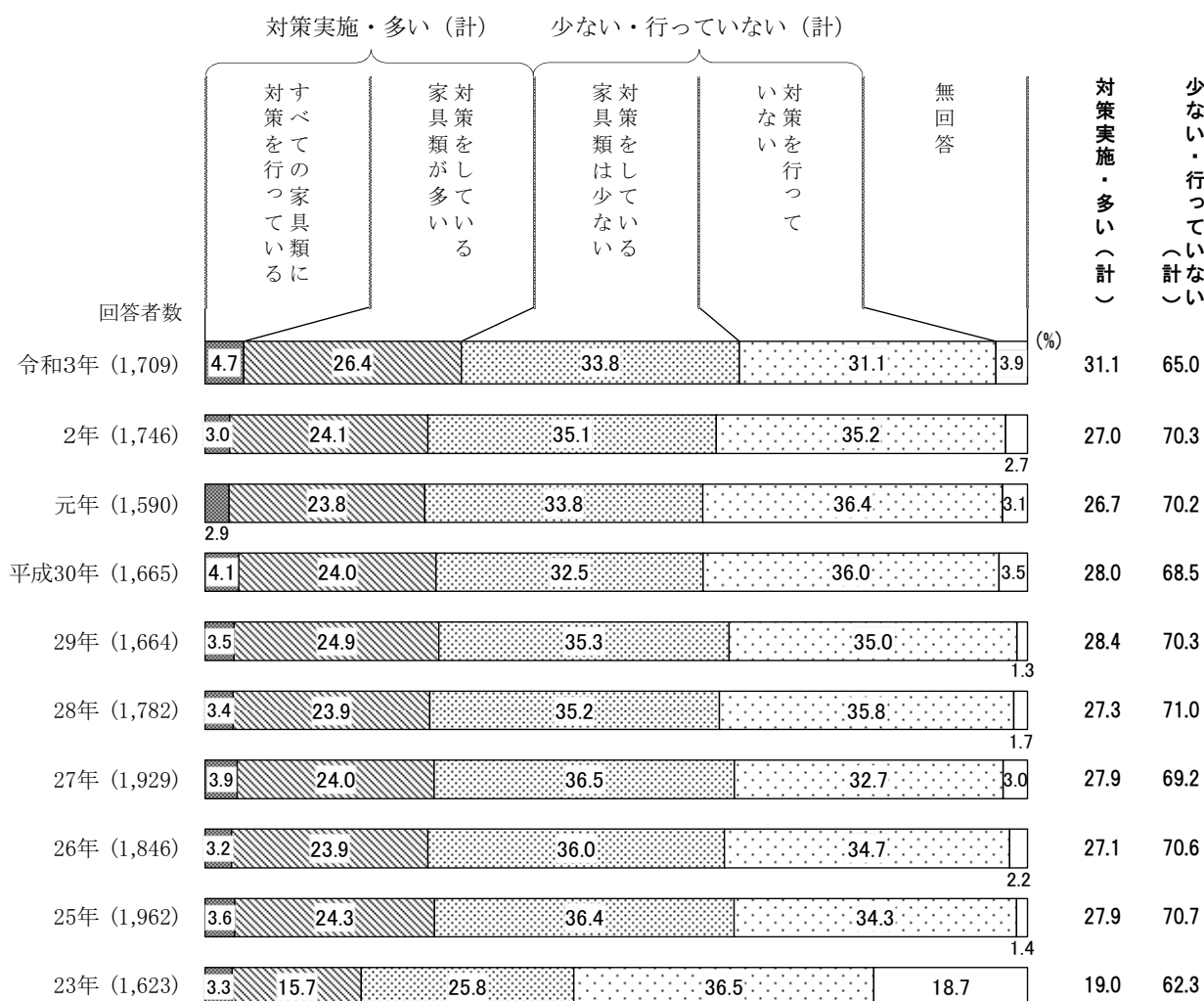
(5) 家具類の転倒・落下・移動防止対策

■【対策実施・多い】が初めて3割台

問6 あなたのご家庭では、つっぱり棒や壁止め金具などにより家具類(※)の転倒・落下・移動防止対策を行っていますか(○は1つだけ)。

※ 家具類とは、タンス、食器棚、冷蔵庫、電子レンジ、ピアノ、本棚、テレビ、パソコン機器などを指します。

図2-5-1 経年比較／家具類の転倒・落下・移動防止対策



家具類の転倒・落下・移動防止対策については、「すべての家具類に対策を行っている」は4.7%で、これに「対策をしている家具類が多い」の26.4%を合わせた【対策実施・多い】は31.1%となった。一方、「対策をしている家具類は少ない」は33.8%、「対策を行っていない」は31.1%で、両者を合わせた【少ない・行っていない】は65.0%となっている。

経年でみると、【対策実施・多い】は平成25年以降各年2割台後半で横ばいが続いていたが、今回調査で初めて3割台となった。

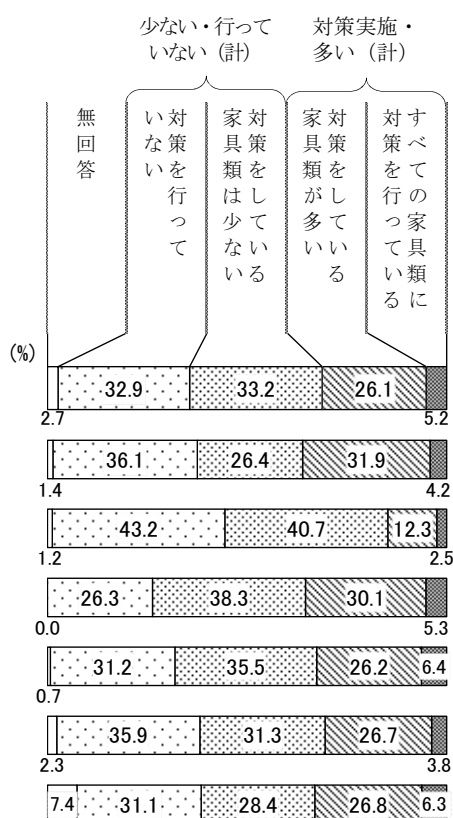
第3章 調査結果の分析 〈大震災などの災害への備え〉

性別では、特に大きな違いはみられない。

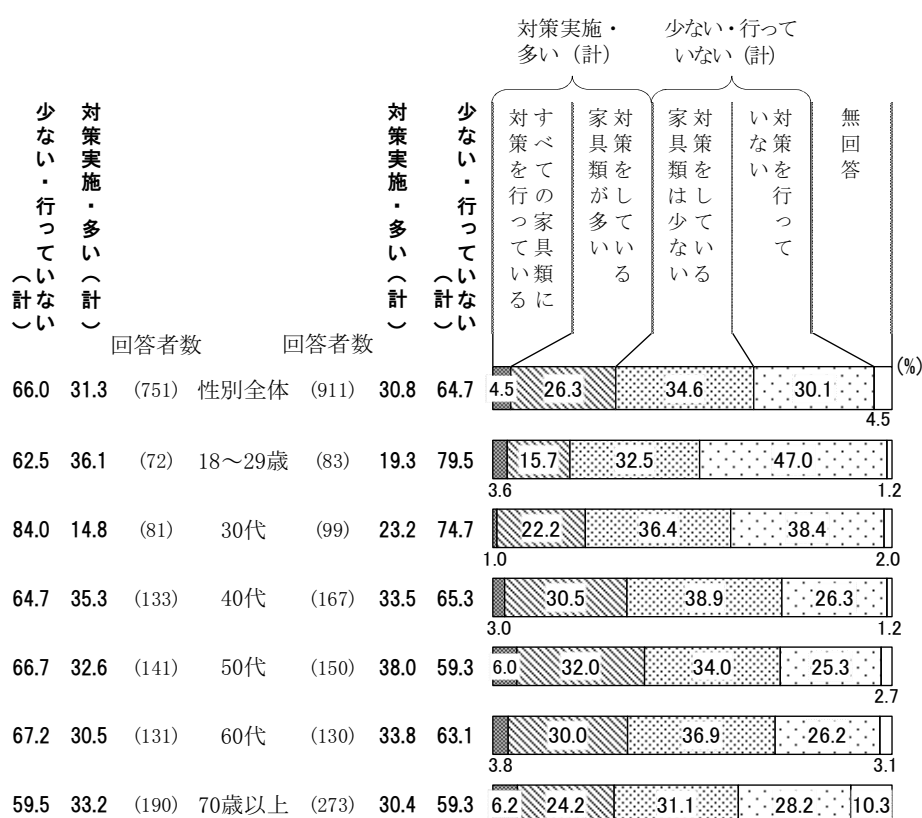
性・年代別でみると、【対策実施・多い】は、女性の50代（38.0%）で最も高く、男性の30代（14.8%）で特に低くなっている。一方【少ない・行っていない】は、男性の30代（84.0%）で最も高く、男性の70歳以上（59.5%）、女性の50代と70歳以上（各59.3%）で5割台と低くなっている。

図2-5-2 性別、性・年代別／家具類の転倒・落下・移動防止対策

【男性】

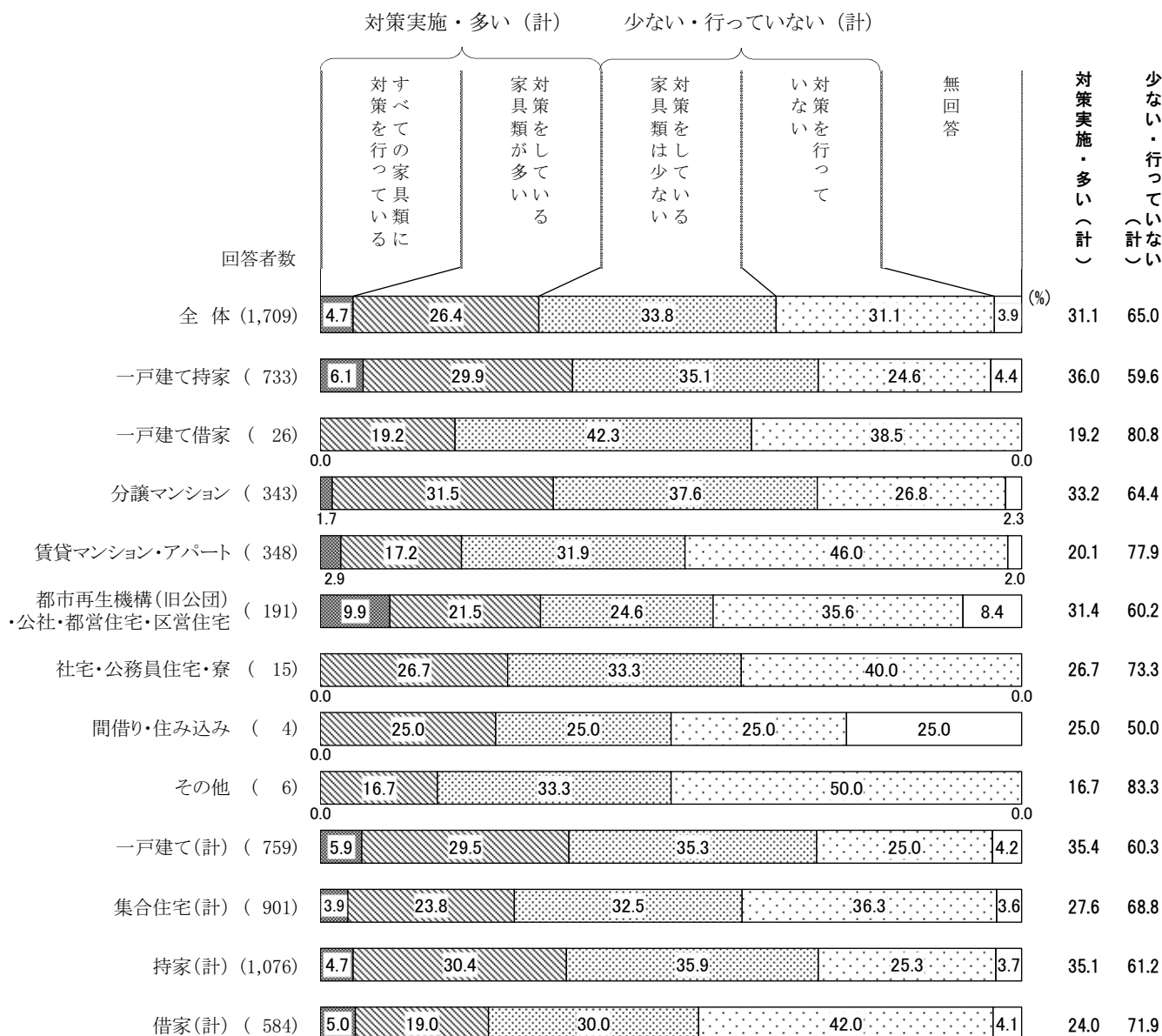


【女性】



住居形態別に【対策実施・多い】を住宅の戸建て集合別にみると、〈一戸建て（計）〉（35.4%）の方が〈集合住宅（計）〉（27.6%）より7.8ポイント高く、住宅の所有形態別にみると、〈持家（計）〉（35.1%）の方が〈借家（計）〉（24.0%）より11.1ポイント高くなっている。

図2-5-3 住居形態別／家具類の転倒・落下・移動防止対策



※ 「一戸建て借家」「社宅・公務員住宅・寮」「間借り・住み込み」「その他」は、サンプル数が少ないため参考値。

(6) 対策をしていない理由

■「面倒である」、「危険な家具類なく不要」、「壁をキズつけたくない」がともに2割台半ば

問6で「3 対策をしている家具類は少ない」または「4 対策を行っていない」とお答えの方に
問6—1 どのような理由からですか（〇はあてはまるものすべて）。

図2-6-1-① 経年比較／対策をしていない理由

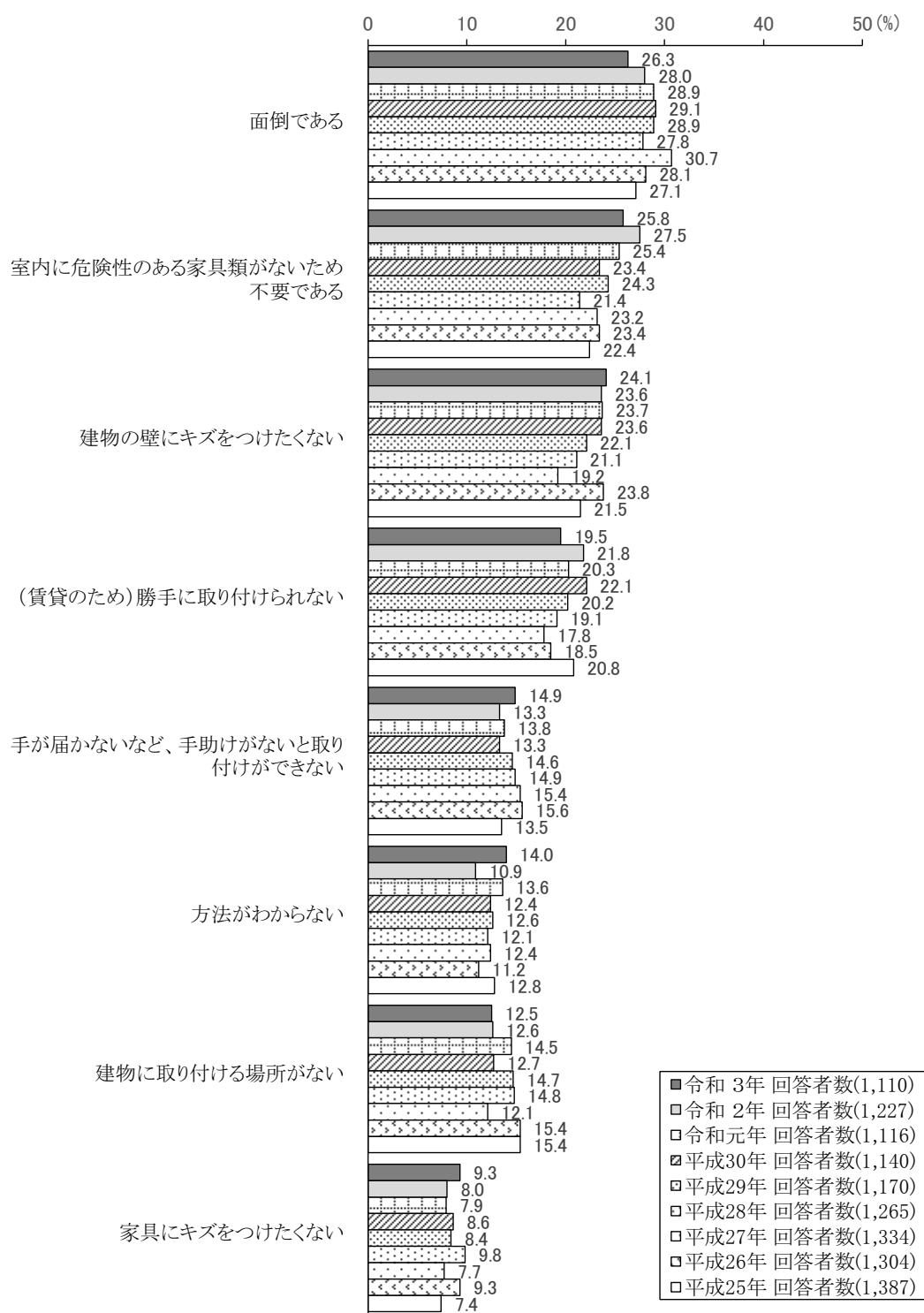
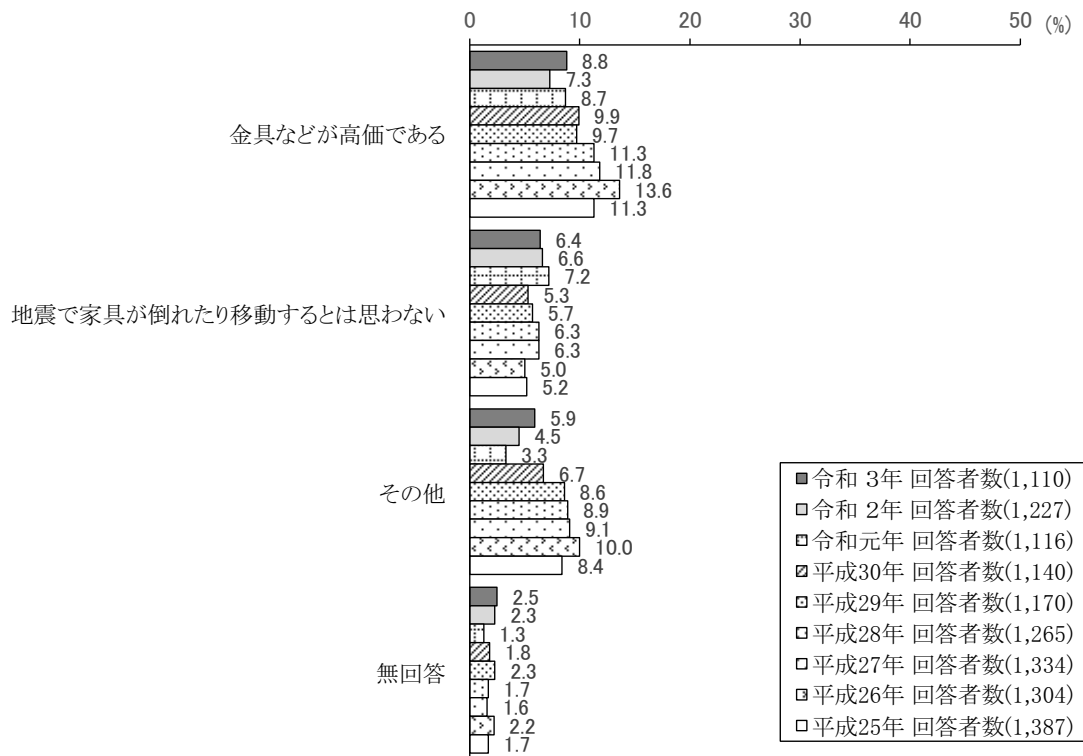


図2-6-1-② 経年比較／対策をしていない理由



家具類への対策を【少ない・行っていない】という人にその理由を聞いたところ、「面倒である」が26.3%で最も高いが、「室内に危険性のある家具類がないため不要である」が25.8%の僅差で続き、以下「建物の壁にキズをつけたくない」(24.1%)、「(賃貸のため)勝手に取り付けられない」(19.5%) などとなっている。

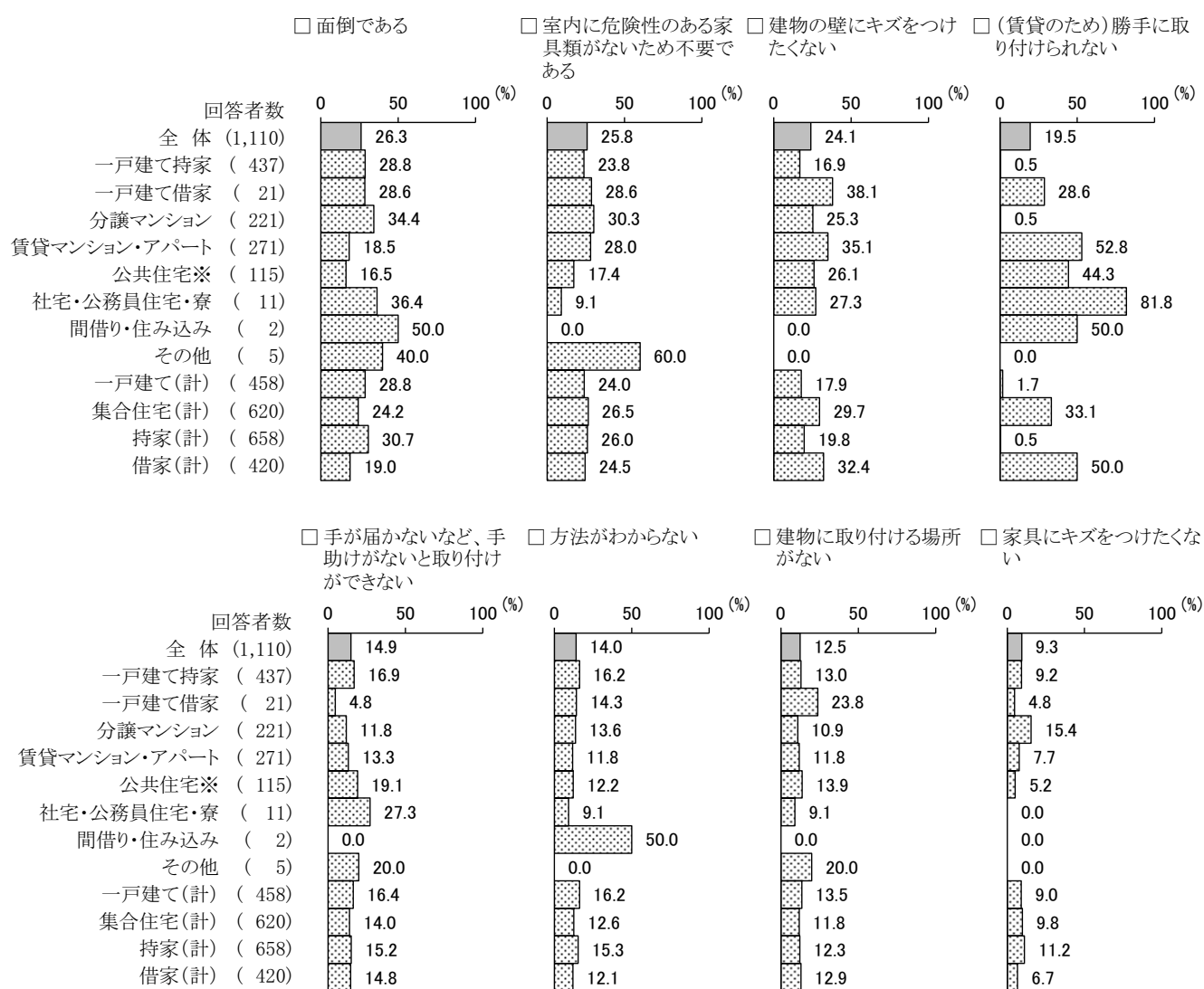
経年でみると、上位項目の順位に変動はみられず、数値にも大きな変動はみられない。

第3章 調査結果の分析 〈大震災などの災害への備え〉

対策をしていない理由を住宅の戸建て集合別にみると、「面倒である」は〈一戸建て（計）〉（28.8％）の方が〈集合住宅（計）〉（24.2％）より4.6ポイント高く、「建物の壁にキズをつけたくない」は〈集合住宅（計）〉（29.7％）の方が〈一戸建て（計）〉（17.9％）より11.8ポイント高くなっている。

対策をしていない理由を住宅の所有形態別にみると、「面倒である」は〈持家（計）〉（30.7％）の方が〈借家（計）〉（19.0％）より11.7ポイント高く、「建物の壁にキズをつけたくない」は〈借家（計）〉（32.4％）の方が〈持家（計）〉（19.8％）より12.6ポイント高くなっている。

図2-6-2 住居形態別／対策をしていない理由／上位8項目



※「公共住宅」とは、都市再生機構（旧公団）・公社・都営住宅・区営住宅のこと。

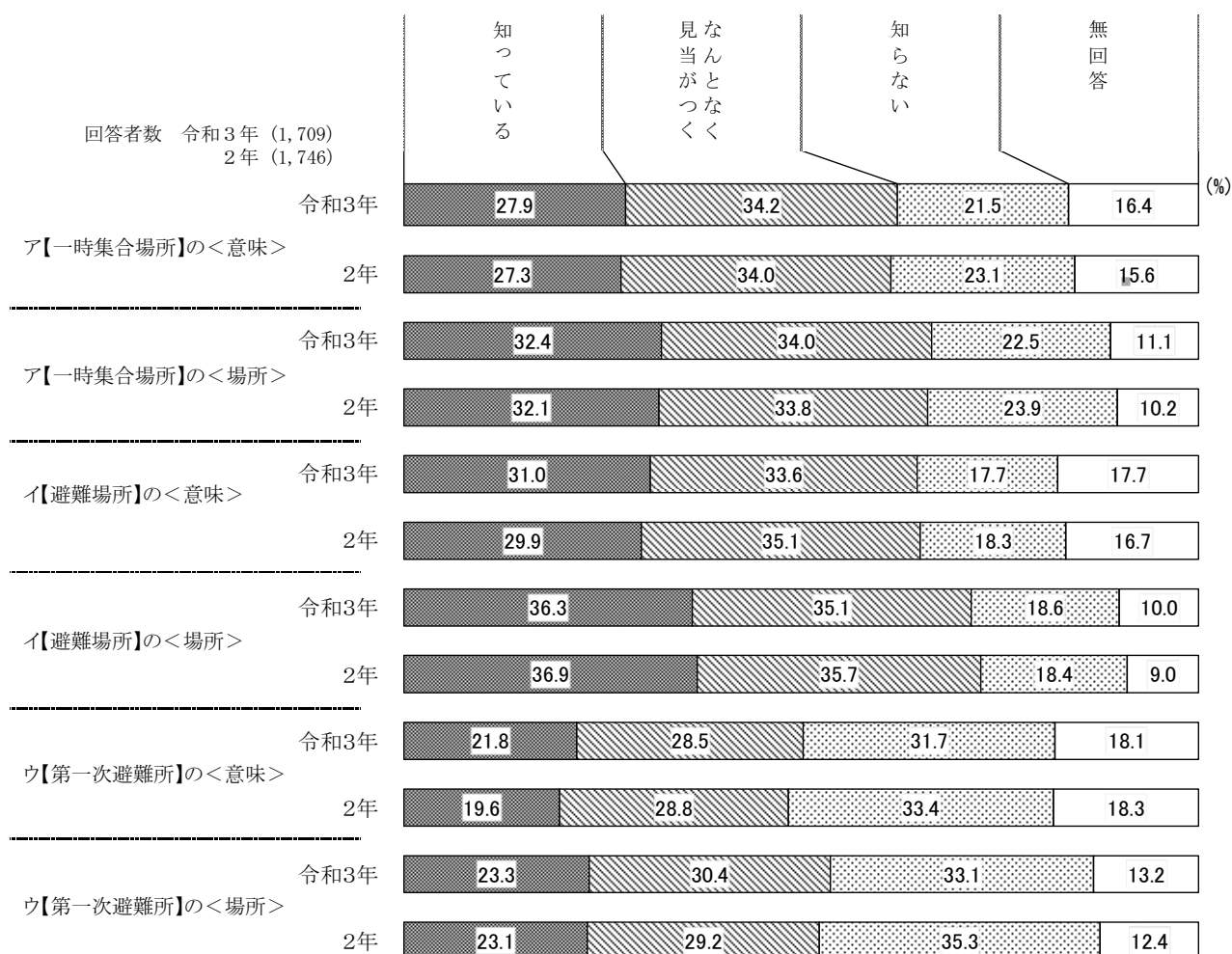
※「一戸建て借家」「社宅・公務員住宅・寮」「間借り・住み込み」「その他」は、サンプル数が少ないため参考値。

(7) 地域の3種の避難場所とその意味の認知

■「知っている」は【避難場所】の〈場所〉が最高(36.3%)、【第一次避難所】の〈意味〉が最低(21.8%)

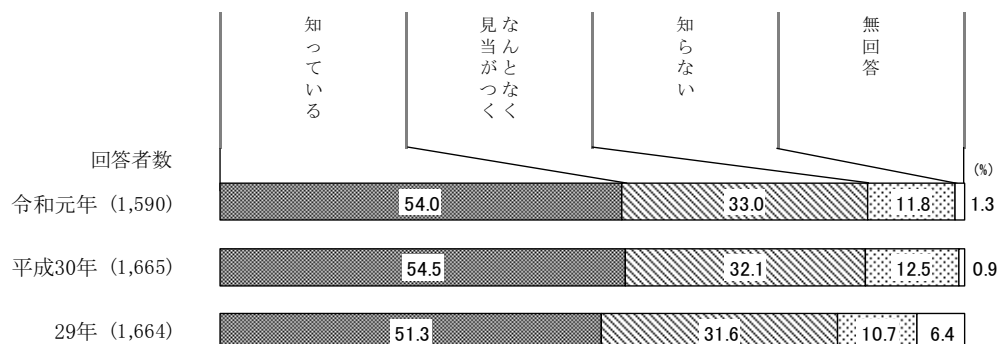
問7 大震災などで大規模な災害が発生した場合に、危険から身を守る、以下のア～ウのあなたの地域の避難場所とその意味を知っていますか(○はそれぞれ1つずつ)。

図2-7-1 前回調査比較/地域の3種の避難場所とその意味の認知



参考/地域の避難場所の認知

問 大震災などで大規模な災害が発生した場合に、危険から身を守る、あなたの地域の避難場所を知っていますか(○は1つだけ)。



第3章 調査結果の分析〈大震災などの災害への備え〉

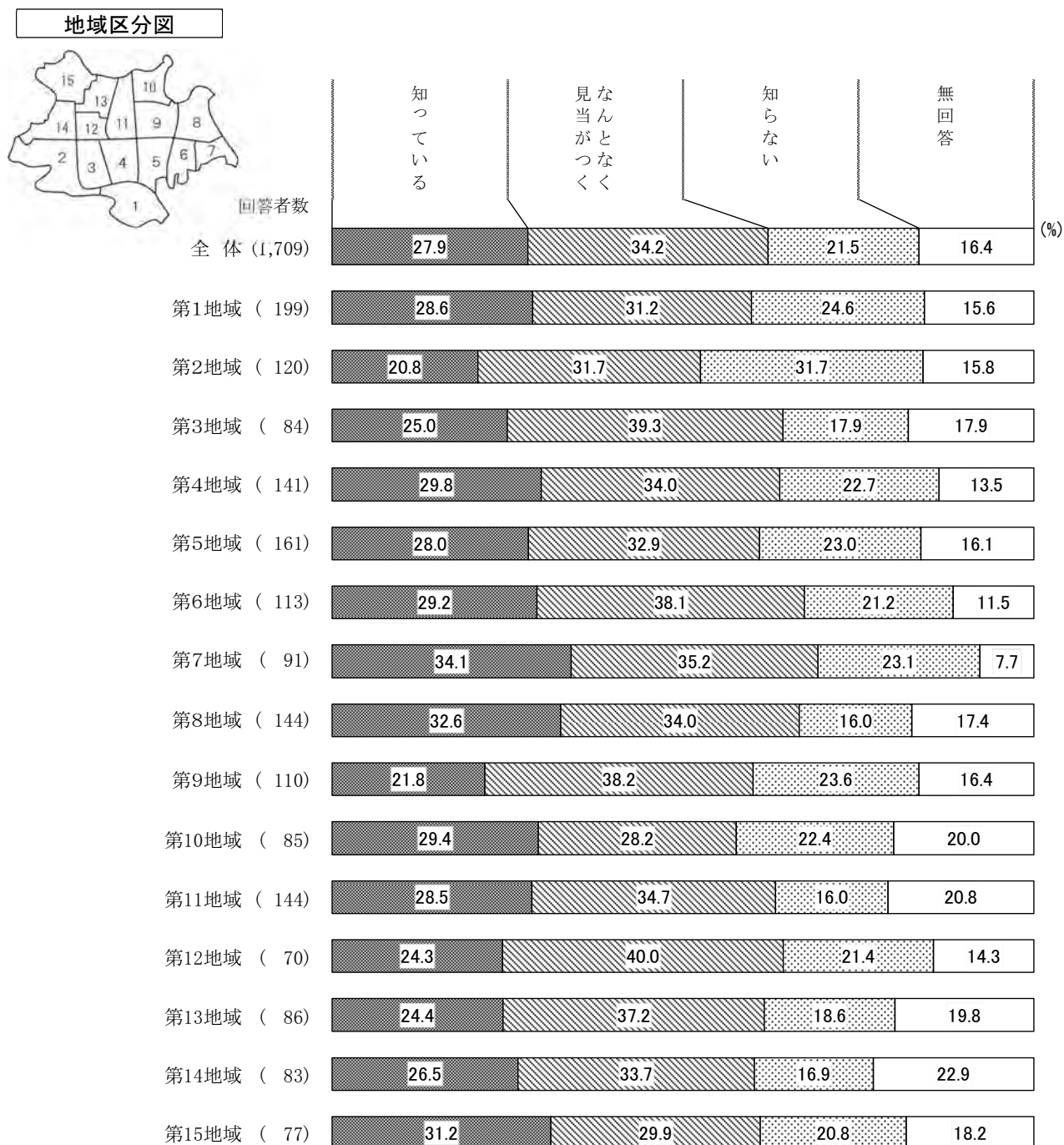
地域の3種の避難場所の意味を「知っている」の割合は、「イ 避難場所」が31.0%で最も高く、以下「ア 一時集合場所」(27.9%)、「ウ 第一次避難所」(21.8%)となっている。

地域の3種の避難場所の場所を「知っている」の割合は、「イ 避難場所」が36.3%で最も高く、以下「ア 一時集合場所」(32.4%)、「ウ 第一次避難所」(23.3%)となっている。

いずれも「意味」より「場所」の認知割合が高くなっており、その差が大きい順に、「イ 避難場所」(5.3ポイント)、「ア 一時集合場所」(4.5ポイント)、「ウ 第一次避難所」(1.5ポイント)となっている。

「ア【一時集合場所】の〈意味〉」の認知状況を地域別でみると、「知っている」は第7地域が34.1%で最も高く、次いで第8地域（32.6%）となっている。一方、第2地域が20.8%で最も低く、次いで第9地域（21.8%）となっている。

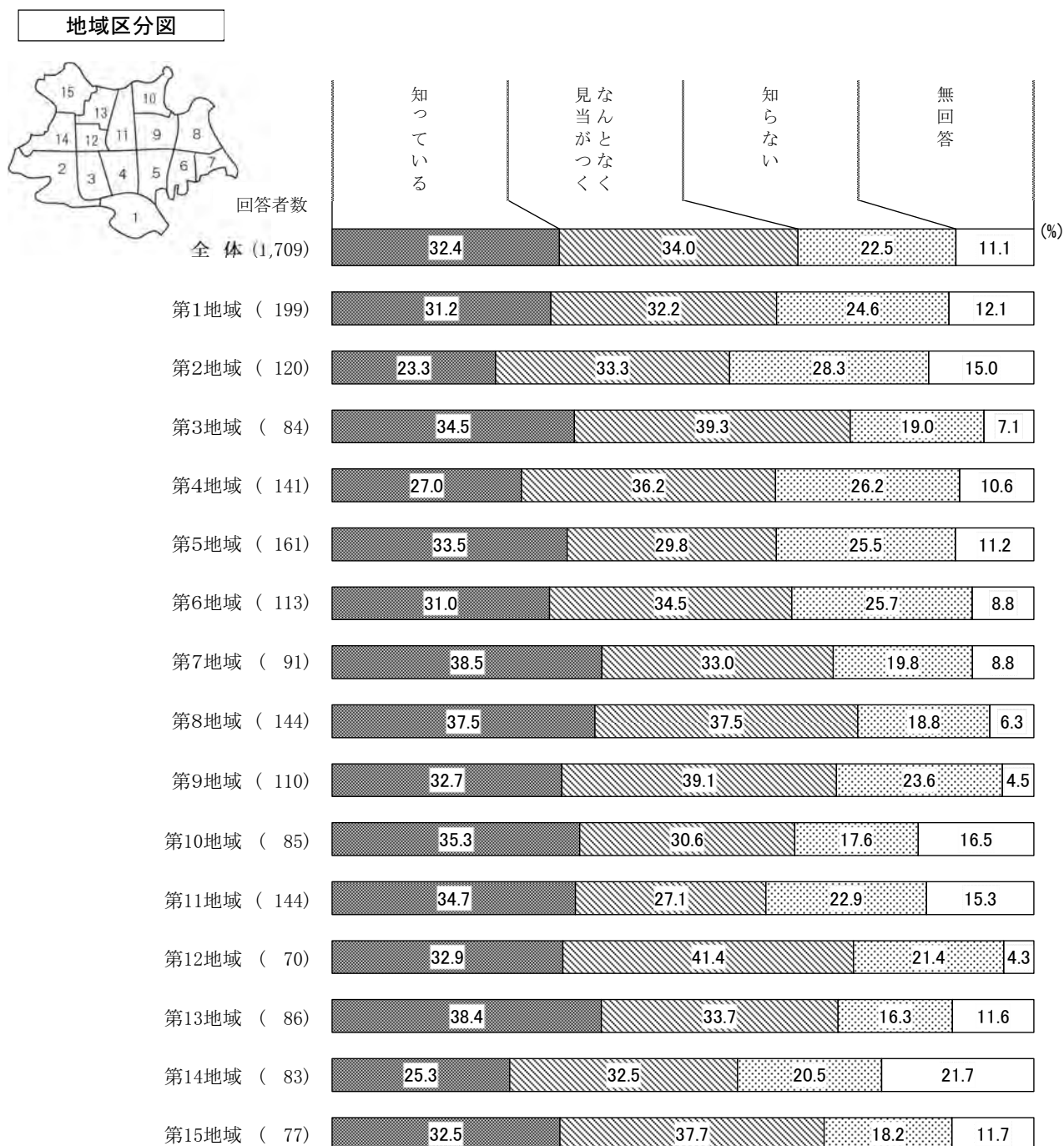
図2-7-2-① 地域別／「ア【一時集合場所】の〈意味〉」の認知



第3章 調査結果の分析 〈大震災などの災害への備え〉

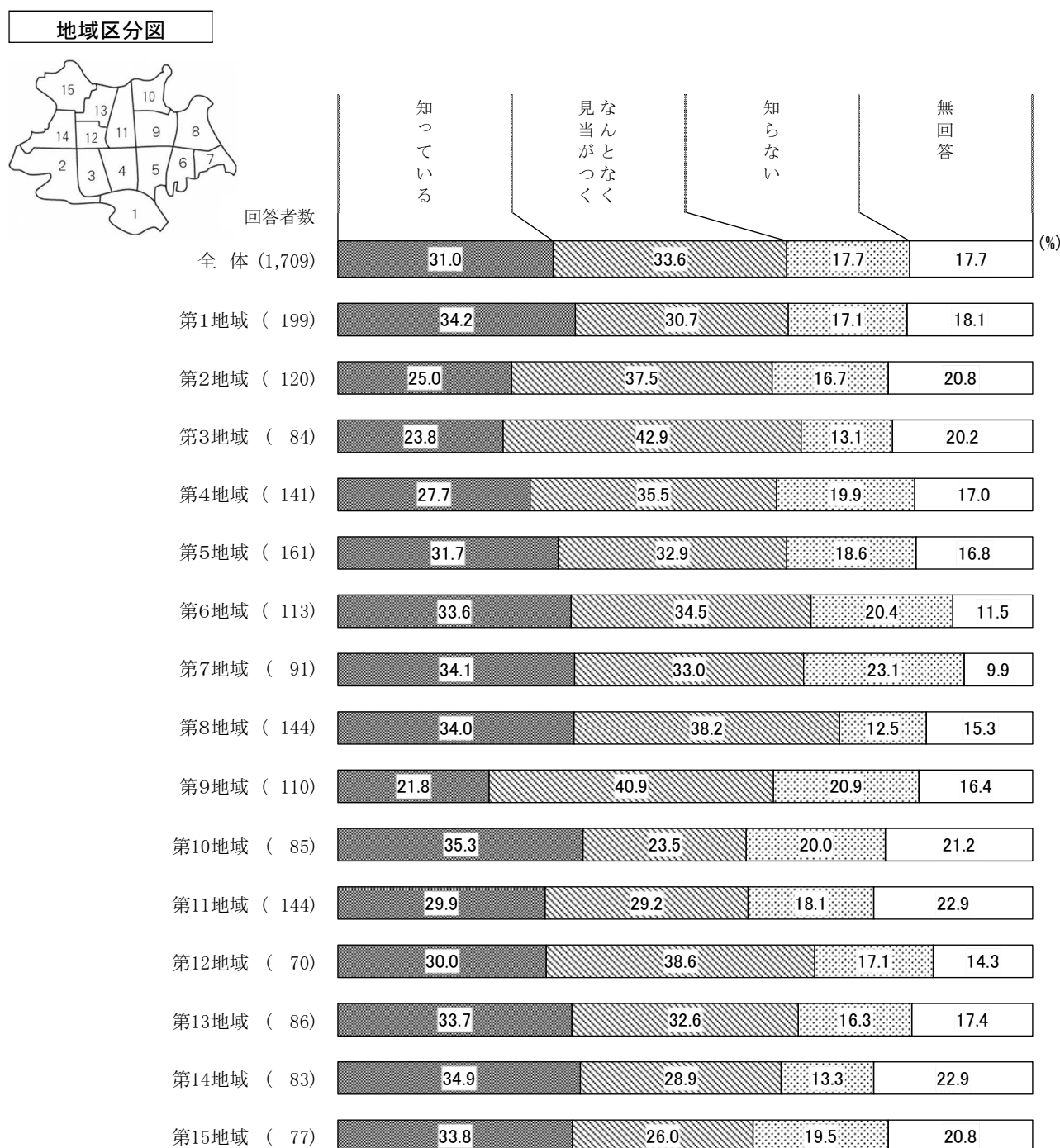
「ア【一時集合場所】の〈場所〉」の認知状況を地域別でみると、「知っている」は第7地域が38.5%で最も高く、次いで第13地域（38.4%）となっている。一方、第2地域が23.3%で最も低く、次いで第14地域（25.3%）となっている。

図2-7-2-② 地域別／「ア【一時集合場所】の〈場所〉」の認知



「イ【避難場所】の＜意味＞」の認知状況を地域別でみると、「知っている」は第10地域が35.3%で最も高く、次いで第14地域（34.9%）となっている。一方、第9地域が21.8%で最も低く、次いで第3地域（23.8%）となっている。

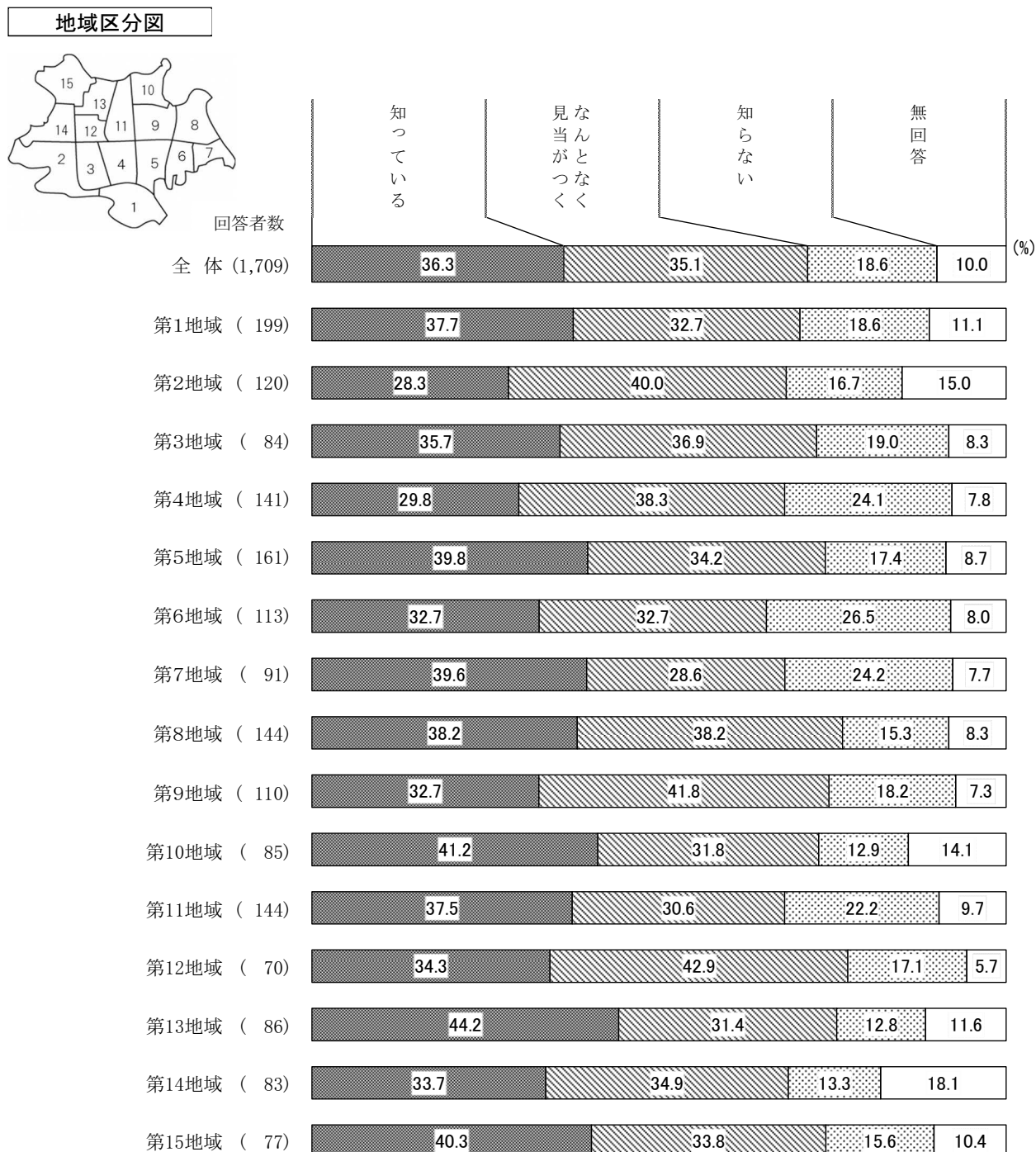
図2-7-2-③ 地域別／「イ【避難場所】の＜意味＞」の認知



第3章 調査結果の分析 〈大震災などの災害への備え〉

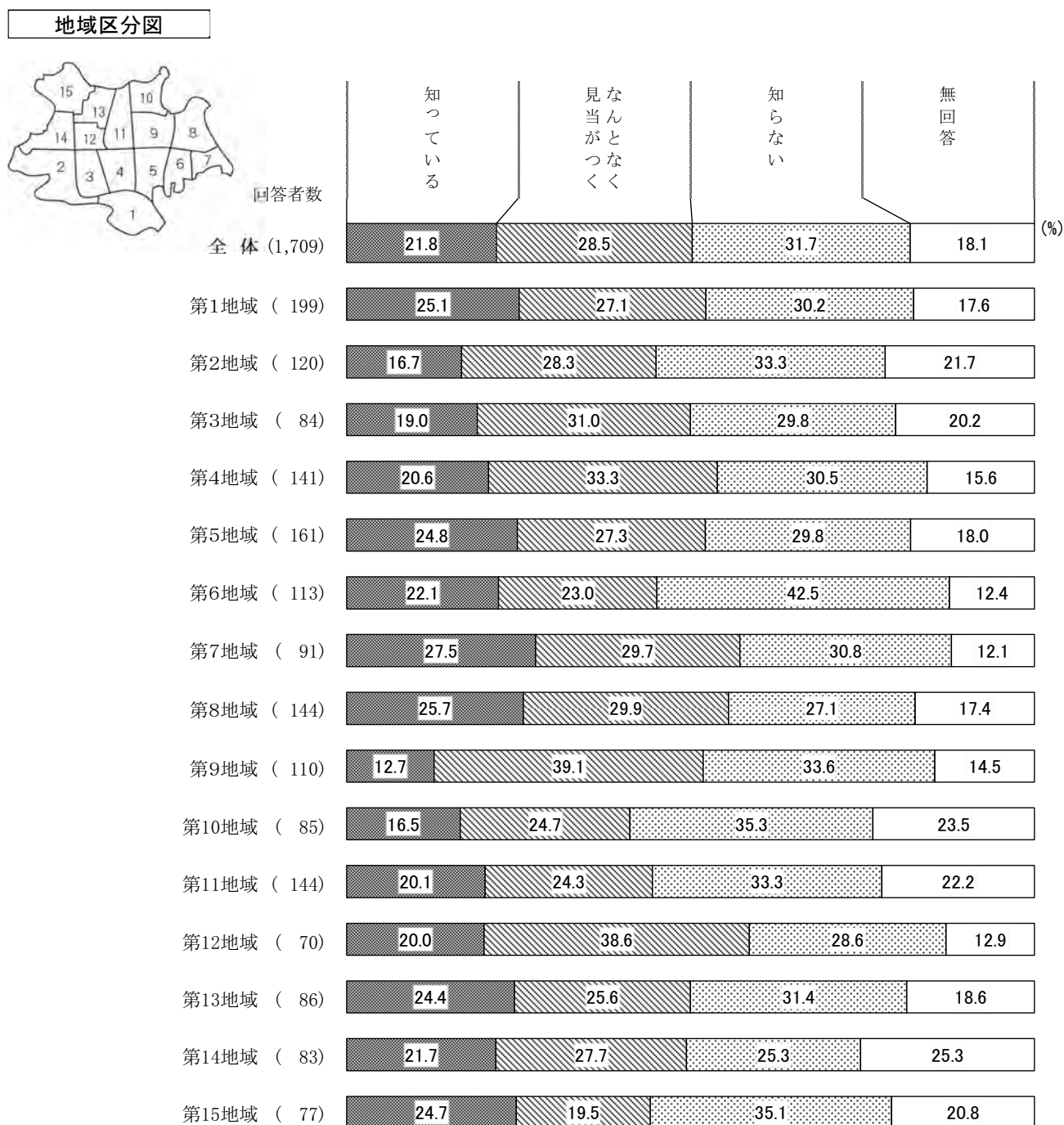
「イ【避難場所】の〈場所〉」の認知状況を地域別でみると、「知っている」は第13地域が44.2%で最も高く、次いで第10地域（41.2%）となっている。一方、第2地域が28.3%で最も低く、次いで第4地域（29.8%）となっている。

図2-7-2-④ 地域別／「イ【避難場所】の〈場所〉」の認知



「ウ【第一次避難所】の＜意味＞」の認知状況を地域別でみると、「知っている」は第7地域が27.5%と最も高く、次いで第8地域（25.7%）となっている。一方、第9地域が12.7%で最も低く、次いで第10地域（16.5%）となっている。

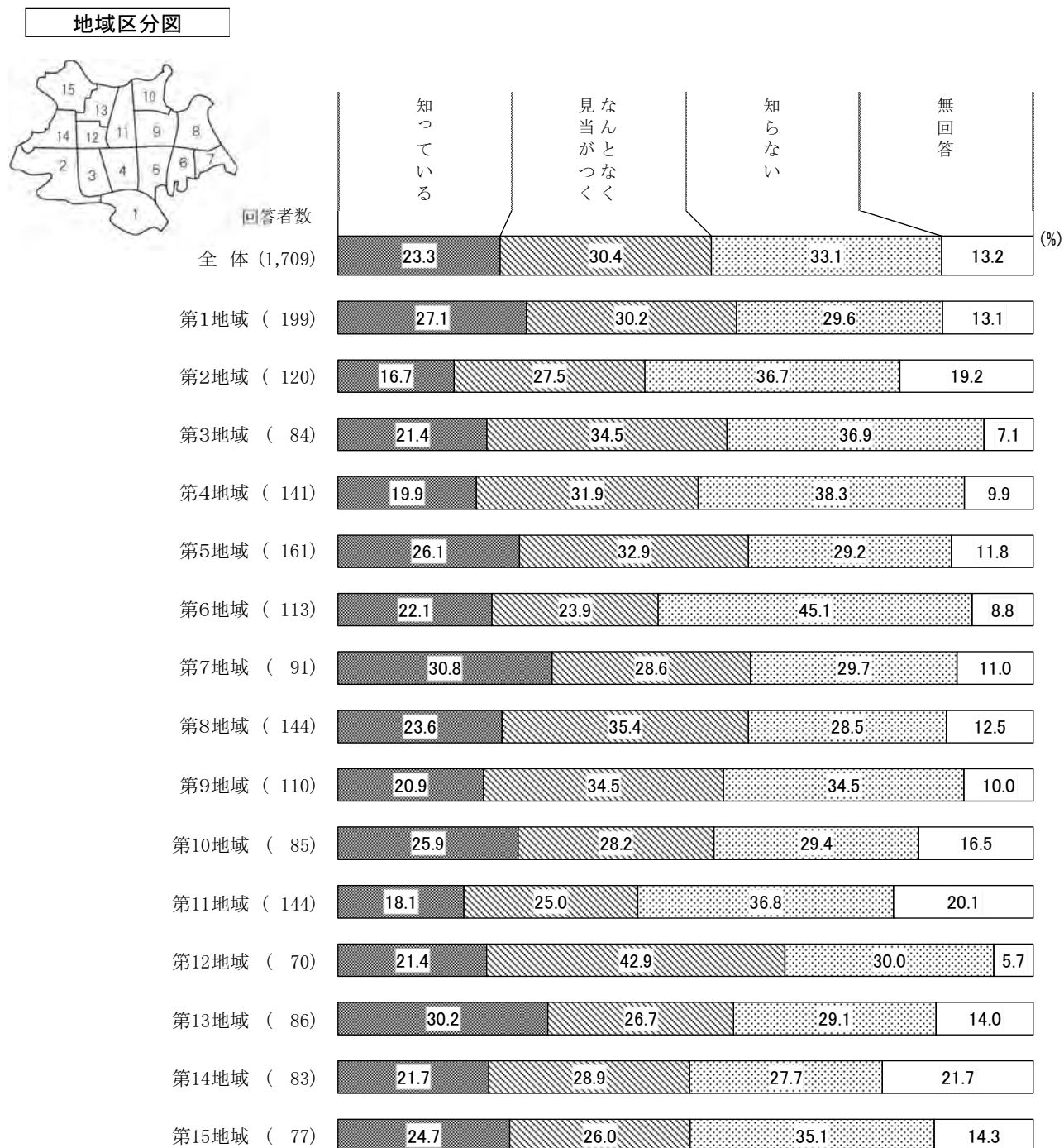
図2-7-2-⑤ 地域別／「ウ【第一次避難所】の＜意味＞」の認知



第3章 調査結果の分析 〈大震災などの災害への備え〉

「ウ【第一次避難所】の〈場所〉」の認知状況を地域別でみると、「知っている」は第7地域が30.8%で最も高く、次いで第13地域（30.2%）となっている。一方、第2地域が16.7%で最も低く、次いで第11地域（18.1%）となっている。

図2-7-2-⑥ 地域別／「ウ【第一次避難所】の〈場所〉」の認知



(8) 避難場所の認知経路

■ “防災マップ&ガイド”が5割弱で最も高く、次いで“広報”が3割強

問7のいずれかで「1 知っている」とお答えの方に

問7—1 それぞれの避難場所をどのように知りましたか（○はあてはまるものすべて）。

図2-8-1-① 経年比較／避難場所の認知経路

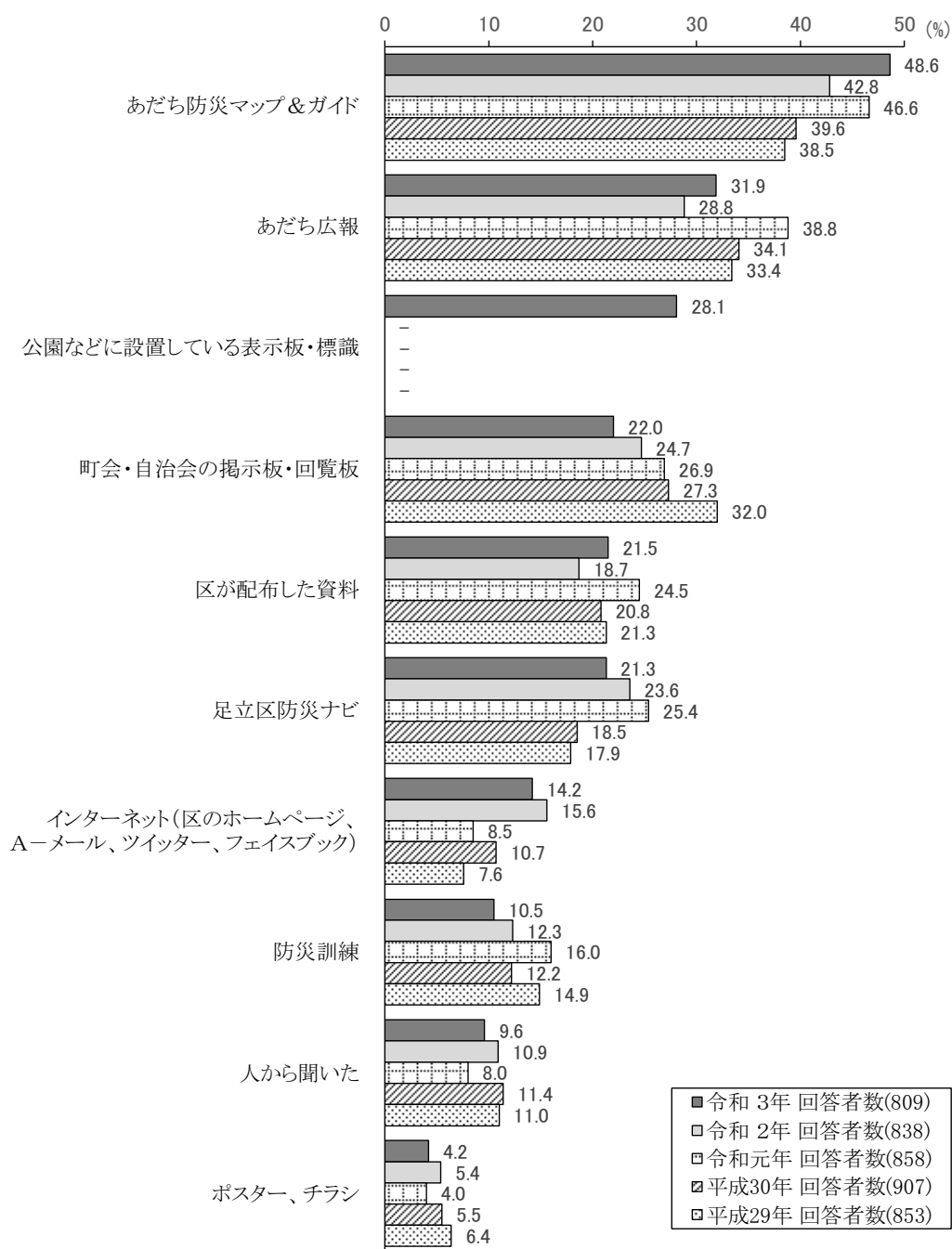
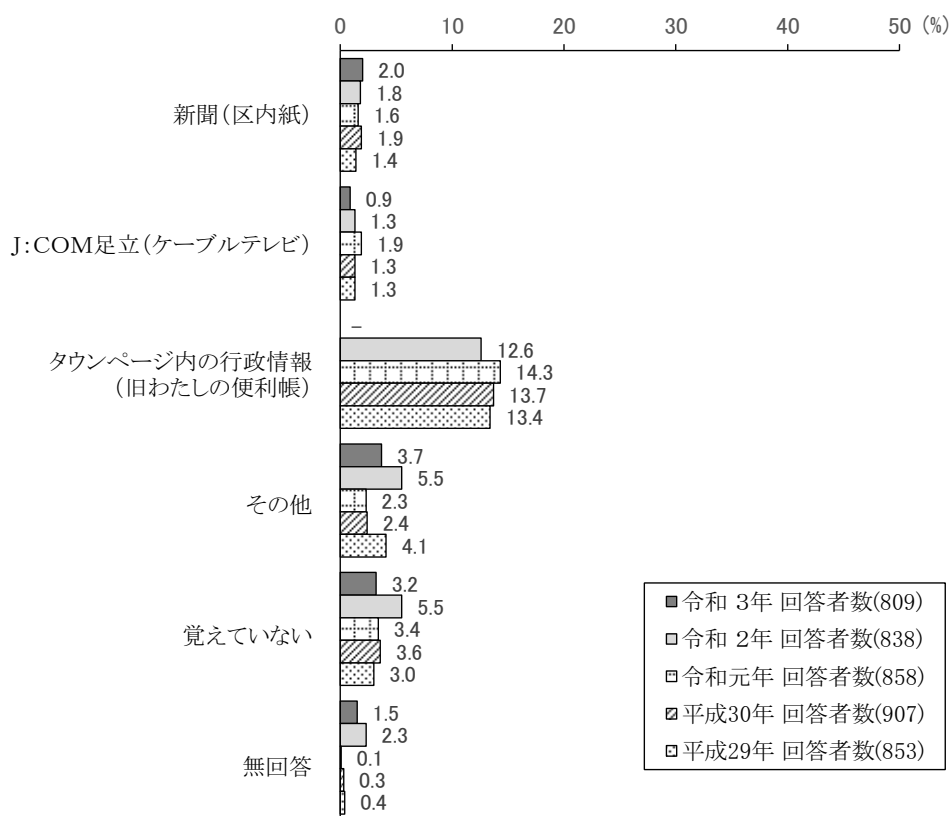


図2-8-1-② 経年比較／避難場所の認知経路



※ 令和元年度までであった「区公式アプリ『アダチさん』」は、令和2年度・令和3年度は割愛。

※ 「公園などに設置している表示板・標識」は、今回の令和3年度新設。

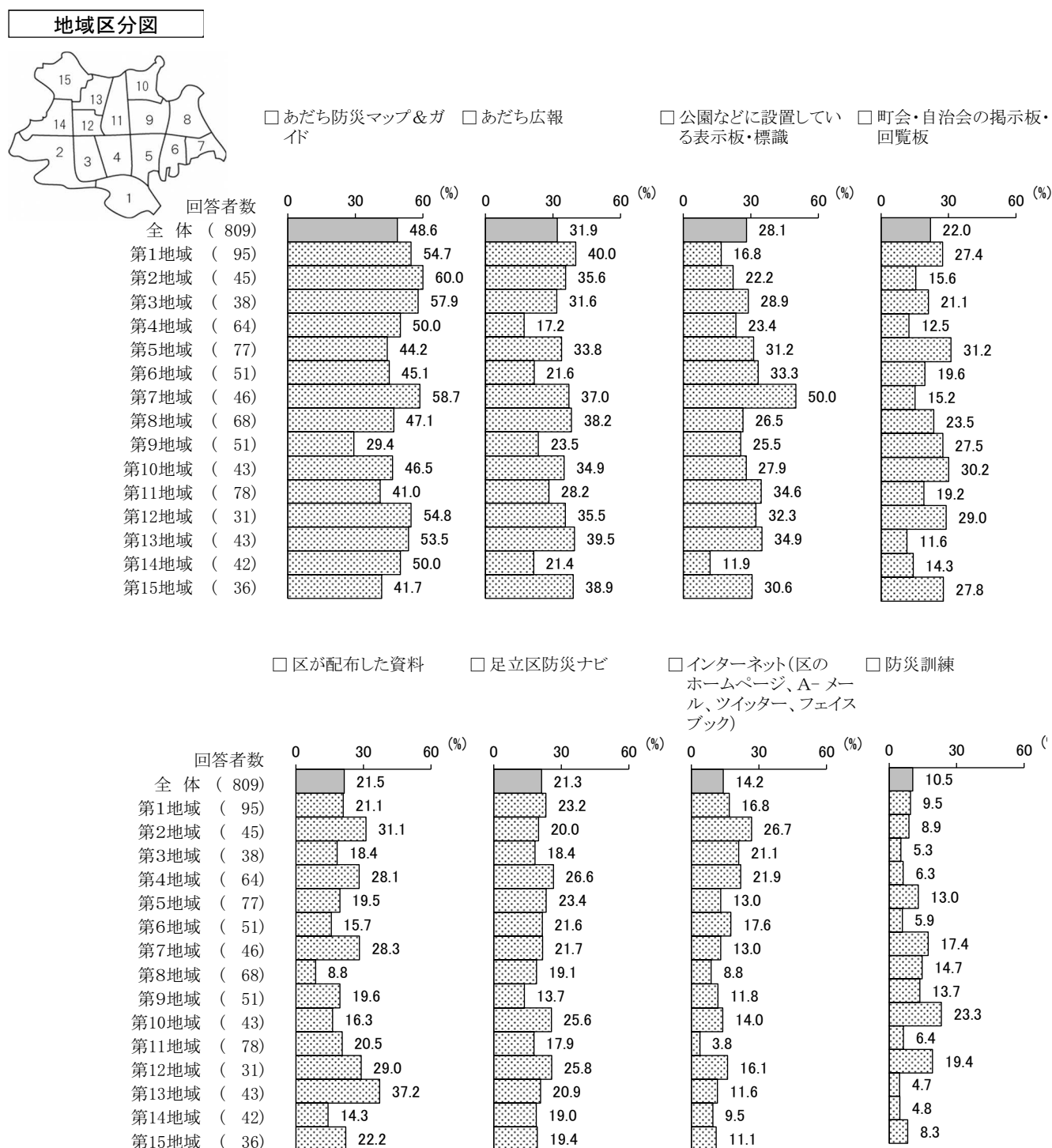
※ 前年度までであった「タウンページ内の行政情報（旧わたしの便利帳）」は、令和3年度は割愛。

問7の3種の避難場所の場所又は意味のいずれかを認知している人のその認知経路をみると、「あだち防災マップ&ガイド」が48.6%で最も高く、次いで「あだち広報」(31.9%)、「公園等に設置している表示板・標識」(28.1%)、「町会・自治会の掲示板・回覧板」(22.0%)、「区が配布した資料」(21.5%)、「足立区防災ナビ」(21.3%) などとなっている。

経年でみると、順位では、1位「あだち防災マップ&ガイド」、2位「あだち広報」に変動はないが、3位に新設の「公園などに設置している表示板・標識」が入っており、その効果がうかがえる。また、前回の令和2年調査に対する割合の増減では、1位「あだち防災マップ&ガイド」が5.8ポイントの増加、2位「あだち広報」が3.1ポイントの増加となっている。逆に4位「町会・自治会の掲示板・回覧板」は2.7ポイントの減少となっている。

地域別でみると、「あだち防災マップ&ガイド」は第2地域で60.0%と最も高く、「あだち広報」は第1地域（40.0%）、「公園などに設置している表示板・標識」は第7地域（50.0%）、「町会・自治会の掲示板・回覧板」は第5地域（31.2%）、「区が配布した資料」は第13地域（37.2%）で最も高くなっている。

図2-8-2 地域別／避難場所の認知経路／上位8項目

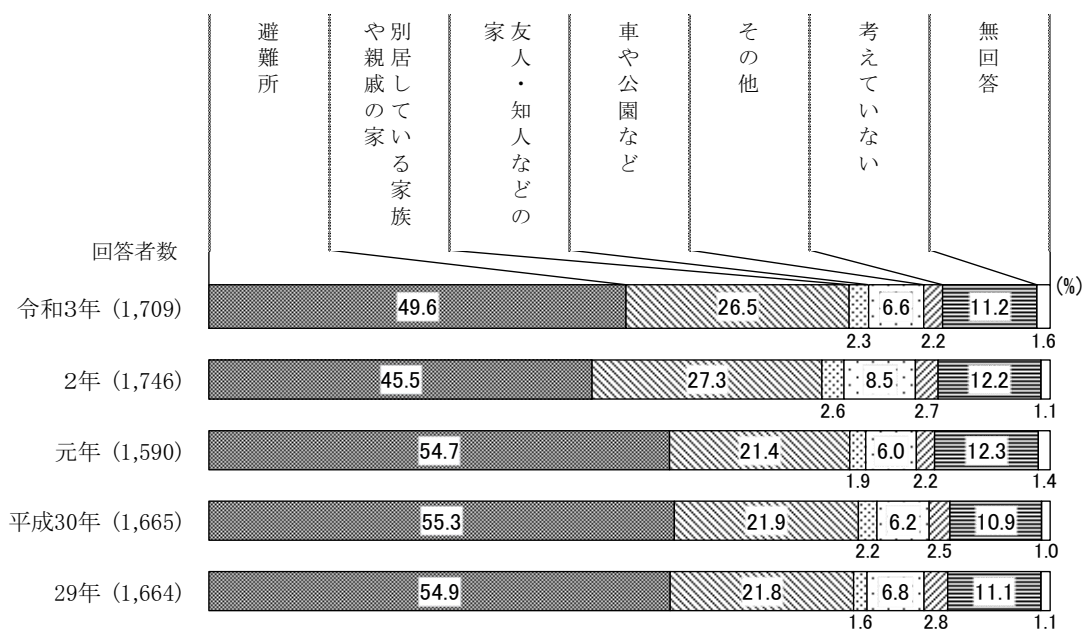


（9）大規模災害時の避難生活場所

■「避難所」が約5割で最も高いが、コロナ禍以前の3年間平均の5割台半ばに比べると低い

問8 大規模な災害が発生し家屋の倒壊などにより自宅で生活できない場合、どこで生活しようと考えていますか（○は1つだけ）。

図2-9-1 経年比較／大規模災害時の避難生活場所

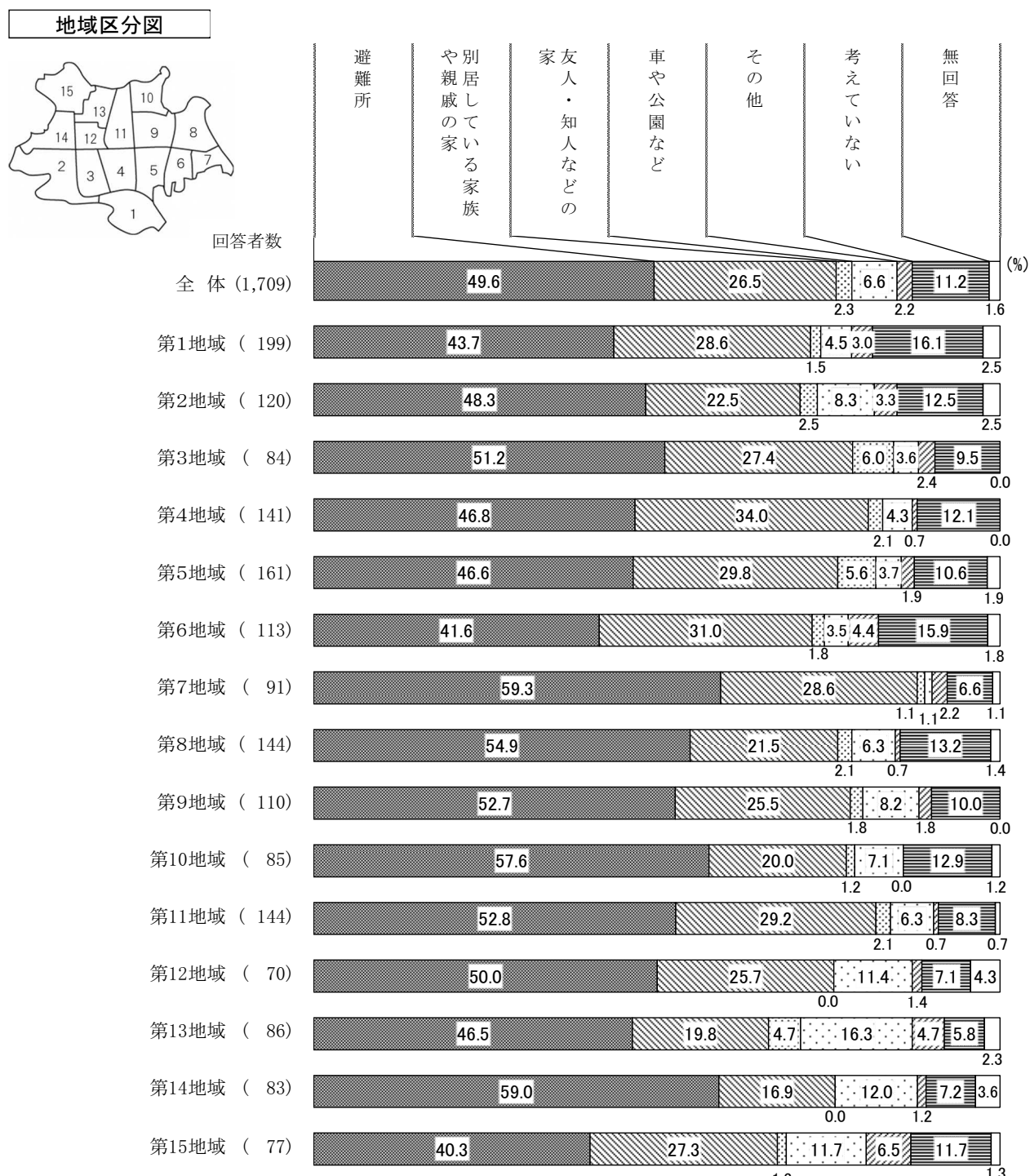


大規模災害時に避難生活を送る場所としては、「避難所」が49.6%で最も高く、次いで「別居している家族や親戚の家」が26.5%となっている。

経年でみると、「避難所」は前回の令和2年調査（45.5%）より4.1ポイント増加したものの、新型コロナウイルス感染防止対策としての密回避の影響もあって、コロナ禍以前の3年間の5割台半ばに比べると低くなっている。

地域別でみると、「避難所」は第7地域（59.3%）と第14地域（59.0%）で約6割と高く、「別居している家族や親戚の家」は第4地域（34.0%）と第6地域（31.0%）で3割台と高くなっている。一方、「考えていない」は第1地域（16.1%）と第6地域（15.9%）で1割台半ばと他の地域に比べて高くなっている。

図2-9-2 地域別／大規模災害時の避難生活場所



(10) 大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいこと

■ “衛生対策の充実” と “ライフラインの確保” が6割で1位と2位

問9 あなたが、大地震の際の防災対策として、足立区に特に力を入れてほしいと考えていることは何ですか（○は5つまで）。

※ 災害時における要配慮者とは、高齢者、障がい者、外国人、難病患者、乳幼児、妊産婦など、災害発生時に避難行動を取る際や、避難所における生活などにおいて、特に配慮を要する方々を指します。

図2-10-1-① 経年比較／大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいこと

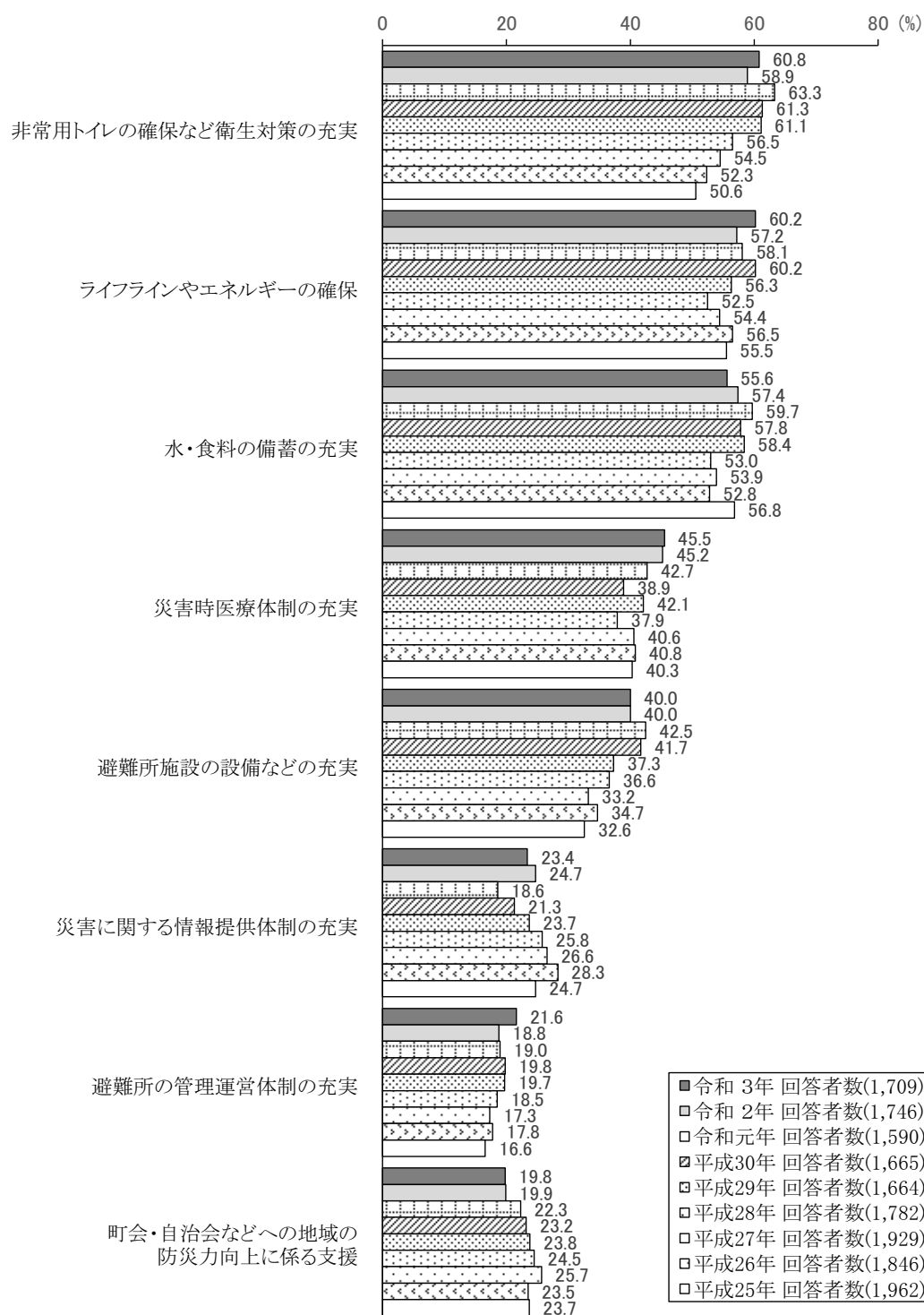


図2-10-1-② 経年比較／大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいこと

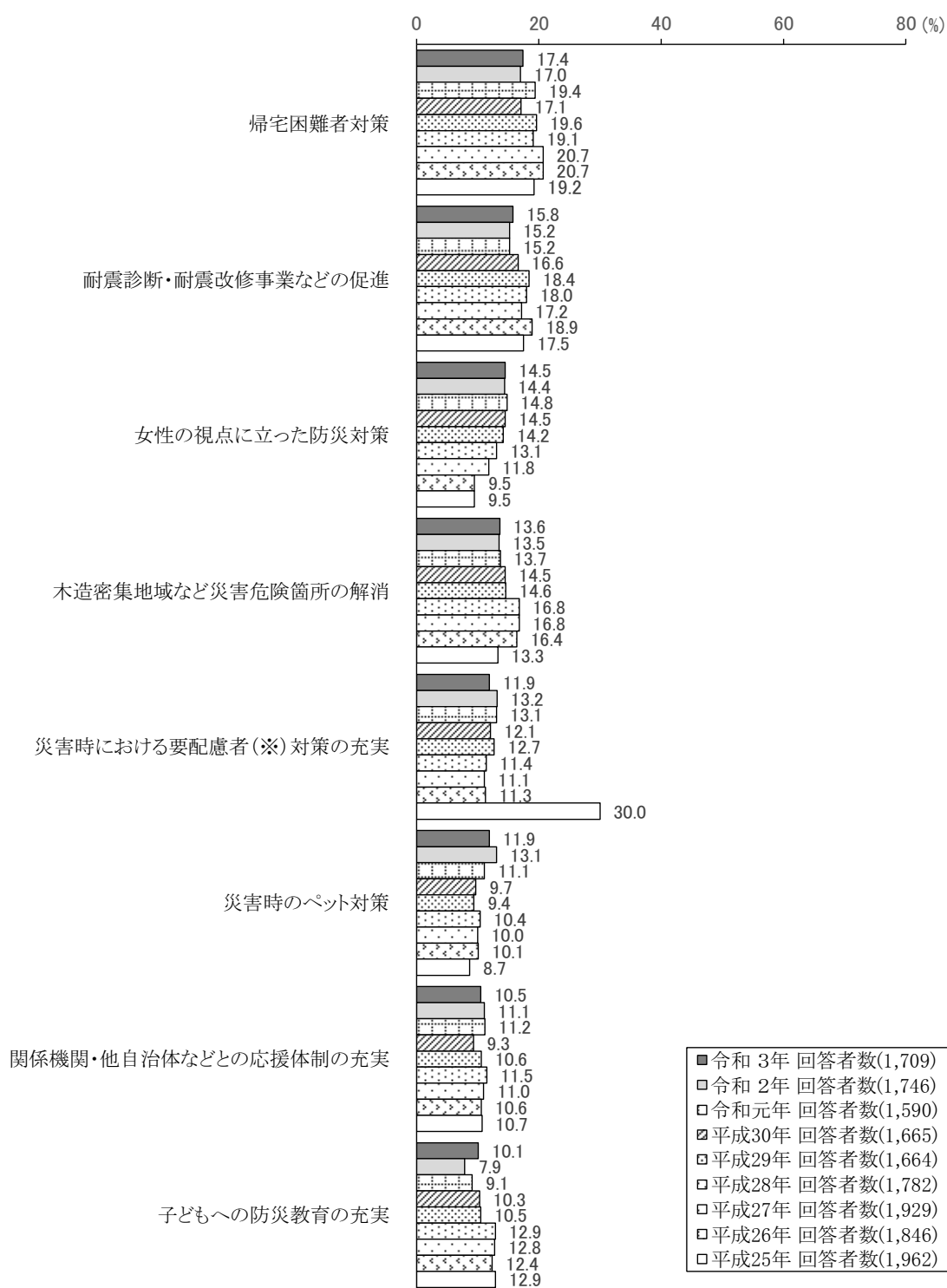
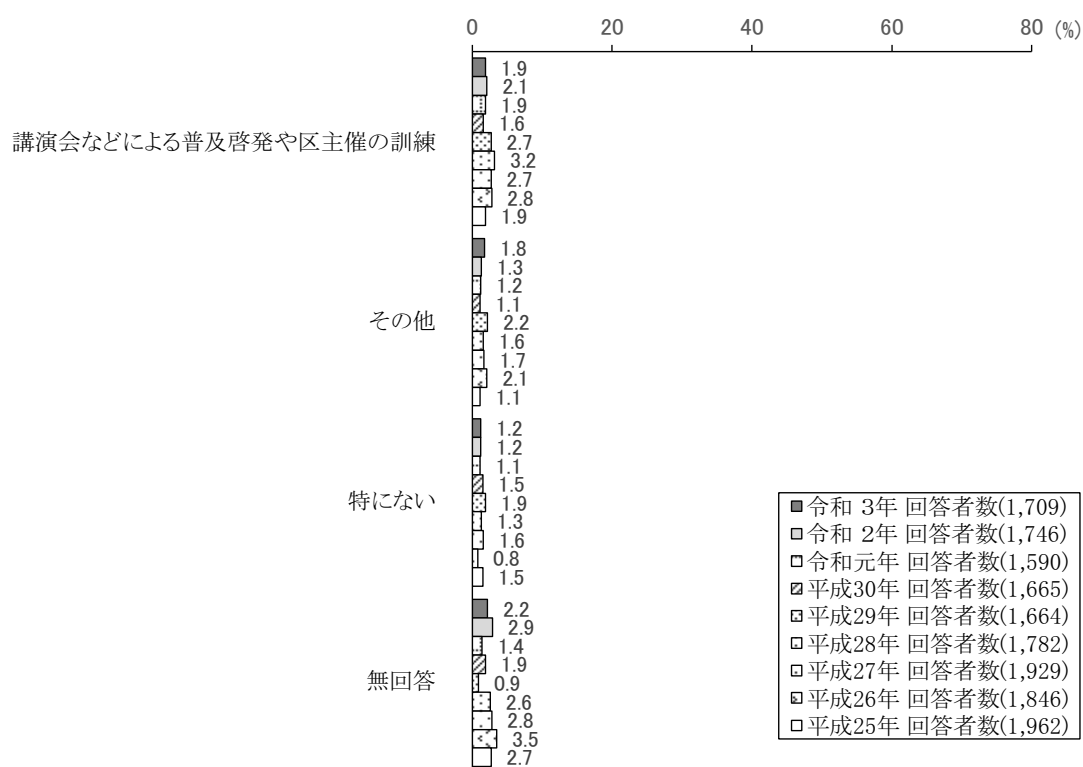


図2-10-1-③ 経年比較／大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいこと



※「水・食料の備蓄の充実」は、平成25年度では「水・食料等災害用備蓄の充実」。

※「災害時における要配慮者対策の充実」は、平成25年度では「高齢者・障がい者・乳幼児などの要援護者対策の充実」。

大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいことは、「非常用トイレの確保など衛生対策の充実」が60.8%で最も高く、次いで「ライフラインやエネルギーの確保」(60.2%)、「水・食料の備蓄の充実」(55.6%)、「災害時医療体制の充実」(45.5%)などとなっている。

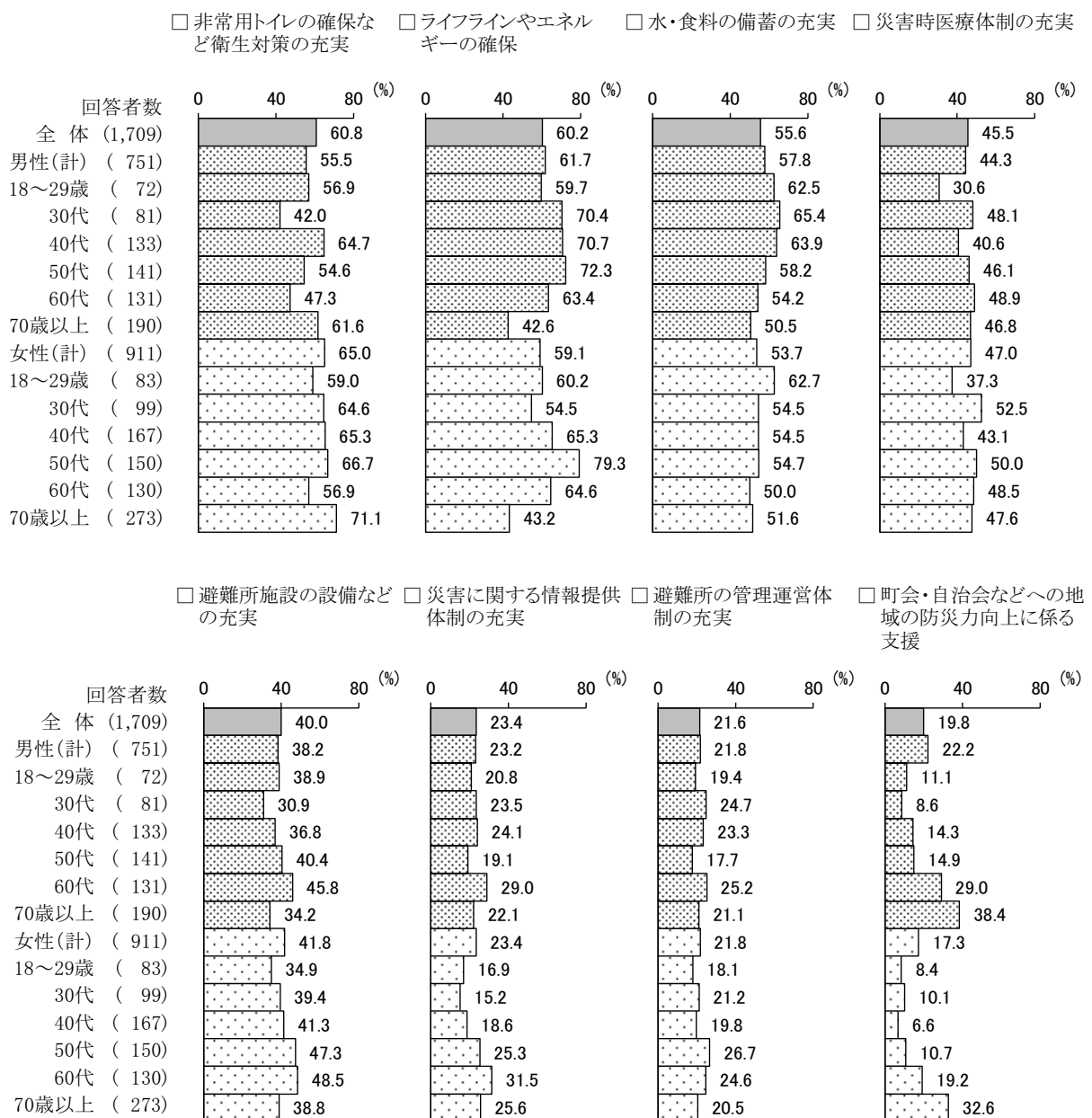
経年でみると、「ライフラインやエネルギーの確保」が前回の令和2年調査から3.0ポイント増加し、「水・食料の備蓄の充実」にかわって2位となったが、その他の上位項目の順位と割合に大きな違いはみられない。

性別でみると、「非常用トイレの確保など衛生対策の充実」は女性（65.0％）の方が男性（55.5％）より9.5ポイント高くなっている。一方「町会・自治会などへの地域の防災力向上に係る支援」は男性（22.2％）の方が女性（17.3％）より4.9ポイント高く、「水・食料の備蓄の充実」でも男性（57.8％）の方が女性（53.7％）より4.1ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、「非常用トイレの確保など衛生対策の充実」は女性の70歳以上が71.1％と最も高く、「ライフラインやエネルギーの確保」は女性の50代が79.3％で最も高くなっている。また、「水・食料の備蓄の充実」は男性の40代以下と女性の18～29歳で6割台と高くなっている。

図2-10-2 性別、性・年代別／大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいこと

／上位8項目

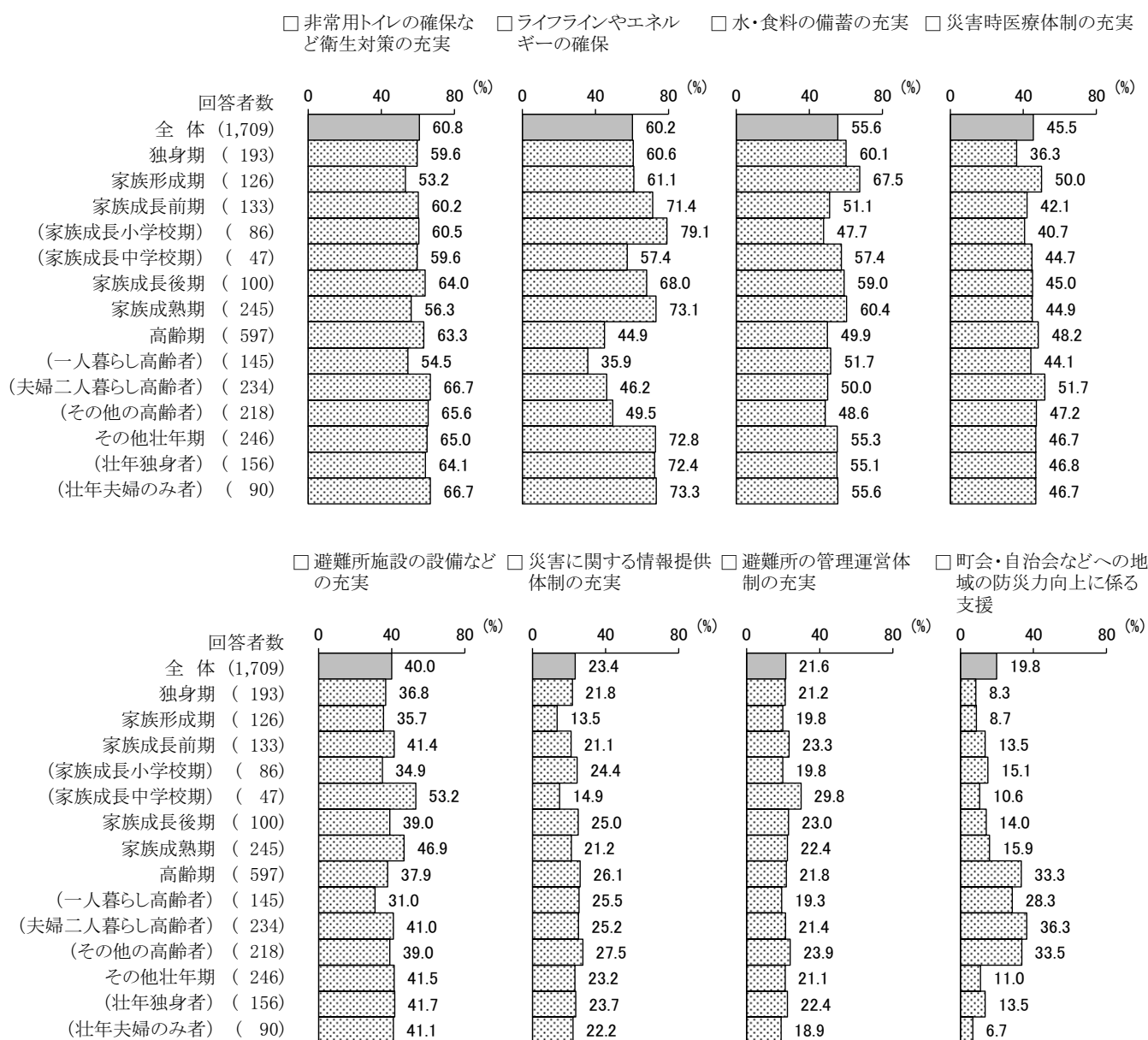


第3章 調査結果の分析 〈大震災などの災害への備え〉

ライフステージ別でみると、「非常用トイレの確保など衛生対策の充実」は、〈その他壮年期〉（65.0%）、〈家族成長後期〉（64.0%）、〈高齢期〉（63.3%）で6割台半ばと高く、「ライフラインやエネルギーの確保」は〈家族成熟期〉（73.1%）、〈その他壮年期〉（72.8%）、〈家族成長前期〉（71.4%）で7割台前半と高くなっている。また、「水・食料の備蓄の充実」は〈家族形成期〉（67.5%）で6割台半ばを超えて他のライフステージに比べて特に高くなっている。

図2-10-3 ライフステージ別／大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいこと

／上位8項目



3 洪水対策

-
- (1) 「足立区洪水ハザードマップ」の認知
 - (2) 河川はん濫時の避難場所の事前決定
 - (3) 事前に決めている河川はん濫時の避難場所
 - (4) 河川はん濫時の避難場所を決めていない理由
 - (5) 河川はん濫による浸水被害の際の対処
-

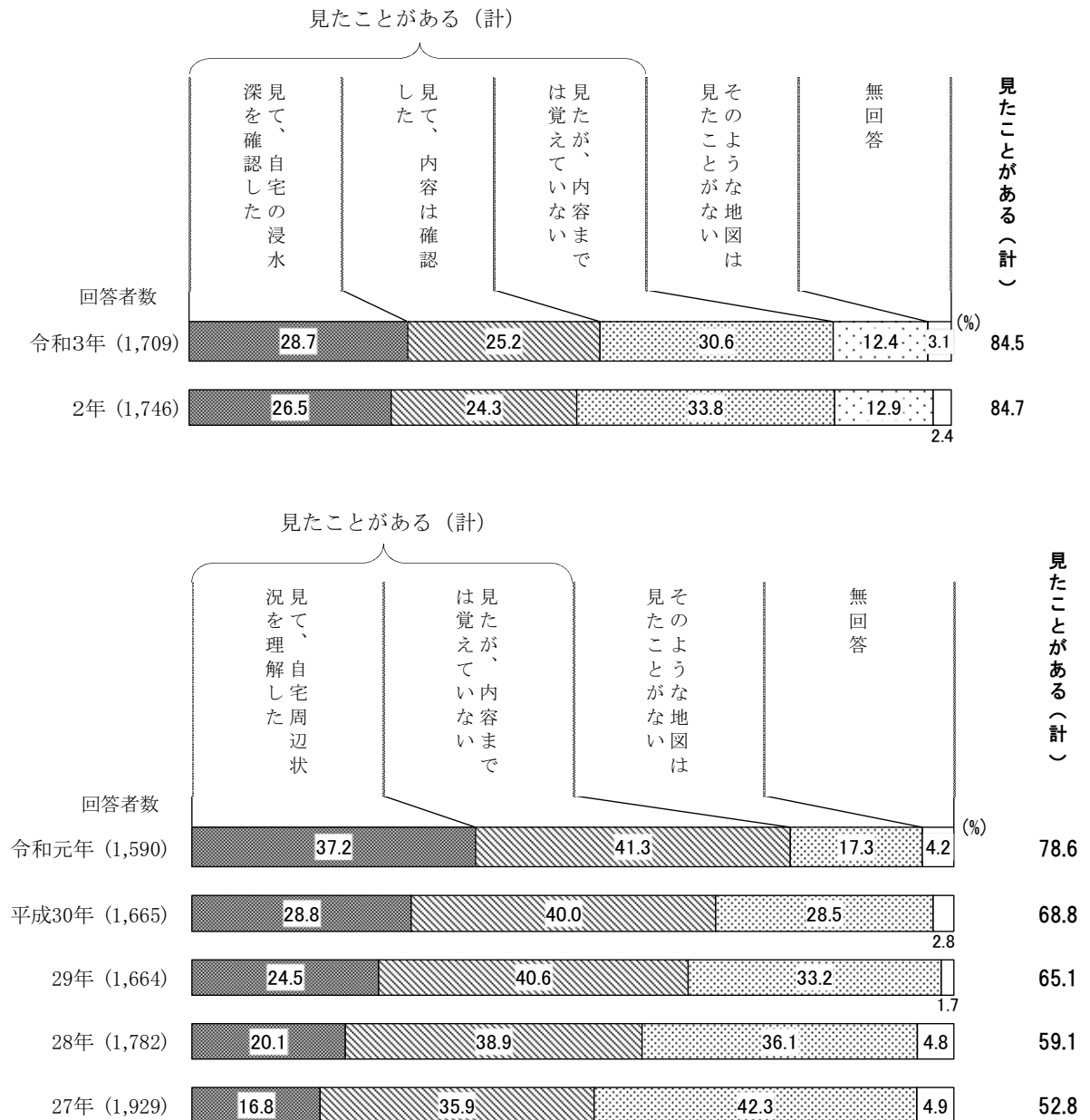
3 洪水対策

(1)「足立区洪水ハザードマップ」の認知

■「見て、自宅の浸水深を確認した」は微増して3割弱

問10 あなたは、足立区が発行（区のホームページにも掲載）している「足立区洪水ハザードマップ」を見たことがありますか（○は1つだけ）。

図3-1-1 経年比較／「足立区洪水ハザードマップ」の認知



※ 令和2年度から、令和元年までの「見て、自宅周辺の状況を理解した」が、「見て、自宅の浸水深を確認した」と「見て、内容は確認した」に2分割された。

※ 「見て、自宅周辺の状況を理解した」は、平成27年度は「見たことがあって、自宅周辺の状況を理解した」。

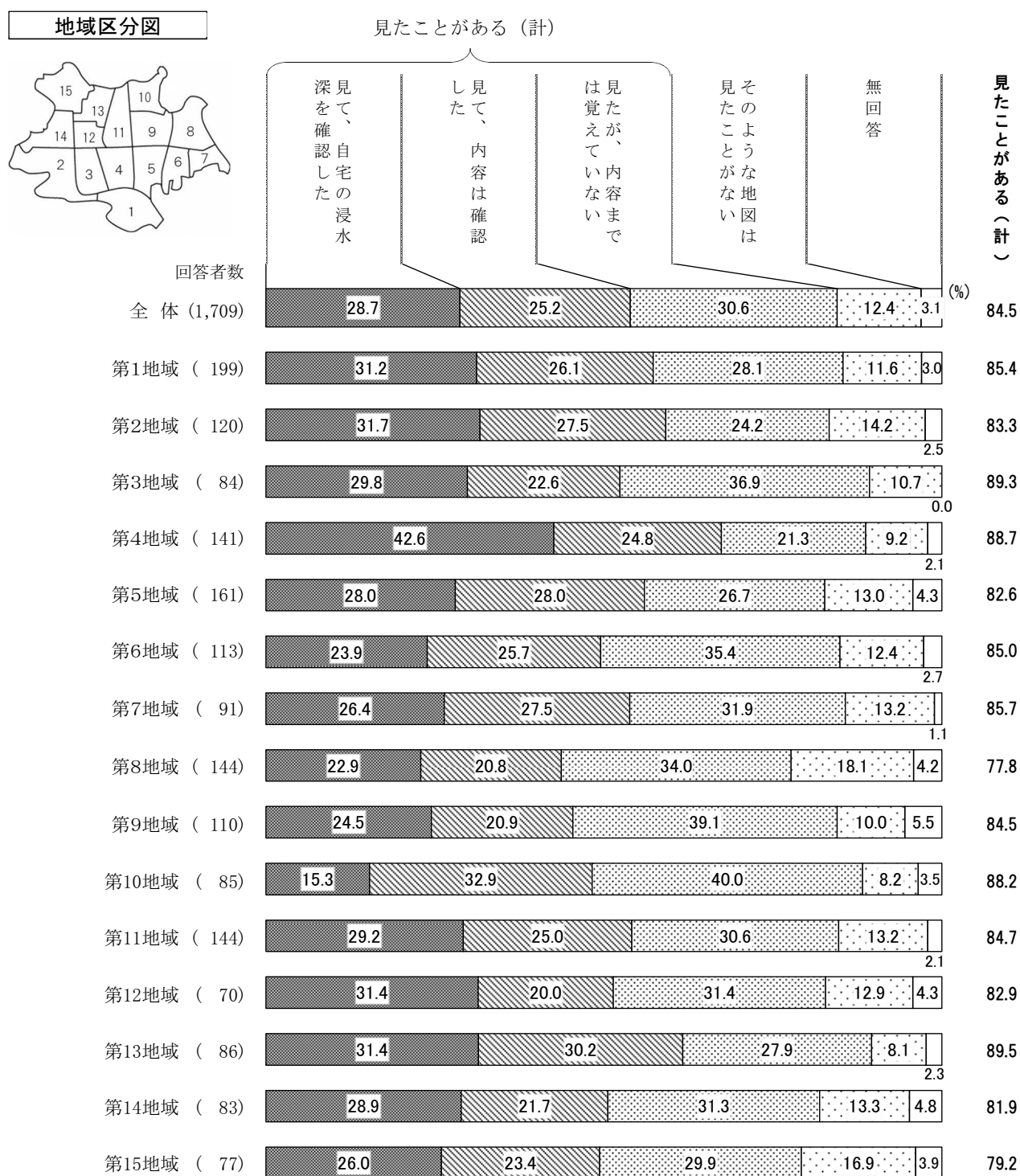
第3章 調査結果の分析〈洪水対策〉

『足立区洪水ハザードマップ』について、「見たが、内容までは覚えていない」が30.6%で最も高く、次いで「見て、自宅の浸水深を確認した」(28.7%)、「見て、内容は確認した」(25.2%)となり、これらを合わせた【見たことがある】は8割台半ばを占めている。一方、「そのような地図は見たことがない」は12.4%となっている。

経年でみると、「見たが、内容までは覚えていない」(30.6%)が前回の令和2年調査(33.8%)から3.2ポイント減少し、「見て、自宅の浸水深を確認した」が前回調査(26.5%)から2.2ポイント増加した結果、【見たことがある】では特に変化はなかった。

地域別でみると、「見て、自宅の浸水深を確認した」は第4地域で42.6%と最も高く、第10地域で15.3%と最も低い。一方、【見たことがある】は第13地域で89.5%と最も高く、僅差で第3地域(89.3%)が続いている。第8地域は77.8%で最も低くなっている。

図3-1-2 地域別／「足立区洪水ハザードマップ」の認知



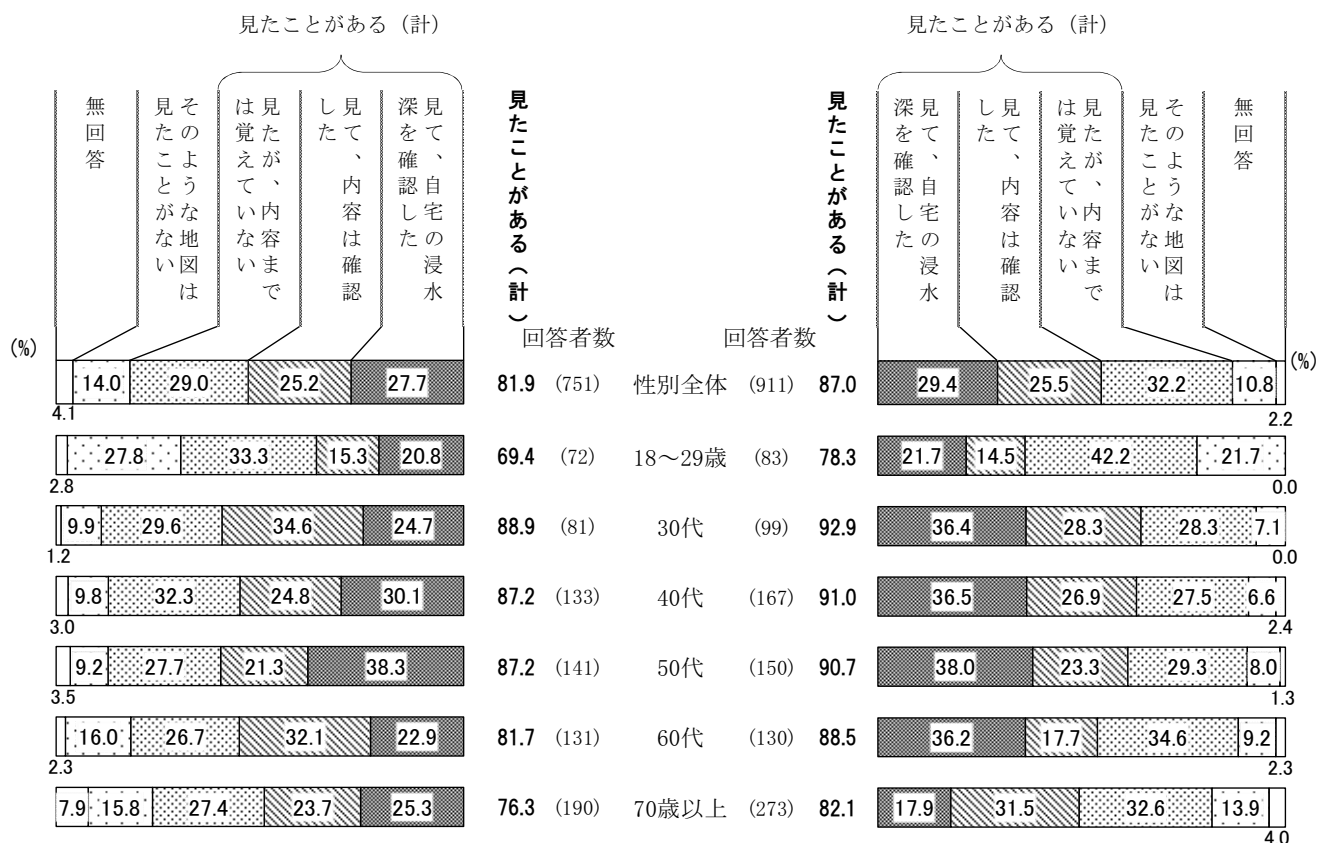
性別でみると、【見たことがある】は女性（87.0%）の方が男性（81.9%）より5.1ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、「見て、自宅の浸水深を確認した」は男女ともに50代で4割弱と高くなっており、女性の70歳以上が17.9%で最も低くなっている。【見たことがある】は女性の30代～50代で9割を超えて高く、男性の18～29歳で約7割と最も低くなっている。

図3-1-3 性別、性・年代別／「足立区洪水ハザードマップ」の認知

【男性】

【女性】

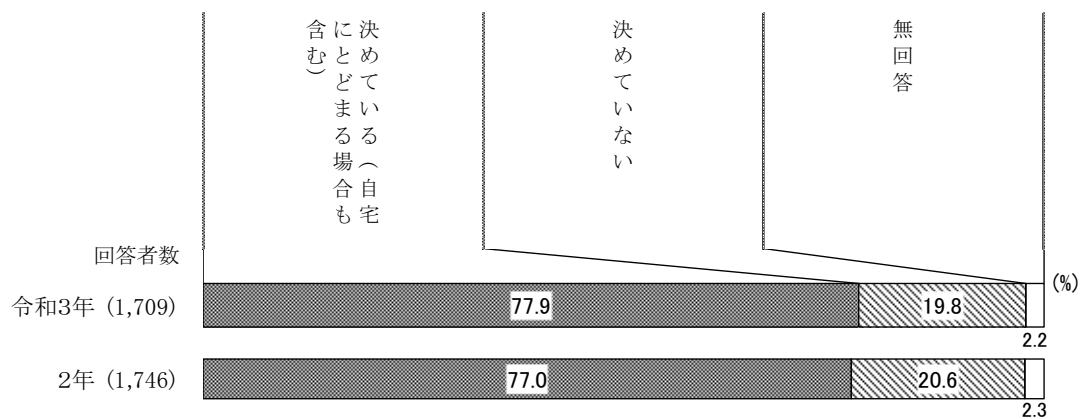


（2）河川はん濫時の避難場所の事前決定

■「決めている（自宅にとどまる場合も含む）」が8割近く

問11 あなたは、河川がはん濫する恐れがある場合、避難する場所を事前に決めていますか
（○は1つだけ）。

図3－2－1 前回調査比較／河川はん濫時の避難場所の事前決定



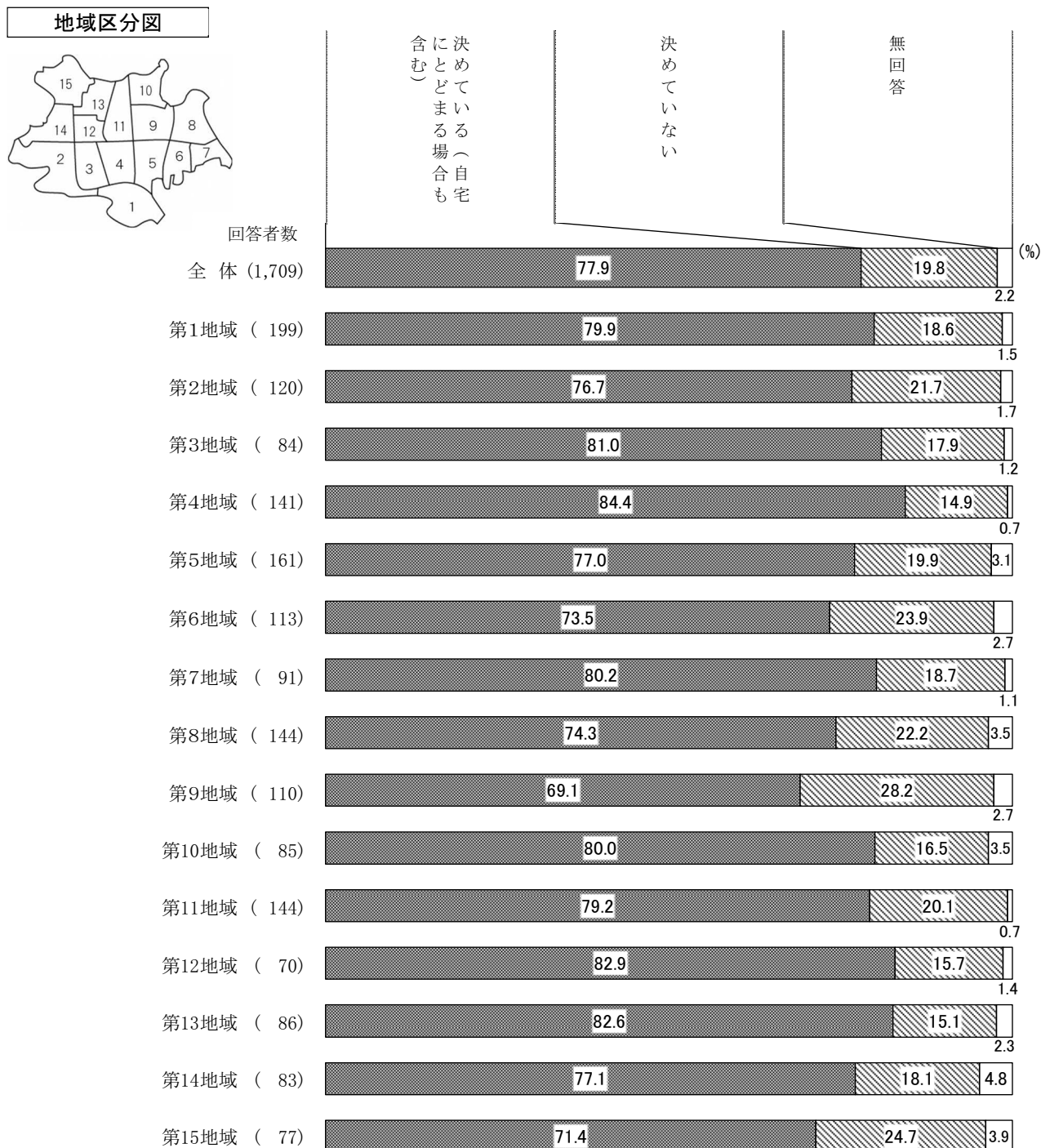
河川はん濫の恐れがある場合に避難する場所を事前に「決めている（自宅にとどまる場合も含む）」は77.9%を占めており、「決めていない」は19.8%となっている。

経年でみると、本設問は前回の令和2年調査から新設されているが、回答割合に大きな違いはみられない。

第3章 調査結果の分析 〈洪水対策〉

地域別にみると、「決めている（自宅にとどまる場合も含む）」は第4地域が84.4%と最も高く、次いで、第12地域（82.9%）と第13地域（82.6%）が8割強で高くなっている。一方、第9地域で69.1%と最も低くなっている。

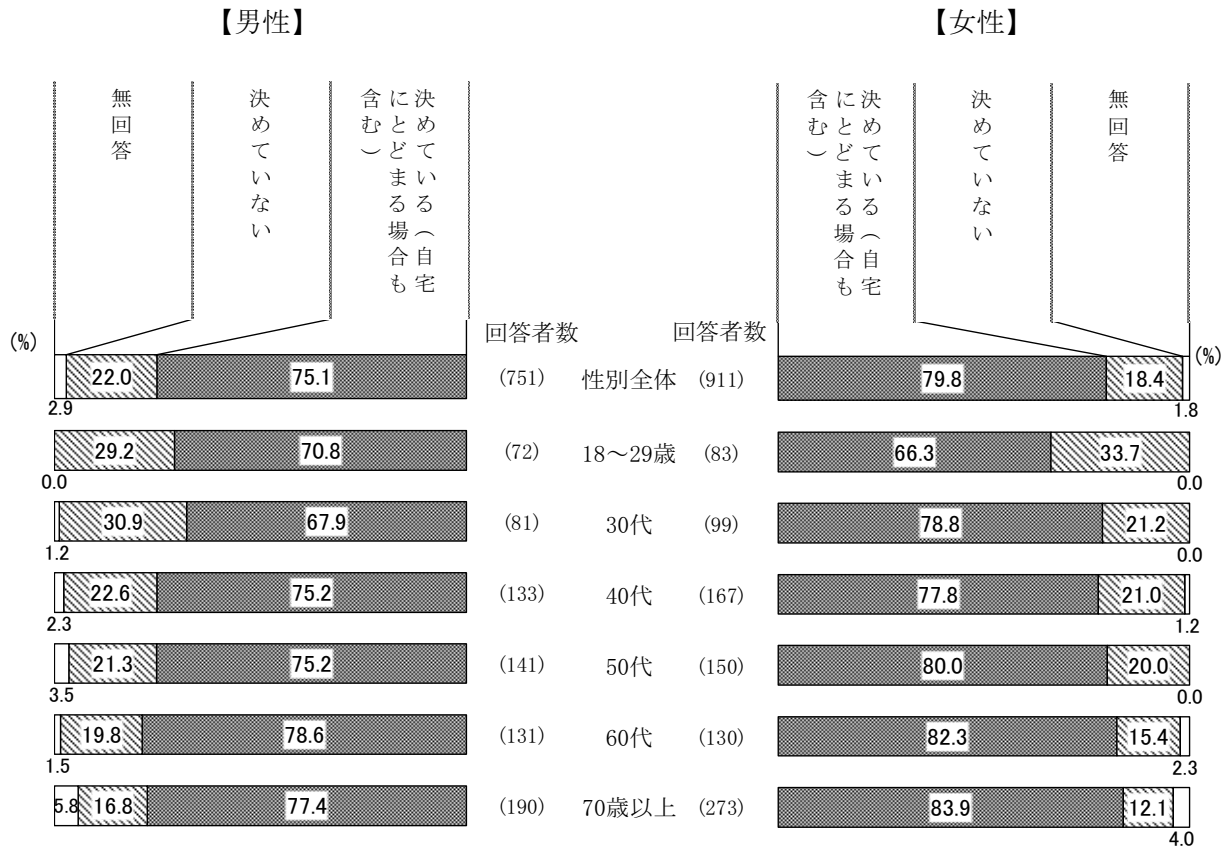
図3-2-2 地域別／河川はん濫時の避難場所の事前決定



性別にみると、「決めている（自宅にとどまる場合も含む）」は、女性（79.8％）の方が男性（75.1％）より4.7ポイント高くなっている。

性・年代別にみると、「決めている（自宅にとどまる場合も含む）」は女性の70歳以上（83.9％）で最も高く、女性の18～29歳（66.3％）で最も低く、男女ともおおむね年齢が上がるほど割合が高くなっている。

図3-2-3 性別、性・年代別／河川はん濫時の避難場所の事前決定



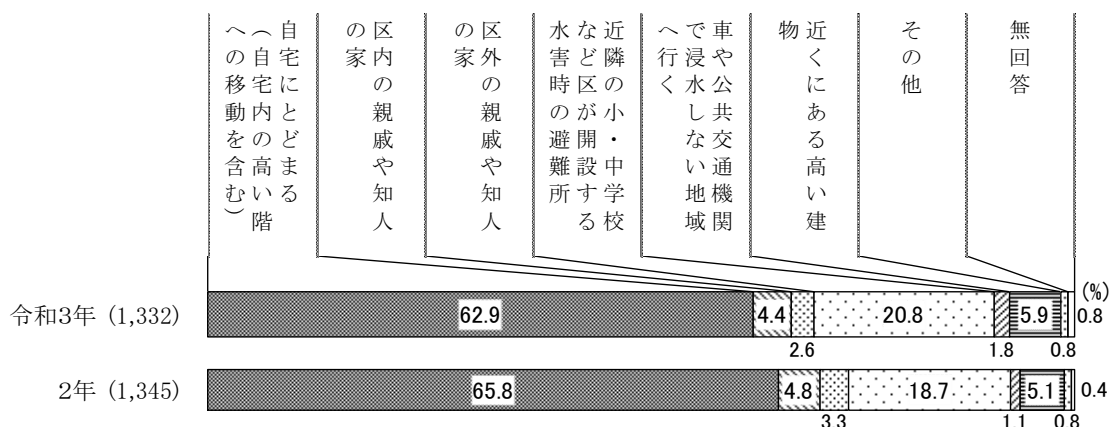
（3）事前に決めている河川はん濫時の避難場所

■「自宅にとどまる（自宅内の高い階への移動を含む）」が6割強

問11で「1 決めている（自宅にとどまる場合も含む）」とお答えの方に

問11—1 あなたが、避難する場所はどこですか（○は1つだけ）。

図3-3-1 前回調査比較／事前に決めている河川はん濫時の避難場所

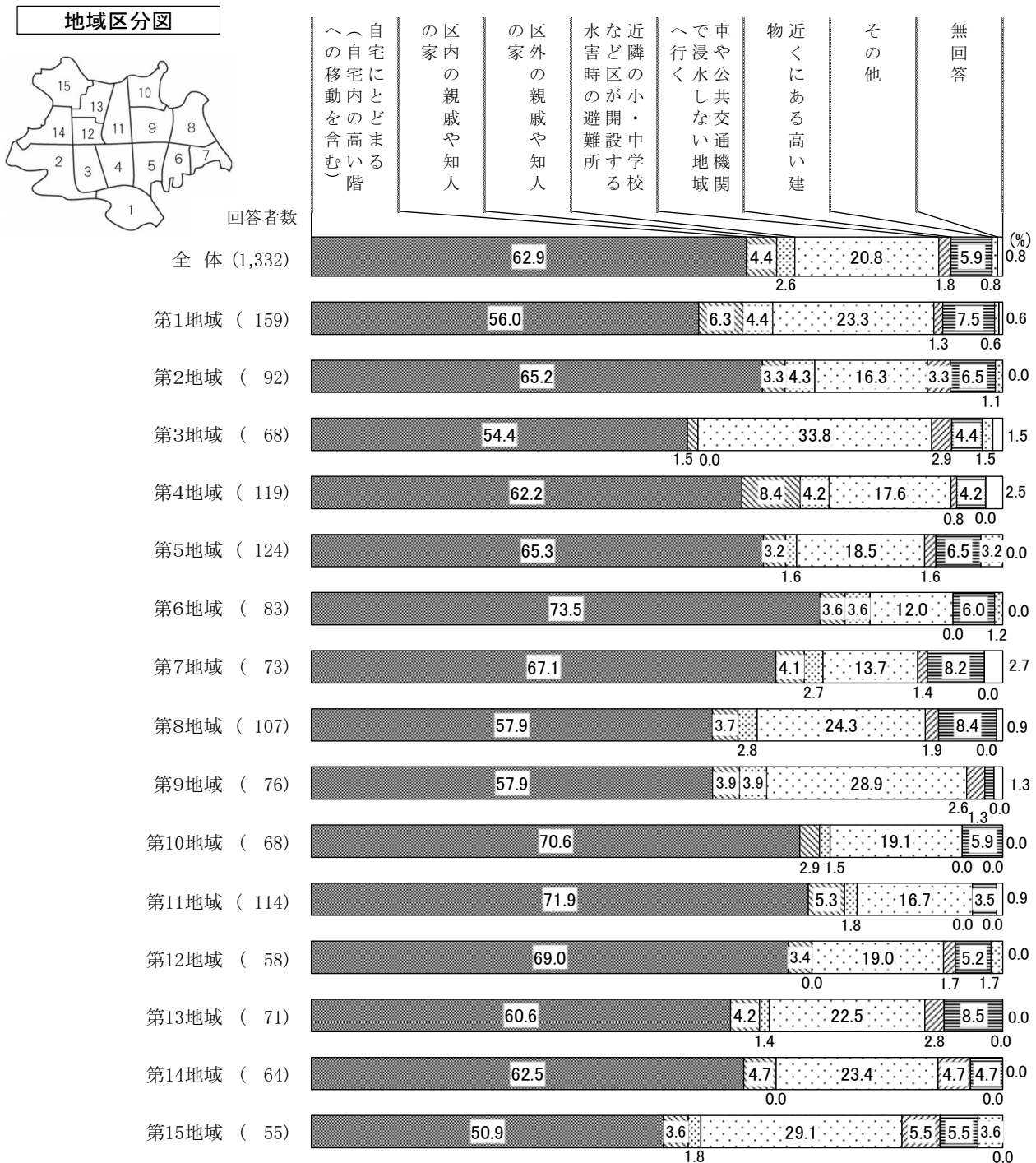


河川はん濫の恐れがある場合に避難する場所を事前に「決めている（自宅にとどまる場合も含む）」と回答した人に、事前に決めている避難場所を聞いた結果（単数回答）は、「自宅にとどまる（自宅内の高い階への移動を含む）」が6割強と最も高く、次いで「近隣の小・中学校など区が開設する水害時の避難所」が2割で続き、「近くにある高い建物」（5.9%）、「区内の親戚や知人の家」（4.4%）、「区外の親戚や知人の家」（2.6%）などはいずれも1割未満となっている。

経年でみると、「自宅にとどまる（自宅内の高い階への移動を含む）」は前回の令和2年調査（65.3%）から2.9ポイント減少し、逆に「近隣の小・中学校など区が開設する水害時の避難所」（前回18.7%）が2.1ポイント増加している。

地域別にみると、「自宅にとどまる（自宅内の高い階への移動を含む）」は、第6地域で73.5%と最も高く、次いで第11地域（71.9%）と第10地域（70.6%）が7割台で続き、第15地域で50.9%と最も低くなっている。「近隣の小・中学校などが開設する水害時の避難場所」は第3地域が33.8%で最も高く、第6地域が12.0%で最も低くなっている。

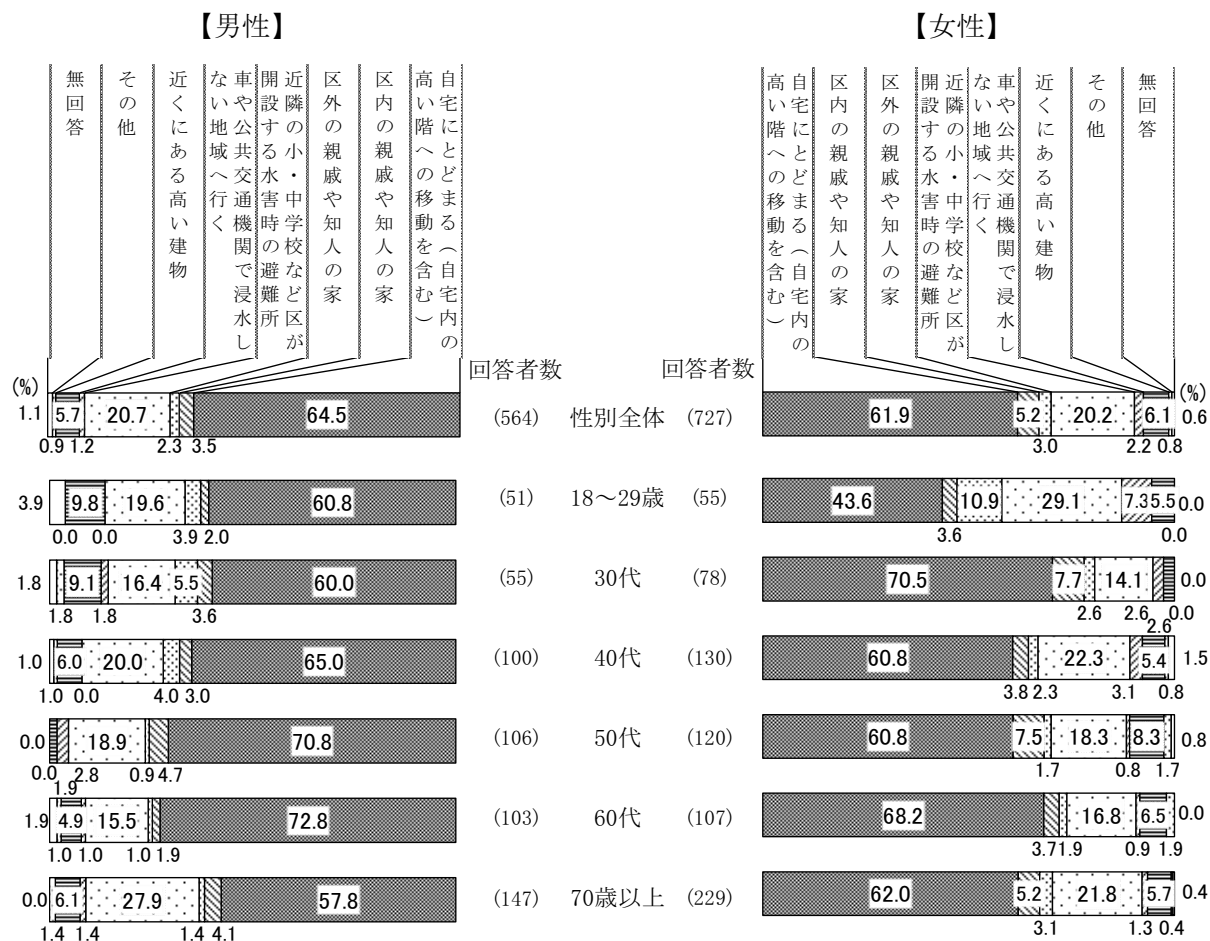
図3-3-2 地域別／事前に決めている河川はん濫時の避難場所



性別にみると、「自宅にとどまる（自宅内の高い階への移動を含む）」は男性（64.5%）の方が女性（61.9%）より2.6ポイント高くなっている。

性・年代別にみると、「自宅にとどまる（自宅内の高い階への移動を含む）」は男性の60代（72.8%）、50代（70.8%）、女性の30代（70.5%）で7割台と高く、女性の18～29歳で43.6%と他の層に比べて特に低くなっている。一方、「近隣の小・中学校など区が開設する水害時の避難所」では女性の18～29歳が29.1%で最も高くなっている。

図3-3-3 性別、性・年代別／事前に決めている河川はん濫時の避難場所



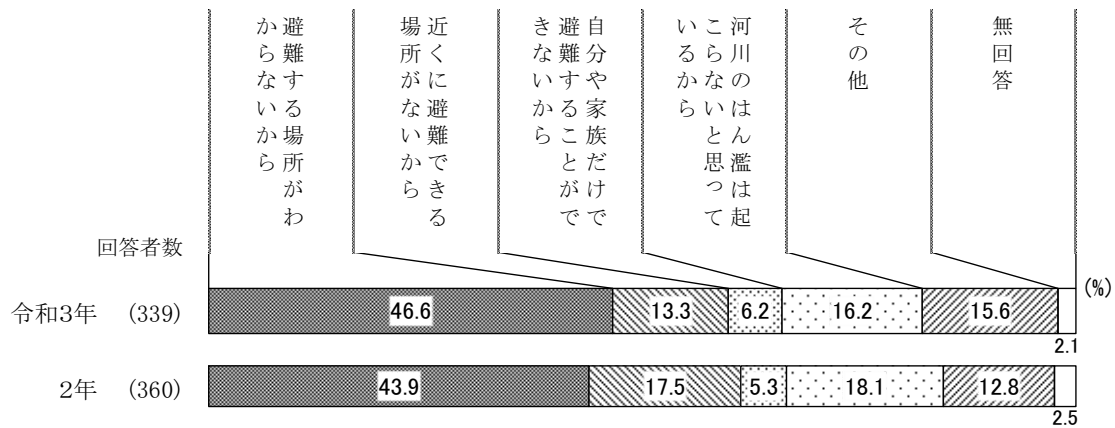
（4）河川はん濫時の避難場所を決めていない理由

■「避難する場所がわからないから」が4割台半ばで微増

問11で「2 決めていない」とお答えの方に

問11－2 避難する場所を決めていない理由はなんですか（○は1つだけ）。

図3－4－1 前回調査比較／河川はん濫時の避難場所を決めていない理由



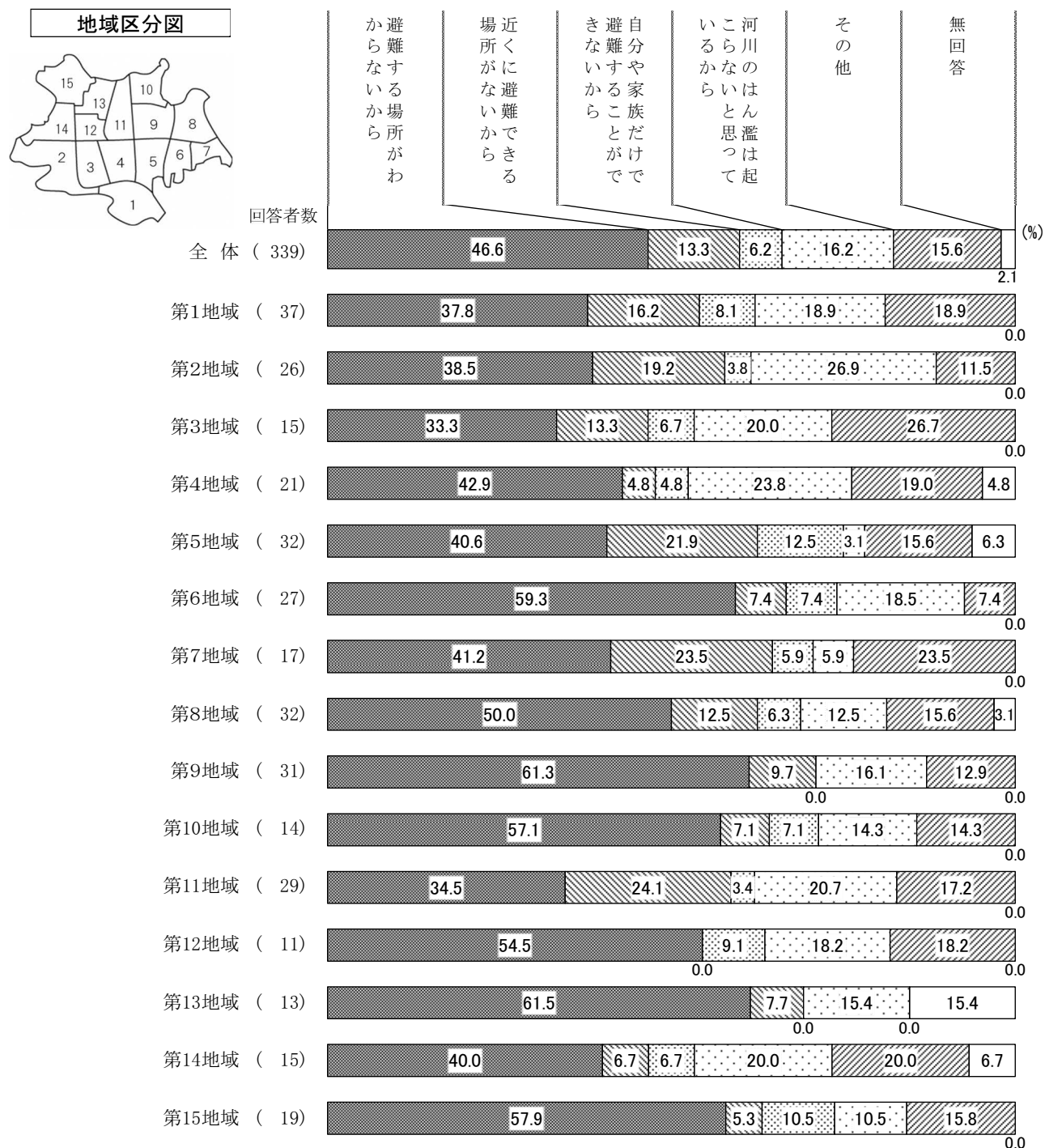
河川はん濫の恐れがある場合に避難する場所を事前に「決めていない」と回答した人に、事前に決めていない理由を聞いた結果、「避難する場所がわからないから」が4割台半ばを占めて最も多く、次いで「河川のはん濫は起こらないと思っているから」（16.2%）、「近くに避難できる場所がないから」（13.3%）などとなっている。

経年でみると、「避難する場所がわからないから」は前回の令和2年調査（43.9%）から2.7ポイント増加し、逆に「近くに避難できる場所がないから」（前回17.5%）が4.2ポイント減少している。

第3章 調査結果の分析 〈洪水対策〉

地域別にみると、大半の地域でサンプル数が少ないことからあくまで参考値ながら、「避難する場所がわからないから」は第13地域、第9地域、第6地域で6割前後と高く、逆に、第3地域、第11地域、第1地域、第2地域で3割台と低くなっている。また、「近くに避難できる場所がないから」は第11地域、第7地域、第5地域で2割台と高く、逆に、第4地域、第15地域で5%前後と低くなっている。

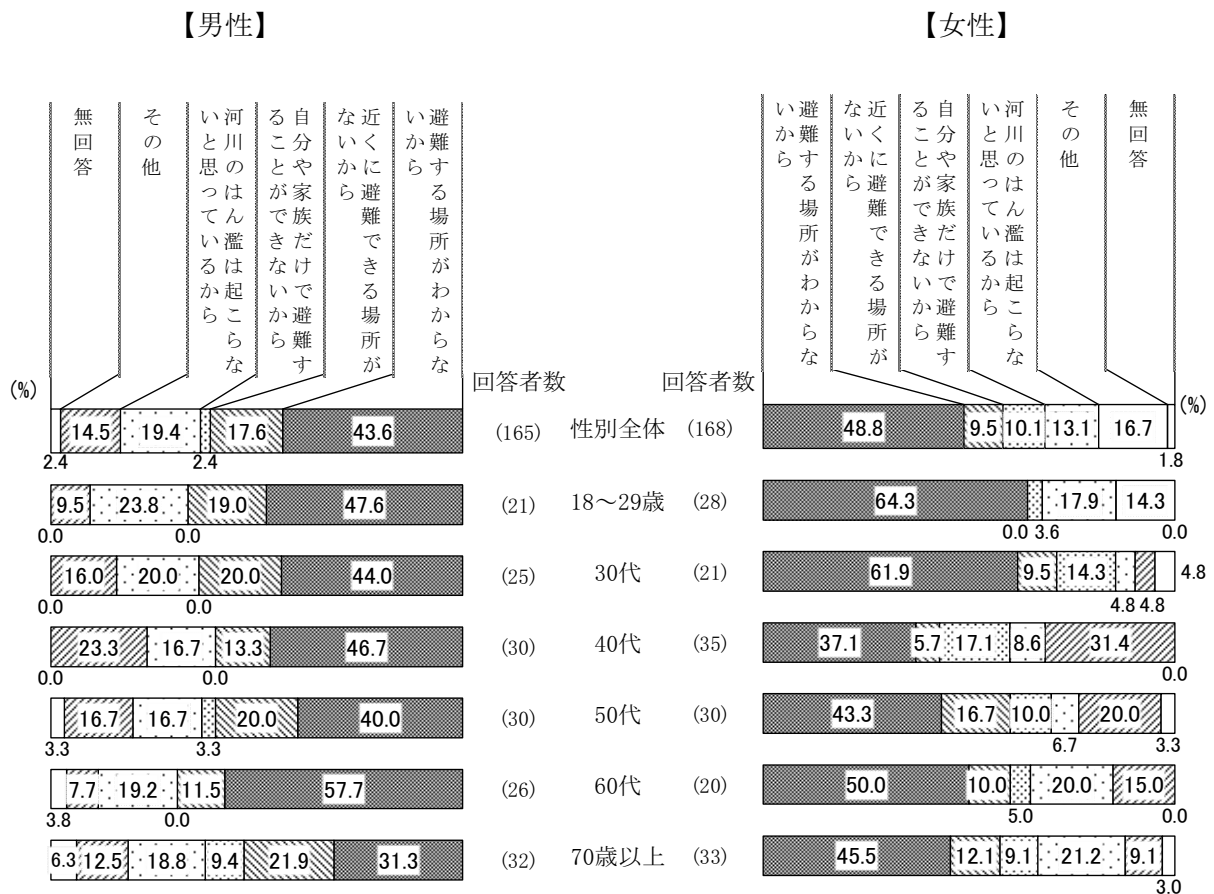
図3-4-2 地域別／河川はん濫時の避難場所を決めていない理由



性別にみると、「近くに避難できる場所がないから」は男性（17.6％）の方が女性（9.5％）より8.1ポイント高く、逆に「自分や家族だけで避難することができないから」は女性（10.1％）の方が男性（2.4％）より7.7ポイント高くなっている。

性・年代別にみると、男女とも30代以下と60代でサンプル数が少ないことからあくまで参考値ながら、「避難する場所がわからないから」は女性の30代以下で6割台と高く、男性の70歳以上と女性の40代で3割台と低くなっている。一方「河川のはん濫は起こらないと思っているから」は男性の30代以下と女性の60代以上で2割台と高く、女性の30代～50代で1割未満と低くなっている。

図3-4-3 性別、性・年代別／河川はん濫時の避難場所を決めていない理由



(5) 河川はん濫による浸水被害の際の対処

■「避難する」は〈区から避難指示が発令〉が7割弱、〈自宅付近が浸水〉が6割台半ば

問12 河川がはん濫して、浸水被害になるような大洪水が迫っている場合、以下のア～カまでの情報を知ったとき、あなたは避難しますか（自宅内の高い場所への移動も含む）。

（○はそれぞれ1つずつ）

図3-5-1-① 経年比較／河川はん濫による浸水被害の際の対処

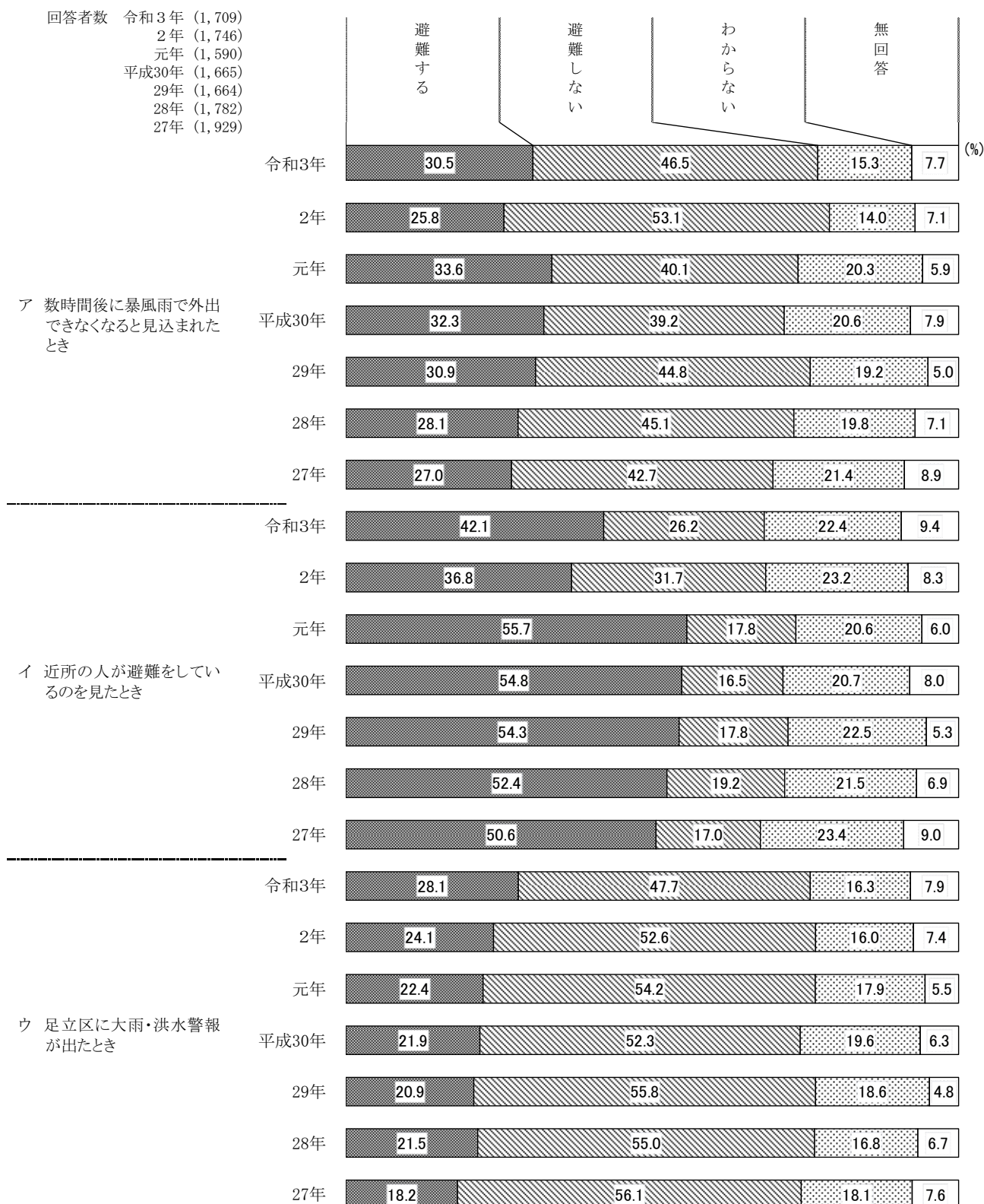
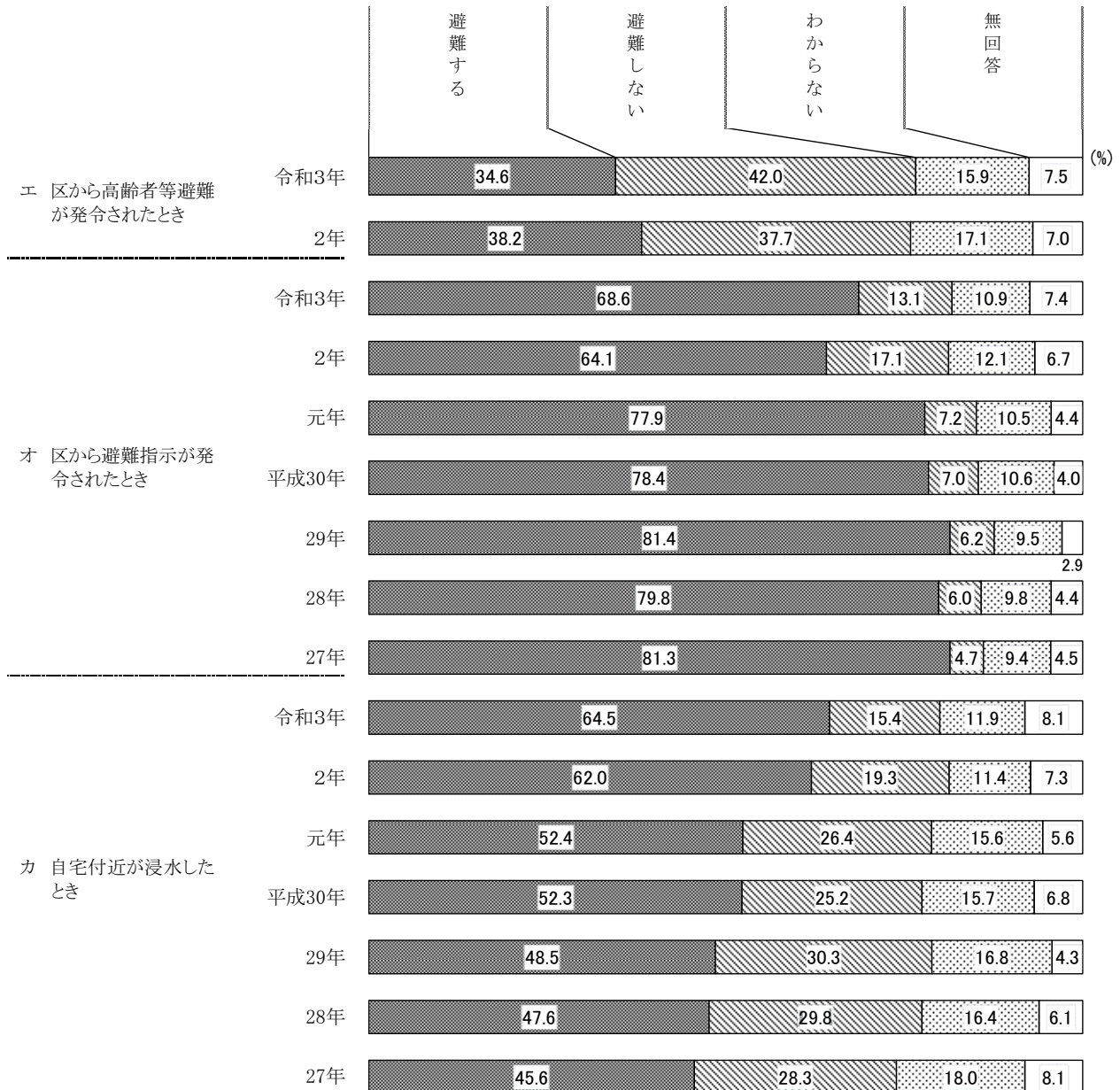


図3-5-1-② 経年比較／河川はん濫による浸水被害の際の対処



※「エ」は令和2年度からの新設項目。令和2年度の「区から避難準備・高齢者等避難開始が発令されたとき」から令和3年度で表現をかえた。

※「オ」は令和2年度の「区から避難勧告・指示が発令されたとき」から令和3年度で表現をかえた。

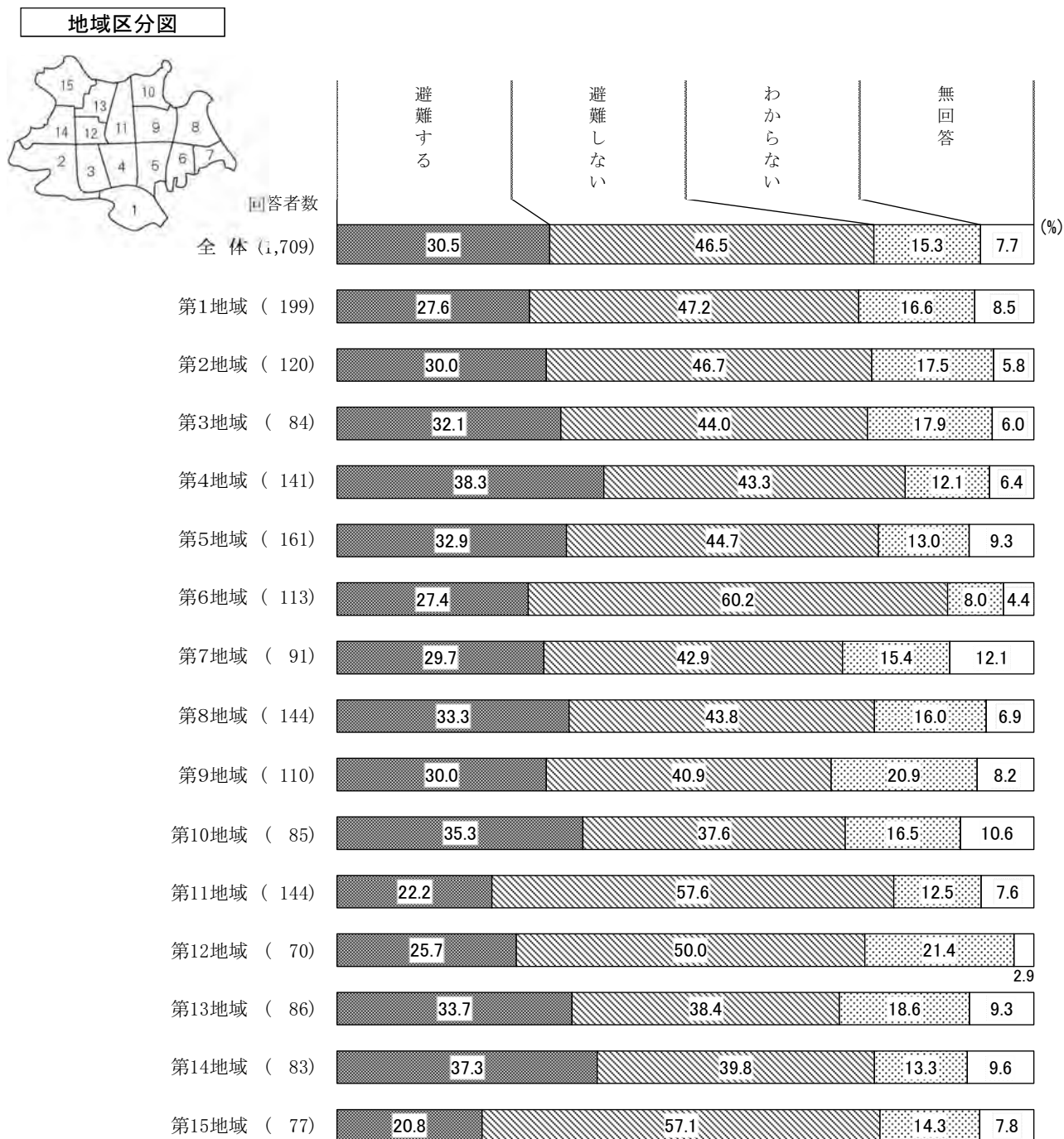
河川がはん濫して、数メートルの浸水被害になるような大洪水が迫っていると仮定した場合、どのような情報を知って避難するかをア～カの6項目について質問した。

「避難する」の割合が多い順にみると、〈オ 区から避難指示が発令されたとき〉が68.6%で最も高く、次いで〈カ 自宅付近が浸水したとき〉(64.5%)、〈イ 近所の人が避難をしているのを見たとき〉(42.1%)、〈エ 区から高齢者等避難が発令されたとき〉(34.6%)などとなっている。

「避難する」を前回調査との増減でみると、〈イ 近所の人が避難をしているのを見たとき〉が5.3ポイント増で最も大きく、次いで〈ア 数時間後に暴風雨で外出できなくなると見込まれたとき〉(4.7ポイント増)となった。一方で〈エ 区から高齢者等避難が発令されたとき〉が3.6ポイントの減少となっている。

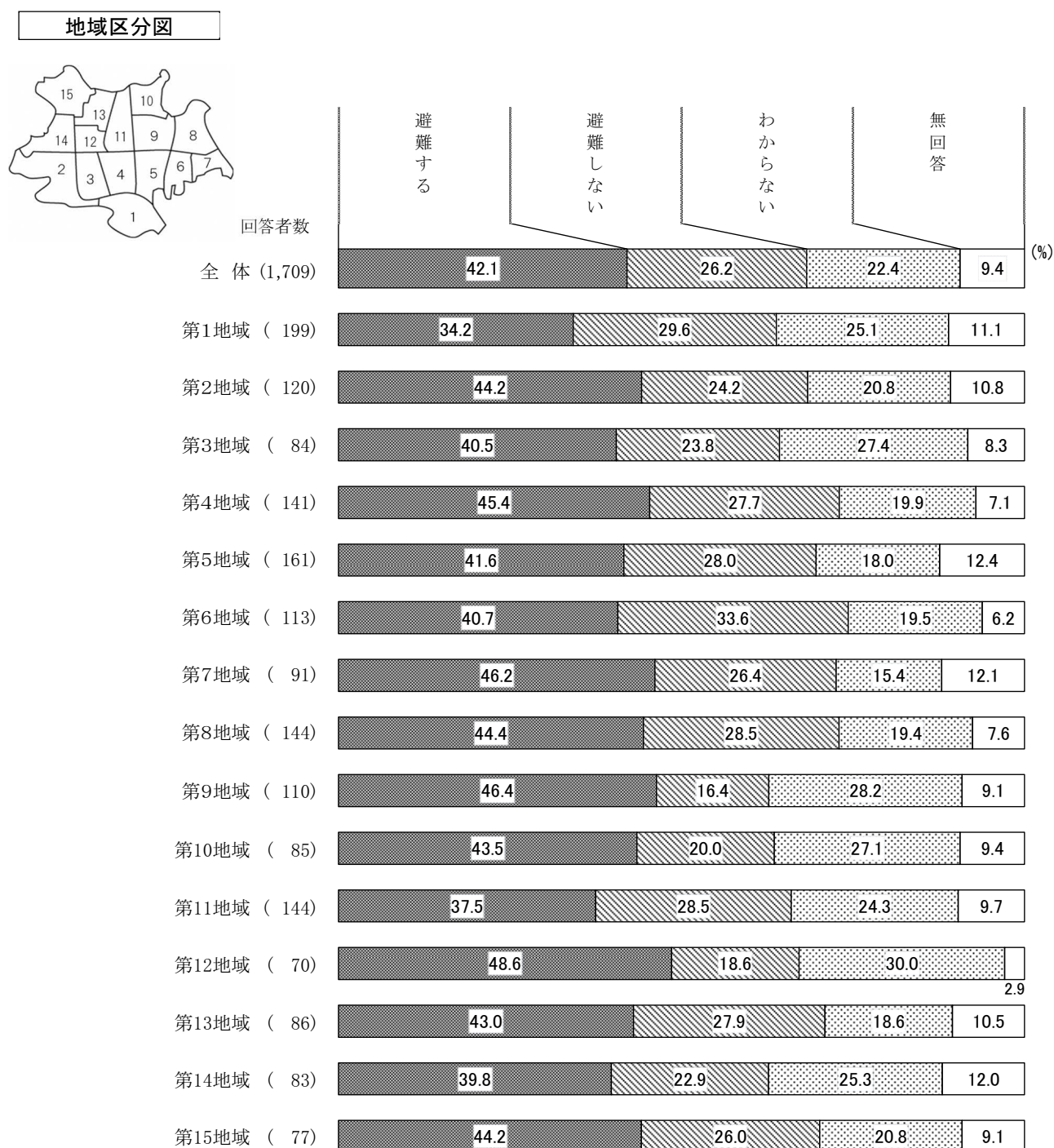
〈ア 数時間後に暴風雨で外出できなくなると見込まれたとき〉について地域別でみると、「避難する」は第4地域で38.3%と最も高く、次いで第14地域（37.3%）となっている。一方、「避難しない」は第6地域で60.2%と最も高く、次いで第11地域（57.6%）となっている。

図3-5-2-① 地域別／河川はん濫による浸水被害の際の対処
／数時間後に暴風雨で外出できなくなると見込まれたとき



〈イ 近所の人が避難をしているのを見たとき〉について地域別でみると、「避難する」は第12地域で48.6%と最も高く、次いで第9地域（46.4%）となっている。一方、「避難しない」は第6地域で33.6%と最も高く、次いで第1地域（29.6%）となっている。

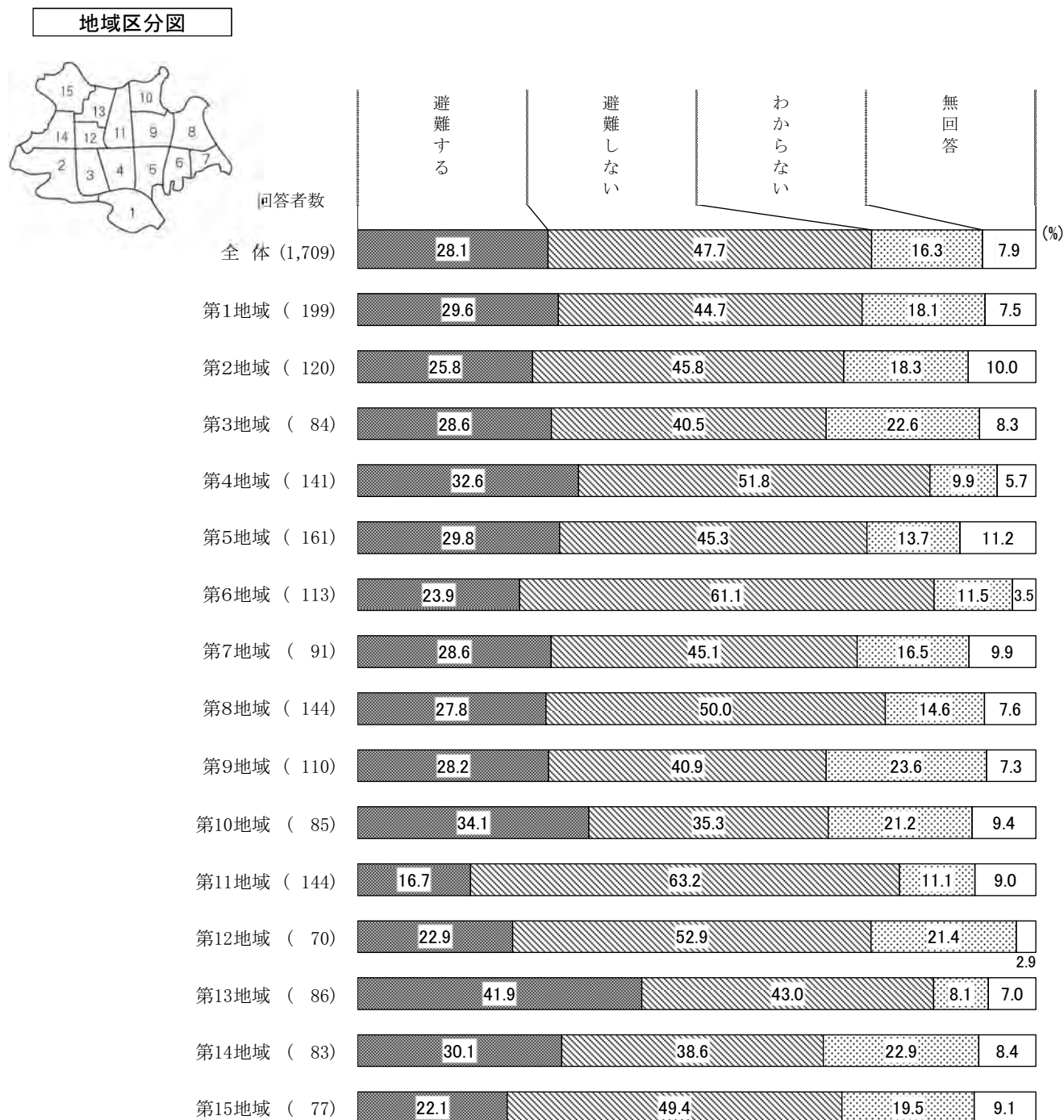
図3-5-2-② 地域別／河川はん濫による浸水被害の際の対処
／近所の人が避難をしているのを見たとき



第3章 調査結果の分析 〈洪水対策〉

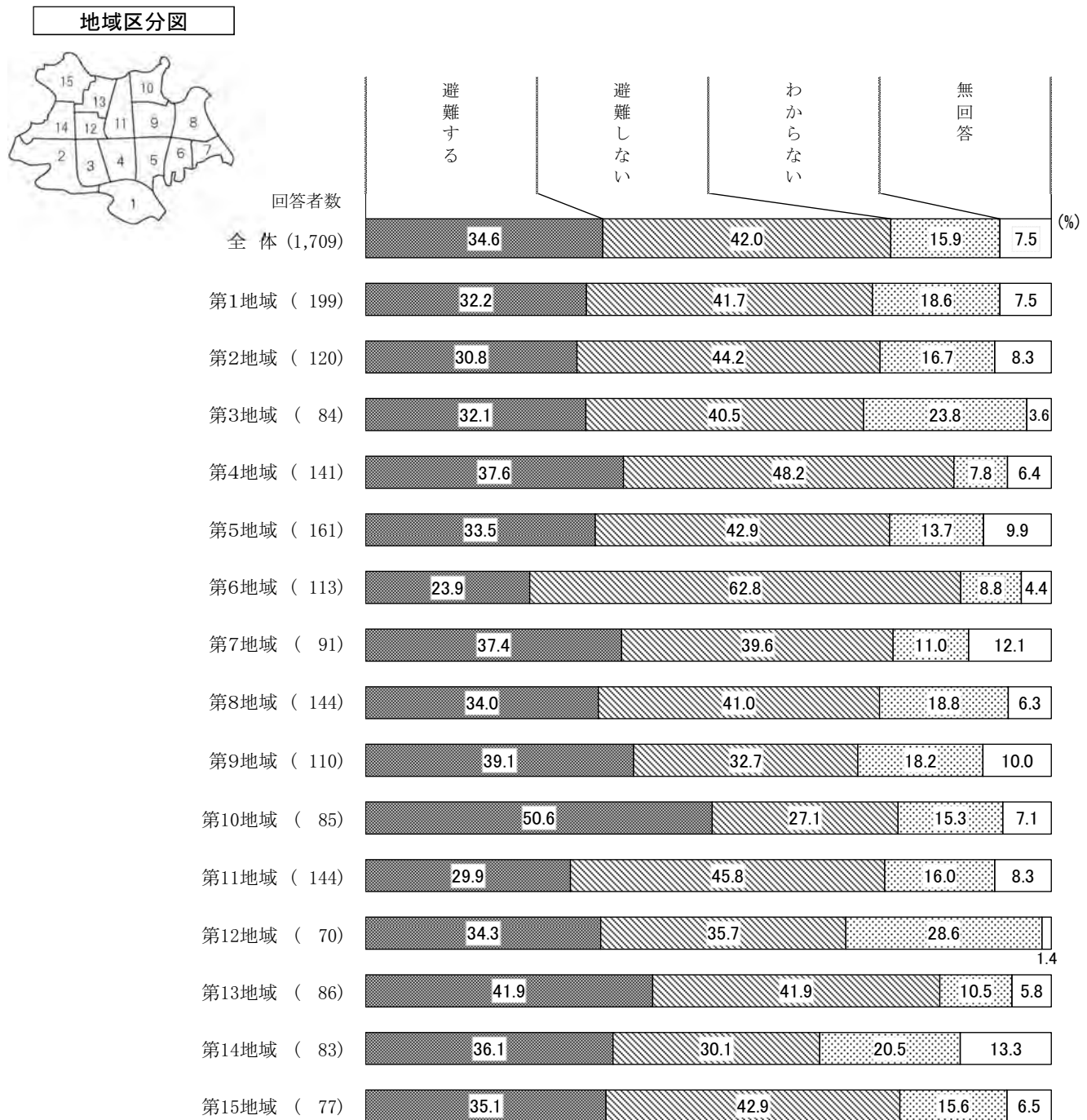
〈ウ 足立区に大雨・洪水警報が出たとき〉について地域別でみると、「避難する」は第13地域で41.9%と最も高く、次いで第10地域（34.1%）となっている。一方、「避難しない」は第11地域で63.2%と最も高く、次いで第6地域（61.1%）となっている。

図3-5-2-③ 地域別／河川はん濫による浸水被害の際の対処
／足立区に大雨・洪水警報が出たとき



〈エ 区から高齢者等避難が発令されたとき〉について地域別でみると、「避難する」は第10地域で50.6%と他の地域に比べ特に高く、次いで第13地域（41.9%）となっている。一方、「避難しない」は第6地域で62.8%と他の地域に比べ特に高く、次いで第4地域（48.2%）となっている。

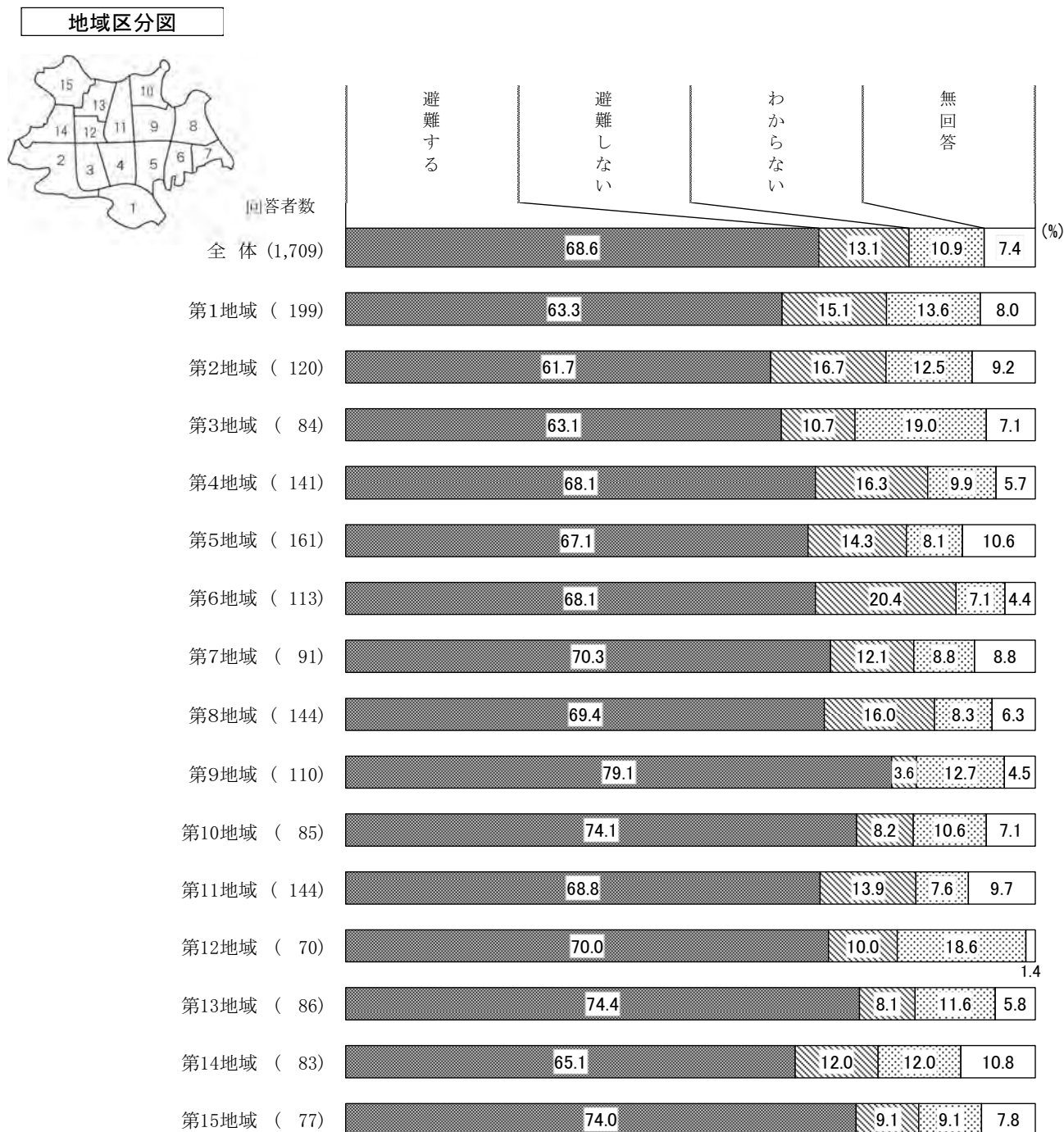
図3-5-2-④ 地域別／河川はん濫による浸水被害の際の対処
／区から高齢者等避難が発令されたとき



第3章 調査結果の分析 〈洪水対策〉

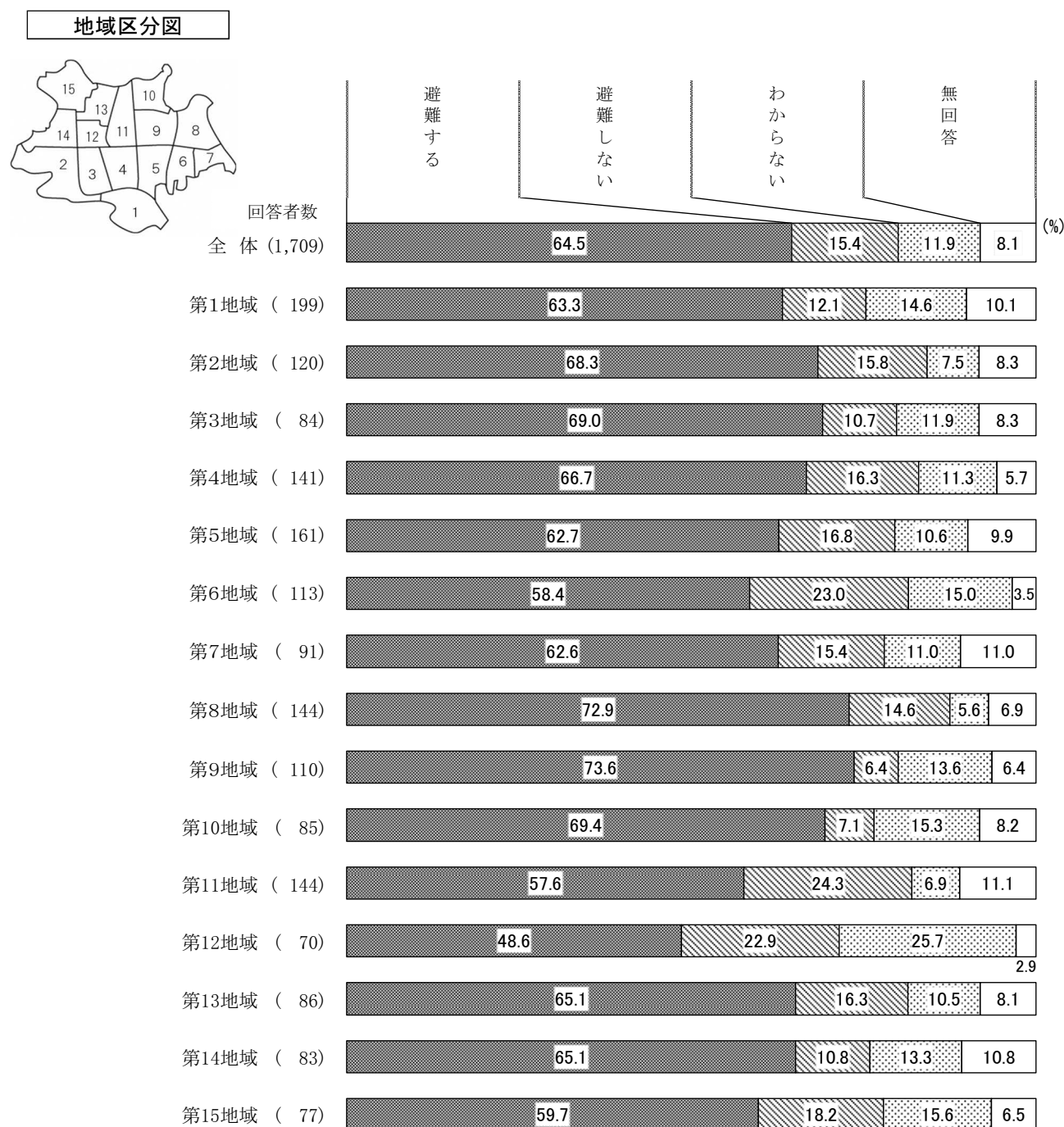
〈オ 区から避難指示が発令されたとき〉について地域別でみると、「避難する」は第9地域で79.1%と最も高く、次いで第13地域（74.4%）となっている。一方、「避難しない」は第6地域で20.4%と最も高く、次いで第2地域（16.7%）となっている。

図3-5-2-⑤ 地域別／河川はん濫による浸水被害の際の対処
／区から避難指示が発令されたとき



〈カ 自宅付近が浸水したとき〉について地域別でみると、「避難する」は第9地域で73.6%と最も高く、次いで第8地域（72.9%）となっている。一方、「避難しない」は第11地域で24.3%と最も高く、次いで第6地域（23.0%）となっている。

図3-5-2-⑥ 地域別／河川はん濫による浸水被害の際の対処
／自宅付近が浸水したとき



4 区の情報発信のあり方

-
- (1) 区の情報入手手段
 - (2) 重要と考える区の情報
 - (3) 必要な時に必要とする区の情報入手状況
 - (4) 区の情報得られない理由
 - (5) 区の情報得られない理由の詳細
-

4 区の情報発信のあり方

(1) 区の情報入手手段

■「あだち広報」が7割、「区のHP」、「町会・自治会掲示板・回覧板」、「トキメキ」が3割前後

問13 あなたは、足立区に関する情報をどのような手段で入手していますか

(〇はあてはまるものすべて)。

図4-1-1-① 経年比較／区の情報入手手段

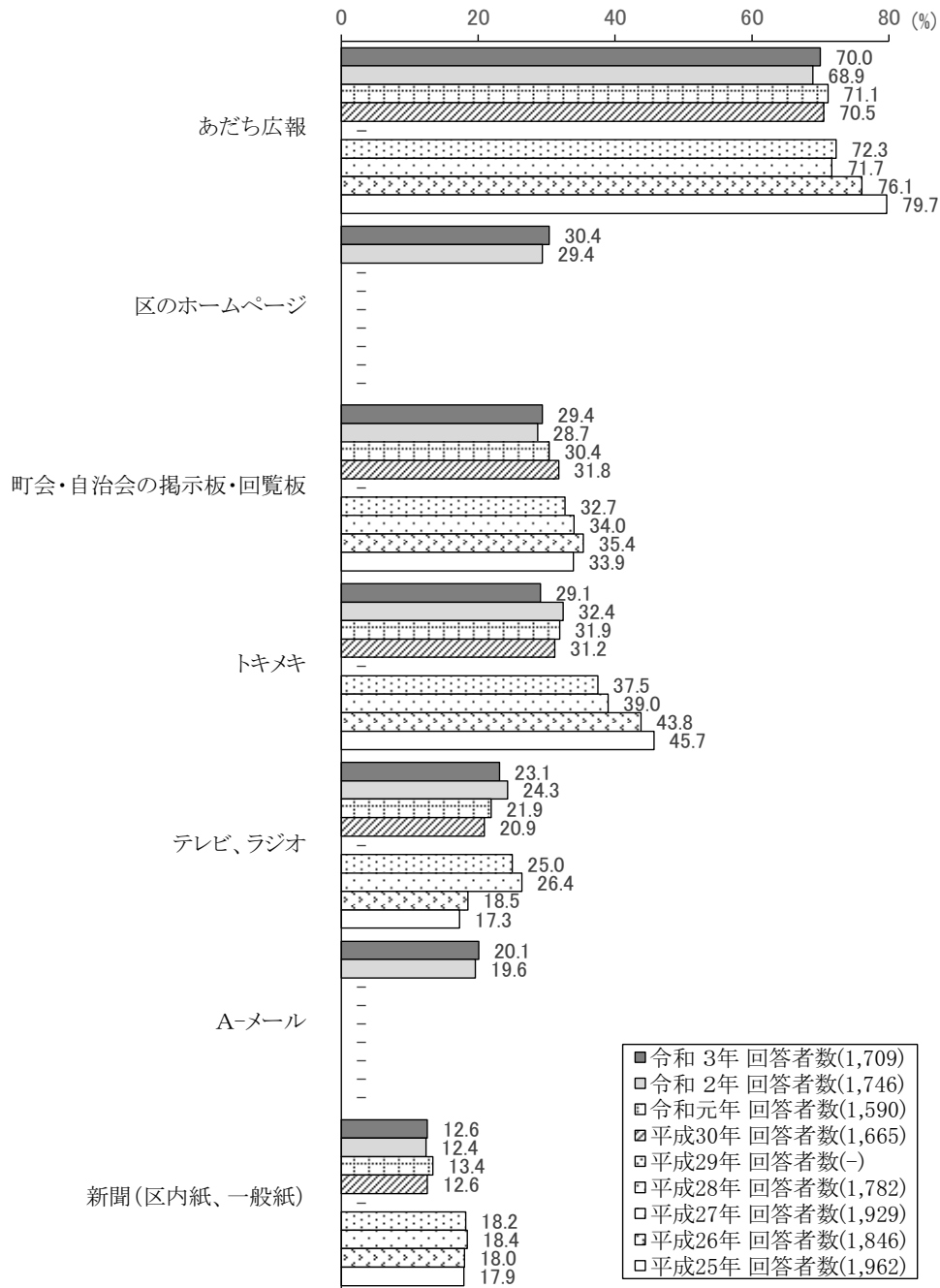


図4-1-1-② 経年比較／区情報の入手手段

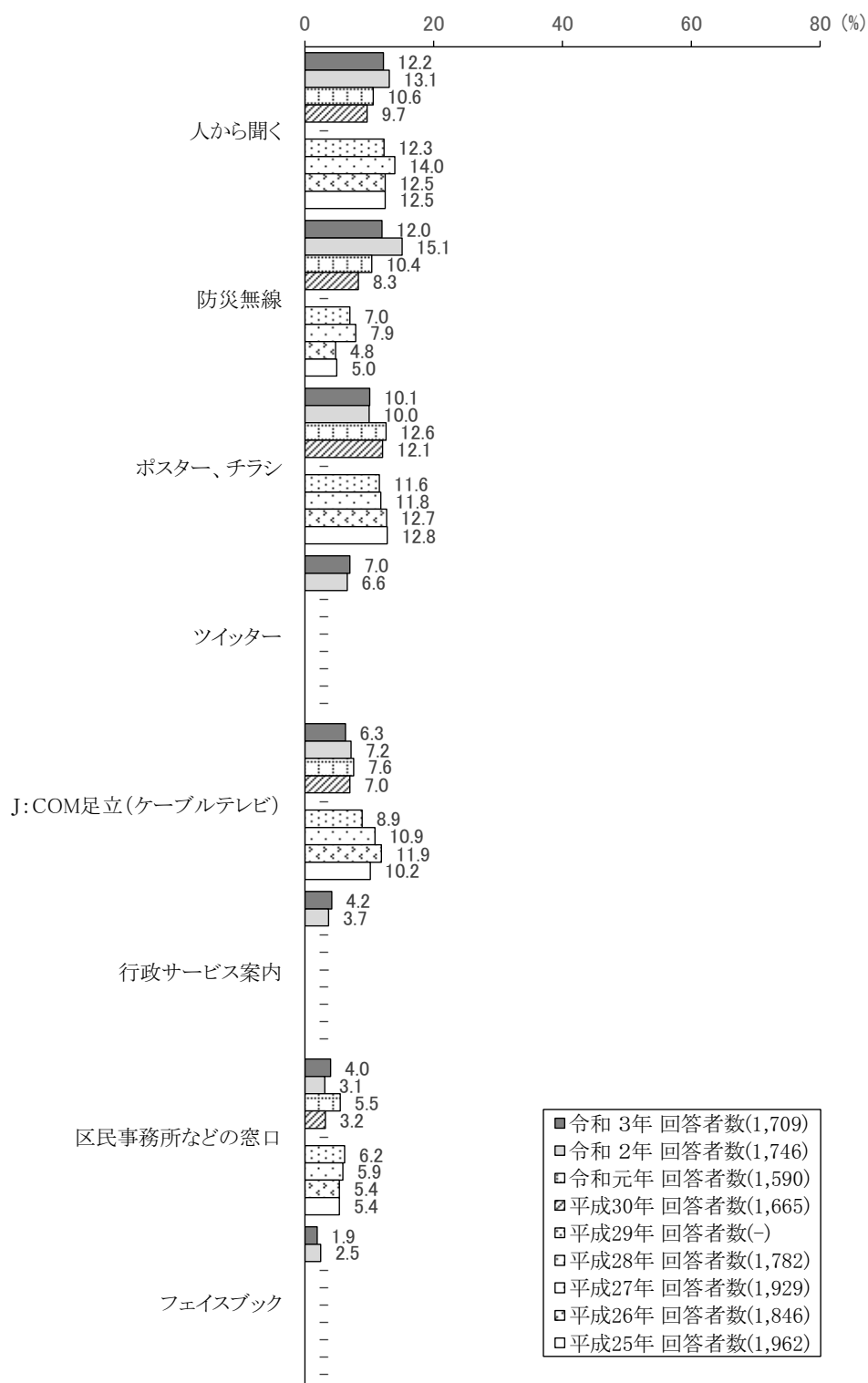
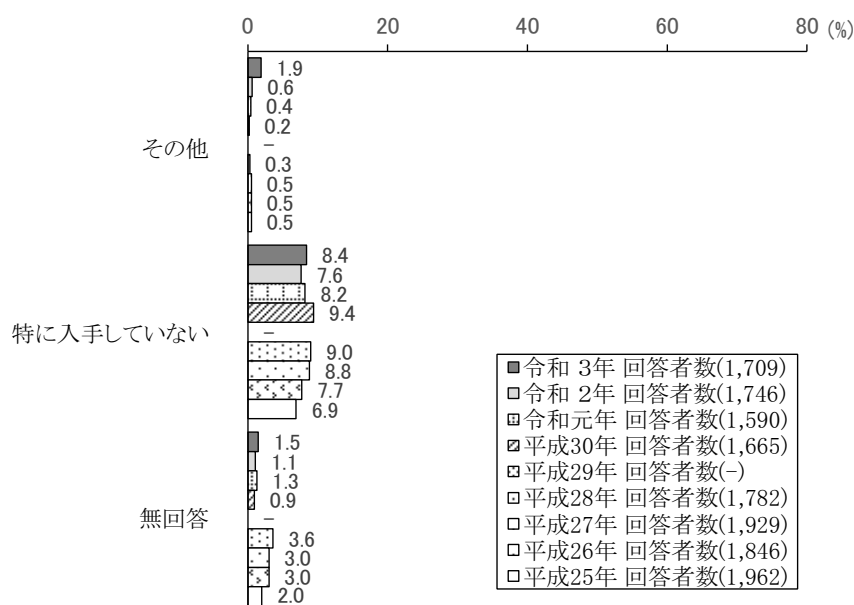


図4-1-1-③ 経年比較／区情報の入手手段



※ 本設問は、平成25年度以降聴取しているが、平成29年度では聴取していない。

※ 令和元年度まで「インターネット（区のホームページ、Aメール、ツイッター、フェイスブック）」の単独1項目で測定していたものを、令和2年度よりそれぞれの4項目に細分化して聴取している。

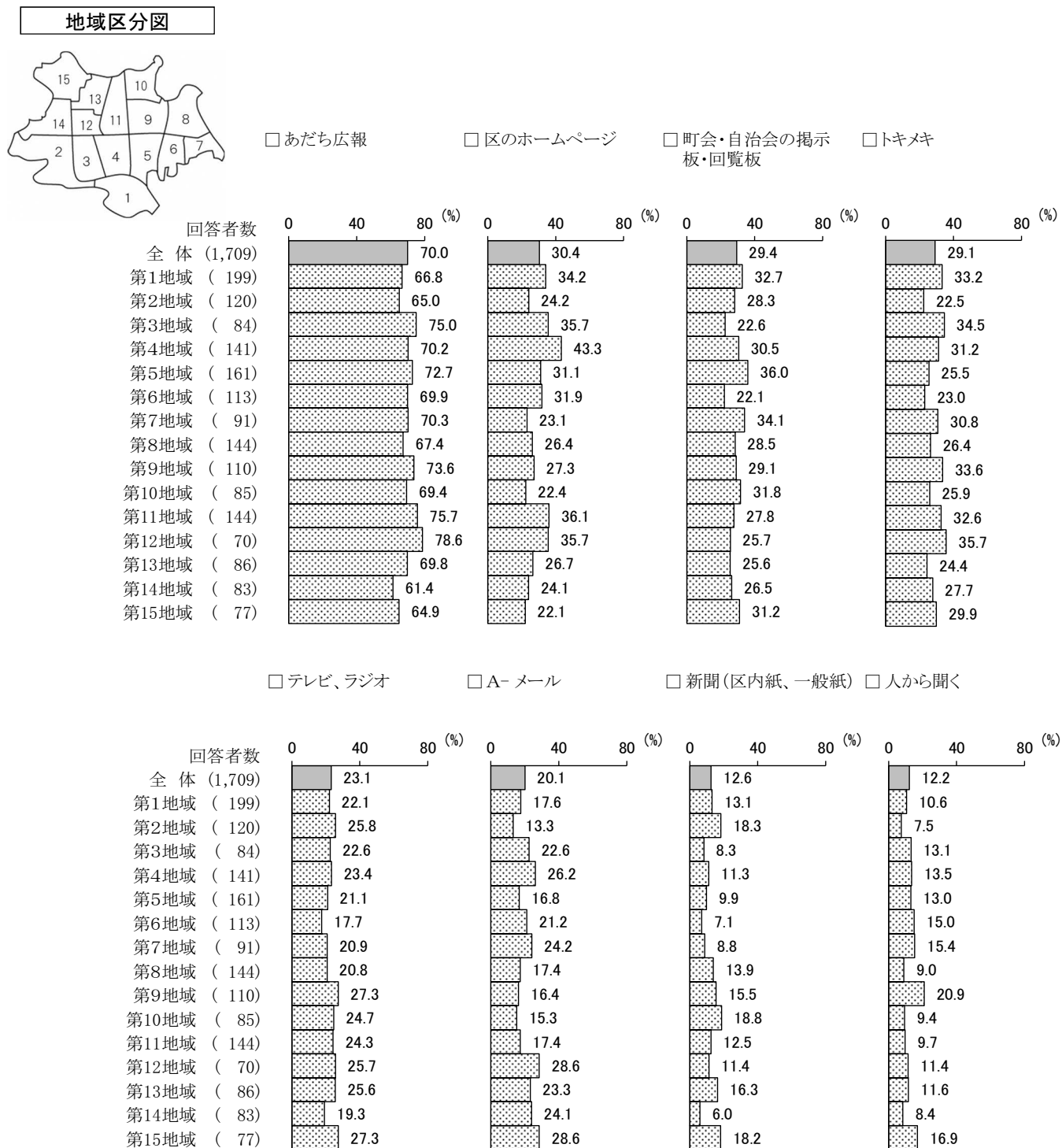
足立区に関する情報の入手媒体としては、「あだち広報」が70.0%で最も高く、以下「区のホームページ」(30.4%)、「町会・自治会の掲示板・回覧板」(29.4%)、「トキメキ」(29.1%)の3項目が3割前後で上位となっている。

経年でみると、「あだち広報」は平成27年調査以降7割前後と横ばいで推移している。2位の「区のホームページ」と3位の「町会・自治会の掲示板・回覧板」も前回の令和2年調査から変動はないが、4位の「トキメキ」は前回調査から3.3ポイント減少している。

第3章 調査結果の分析 〈 区の情報発信のあり方 〉

地域別でみると、「あだち広報」は第12地域で78.6%と最も高く、「区のホームページ」は第4地域（43.3%）、「町会・自治会の掲示板・回覧板」は第5地域（36.0%）、「トキメキ」は第12地域（35.7%）でそれぞれ最も高くなっているが、上位項目では「区のホームページ」の第4地域（43.3%）が他の地域に比べて特に高いのが目立っている。

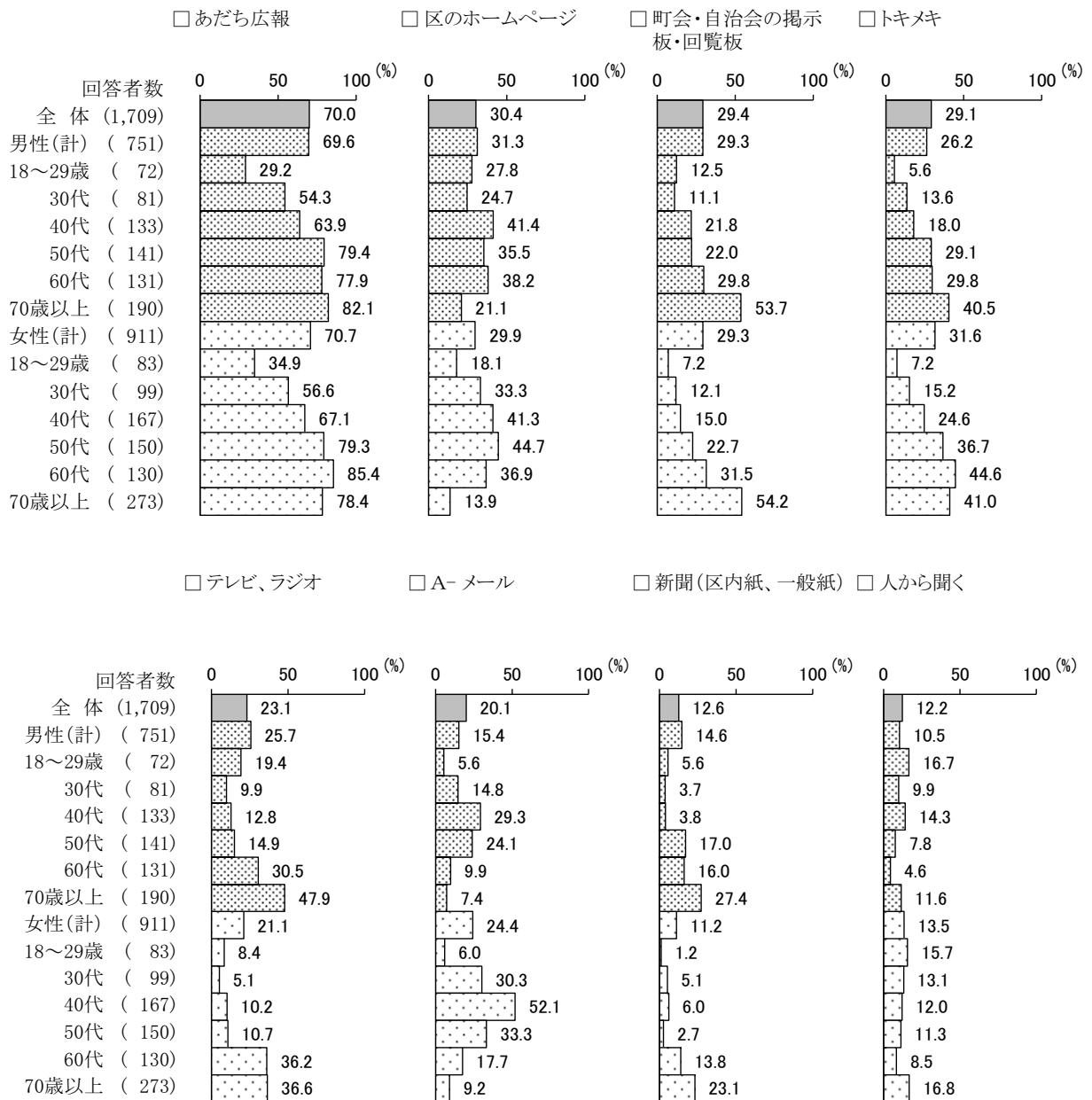
図4-1-2 地域別／区の情報入手手段／上位8項目



性別でみると、「テレビ、ラジオ」と「新聞（区内紙、一般紙）」で男性の方がそれぞれ4.6ポイント、3.4ポイント高く、逆に「A-メール」と「トキメキ」では女性の方がそれぞれ9.0ポイント、5.4ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、「あだち広報」は男女とも50代以上で7割台後半以上と高く、18～29歳で3割台以下と低く、年代層で大きな違いがみられる。この傾向は割合こそ違うものの「町会・自治会の掲示板・回覧板」、「トキメキ」、「テレビ、ラジオ」でも同様の傾向となっている。また、「区のホームページ」は男性の40代、女性の40代と50代で4割台と高く、「A-メール」は女性の40代で52.1%と他の年代に比べて特に高くなっている。

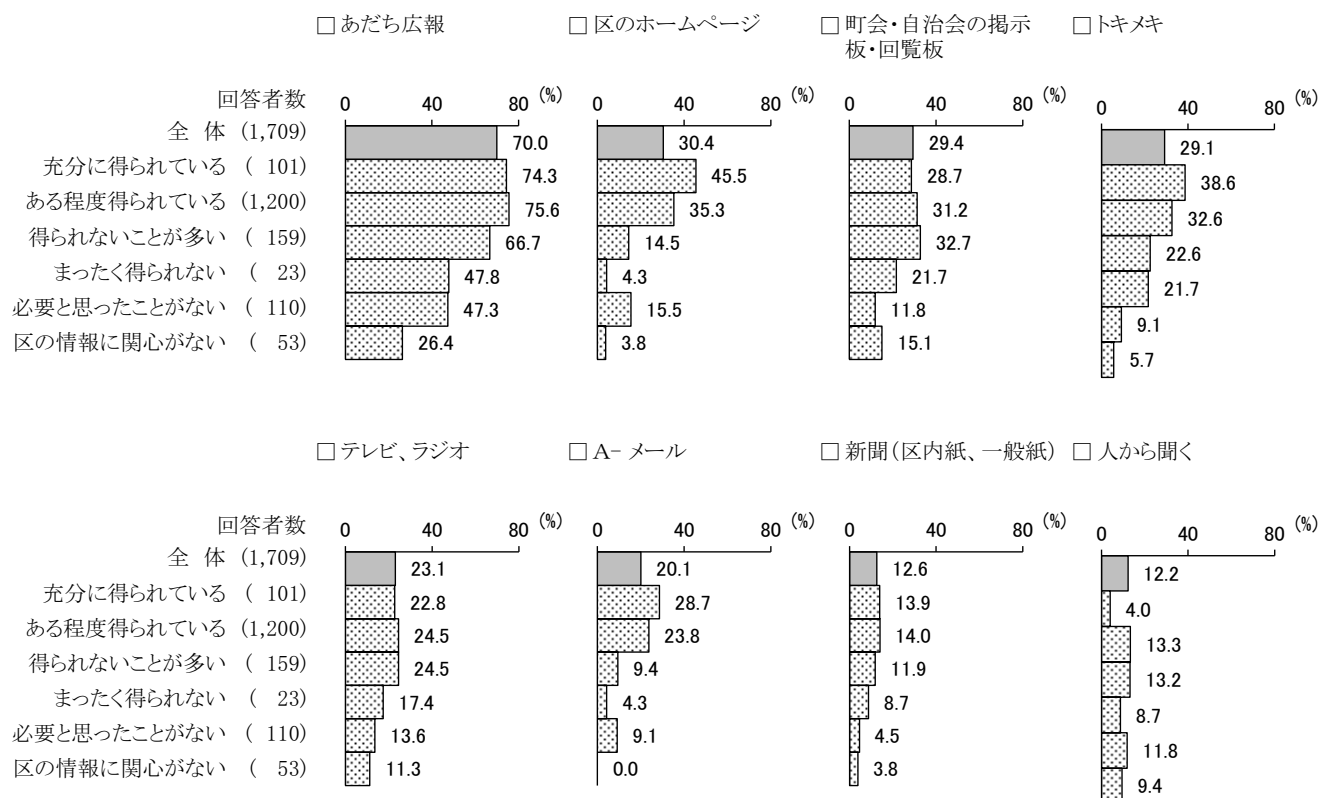
図4-1-3 性別、性・年代別／区の情報入手手段／上位8項目



第3章 調査結果の分析 〈 区の情報発信のあり方 〉

必要な時に必要とする区の情報入手状況別にみると、上位の「あだち広報」「区のホームページ」「町会・自治会の掲示板・回覧板」「トキメキ」などの多くの項目で、情報が得られている層の割合が高くなっている。

図4-1-4 必要な時に必要とする区の情報入手状況別／区の情報入手手段／上位8項目



(2) 重要と考える区の情報

■ “健康や福祉” と “災害や気象” がともに6割台前半で上位

問14 あなたは、区が発信するどのような情報が重要だと考えていますか

(○はあてはまるものすべて)。

図4-2-1-① 経年比較／重要と考える区の情報

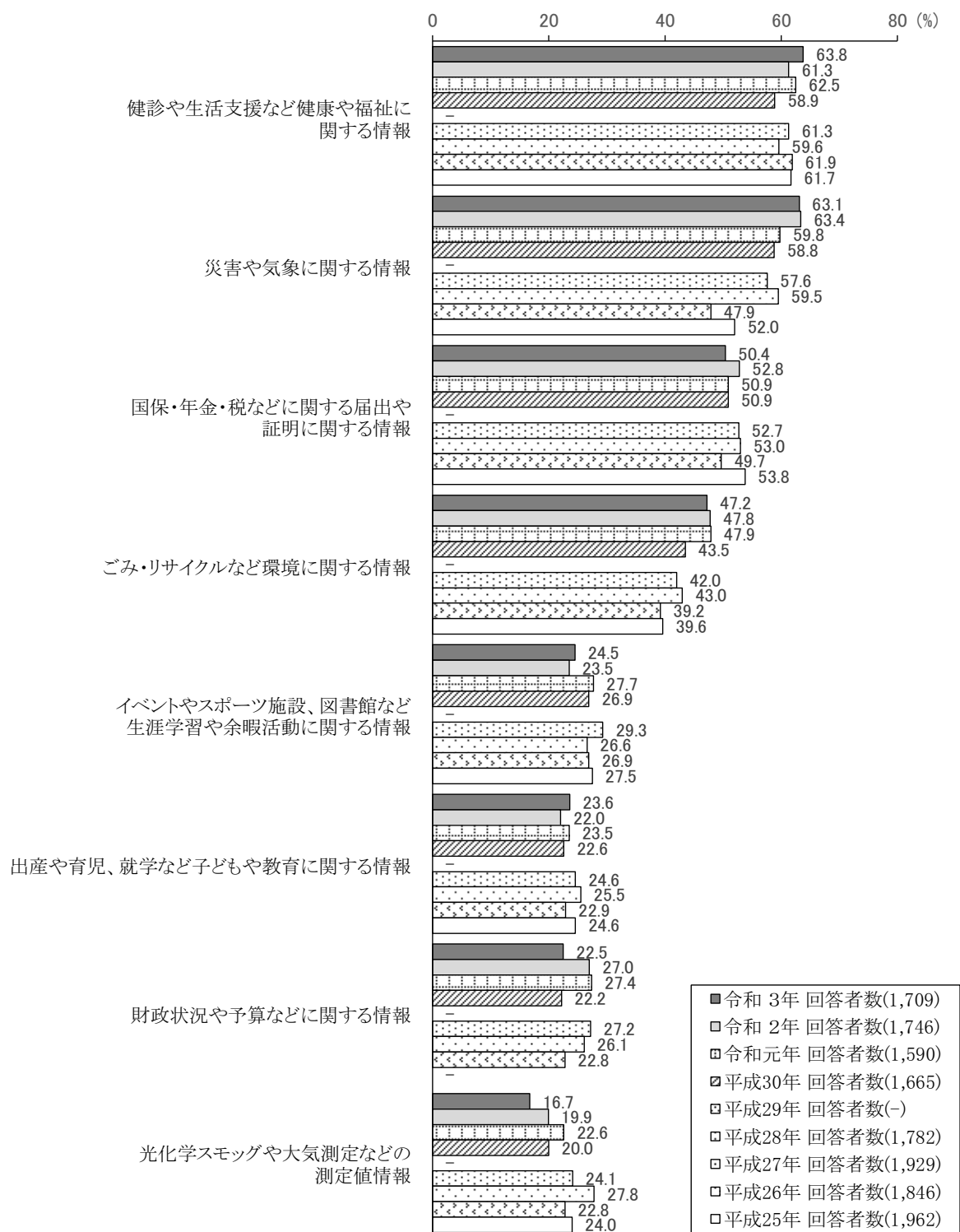
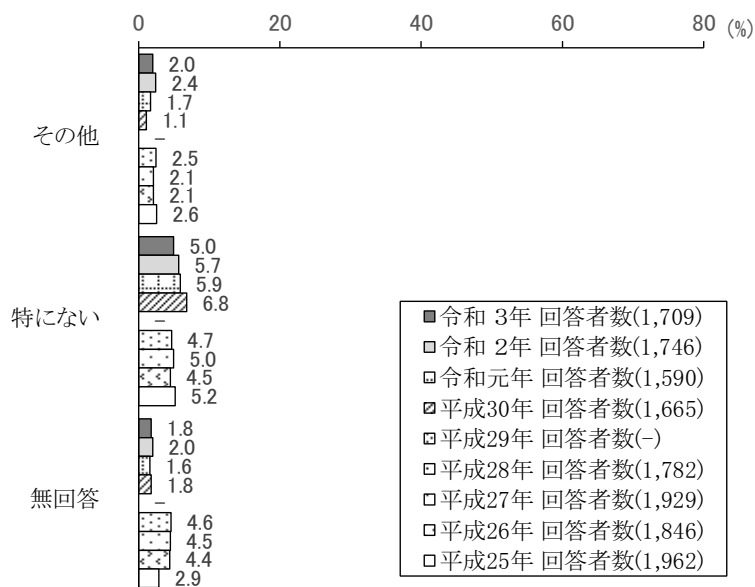


図4-2-1-② 経年比較／重要と考える区の情報



※ 本設問は、令和元年まで「どのような情報が必要だと思いますか」という設問文で聴取していたが、令和2年調査から「どのような情報が重要だと考えていますか」という設問文にかえた。

※ 本設問は、平成25年度以降聴取しているが、平成29年度では聴取していない。

※ 「財政状況や予算などに関する情報」は平成26年度で新設。

重要と考える区の情報は、「健診や生活支援など健康や福祉に関する情報」が63.8%で最も高く、僅差で「災害や気象に関する情報」(63.1%)となっている。以下「国保・年金・税などに関する届出や証明に関する情報」(50.4%)、「ごみ・リサイクルなど環境に関する情報」(47.2%)の順で続いている。

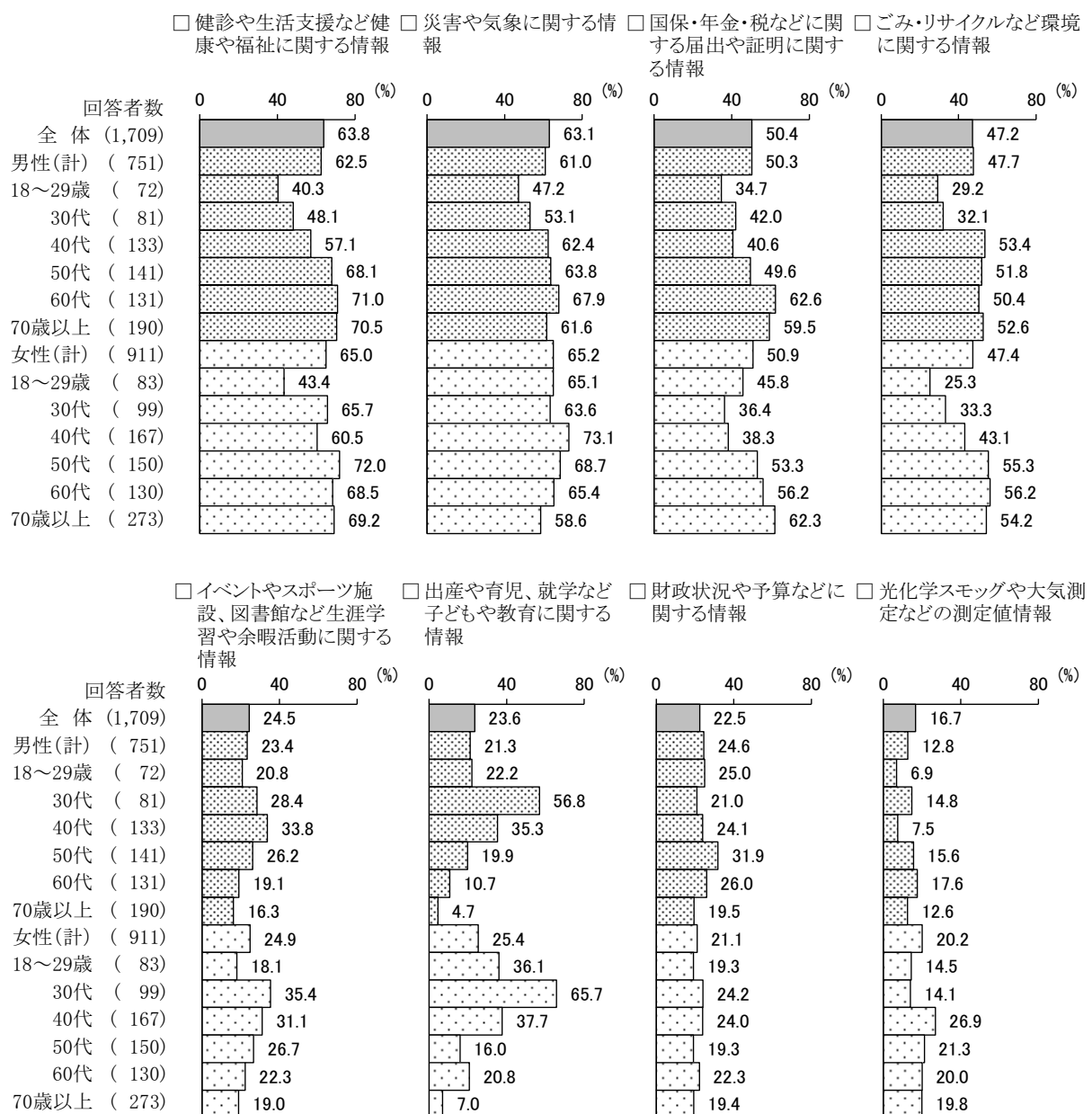
質問文に変更があった前回の令和2年調査との比較でみると、前回の1位と2位が逆転しているものの割合に大きな違いはないが、「財政状況や予算などに関する情報」で4.5ポイント減少し前回の5位から7位に下がっている。また、「光化学スモッグや大気測定などの測定値情報」で前回から3.2ポイント減少している。

性別でみると、「財政状況や予算などに関する情報」は男性（24.6%）の方が女性（21.1%）より3.5ポイント高くなっている。逆に「光化学スモッグや大気測定などの測定値情報」は女性（20.2%）の方が男性（12.8%）より7.4ポイント高くなっており、「災害や気象に関する情報」と「出産や育児、就学など子どもや教育に関する情報」でも女性の方が男性よりそれぞれ約4ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、男女ともに「健診や生活支援など健康や福祉に関する情報」と「国保・年金・税などに関する届出や証明に関する情報」はおおむね年齢が上がるほど割合も高くなる傾向がみられる。また、「災害や気象に関する情報」は女性の40代で73.1%と最も高くなっている。

「イベントやスポーツ施設、図書館など生涯学習や余暇活動に関する情報」は男女ともに30～40代で他の年代に比べ高くなっている。

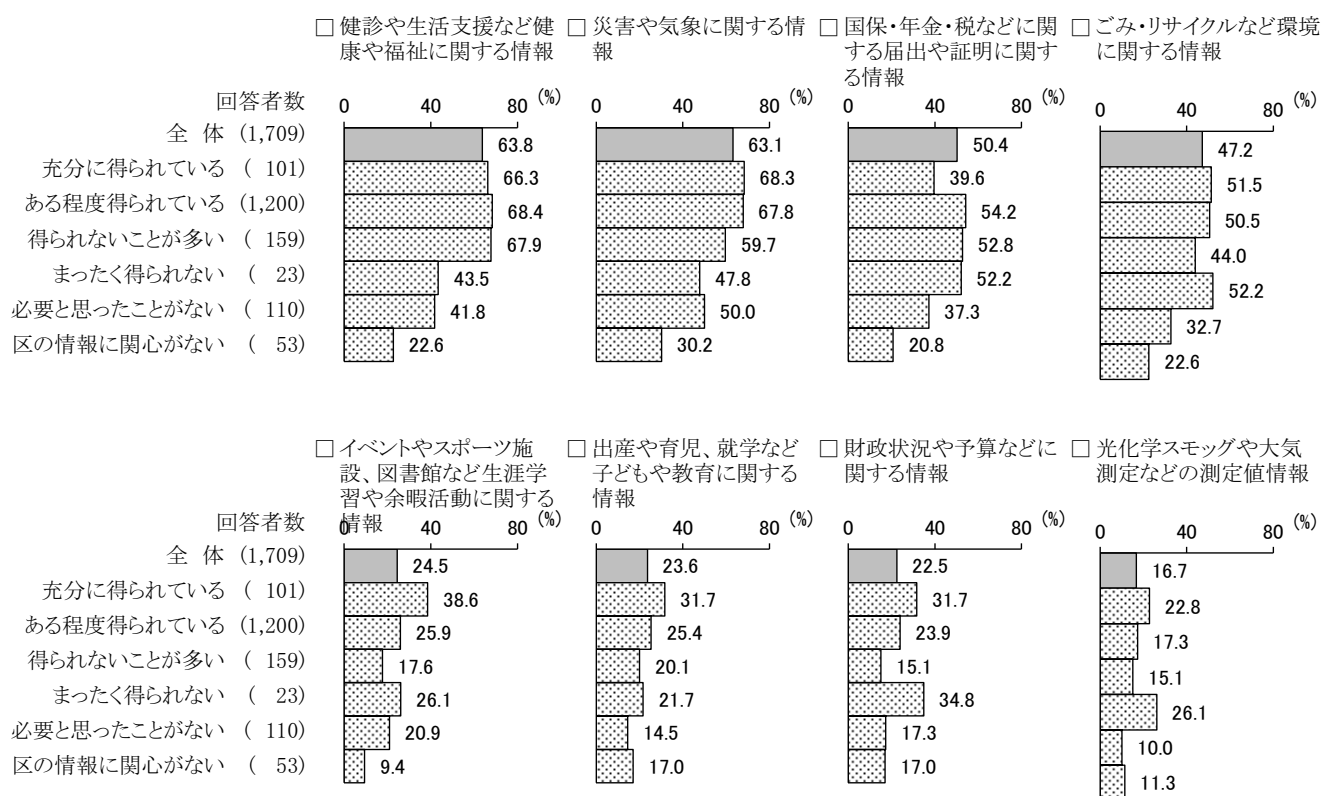
図4-2-2 性別、性・年代別／重要と考える区の情報／上位8項目



第3章 調査結果の分析 〈区の情報発信のあり方〉

必要な時に必要とする区の情報入手状況別に上位項目をみると、〈まったく得られない〉はサンプル数が少ないため参考程度となるため、〈十分に得られている〉〈ある程度得られている〉〈得られないことが多い〉の3項目でみると、「国保・年金・税などに関する届出や証明に関する情報」では〈十分に得られている〉が低くなっているが、「健診や生活支援など健康や福祉に関する情報」、「災害や気象に関する情報」、「ごみ・リサイクルなど環境に関する情報」では大きな違いはないことから、区の情報入手程度による情報の重要性認識に目立って大きな違いはみられない。

図4-2-3 必要な時に必要とする区の情報入手状況別／重要と考える区の情報／上位8項目

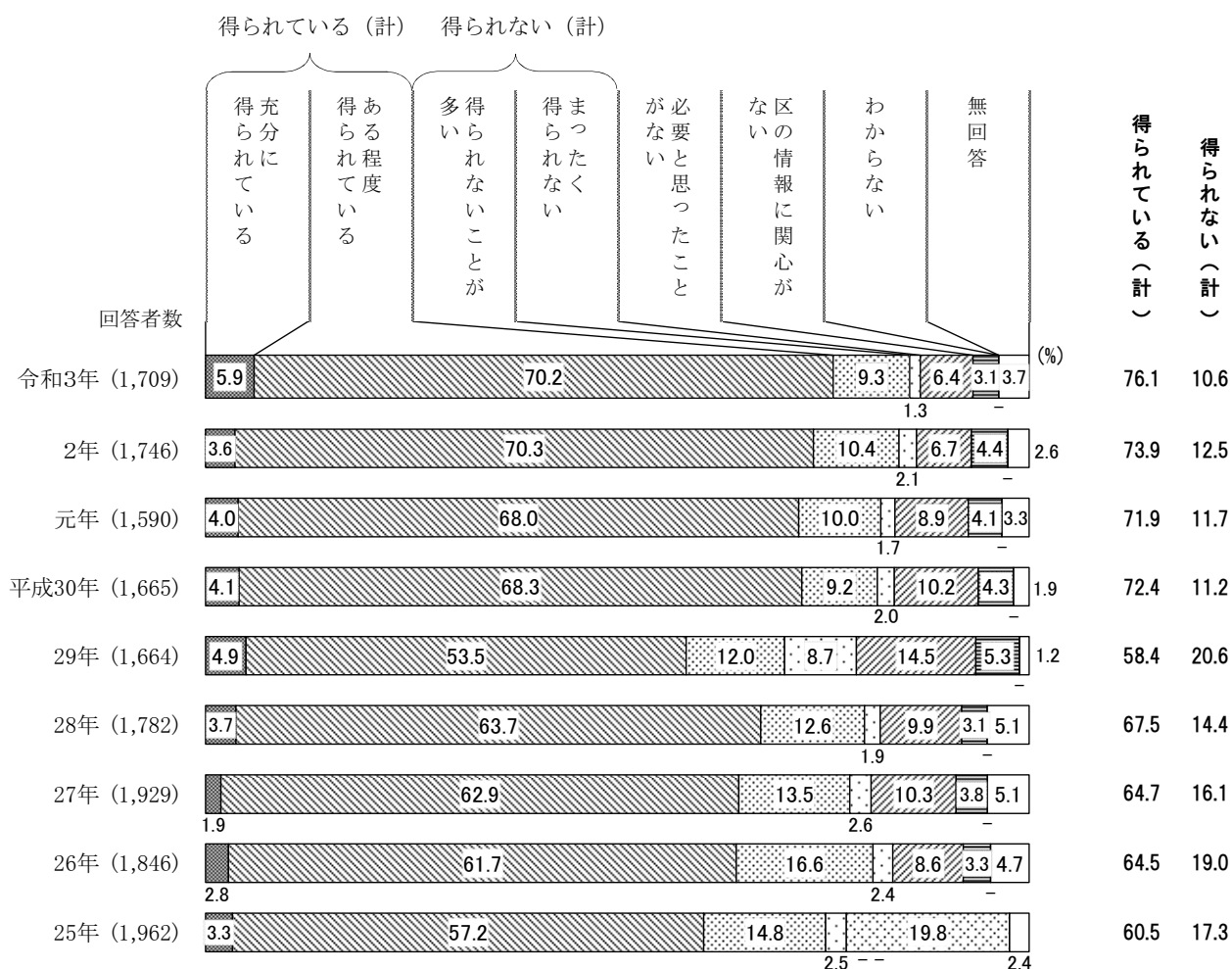


(3) 必要な時に必要とする区の情報入手状況

■ 必要なときに【得られている】は7割台半ばで、平成25年以降で最高値

問15 あなたは、必要な時に必要とする区の情報を得られていますか（○は1つだけ）。

図4-3-1 経年比較／必要な時に必要とする区の情報入手状況



※「必要と思ったことがない」「区の情報に関心がない」は、平成26年度新設。

※「わからない」は、平成26年度から削除。

※ 平成29年度調査では、本設問の前の問である〈区の情報入手手段〉および〈必要とする区の情報〉を聴取していないため、経年比較では平成29年度の結果との比較は行わない。

必要な時に必要とする情報を得られているかについては、「十分に得られている」が5.9%で、これに「ある程度得られている」の70.2%を合わせた【得られている】は76.1%となっている。一方、「得られないことが多い」は9.3%、「まったく得られない」は1.3%で、これらを合わせた【得られない】は10.6%となっている。

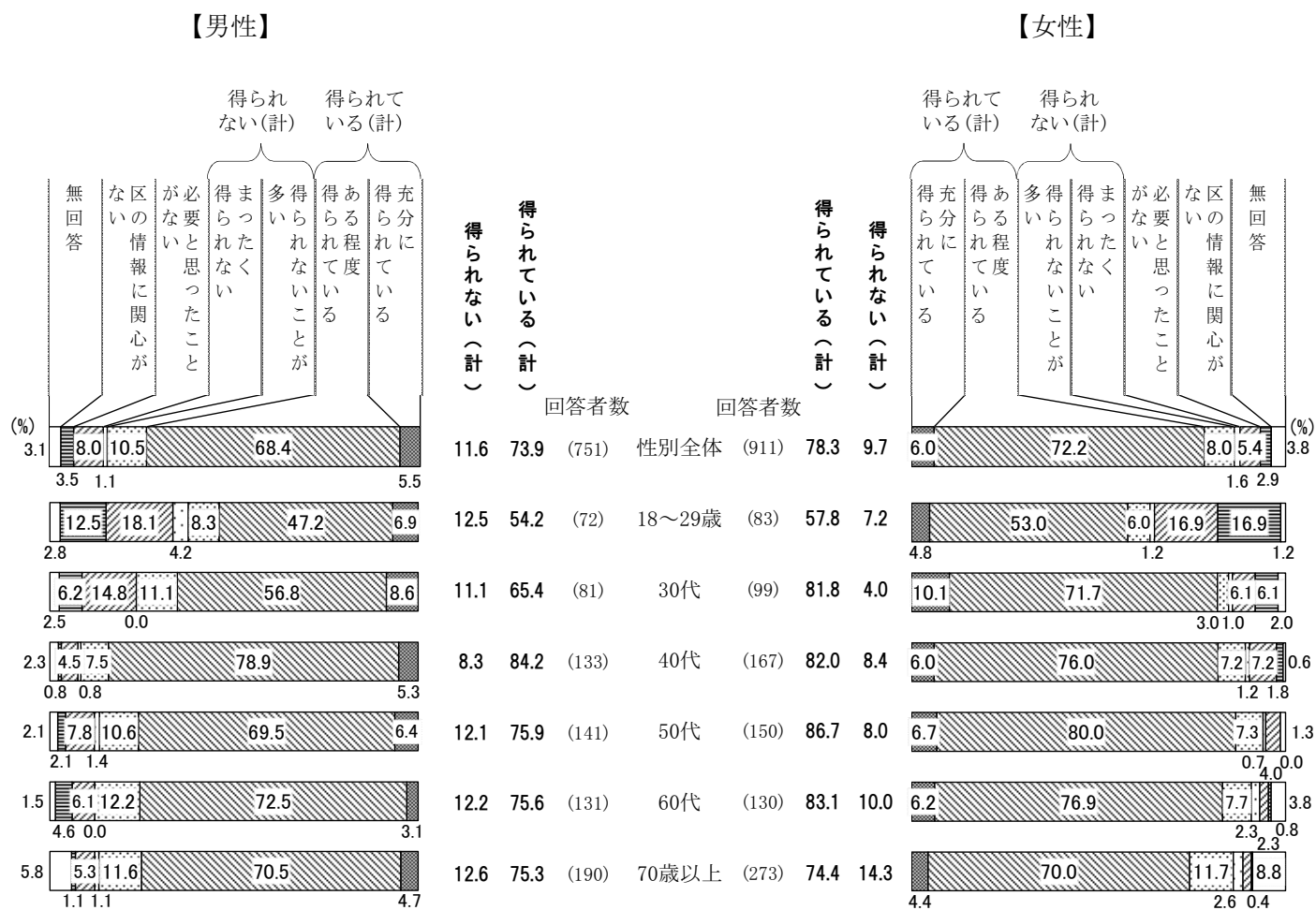
経年でみると、必要な時に必要とする情報を【得られている】という回答は、令和元年調査以降は漸増傾向を続けており、前回の令和2年調査から2.2ポイント増加して76.1%と、平成25年以降で最も高くなっている。

第3章 調査結果の分析 〈 区の情報発信のあり方 〉

性別でみると、【得られている】は女性（78.3%）の方が男性（73.9%）より4.4ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、【得られている】は、女性の50代が86.7%で最も高く、次いで男性の40代（84.2%）となっている。一方、「区の情報に関心がない」は男女ともに18～29歳（男性12.5%、女性16.9%）で高くなっている。

図4-3-2 性別、性・年代別／必要な時に必要とする区情報の入手状況

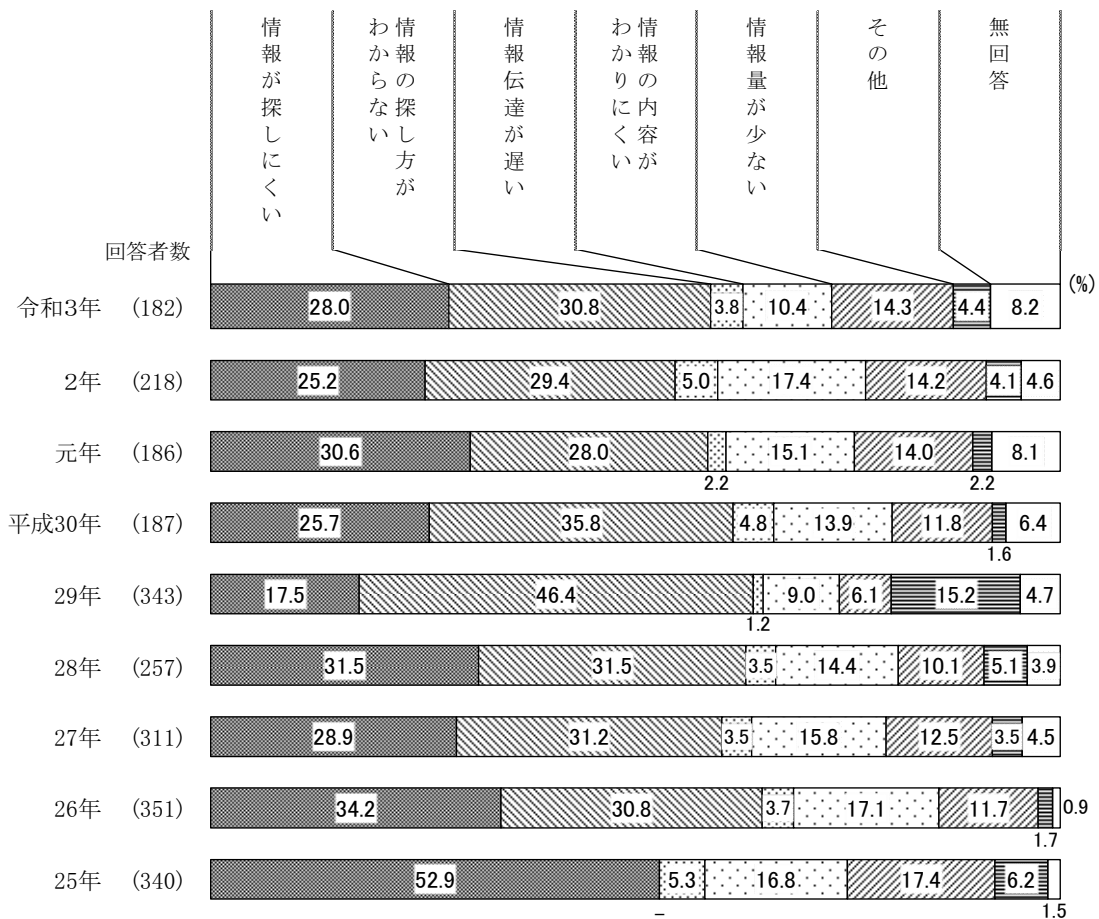


(4) 区の情報得られない理由

■ “情報の探し方がわからない” が、約3割で最多に

問15で「3 得られないことが多い」または「4 まったく得られない」とお答えの方に
問15-1 主にどのような理由からですか（○は1つだけ）。

図4-4-1 経年比較／区の情報得られない理由



※ 「情報の探し方がわからない」は、平成26年度新設。

※ 平成29年度調査では、本設問の前問である〈区情報の入手手段〉および〈必要とする区の情報〉を聴取していないため、経年比較では平成29年度の結果との比較は行わない。

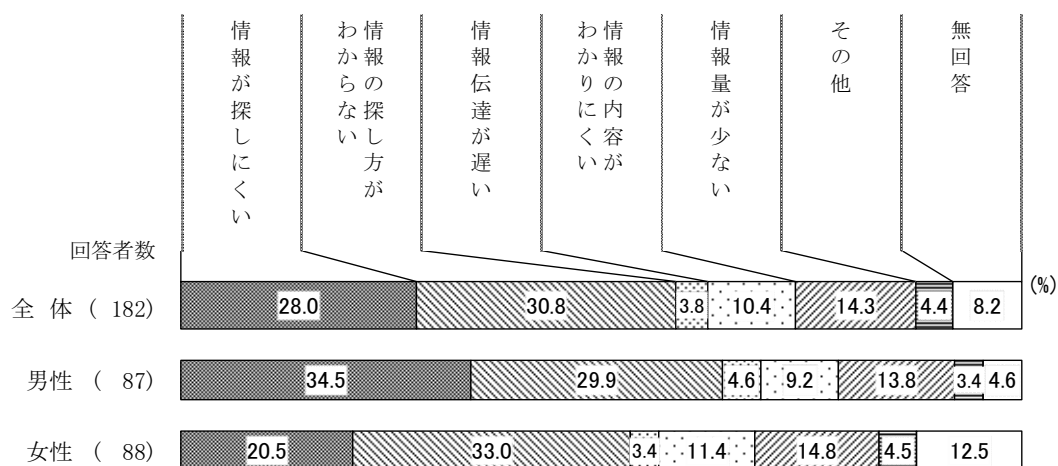
区情報が【得られない】という人に、その主な理由を単数回答で聞いたところ、「情報の探し方がわからない」が30.8%で最も高く、次いで「情報が探しにくい」(28.0%)、「情報量が少ない」(14.3%)となっている。

前回の令和2年調査との比較でみると、「情報が探しにくい」が2.8ポイント増加して、「情報の内容がわかりにくい」が7.0ポイント減少した。

第3章 調査結果の分析 〈区の情報発信のあり方〉

性別でみると、「情報が探しにくい」は男性（34.5%）の方が女性（20.5%）より14.0ポイント高く、逆に「情報の探し方がわからない」は女性（33.0%）の方が男性（29.9%）より3.1ポイント高くなっている。

図4-4-2 性別／区の情報 that 得られない理由



(5) 区の情報得られない理由の詳細

問15で「3 得られないことが多い」または「4 まったく得られない」とお答えの方に
問15-2 問15-1の回答のように思われるのは、どうしてですか。理由をお書きください。

区の情報得られない理由として寄せられた自由回答の内容を「あだち広報」「区のホームページ」「その他」の3項目ごとに、主な要旨とその件数をまとめた結果は以下のようになっている。

あだち広報（66名のご回答）	件数
読みづらい、わかりづらいから	20
関心がない、見る機会が少ないから	15
内容が少ない、薄いから	6
自分にとって必要ない情報が多いから	6
情報の提供が遅い・届いたときにはすでに遅いから	5
毎号同じ内容・編集内容が飽きるから	4
その他	13

区ホームページ（74名のご回答）	件数
探しにくい、わかりづらいから	35
（あまり）見ないから	15
パソコン（インターネット）を使わない・使えないから	11
情報が少ない・ほしい情報がないから	7
その他	8

その他（23名のご回答）	件数
情報をみつけられない、入手方法がわからないから	6
放送が聞こえないから	5
情報の提供量が少ないから	2
その他	10

5 健康

-
- (1) 区のキャッチフレーズの認知状況
 - (2) 糖尿病の進行による病気や障がいの認識
 - (3) 野菜から食べ始めることの実践状況
 - (4) 1日野菜350g以上の摂取
 - (5) 体調や習慣
 - (6) 健康維持のために実行している、心がけているもの
 - (7) 自身の健康状態について
 - (8) がん検診の受診状況
 - (9) 受けたがん検診の種類
 - (10) 決めている歯科医院
 - (11) 歯科医院で治療のほかに受けている内容
 - (12) 感染症予防としての手洗いの実践状況
 - (13) 「ゲートキーパー」という言葉の認知状況
-

5 健康

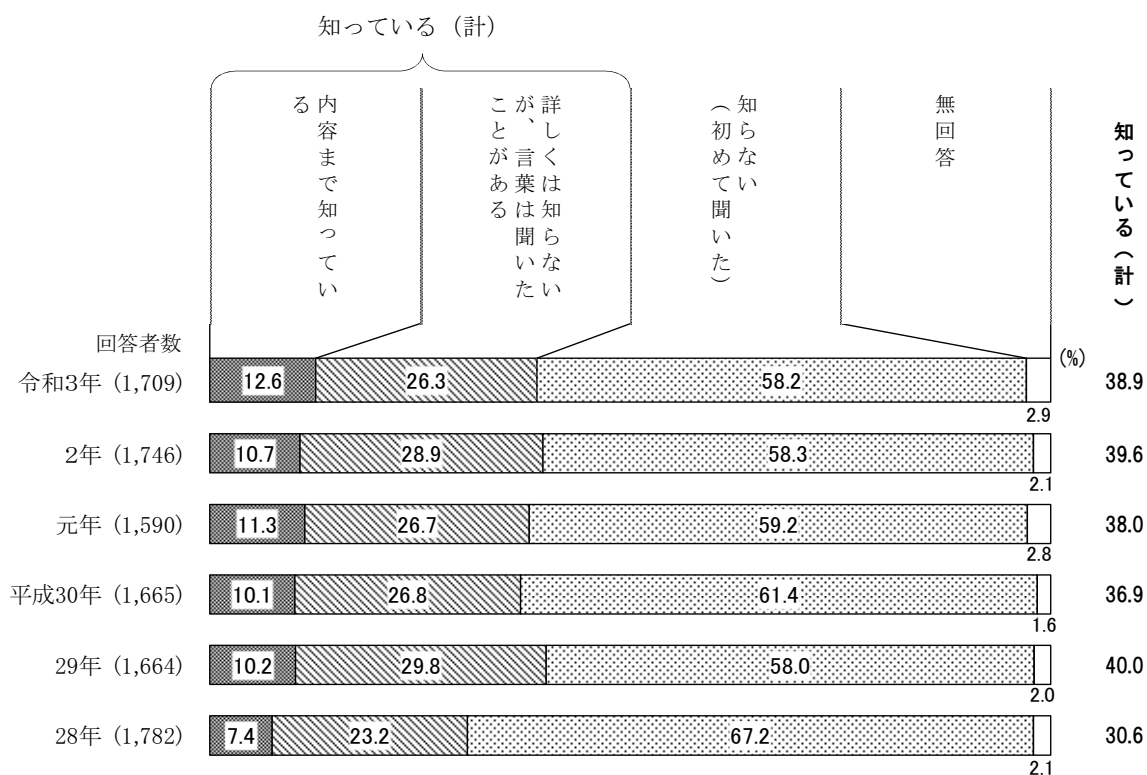
(1) 区のキャッチフレーズの認知状況

■【知っている】は4割弱

問16 あなたは、「あだちベジタベライフ～そうだ、野菜を食べよう～（※）」を知っていますか（○は1つだけ）。

※ 糖尿病予防や糖尿病の悪化防止のために「野菜から食べる」「野菜をよくかんで食べる」ことを推進する足立区のキャッチフレーズです。

図5-1-1 経年比較／区のキャッチフレーズの認知状況



区のキャッチフレーズ『あだちベジタベライフ～そうだ、野菜を食べよう～』について、「内容まで知っている」は12.6%で、これに「詳しくは知らないが、言葉は聞いたことがある」（26.3%）を合わせた【知っている】は38.9%となっている。一方、「知らない（初めて聞いた）」は58.2%となっている。

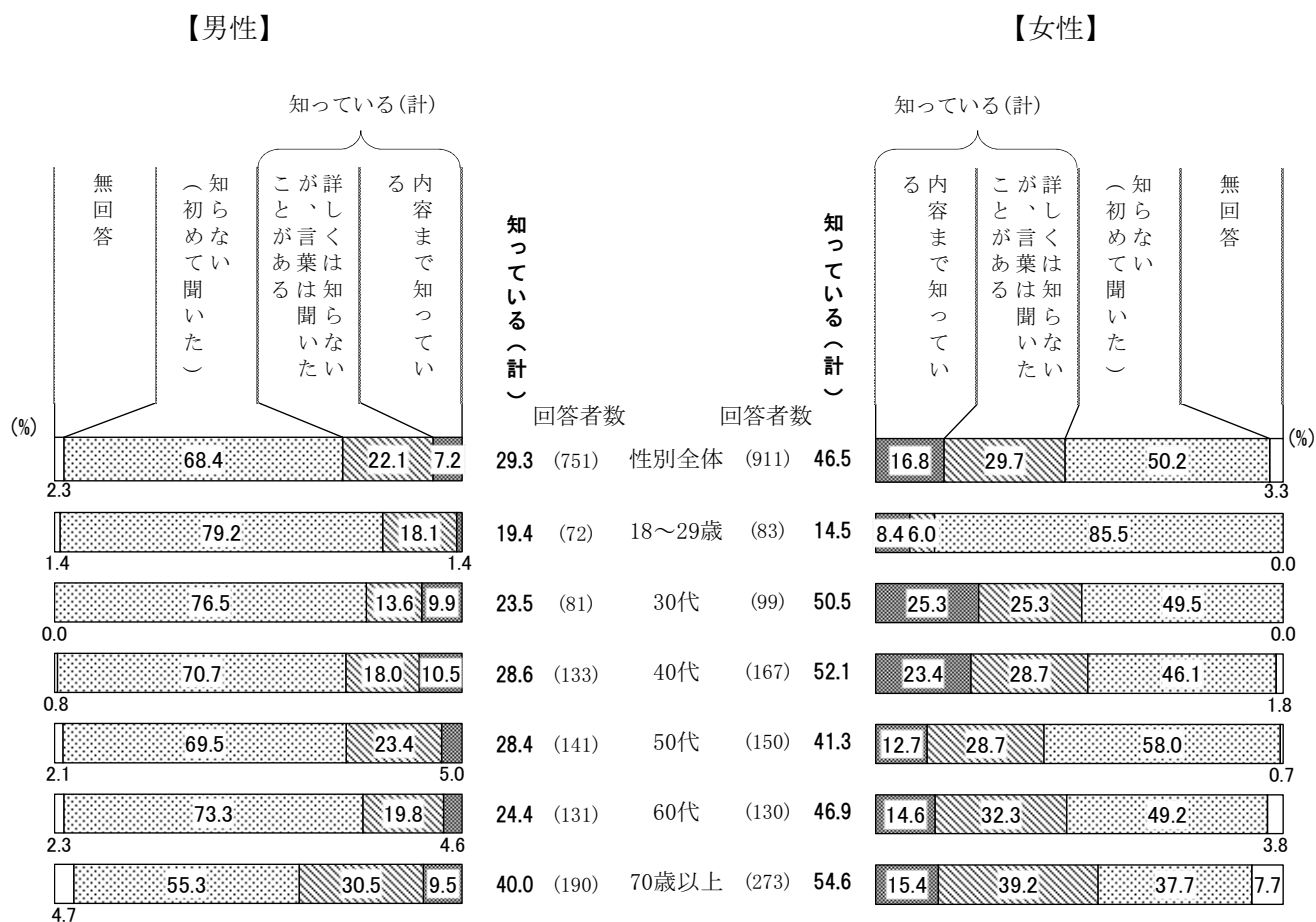
経年でみると、【知っている】は、前回調査から僅かに0.7ポイント減少しているが、内訳の「内容まで知っている」をみると、前回の令和2年調査（10.7%）から1.9ポイント微増している。

第3章 調査結果の分析 〈健康〉

性別でみると、【知っている】は女性（46.5%）の方が男性（29.3%）より17.2ポイントと大きく上回っている。

性・年代別でみると、【知っている】は女性の30代、40代、70歳以上は5割台、女性の60代で4割台半ばと性別全体（46.5%）より高くなっている。また、男女ともに18～29歳で1割台と他の年代に比べて低くなっている。

図5－1－2 性別、性・年代別／区のキャッチフレーズの認知状況



(2) 糖尿病の進行による病気や障がいの認識

■「失明」と「足の壊疽（えそ）」が6割台で上位

問17 初期の糖尿病には自覚症状がありませんが、糖尿病が進行するとあらわれる病気や障がいの中で、あなたが知っているものはどれですか（○はあてはまるものすべて）。

図5-2-1-① 経年比較／糖尿病の進行による病気や障がいの認識

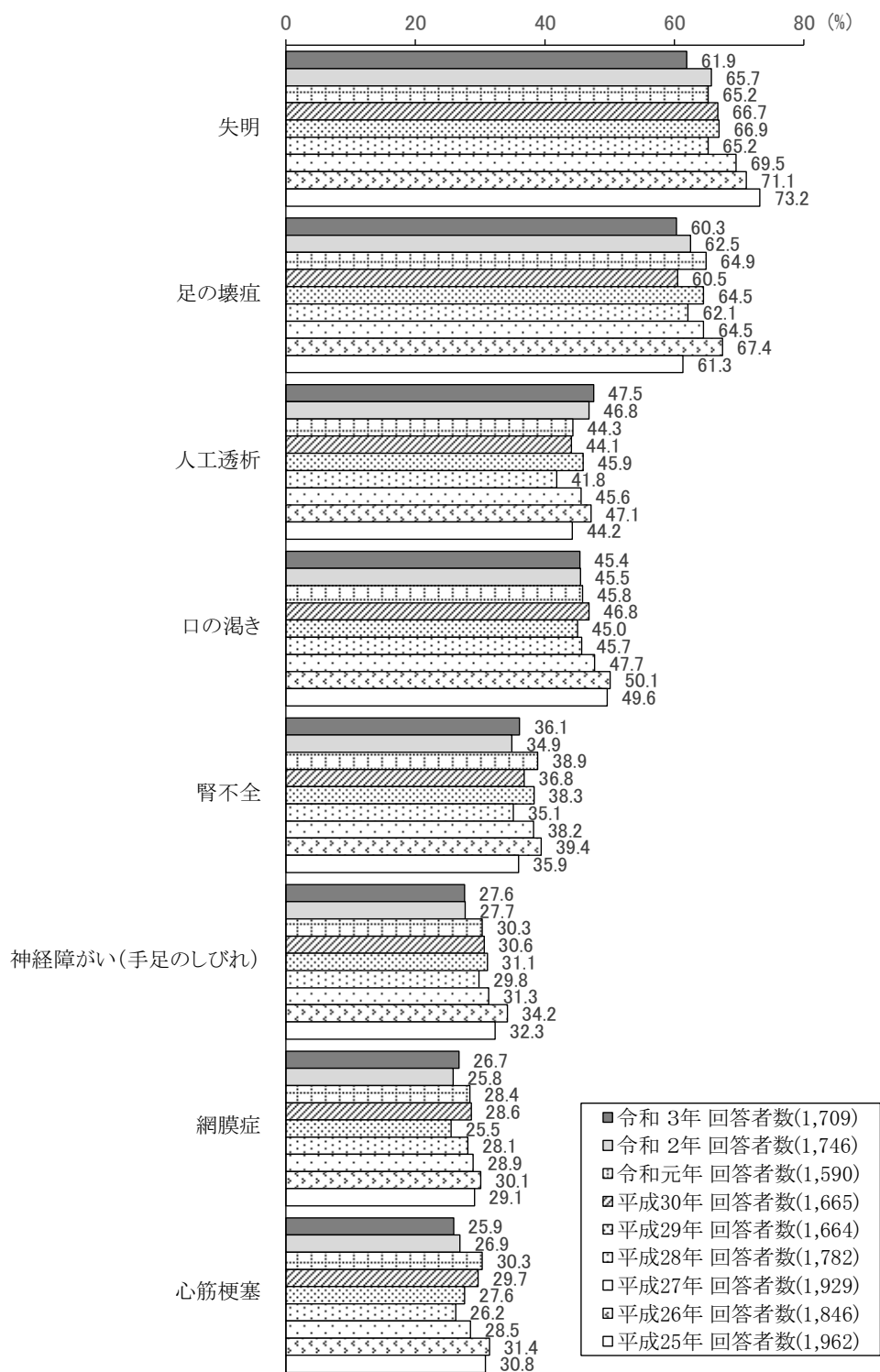
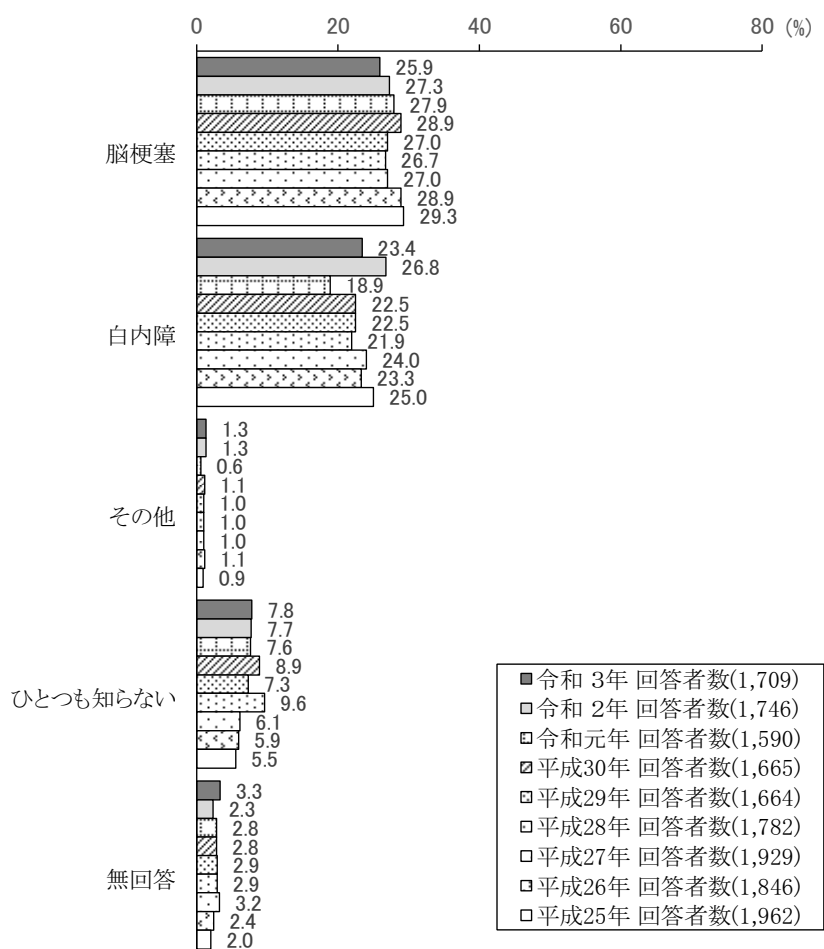


図5-2-1-② 経年比較／糖尿病の進行による病気や障がいの認識



※「ひとつも知らない」は、令和元年度調査まで「わからない」で聴取していた。

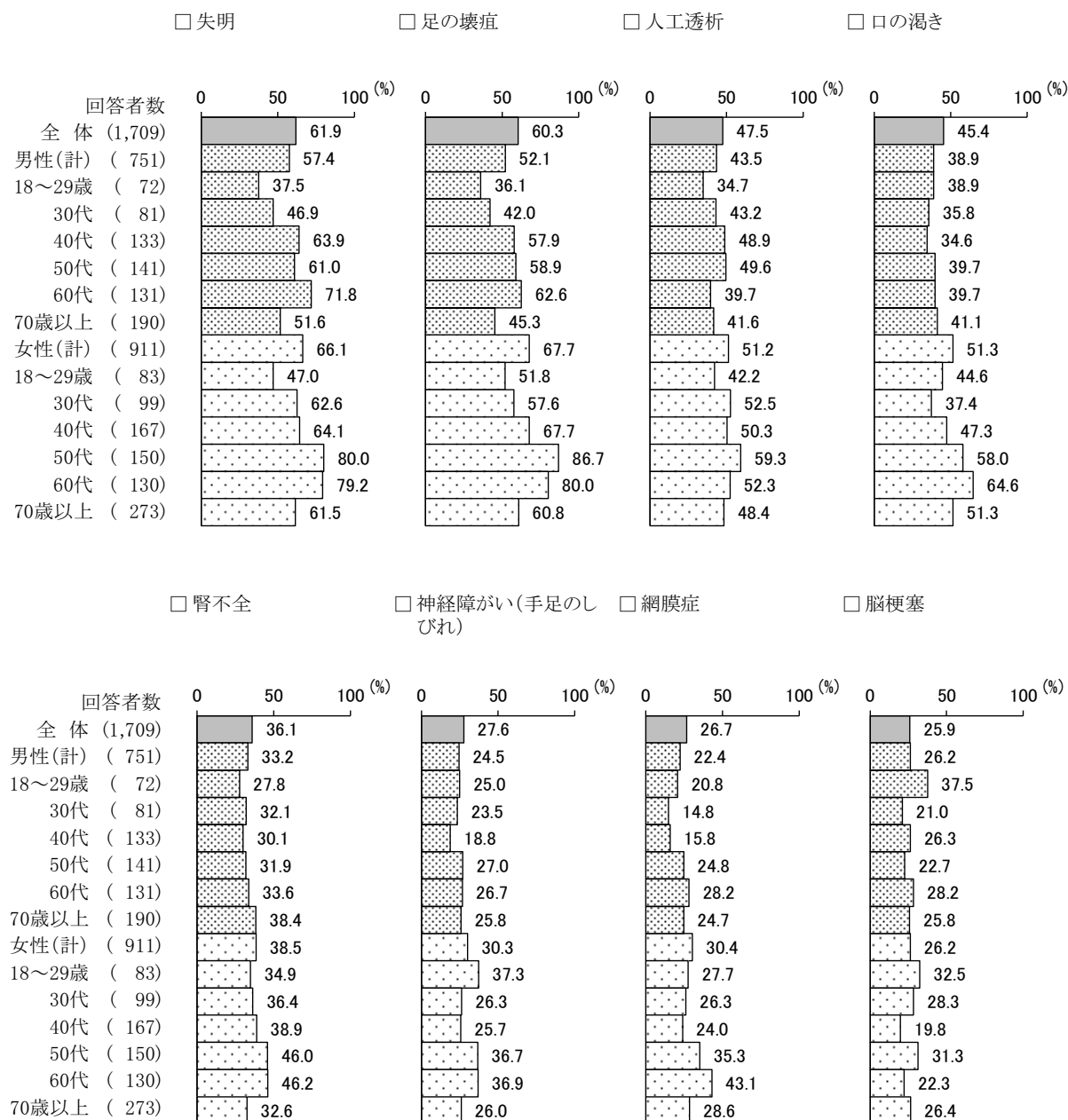
糖尿病が進行するとあらわれる病気や障がいの中で“知っているもの”を回答してもらった結果は、「失明」が61.9%で最も高く、次いで「足の壊疽（えそ）」（60.3%）、「人工透析」（47.5%）、「口の渇き」（45.4%）、「腎不全」（36.1%）などとなっている。

平成25年以降“そう思うもの”で聴いていた質問文を、前回の令和2年から“知っているもの”に変更しているため、前回調査との比較でみると、上位5位の項目に変動はないが、1位の「失明」は3.8ポイント、2位の「足の壊疽」は2.2ポイントそれぞれ減少している。

性別でみると、「足の壊疽」で女性の方が15.6ポイント高いのをはじめ、「口の渇き」(12.4ポイント)、「失明」(8.7ポイント)、「網膜症」(8.0ポイント)など大半の項目で女性の方が男性より高くなっている。

性・年代別でみると、上位5項目のすべてで女性の40代と50代で1位と2位を占めており、逆に男性の18～29歳は「口の渇き」を除く上位4項目で最も低い割合となっている。

図5-2-2 性別、性・年代別／糖尿病の進行による病気や障がいの認識／上位8項目



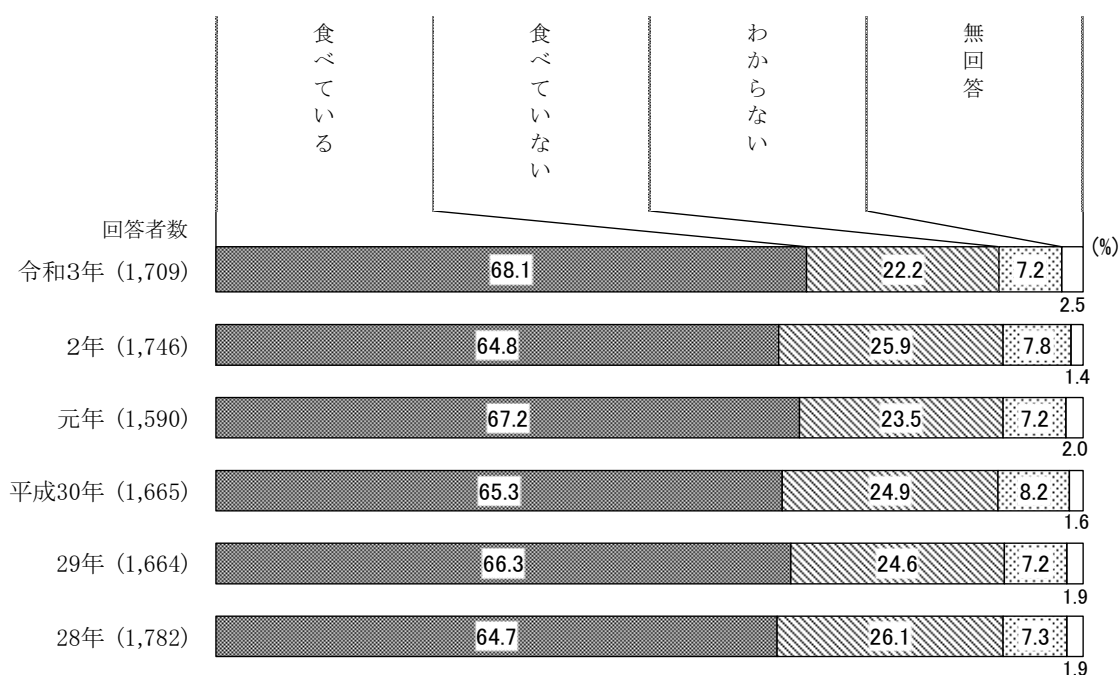
（3）野菜から食べ始めることの実践状況

■「食べている」が3ポイント以上増加し7割弱となる

問18 野菜から食べることは、糖尿病予防に効果がありますが、あなたは、野菜から食べていますか（○は1つだけ）。

※ 糖尿病が進行して起こる様々な合併症は、食後に血糖値が急上昇し、血管を傷つけることが原因で起こります。このような血糖値の急上昇を抑えるためには、食事の最初に野菜をよくかんで食べることが効果的です。

図5－3－1 経年比較／野菜から食べ始めることの実践状況



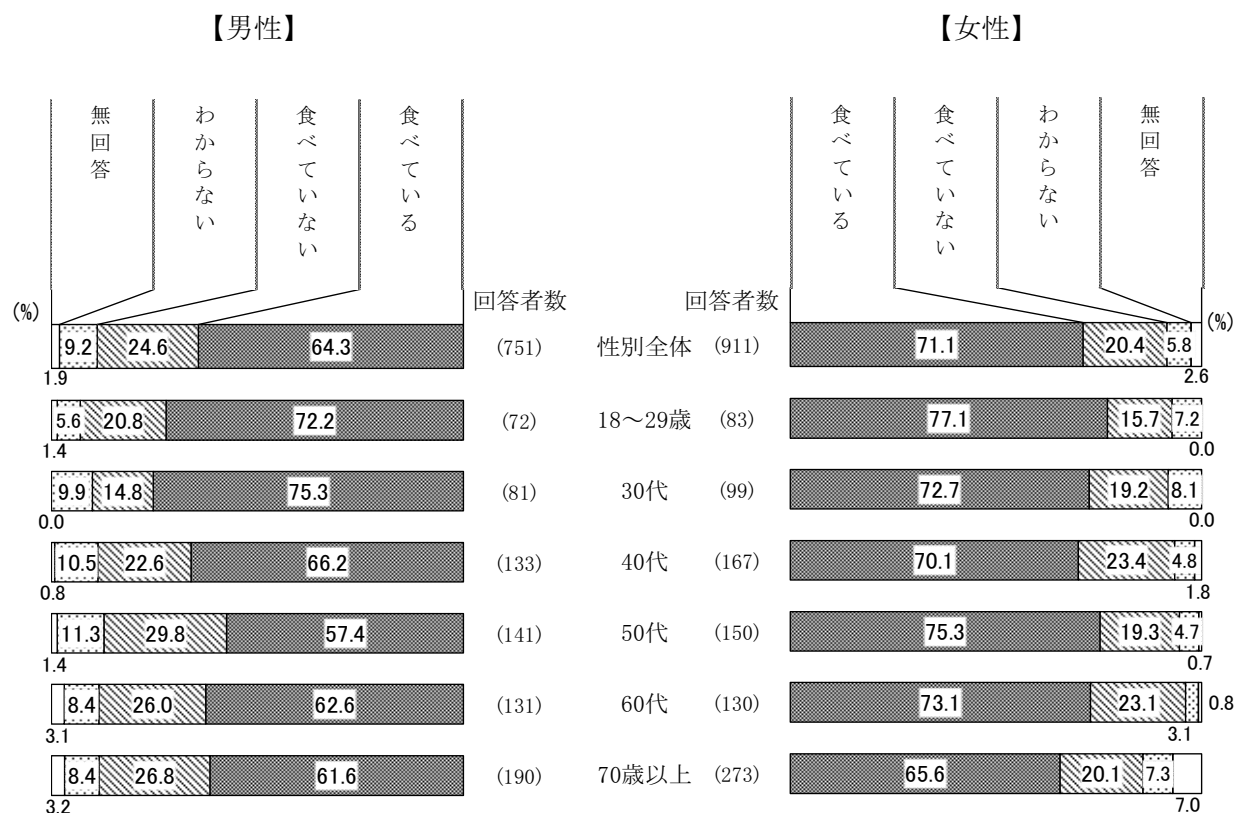
野菜から「食べている」は68.1%を占めている。一方、「食べていない」は22.2%となっている。

経年でみると、前回の令和2年調査に比べて「食べている」は3.3ポイント増加しており、逆に「食べていない」は3.7ポイント減少している。

性別でみると、「食べている」は女性（71.1%）の方が男性（64.3%）より6.8ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、「食べている」は、男性では30代以下で7割を超えて高くなっており、女性では60代以下で7割を超え、18～29歳で77.1%と最も高くなっている。

図5－3－2 性別、性・年代別／野菜から食べ始めることの実践状況



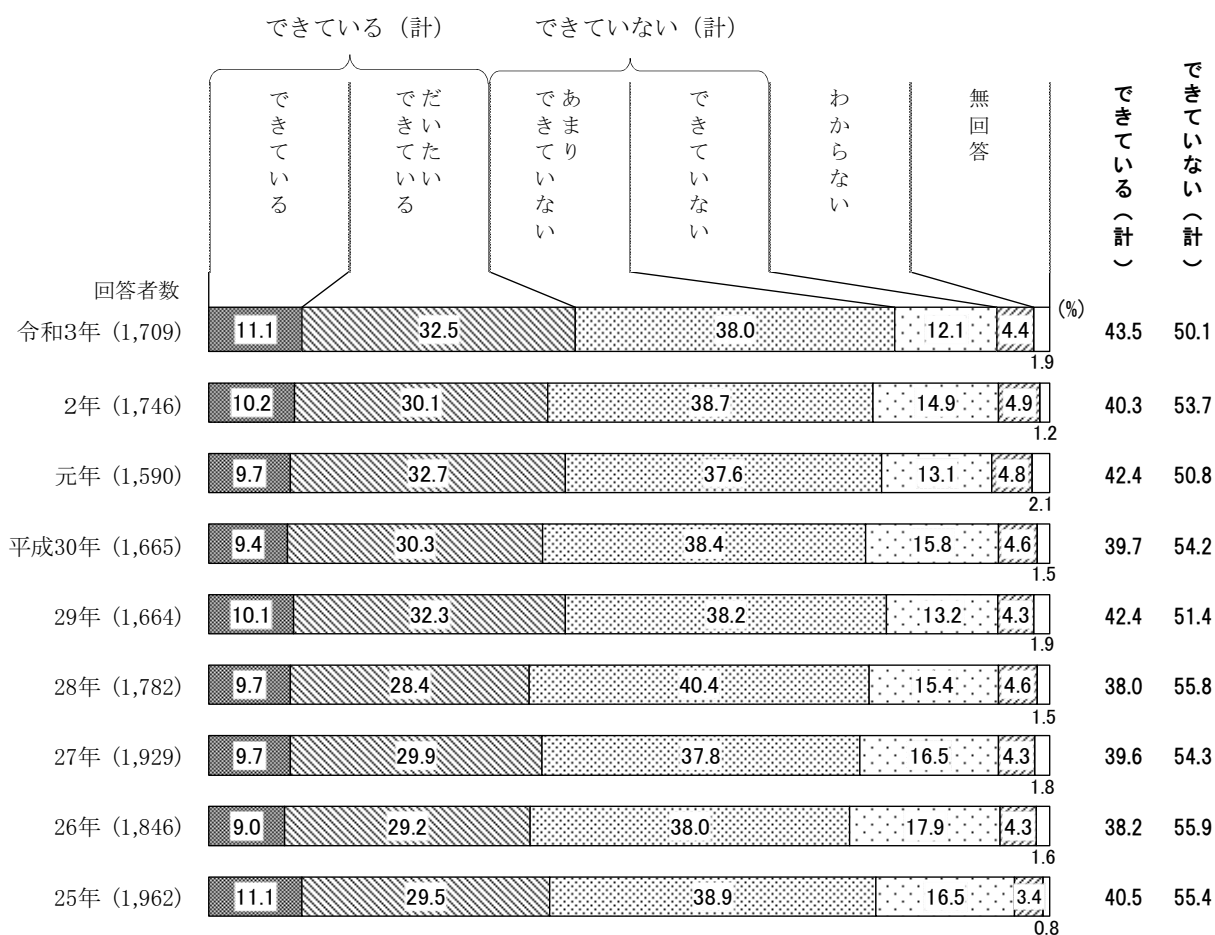
(4) 1日野菜350g以上の摂取

■【できている】(4割台半ば)が増加するが、【できていない】(5割)に及ばず

問19 1日の野菜摂取量の目標は350g以上(調理前の生の状態で)です。あなたは、毎日350g以上の野菜が摂取できていますか(○は1つだけ)。

※ 野菜350gとは、1例をあげると、レタス1枚、きゅうり1本、プチトマト2個、にんじん1/2本、たまねぎ1/2個の合計に相当する量です。

図5-4-1 経年比較／1日野菜350g以上の摂取



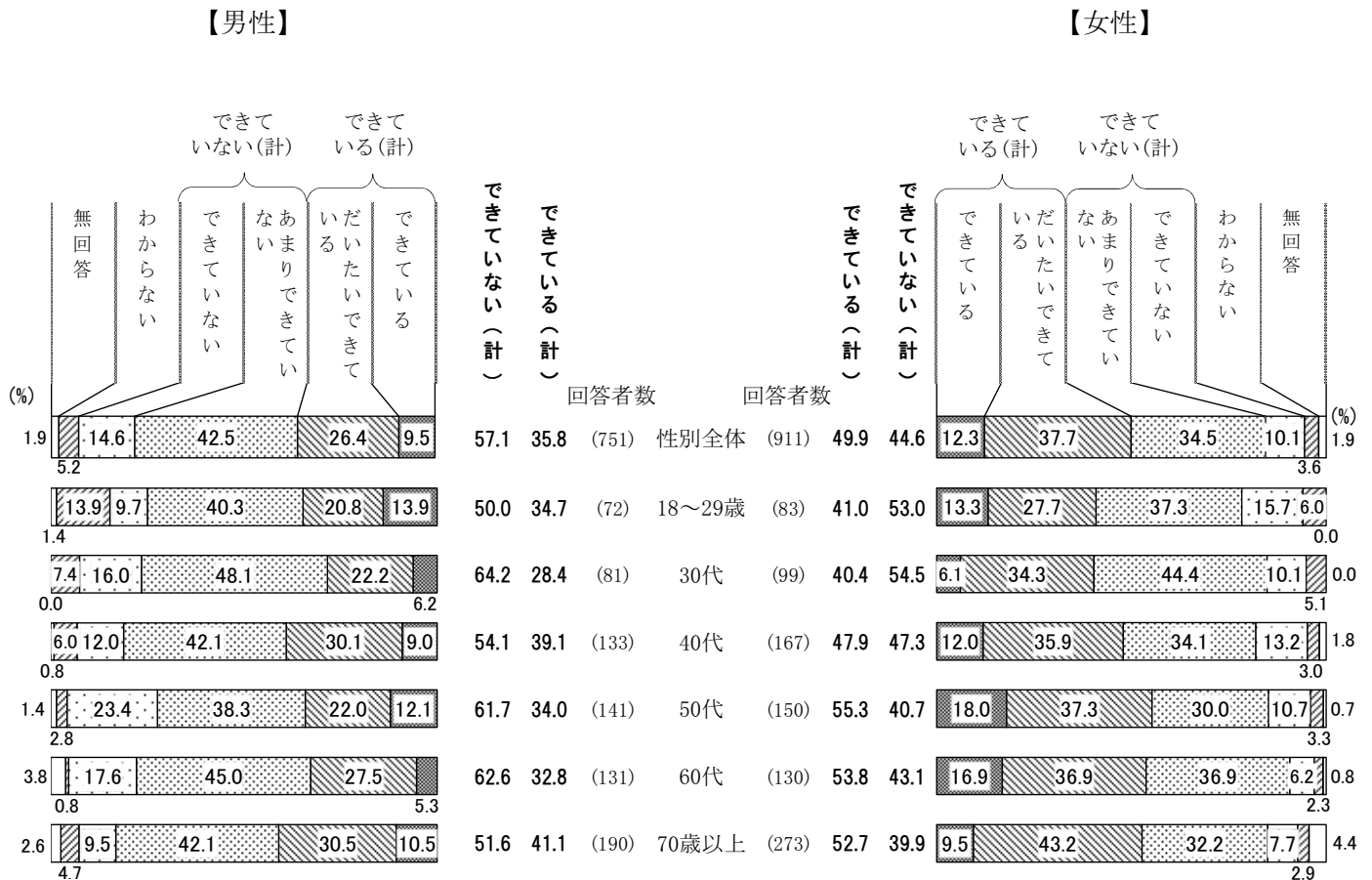
毎日350g以上の野菜の摂取については、「できている」が11.1%で、これに「だいたいできている」の32.5%を合わせた【できている】は43.5%となっている。一方、「あまりできていない」(38.0%)と「できていない」(12.1%)を合わせた【できていない】は50.1%となっている。

経年でみると、前回の令和2年調査に比べて、【できている】(43.5%)は3.2ポイント増加したものの、3.6ポイント減少した【できていない】(50.1%)をまだ下回っている。

性別でみると、【できている】は、女性（49.9%）の方が男性（35.8%）より14.1ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、【できている】は女性では全ての年代層で4割を超えており、50代で55.3%と最も高くなっている。男性では70歳以上が41.1%と最も高く60代以下は全て3割台以下で、特に30代で28.4%と最も低くなっている。

図5-4-2 性別、性・年代別／1日野菜350g以上の摂取



(5) 体調や習慣

■ 〈安心して受診できる医療機関が身近にある〉という人は6割台半ば

問20 あなたの体調や習慣、身近な医療機関についてお答えください

(〇はそれぞれ1つずつ)。

図5-5-1-① 経年比較／体調や習慣

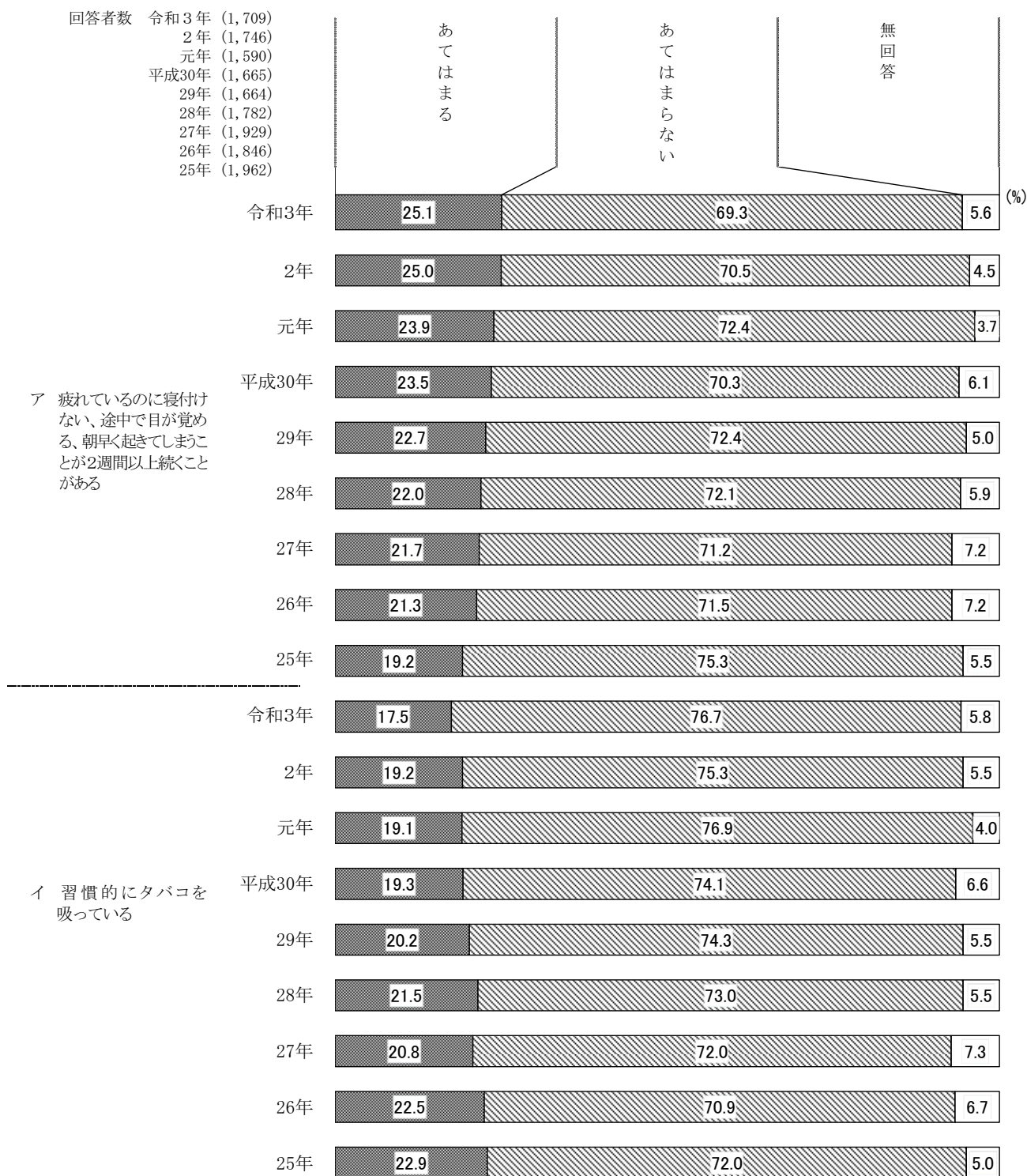
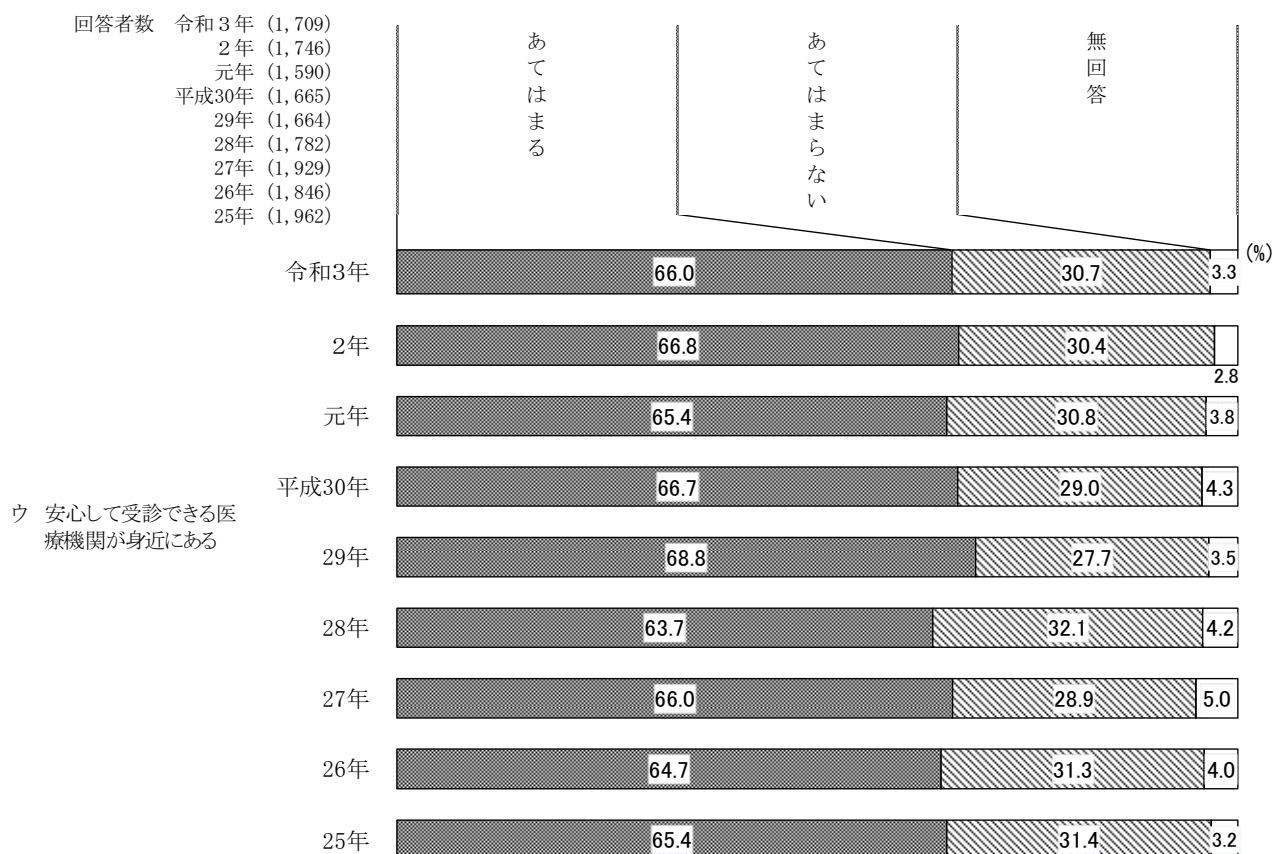


図5-5-1-② 経年比較／体調や習慣



体調や習慣に関する3項目について、「あてはまる」の割合をみると、〈安心して受診できる医療機関が身近にある〉が66.0%と最も高くなっている。

一方、〈疲れているのに寝付けない、途中で目が覚める、朝早く起きてしまうことが2週間以上続くことがある〉が25.1%、〈習慣的にタバコを吸っている〉は17.5%となっている。

経年でみると、各項目とも、大きな変化はみられないものの、〈習慣的にタバコを吸っている〉は漸減しており平成25年調査（22.9%）から8年間で5.4ポイント減少し、〈疲れているのに寝付けない、途中で目が覚める、朝早く起きてしまうことが2週間以上続くことがある〉は微増傾向にあり平成25年調査（19.2%）から8年間で5.9ポイント増加するなど、ゆるやかに変化している。

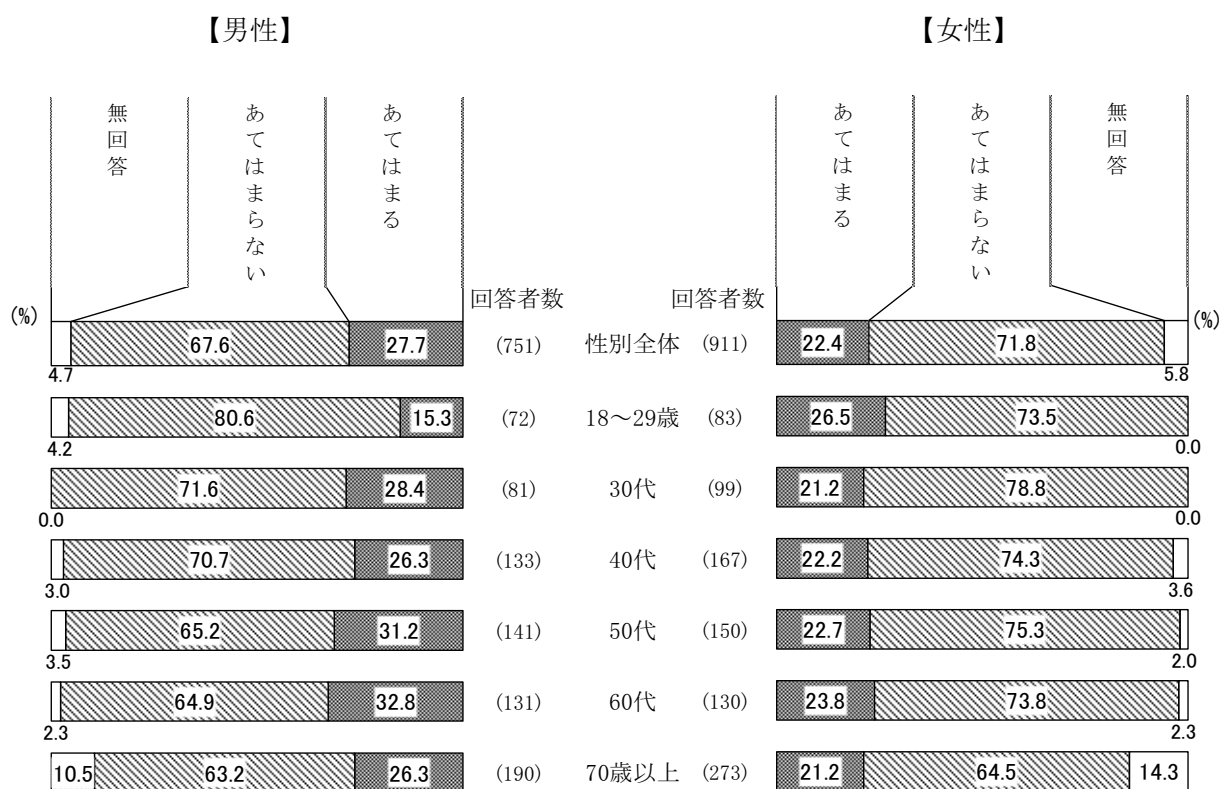
第3章 調査結果の分析 〈健康〉

〈疲れているのに寝付けない、途中で目が覚める、朝早く起きてしまうことが2週間以上続くことがある〉について、性別でみると、「あてはまる」は男性（27.7%）の方が女性（22.4%）より5.3ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、「あてはまる」は、男性の60代（32.8%）、50代（31.2%）で3割強と高く、男性の18～29歳で15.3%と最も低くなっている。

図5-5-2-① 性別、性・年代別／体調や習慣

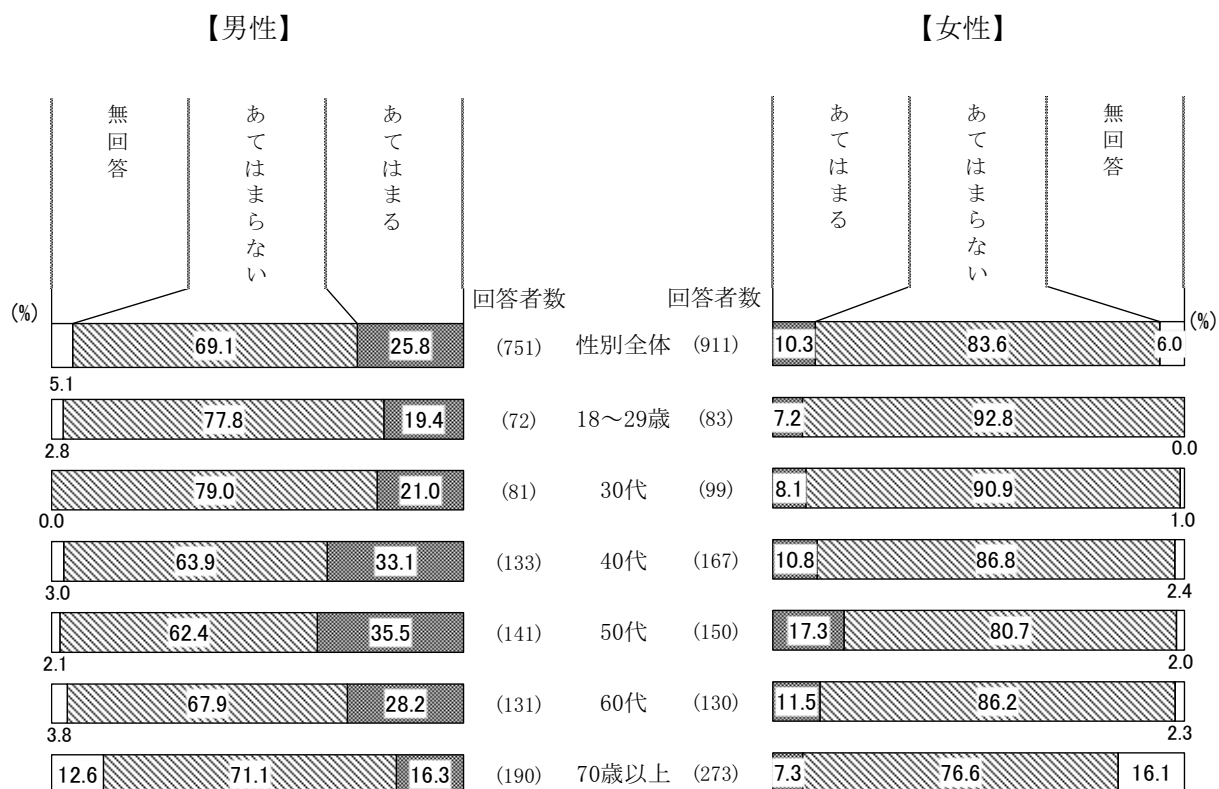
／疲れているのに寝付けない、途中で目が覚める、朝早く起きてしまうことが2週間以上続くことがある



〈習慣的にタバコを吸っている〉について、性別でみると、「あてはまる」は男性（25.8%）の方が女性（10.3%）より15.5ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、「あてはまる」は、男性の50代（35.5%）、40代（33.1%）で3割台半ばと高く、女性の18～29歳で7.2%と最も低くなっている。

図5-5-2-② 性別、性・年代別／体調や習慣／習慣的にタバコを吸っている

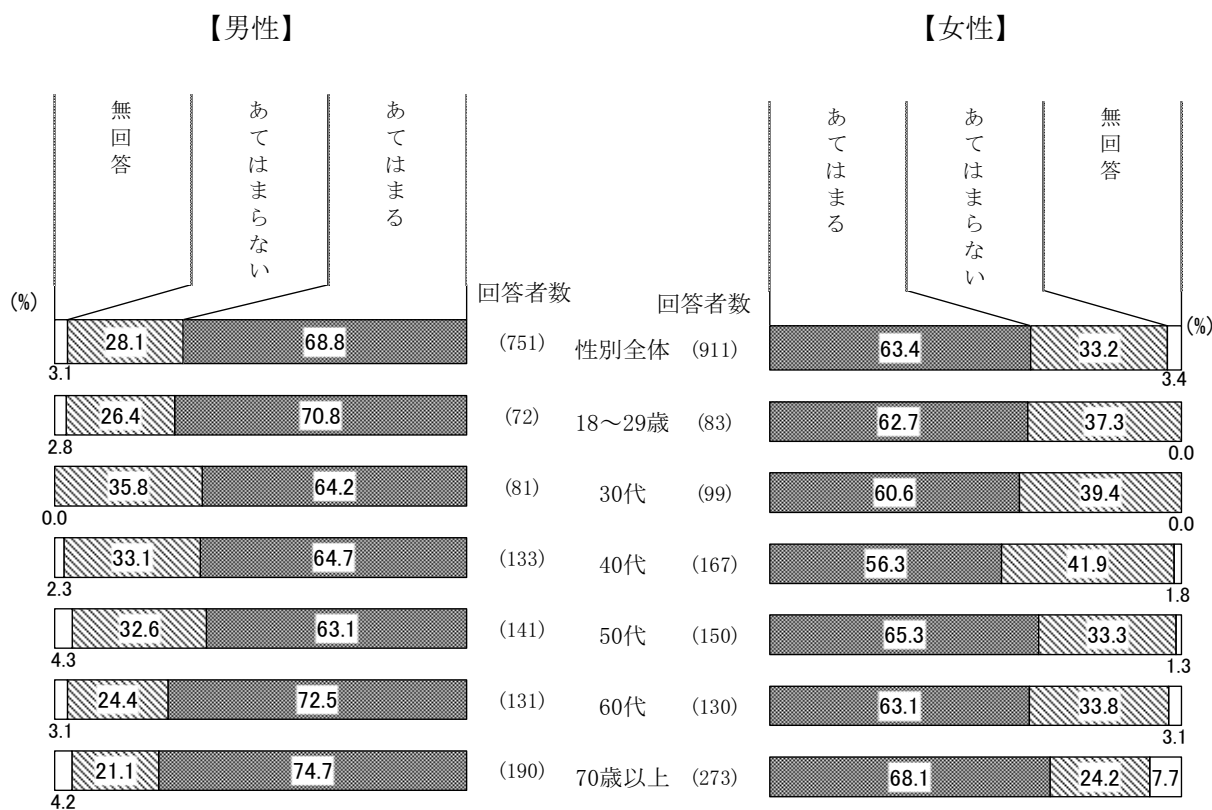


第3章 調査結果の分析 〈健康〉

〈安心して受診できる医療機関が身近にある〉について、性別でみると、「あてはまる」は男性（68.8%）の方が女性（63.4%）より5.4ポイント高くなっている。

性・年代別でみると、「あてはまる」は、男性の70歳以上（74.7%）、60代（72.5%）、18～29歳（70.8%）で7割台と高く、女性の40代で56.3%と最も低くなっている。

図5-5-2-③ 性別、性・年代別／体調や習慣／安心して受診できる医療機関が身近にある



(6) 健康維持のために実行している、心がけているもの

■「毎年健康診断を受けている」が「毎日朝ごはんを食べている」を上回って再び1位

問21 あなた自身が健康維持のために実行している、または心がけているものをお答えください（〇はあてはまるものすべて）。

図5-6-1-① 経年比較／健康維持のために実行している、心がけているもの

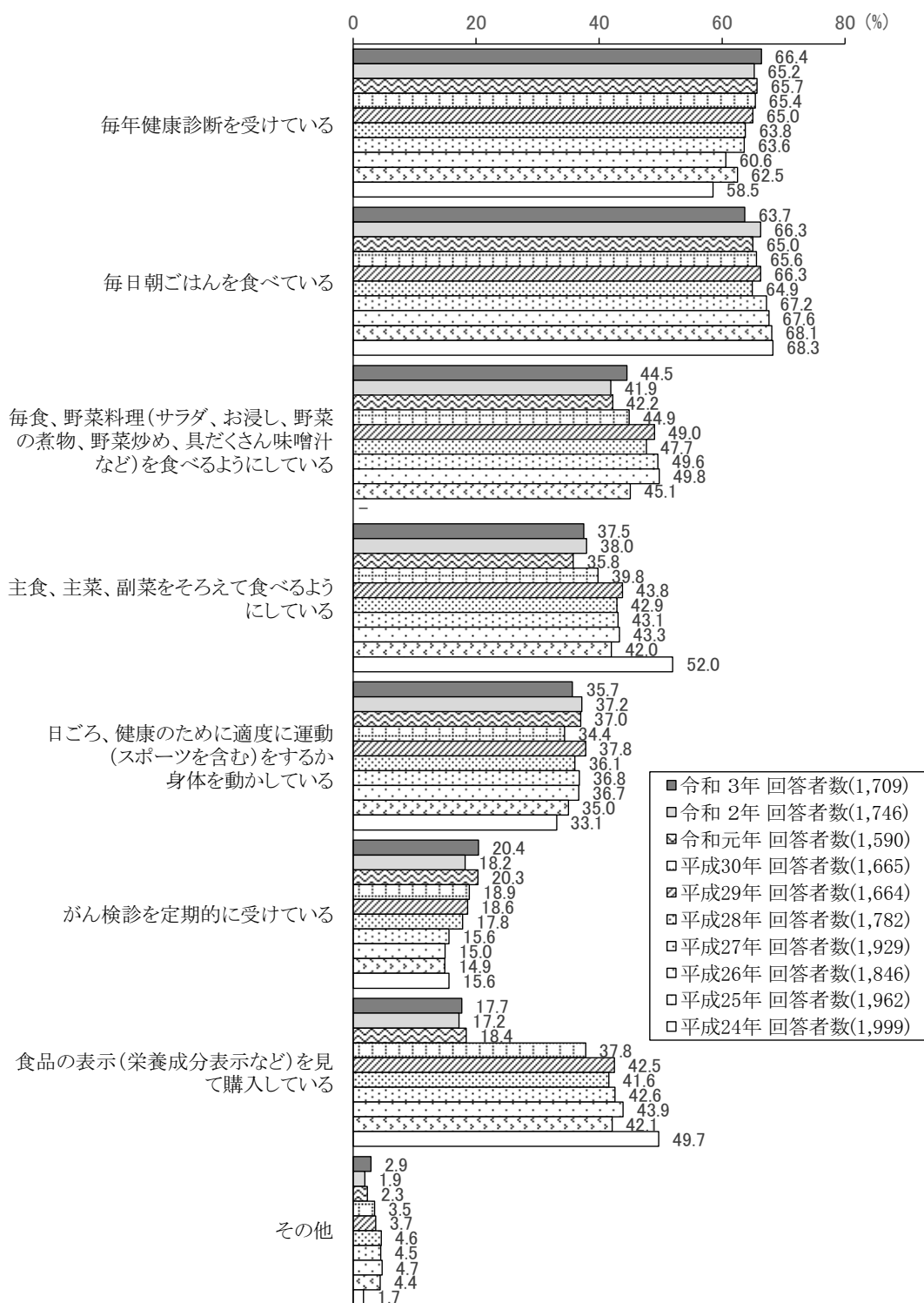
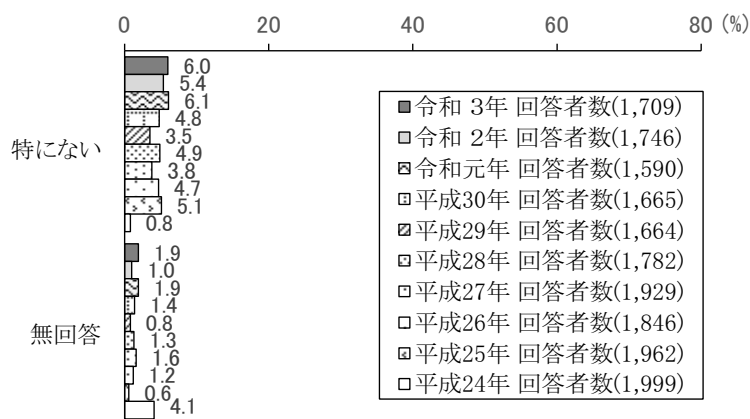


図5-6-1-② 経年比較／健康維持のために実行している、心がけているもの



※「毎食、野菜料理を食べるようにしている」は平成25年度～平成30年度までは「毎食、野菜料理を食べるように心がけている」。なお、この項目は平成25年度新設。

※「日ごろ、健康のために適度に運動（スポーツを含む）をするか身体を動かしている」は平成26年度～平成30年度は「健康のため仕事や家事以外で毎日30分は歩行する、またはそれと同等以上、身体を動かす習慣がある」、平成25年度では「健康のため仕事や家事以外で身体を動かす習慣がある」。

※「主食、主菜、副菜をそろえて食べるようにしている」は平成24年度～平成30年度までは「主食、主菜、副菜をそろえて食べるように心がけている」。

※「食品の表示（栄養成分表示など）を見て購入している」は平成24年度～平成30年度までは「食品の表示（添加物、消費期限など）を見て購入している」。

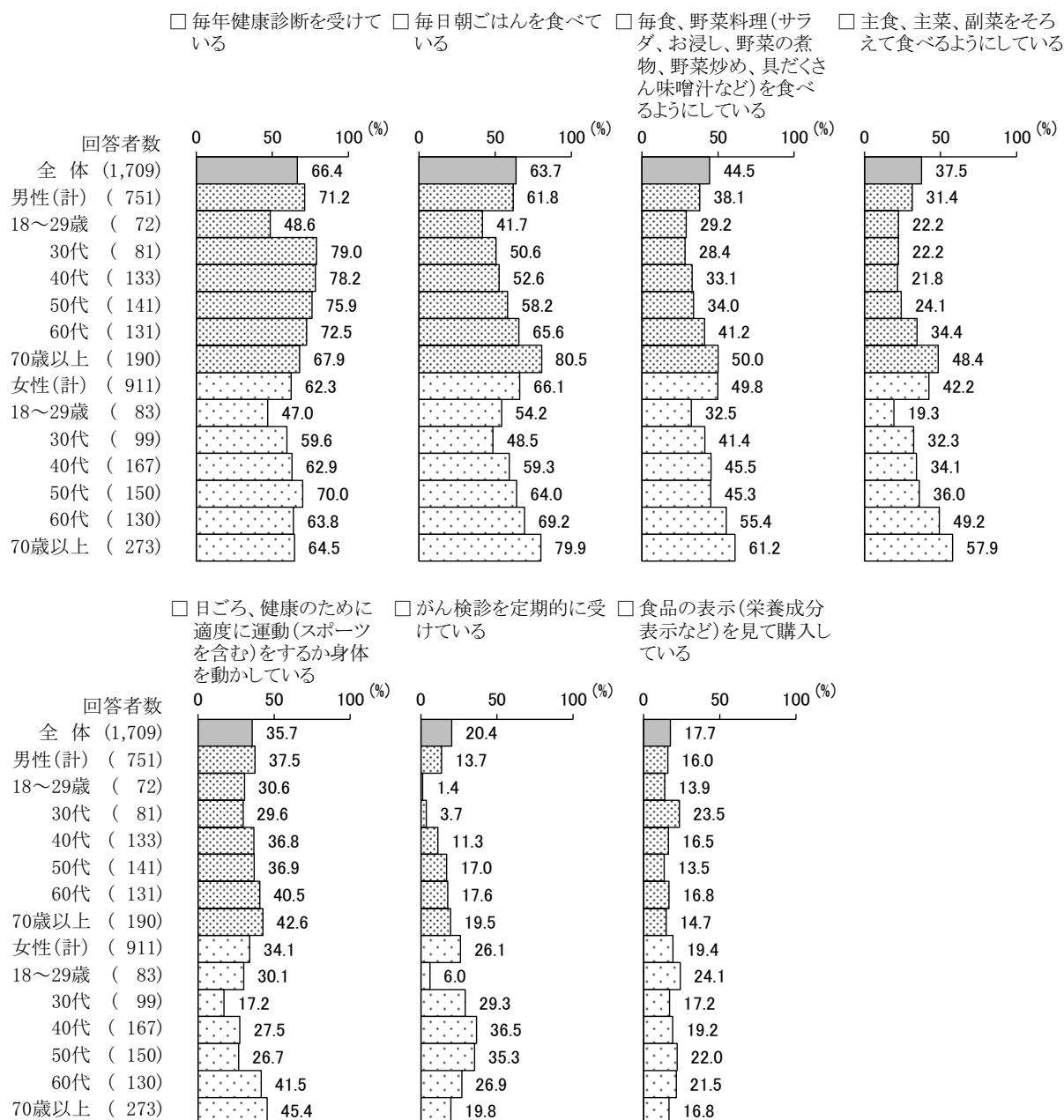
健康維持のために心がけていることとしては、「毎年健康診断を受けている」が66.4%で最も高く、僅差で「毎日朝ごはんを食べている」(63.7%)が続き、以下「毎食、野菜料理（サラダ、お浸し、野菜の煮物、野菜炒め、具だくさん味噌汁など）を食べるようにしている」(44.5%)、「主食、主菜、副菜をそろえて食べるようにしている」(37.5%)、「日ごろ、健康のために適度に運動（スポーツを含む）をするか身体を動かしている」(35.7%) などとなっている。

経年でみると、おおむね増加傾向を続ける「毎年健康診断を受けている」が、逆におおむね減少傾向にある「毎日朝ごはんを食べている」を再び逆転したが、割合では特に大きな違いはみられない。それ以外は、順位と割合に前回調査からの大きな変動はみられない。

性別でみると、「毎年健康診断を受けている」は男性（71.2%）の方が女性（62.3%）より8.9ポイント高く、逆に「がん検診を定期的に受けている」、「毎食、野菜料理（サラダ、お浸し、野菜の煮物、野菜炒め、具だくさん味噌汁など）を食べるようにしている」、「主食、主菜、副菜をそろえて食べるようにしている」は女性の方が男性よりそれぞれ10ポイント以上高くなっている。

性・年代別でみると、男性では、「毎年健康診断を受けている」は男性の30代（79.0%）、40代（78.2%）で7割弱と高く、逆に男女とも18～29歳で4割台と低くなっている。また、「毎日朝ごはんを食べている」、「毎食、野菜料理（サラダ、お浸し、野菜の煮物、野菜炒め、具だくさん味噌汁など）を食べるようにしている」、「主食、主菜、副菜をそろえて食べるようにしている」の食事項目については、男女ともおおむね年代が上がるほど割合も高くなり70歳以上で最も高くなっている。「がん検診を定期的に受けている」は女性の40～50代で3割台半ばと高く、「日ごろ、健康のために適度に運動（スポーツを含む）をするか身体を動かしている」では男女とも60代以上で4割台と高くなっている。

図5-6-2 性別、性・年代別／健康維持のために実行している、心がけているもの

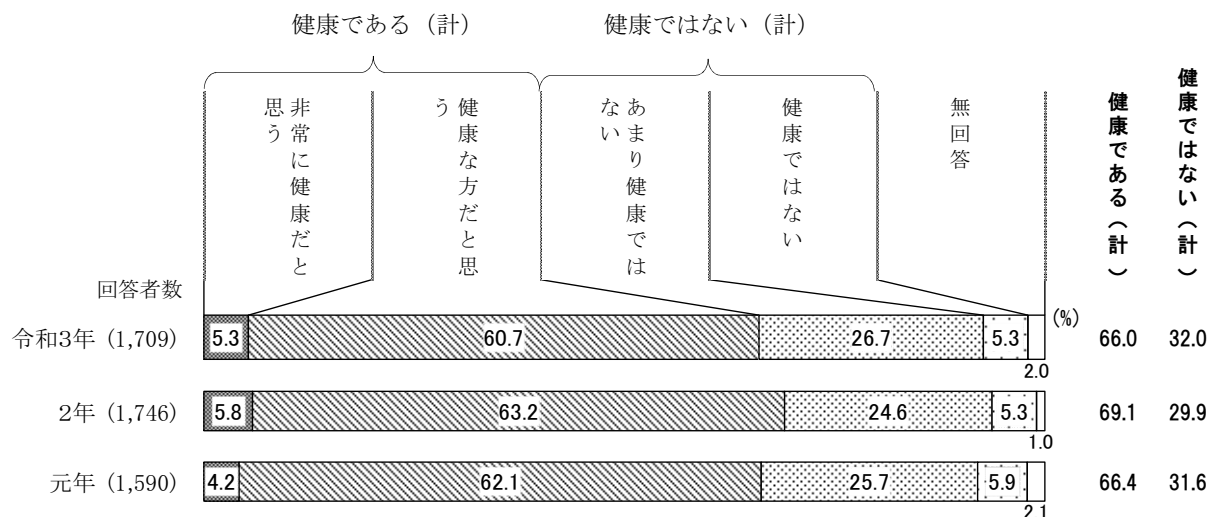


(7) 自身の健康状態について

■ 自分は【健康である】と自認している人は、前回より僅かに減少して6割台半ば

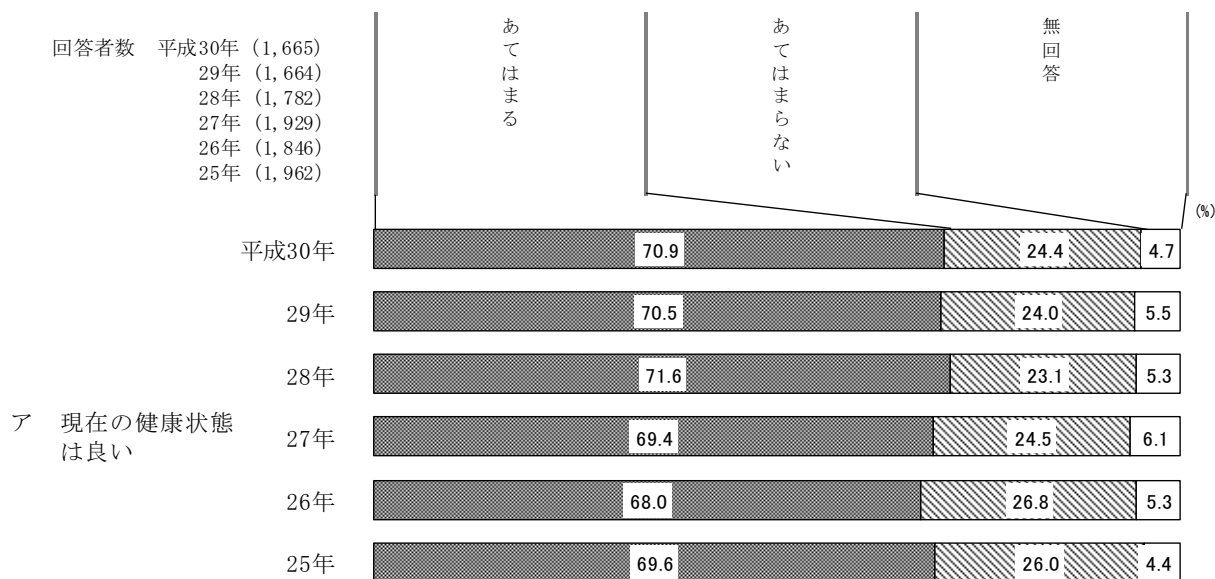
問22 あなたは普段、ご自分のことを健康だと感じていますか（〇は1つだけ）。

図5-7-1 経年比較／自身の健康状態について



参考／体調や習慣

問 あなたの体調などについてお答えください（〇はそれぞれ1つずつ）。



※ 前回の令和元年度より独立設問として、4つの選択肢から選んでもらった「自身の健康状態」については、平成25～30年度では、「現在の健康状態は良い」という項目に対して「あてはまる」と「あてはまらない」の2択で聴取していた。

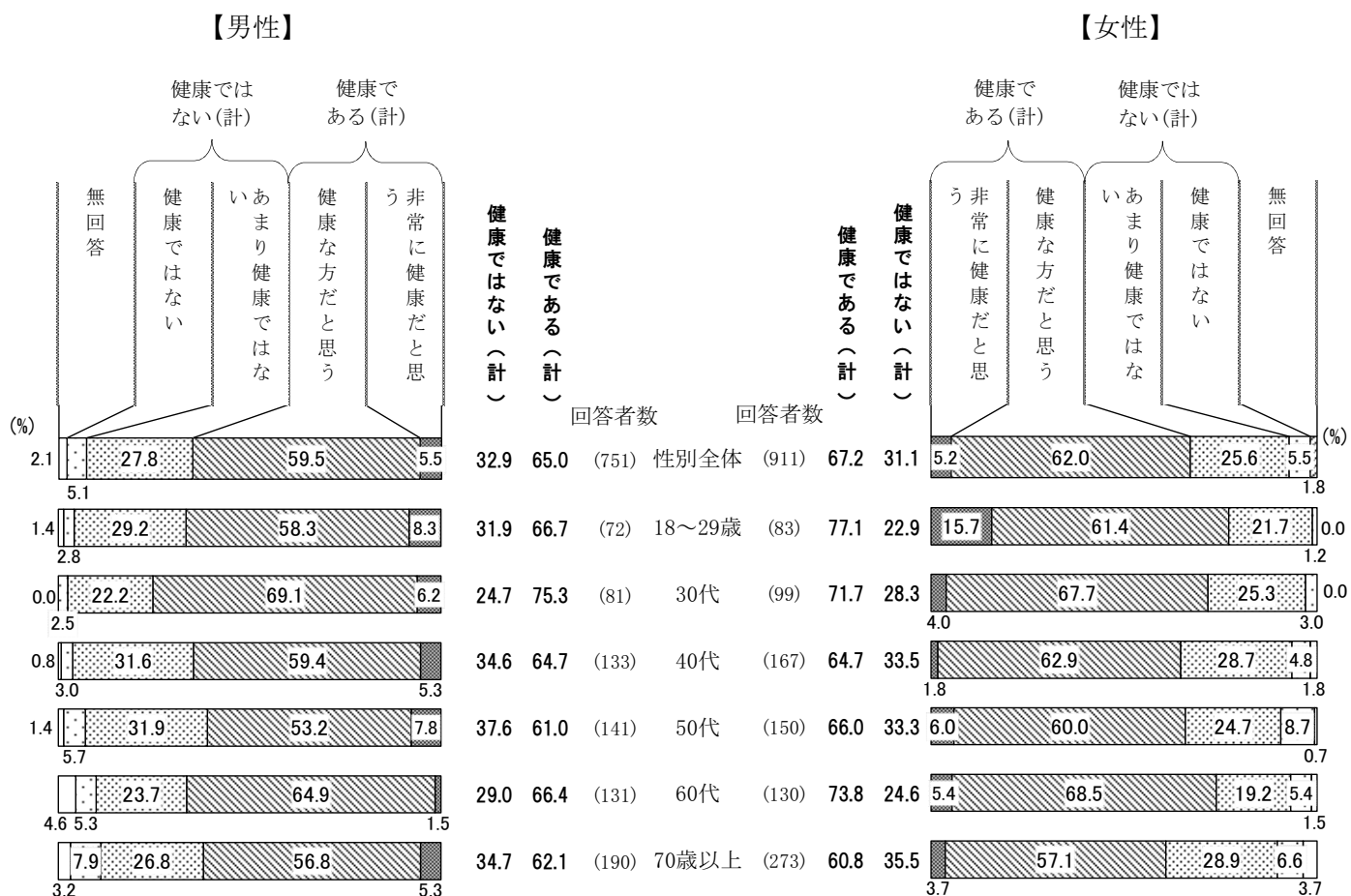
自身の健康状態については、「健康な方だと思ふ」が60.7%を占めており、これに「非常に健康だと思ふ」(5.3%)を合わせた【健康である】が66.0%となっている。一方、「あまり健康ではない」(26.7%)と「健康ではない」(5.3%)を合わせた【健康ではない】は32.0%となっている。

前回の令和2年調査と比べると、【健康である】は前回(69.1%)から3.1ポイント減少し、逆に【健康ではない】は前回(29.9%)より2.1ポイント増加している。

性別でみると、【健康である】は、女性（67.2%）の方が男性（65.0%）より僅かに高い。

性・年代別でみると、【健康である】は、女性の18～29歳で77.1%と最も高く、男性の30代（75.3%）、女性の60代（73.8%）でも7割台半ばと高くなっている。逆に女性の70歳以上で60.8%と最も低く、男性の50代（61.0%）と男性の70歳以上（62.1%）でも6割強と低くなっている。

図5-7-2 性別、性・年代別／自身の健康状態について

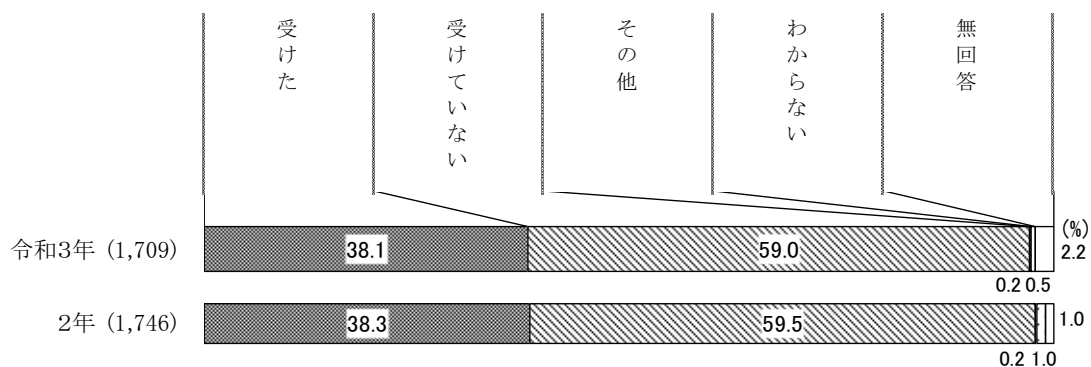


(8) がん検診の受診状況

■ この一年間にがん検診を受けた人の割合は4割弱で、「受けていない」が約6割

問23 あなたは、この一年間で、何らかのがん検診を受けましたか（○は1つだけ）。

図5-8-1 前回調査比較／がん検診の受診状況



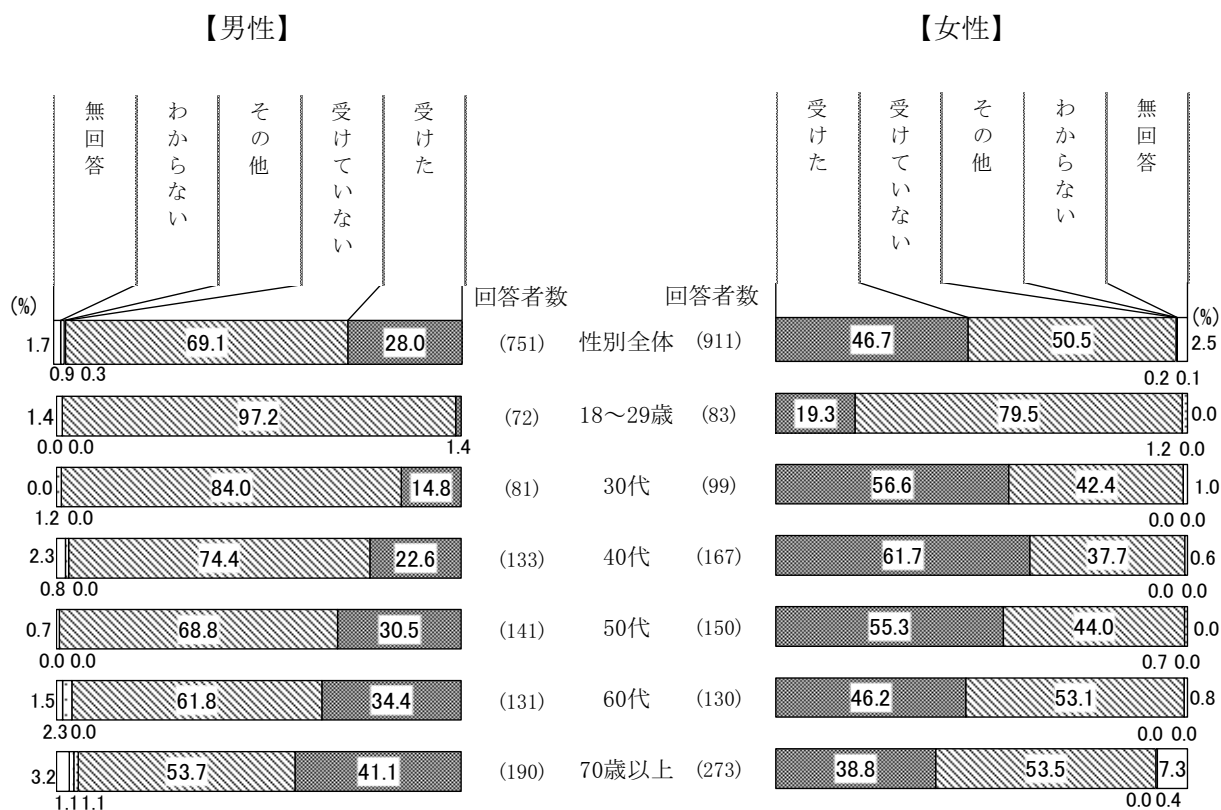
この一年間のがん検診の受診状況は、「受けていない」が59.0%で、「受けた」(38.1%)を約20ポイント上回っている。

本設問が新設された前回の令和2年調査と比較すると、ほぼ同じ割合となっており変動はみられない。

性別でみると、「受けた」は、女性（46.7%）の方が男性（28.0%）より18.7ポイント高く、性差が大きくなっている。

性・年代別でみると、男性では、「受けた」は18～29歳（1.4%）で最も低く、年代が上がるほど割合が高くなり70歳以上で41.1%となっている。女性では「受けた」は、40代で61.7%と最も高く、30代（56.6%）と50代（55.3%）が5割台半ばで続き、男性とは年代別の傾向が大きく異なっている。

図5-8-2 性別、性・年代別／がん検診の受診状況



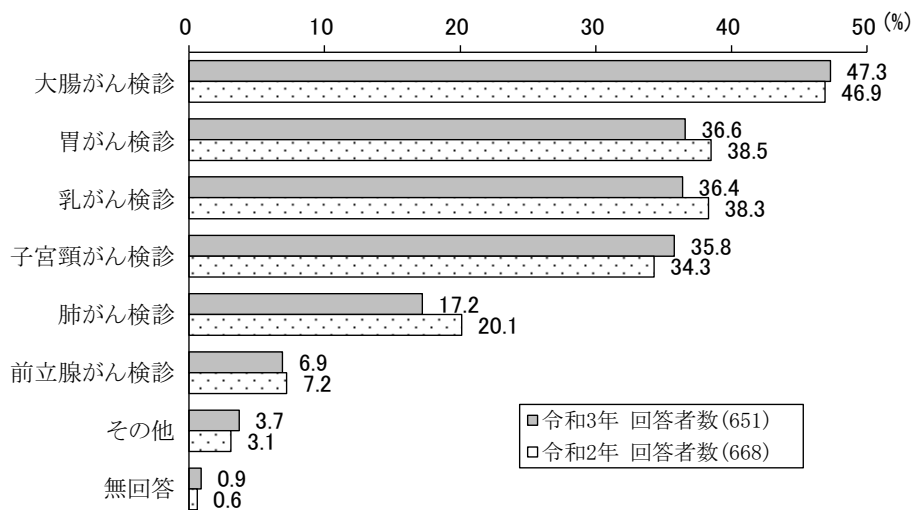
（9）受けたがん検診の種類

■「大腸がん検診」が4割台半ばを超えて、「胃がん検診」が3割台半ばで続く

問23で「1 受けた」とお答えの方に

問23－1 あなたが受けたがん検診は以下のどれですか（○はあてはまるものすべて）。

図5－9－1 前回調査比較／受けたがん検診の種類



＜参考＞足立区が区民対象に行っているがん検診

検査項目	受診対象	自己負担金	備 考
胃がんハイリスク検診	40歳から74歳の間に1回のみ受診可	1,000円	
胃がん内視鏡検診	50歳以上2年度に1回受診可	2,000円	
肺がん検診	40歳以上毎年度受診可	800円	かく痰検査は＋300円
大腸がん検診	40歳以上毎年度受診可	300円	初該当年に無料クーポン券あり
子宮頸がん検診	20歳以上2年度に1回受診可	500円	
乳がん検診	40歳以上2年度に1回受診可	500円	
前立腺がん検診	60歳から64歳の間毎年度受診可	800円	

※がん検診は足立区が行っている「区の検診」以外に、職場で行う「職場の検診」、医療機関で行う人間ドックなどの「個人的な検診」などがあり、また上記表のとおり検査項目によって受診対象が異なることを考慮する必要がある。

この一年間に受けたがん検診の種類をみると、「大腸がん検診」が47.3%で最も高く、以下「胃がん検診」（36.6%）、「乳がん検診」（36.4%）、「子宮頸がん検診」（35.8%）、「肺がん検診」（17.2%）、「前立腺がん検診」（6.9%）の順となっている。

前回の令和2年調査と比べると、上位の4検診には大きな違いはないが、「肺がん検診」で前回調査（20.1%）に比べて2.9ポイント減少している。

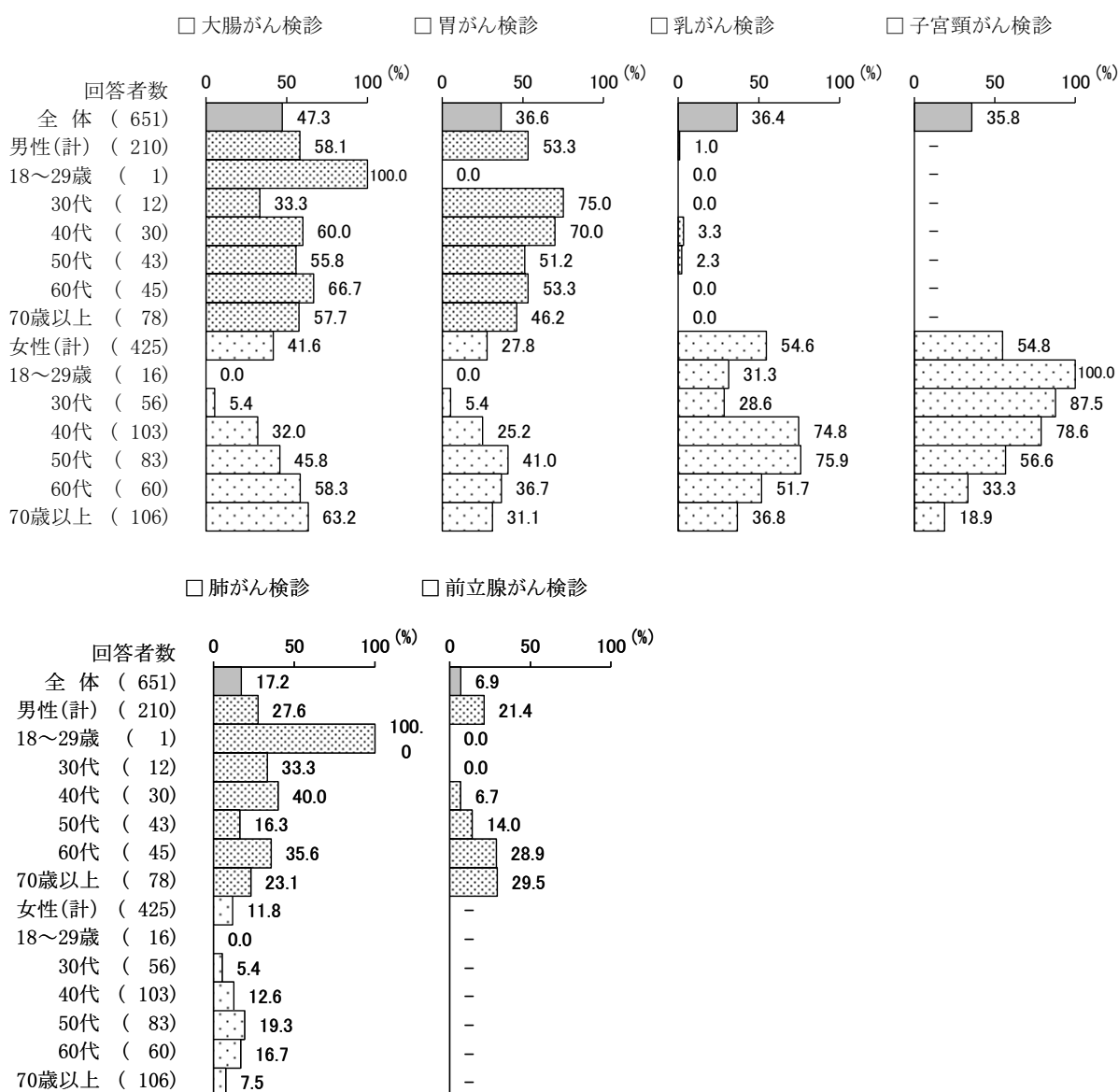
性別でみると、がん検診の種類に応じて性差が大きく、男性では、「大腸がん検診」が58.1%で最も高く、以下「胃がん検診」(53.3%)、「肺がん検診」(27.6%)、「前立腺がん検診」(21.4%)となっている。

一方、女性では、「子宮頸がん検診」が54.8%で最も高く、僅差で「乳がん検診」(54.6%)が続き、以下「大腸がん検診」(41.6%)、「胃がん検診」(27.8%)、「肺がん検診」(11.8%)となっている。

性・年代別にみると、男性の18～29歳と30代、女性の18～29歳でサンプル数が少ないため分析から除外するが、男性の場合は、「胃がん検診」で40代(70.0%)、「前立腺がん検診」で60代(28.9%)と70歳以上(29.5%)が高いのを除くと、特に目立った年代別の格差はみられない。

女性の場合は、「子宮頸がん検診」は30代で87.5%と高く、年代が上がるほど割合が低くなる傾向がみられる。逆に「大腸がん検診」は年代が上がるほど割合も高くなる傾向がみられる。また、「乳がん検診」は40代(74.8%)と50代(75.9%)で7割台半ばと高くなっており、「胃がん検診」は50代(41.0%)がピークになっている。

図5-9-2 性別、性・年代別／受けたがん検診の種類

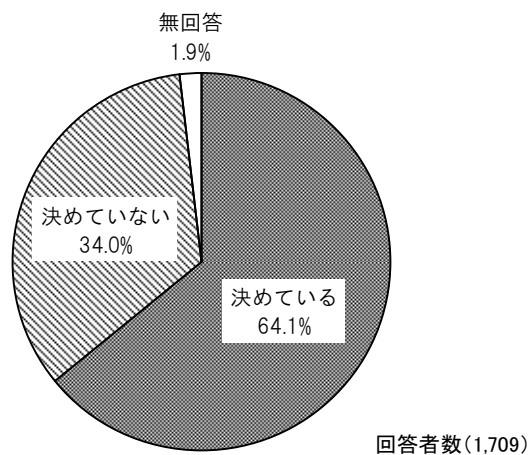


(10) 決めている歯科医院

■「決めている」が6割台半ば

問24 あなたは、かかりつけ歯科医院を決めていますか（○は1つだけ）。

図5-10-1 決めている歯科医院



かかりつけ歯科医院については、「決めている」が64.1%で、「決めていない」の34.0%を上回っている。

<参考>

令和元年度東京都福祉保健基礎調査「都民の健康と医療に関する実態と意識」（令和元年10月実施）

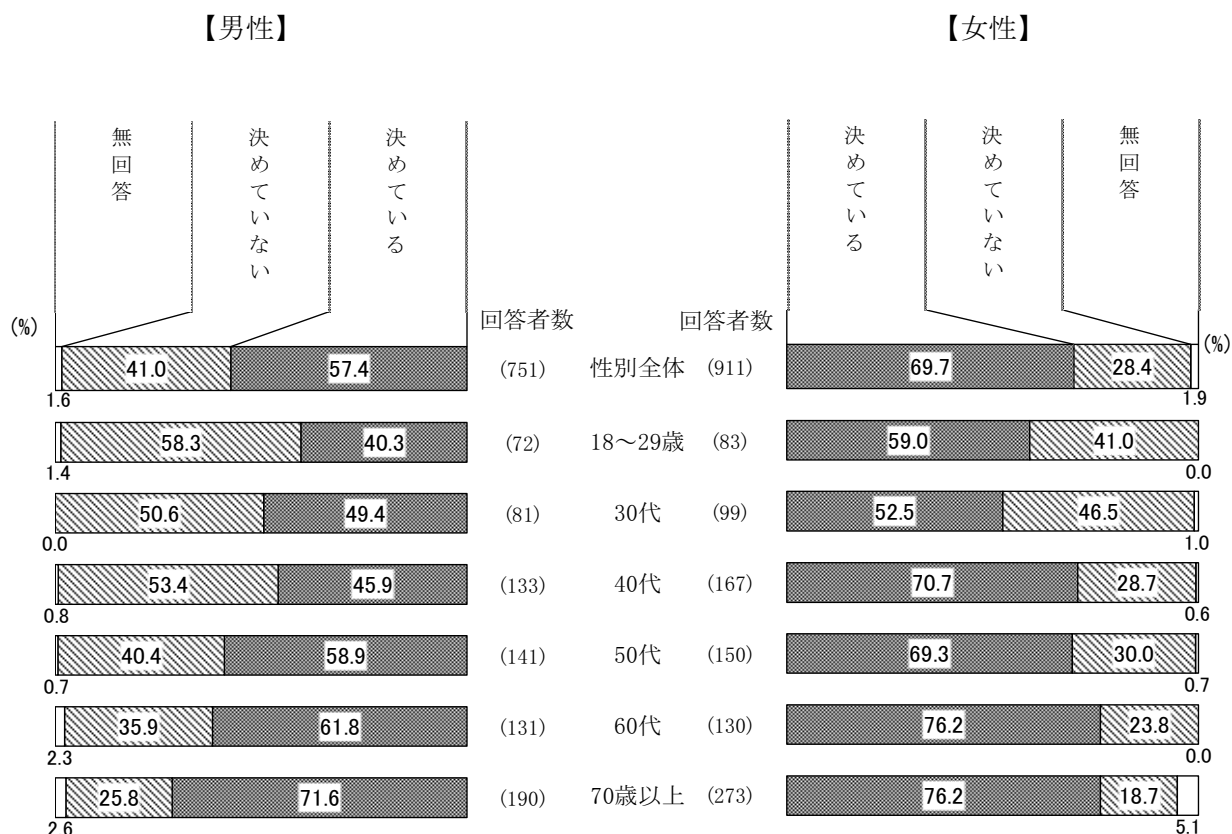
調査対象：都内6,000世帯を対象にし、3,283世帯の7,369人からの回答が得られた。

調査結果：「決めている」70.8%、「決めていない」（26.1%）、「無回答」（3.1%）

性別にみると、「決めている」は女性（69.7%）の方が男性（57.4%）より12.3ポイント高くなっている。

性・年代別にみると、「決めている」は男女ともおおむね年代が上がるほど割合も高くなる傾向がみられ、男性の18～29歳で40.3%と最も低く、女性の60代と70歳以上（ともに76.2%）で7割台半ばと最も高くなっている。

図5-10-2 性別、性・年代別／決めている歯科医院



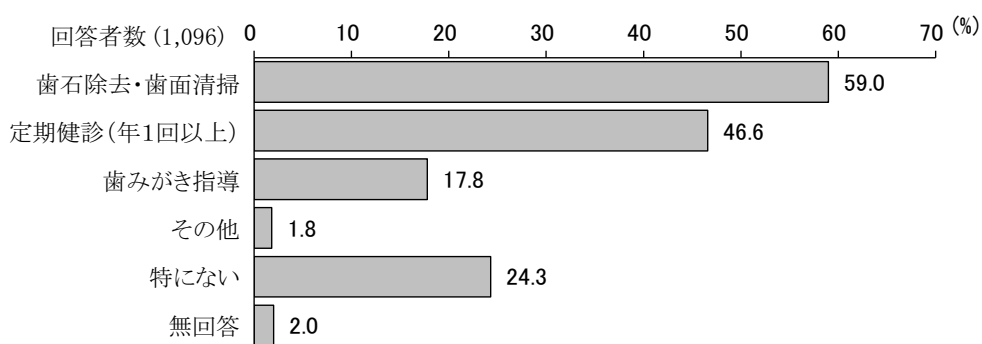
(11) 歯科医院で治療のほかに受けている内容

■治療のほかに受けている内容は「歯石除去・歯面清掃」が約6割

問24で「1 決めている」とお答えの方に

問24—1 その歯科医院では、むし歯・歯周病の治療や入れ歯の作製・修理などのほかに受けているものはありますか（〇はあてはまるものすべて）。

図5-11-1 歯科医院で治療のほかに受けている内容

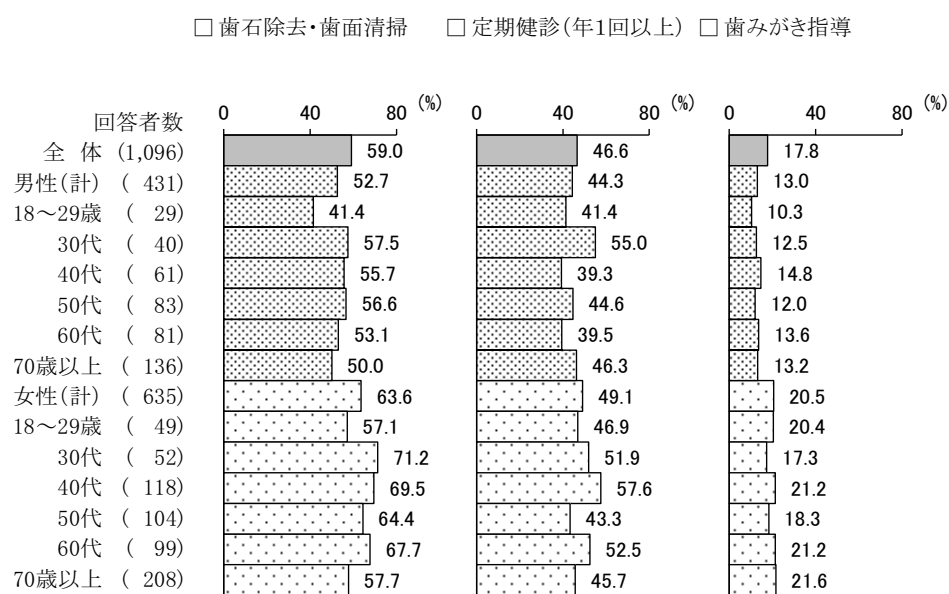


かかりつけ歯科医院でむし歯・歯周病の治療や入れ歯の作製・修理などのほかに受けているものは、「歯石除去・歯面清掃」が59.0%で最も高く、以下「定期健診（年1回以上）」（46.6%）、「歯みがき指導」（17.8%）、「その他」（1.8%）となっている。これらを合わせた【治療のほかに受けているものがある】は73.7%となっている。一方「特にない」は24.3%となっている。

性別にみると、【治療のほかに受けているものがある】（回答者数－「特にない」－「無回答」）は女性（78.0%）の方が男性（68.4%）より9.6ポイント高くなっている。具体的な内容のすべての項目でも女性が高く、「歯石除去・歯面清掃」で10.9ポイント、「歯みがき指導」で7.5ポイントそれぞれ高くなっている。

性・年代別にみると、男性の18～29歳（29サンプル）はサンプル数が少ないため留意が必要だが、【治療のほかに受けているものがある】は女性の18～29歳で83.7%と最も高く、男性の18～29歳で58.6%と最も低くなっている。「歯石除去・歯面清掃」と「歯みがき指導」はすべての年代層で女性の方が男性より高く、「定期健診（年1回以上）」は女性の40代（57.6%）と男性の30代（55.0%）で高くなっている。

図5-11-2 性別、性・年代別／歯科医院で治療のほかに受けている内容

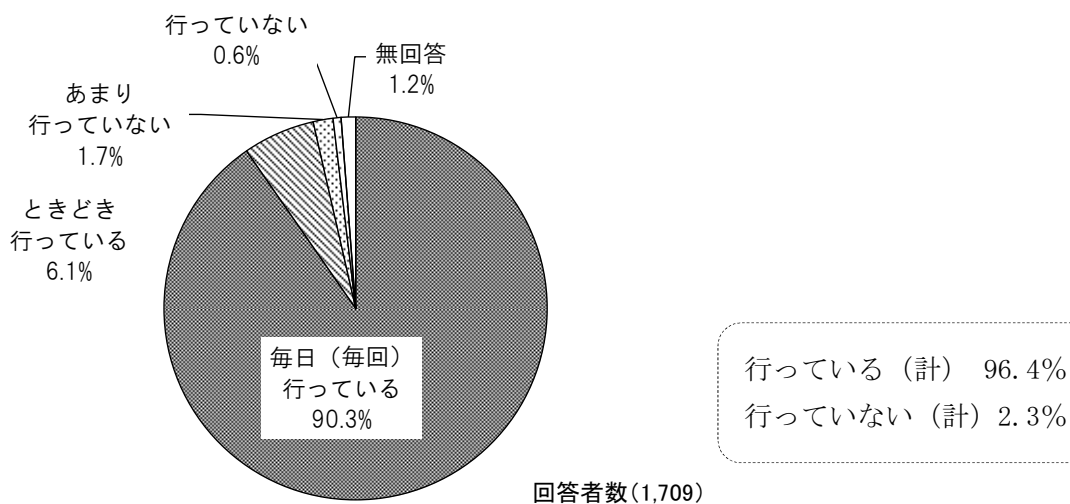


(12) 感染症予防としての手洗いの実践状況

■「毎日（毎回）行っている」人が9割

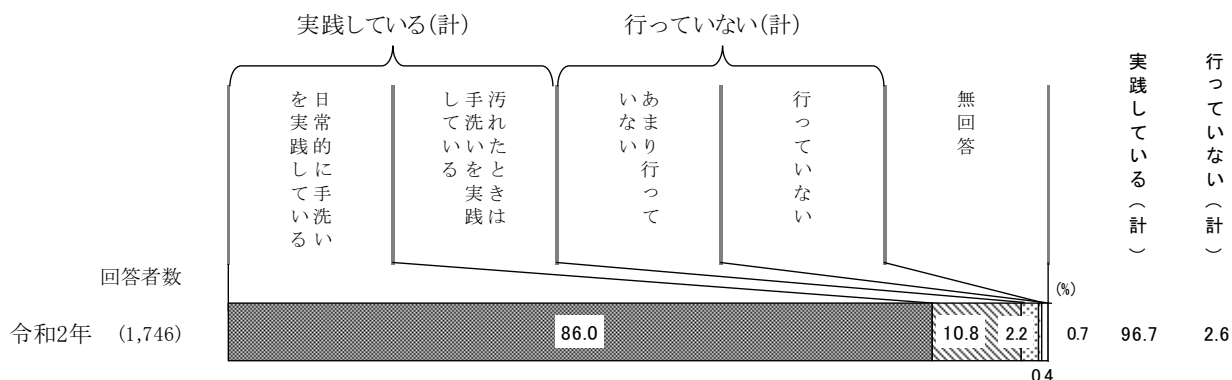
問25 あなたは、帰宅時に感染症予防として手洗いを実践していますか（○は1つだけ）。

図5-12-1 感染症予防としての手洗いの実践状況



参考／（令和2年調査）感染症予防としての手洗いの実践状況

問 あなたは、日頃から感染症予防としての手洗いを実践していますか。（○は1つだけ）

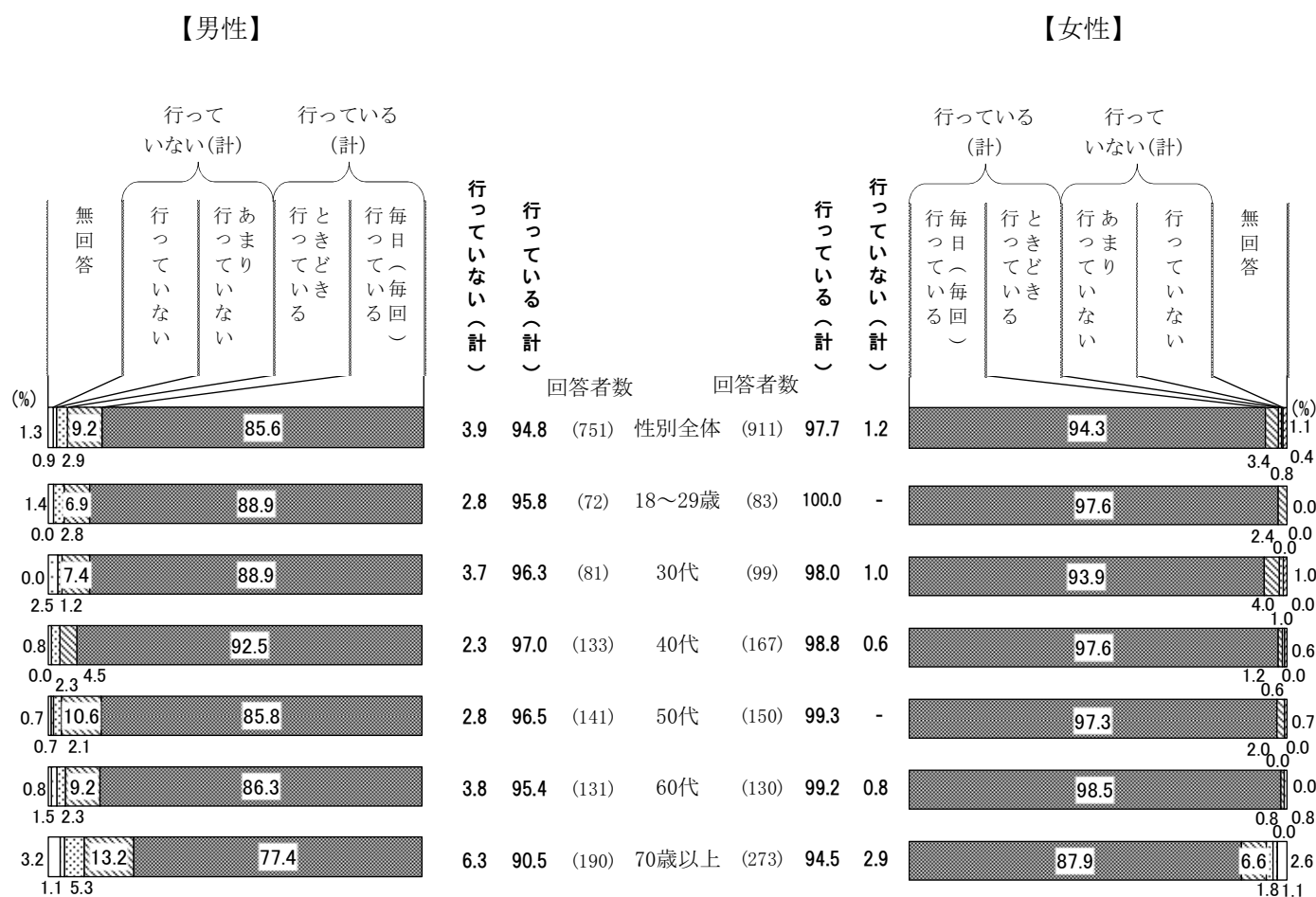


帰宅時における感染症予防としての手洗いの実践状況は、「毎日（毎回）行っている」が90.3%を占めており、これに「ときどき行っている」（6.1%）を合わせた【行っている】（96.4%）は9割台半ばと大部分を占めている。一方、「あまり行っていない」（1.7%）と「行っていない」（0.6%）を合わせた【行っていない】（2.3%）は僅かとなっている。

性別にみると、【行っている】は女性（97.7%）と男性（94.8%）に大きな違いはないが、「毎日（毎回）行っている」では女性（94.3%）の方が男性（85.6%）より8.7ポイント高く、「ときどき行っている」では男性（9.2%）の方が女性（3.4%）より5.8ポイント高くなっている。

性・年代別にみると、【行っている】は、女性では18～29歳（100.0%）で10割となっているのをはじめ70歳以上以外の年代は10割近くと高くなっている。男性でも70歳以上（90.5%）以外の年代層は9割台半ばとなっている。

図5-12-2 性別、性・年代別／感染症予防としての手洗いの実践状況



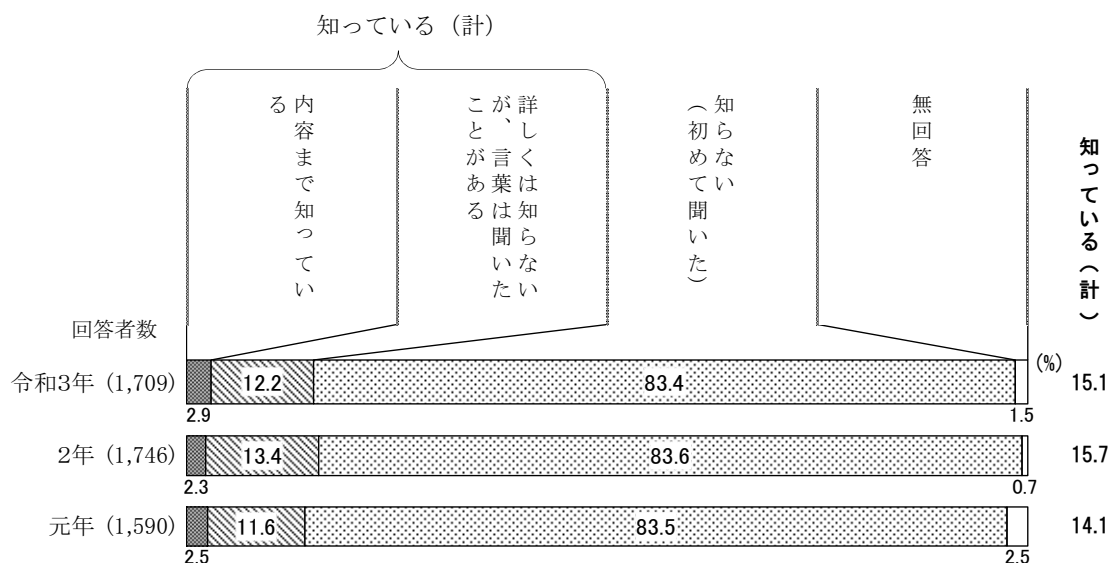
(13) 「ゲートキーパー」という言葉の認知状況

■【知っている】は1割台半ばで、「知らない（初めて聞いた）」が8割台半ばを占めている

問26 あなたは、「ゲートキーパー（※）」という言葉を知っていますか（○は1つだけ）。

※「ゲートキーパー」とは、自殺のサインに気づき、適切な相談機関へつなぐ「いのちの門番」のことです。

図5-13-1 経年比較／「ゲートキーパー」という言葉の認知状況



「ゲートキーパー」という言葉の認知は、「知らない（初めて聞いた）」が83.4%を占めている。一方「内容まで知っている」（2.9%）は僅かで、「詳しくは知らないが、言葉は聞いたことがある」（12.2%）を合わせた【知っている】は1割台半ばとなっている。

経年でみると、前回の令和2年調査、及び新設となった令和元年調査との比較でも回答割合に大きな違いはみられない。

性別でみると、【知っている】は男性が15.4%で、女性が14.6%と特に大きな違いはみられない。
性・年代別にみると、【知っている】は、男性の18～29歳で25.0%と最も高く、次いで男性の40代で20.3%となっている。一方で、女性の18～29歳が8.4%で最も低くなっている。

図5-13-2 性別、性・年代別／「ゲートキーパー」という言葉の認知状況

